櫛形町文化財調査報告 No. 3

# 六科丘遺跡

——山梨県中巨摩郡櫛形町六科丘遺跡発掘調査報告書——

1985

櫛形町教育委員会 六科山遺跡調査団

# 六科丘遺跡正誤表

| 7.41.11.28.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11 |  |  |  |  |
|---|--|--|--|--|
| 項。行   | 誤  | Œ  |  |  |
| 例言  | 御教示  | 御教示いただいた。  |  |  |
| 挿図目次  | 14号住居址〔1/80〕   | 14号住居址〔1/100〕  |  |  |
|   | 14号住居址掘り方及び炉址  | 14号住居址掘り方及び炉址  |  |  |
|   | (1/80 · 1/40)  | (1/100 · 1/40)   |  |  |
|   | 15号住居址 〔1 × 80 〕   | 15号住居址〔1 260〕  |  |  |
| P 5 L15   | 古墳出現の地もある  | 古墳出現の地である  |  |  |
| P 43 L7   | 掘方底面   | 掘り方底面  |  |  |
| P " L10   | 掘方は  | 掘り方は   |  |  |
| P 51 L11  | 掘方   | 掘り方  |  |  |
| P 64 キャプション                                       | 14号住居址 〔1 Ž80 〕  | 1 <b>4号</b> 住居址〔1~100〕   |  |  |
| P 65 キャプション                                       | 14号住居址掘り方及び炉址  | 14号住居址掘り方及び炉址  |  |  |
|   | (1/80 ·1/40)   | (1/100·1/40)   |  |  |
| P 67 キャプション                                       | 15号住居址 〔1~80〕  | 15号住居址〔1/60〕   |  |  |
| P 163 キャプション (図165)                               | - //*  | ○楕円形   |  |  |
| P 168 L 19  | 最後にD類は   | 最後にC類は   |  |  |
| P 184 L 1   | 六科山古墳  | 六科丘古墳  |  |  |
| P-187 L25   | 北拡区  | 北拡張区   |  |  |
| P 188 L 6   | 残っている。は把み得なかった。  | 傍点部削除  |  |  |
| P " L23   | 出土の物と  | 出土の遺物と   |  |  |
| P 199 L 3   | までと交互に   | までを交互に   |  |  |
| " L12   | 強かった。  | 強まった。  |  |  |
| P 209 L 1   | 同時性の決定しえぬ  | 同時性を決定しえぬ  |  |  |
| P " L 6   |  |  |  |  |
| P 210 L 4 L 9                                     | 六科山遺跡  | 六科丘遺跡  |  |  |
| P 212 L 24  | 原体LP単節縄文   | 原体LR単節縄文   |  |  |
|   |  |  |  |  |
| P 41 05 100 7 7 10                                | 0 2 m  | 0 1.5 m  |  |  |
| 42 25 図 スケール                                      | 0 2 m  | 1.5 m  |  |  |
|   | •  |  |  |  |
| P 56 39図 "  | ' 0 2 m  | 0 1.5 m  |  |  |
|   |  | •  |  |  |
| P 64 45 図 "                                       | 0 	 2m   | 0 2.5 m  |  |  |
| ī   |  |  |  |  |
| P 65 46 🗵 "                                       | 0 2 m  | 0 2.5 m  |  |  |
| 1 00 10 20  |  |  |  |  |
| D 67 40 50  | 0 2 m  | 0 1.5 m  |  |  |
| P 67 49 🛛 "                                       | Land the same of t | Medination and appropriate and an execution of the desired and appropriate and |  |  |
|   |  | L  |  |  |

# 六科丘遺跡

——山梨県中巨摩郡櫛形町六科丘遺跡発掘調査報告書——

## 1985

櫛形町教育委員会 六科山遺跡調査団

# **MUJINA-OKA**

AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF ANCIENT

SETTLEMENT AT MUJINA-OKA

YAMANASHI-PREFECTURE, JAPAN

KUSHIGATA-CHO EDUCATION COMMITTEE

AND

THE ARCHAEOLOGICAL EXPEDITION

OF MUJINA-YAMA

## 序文

六科丘遺跡は櫛形町の西部に位置する平岡地内に所在し、通称六科丘とよばれております。本町では新長期総合計画に基づきこの六科丘の開発(住宅団地造成事業)に取り組む事になり、それに伴って教育委員会ではこの遺跡の発掘調査を実施する事になりました。その結果今から約1400年前の古墳や1500年~1600年前の住居跡が確認され、そこから縄文、弥生、中世、各期の土器・石器・鉄製品が多数発見されました。これらの貴重な資料は過去から現在そして未来を結ぶかけはしとして大きな意味を持つものと考えます。そして本町の歴史をひもとき、町の発展を願う町民意識の向上に役立つものと確信しております。

最後に今回の調査ならびに報告書作成にあたり、ご指導ご協力下さったみなさま に心から感謝申し上げる次第でございます。

昭和60年3月31日

櫛形町教育委員会 教育長 河 野 豊

## 例 言

- 1 本書は山梨県中巨摩郡櫛形町平岡字六科山1947他、に所在する六科丘遺跡及び六科丘古墳 の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の名称について。土地台帳では平岡字六科山と記載されているが、地元では従来六科 丘と呼称されている。本報告書では、慣例的な呼称に従って、「六科丘」を遺跡名称とした。
- 3 調査は櫛形町教育委員会からの委託をうけ六科山遺跡調査団が実施した。調査団の構成は 以下の通りである。

団 長 関根孝夫(東海大教授)

副 団 長 近藤英夫(東海大助教授)

主任調查員 清水 博(櫛形町教委)

調 査 員 臼居直之(諏訪西中学教諭)大森隆志・田村大器(明治大卒)秋田かな子・ 桑折礼子・百瀬忠幸(東海大卒)山崎和也(駒沢大卒)浪川幹夫(国学院大 卒)成瀬晃司・堀内秀樹(日大卒)外岡 進・関ロ昌和

発掘事務 上田みな子

調査協力者 鈴木八司 (東海大学教授)、野瀬元興・松田晴義・白沢一彦・長瀬 廷・長 谷川博・幸 俊 (株式会社大本組)、山梨セキスイハウス㈱

行 政 指 導 末木 健(山梨県教育委員会文化課)

- 4 発掘調査は昭和58年5月1日から同年12月27日まで8ヶ月間に亘って実施した。また出土品等の整理及び、報告書の作成は昭和59年1月10日~同年5月19日、昭和59年8月7日~同年12月28日、昭和60年1月4日~同年3月31日まで延12ヶ月間に亘って実施した。
- 5 発掘調査、出土品等の整理及び報告書の作成については以下の方々の御指導御助言を賜った。 記して謝意を表する次第である。

八幡一郎、岩崎貞也、松浦宥一郎、古里節夫、中田 英・御堂島正・伊丹 徹、漆畑 敏、佐 々木藤雄、守屋幸一、坂本美夫・中山誠二・新津 健・保坂康夫(山梨県埋蔵文化財センター)

- 6 本書の編集は調査員の協議のもとに、関根・近藤・清水の3名が行なった。
- 7 原稿の執筆は各調査員が分担して行ない、遺構関係を清水が、土器関係を臼居・百瀬が、石 器関係は大森が総括した。執筆者名は各文末に記した。
- 8 本書作成に関わる業務分担は下記の通りである。
  弥生式土器の実測・トレースは、小口・吉岡・出口・渡辺・浪川が行ない臼居が総括した。

## 凡例

- I、本書の遺構・遺物の挿図及び表の指示は次の通りである。
  - (1)挿図縮尺は原則として次の通りである。

遺構分布図-½。 竪穴住居址及び堀り方-½。 掘立柱建物遺構・竪穴状遺構-½。 住居址炉-½。 集石遺構-½。 土壙-½。 溝状遺構(平面)-½。 同(断面)-½。 古墳全体図-½。 同トレンチ配置図-½。 同トレンチ平・断面図-½。

土器実測図-4 同拓影-% 石器-%・%・4 鉄製品・石製品・土製品-%

(2)竪穴住居址等の記述・挿図について。

遺構実測図の水糸レベルは海抜高を示す。

主軸方位は直交する柱穴間線から得た長軸と真北とのなす角度で示す。

規模は相対する壁の最長距離である。

平面図中一一は床面残存部、一一一は推定線を示す。

焼土・炭化物範囲図版中……は炭化物範囲、——は炭化材範囲、——は焼土範囲を示す。

スクリーントーン及びインスタントレタリングの指示は次の通りである。

炉 ●土器 □ 金属製品 ○石製品 ▲ 土製品

遺物は大数字で遺物番号を、小数字で床面からのレベルを示す。大数字は本文・挿図・表・写真 図版と一致する。

- (3)遺物の記述・挿図について
  - 土器実測図のスクリーントーンは赤色塗彩部位を示す。

土器計測表は各遺構出土の土器のうち、図示しえた土器を除いた総破片数・総重量数を示す。

土器観察表中、法量の()内は推定値である。

弥生式土器の土器観察表は、吉岡が作成し、臼居がまとめた。

縄文式土器の拓影・トレースは、深沢・中沢・斉藤・上田が行ない百瀬が総括した。 石器の実測・トレースは、大森が行なった。

鉄製品・その他の実測・トレースは、清水が行なった。

古墳出土の須恵器については守屋氏に御教示

遺構図版の作成、出口・渡辺が行なった。

- 9 写真撮影については、遺構関係を各遺構担当調査員が、遺物関係を近藤が担当した。
- 10 確認調査時における遺構番号と、本報告書での遺構番号との対称を下に記しておく。

| 本報告書遺構番号  | 確認調査時遺構番号 |
|-----------|-----------|
| 9 号住居址    | 1 号住居址    |
| 撹乱        | 2号住居址     |
| 16号住居址    | 3 号住居址    |
| 17号住居址    | 4 号住居址    |
| 21・22号住居址 | 5号住居址     |
| 30号住居址    | 6 号住居址    |
| 3号住居址     | 7号住居址     |
| 2 号住居址    | 8 号住居址    |
| 5 号住居址    | 9 号住居址    |
| 3号集石遺構    | 1号配石遺構    |
| 遺構と認定せず   | 2号配石遺構    |
| 地山の落ち込み   | 1号土壙      |
| 撹乱        | 2号土壙      |
| 撹乱        | 3号土壙      |

- 11 発掘調査にあたっては山梨セキスイハウス (株)、(株) 大本組から調査事務所・宿舎・土木 機械等の便宜を受け、更に (株) 大本組には、発掘時の基本測量、作業員の確保等にも協力 を頂いた。
- 12 発掘調査によって作成された記録図面、及び出土遺物等は櫛形町教育委員会において保管している。

## 凡。例

- I、本書の遺構・遺物の挿図及び表の指示は次の通りである。
  - (1)挿図縮尺は原則として次の通りである。

遺構分布図一%00 竪穴住居址及び堀り方一% 掘立柱建物遺構・竪穴状遺構一% 住居址炉一% 集石遺構一% 土壙一% 溝状遺構(平面)一½0 同(断面)一% 古墳全体図一%00 同トレンチ 配置図一%00 同トレンチ平・断面図一%0

土器実測図-¼ 同拓影-½ 石器-%・¼・¼ 鉄製品・石製品・土製品-½

(2)竪穴住居址等の記述・挿図について。

遺構実測図の水糸レベルは海抜高を示す。

主軸方位は直交する柱穴間線から得た長軸と真北とのなす角度で示す。

規模は相対する壁の最長距離である。

平面図中一一は床面残存部、一一は推定線を示す。

焼土・炭化物範囲図版中-----は炭化物範囲、----は炭化材範囲、-----は焼土範囲を示す。

スクリーントーン及びインスタントレタリングの指示は次の通りである。

炉 ●土器 □ 金属製品 ○石製品 ▲ 土製品

遺物は大数字で遺物番号を、小数字で床面からのレベルを示す。大数字は本文・挿図・表・写真 図版と一致する。

(3)遺物の記述・挿図について

土器実測図のスクリーントーンは赤色塗彩部位を示す。

土器計測表は各遺構出土の土器のうち、図示しえた土器を除いた総破片数・総重量数を示す。

土器観察表中、法量の()内は推定値である。

#### 六科山遺跡調査委員会

委 員 長 河野 豊 (櫛形町教育長) (前任者) 上田幸斉 (前櫛形町教育長) 副委員長 浅野貫一 (櫛形町文化財審議委員会委員長) 委 員 杉山人歳 ( 11 季目) 石川徳広 ( 11 H =横内重孝 ( 11 # ) 河野正已 11 H = )関根孝夫 (六科山遺跡調査団団長) 事務局長 鶴田一雄 (櫛形町教育委員会社会教育係長) (前任者) 小林喜也 (前櫛形町教育次長) 事務局 横内広記 (櫛形町教育委員会主事) 石川利夫 ( " H = )

#### 関係者名簿

#### 関係者

櫛形町教育委員会、櫛形町企画課、山梨県教育委員会文化課、六科山遺跡調査委員会、六科山遺跡調査団、山梨セキスイハウス(株)、(株)大本組

#### 調査参加者

松下信一(国学院大学卒)、饗場仁(農林高校卒)、嶋村友子(早稲田大学卒)、青木流糸、赤松茂、庵上正一、飯沼高志、伊久美公彦、泉尚子、伊藤公明、井上誠司、井上由美子、稲生隆、臼武美貴子、梅崎香奈美、梅山美奈子、榎本愛彦、大沢基喜、大島慎一、大橋瑠美、尾崎美砂、小野浩子、神谷哲司、川瀬正枝、上西厚郎、菊田宗、城所修、黒沢弓子、小林宇壱、佐々木季美子、静谷誠浩、島田孝雄、田尾誠敏、高田勝、多鹿稔、多田久江、立花実、千田早苗、坪井裕司、寺田春夫、徳田浩行、長広ゆり子、奈須田有里、成田千鶴子、福田卓志、藤川直子、松島由行、宮塚勇、山川倫世、山田克樹、吉岡弘樹、和田恵、木下智章(東海大学)、小口妙子、加田隆志、守屋薫(奈良大学)、松本保、芹沢隆生、中沢俊之(国学院大学)、藤本和弘、菊地賢、藤本芳雄(山梨学院大学)、浅利哲(玉川大学)、名取寿彦(山梨大学)、河野英人、河西宏(農林高校)、沢登章弘(幾山高校)、長沼睦人(創価大学)、米山満広、小尾光一(巨摩高校)、出口真由美(武蔵野美術大学)、渡辺順子(香蘭女学校卒)、饗場うさの、饗場よしみ、石川光蔵、石川芳子、池田雅子、上野広美、川崎菊美、川崎すず子、川崎努、川崎花代、川崎みや子、川崎義造、川崎雪江、河野栄子、河野かおる、河野定子、河野つや子、河野豊文、河野寅重、河野芳子、桜田南江、桜田みさ江、桜田いのじ、斉藤きみえ、塩沢章、住吉幸枝、中込幸子、中込清尊、中込かやの、野中早苗、野中新市、野中つる江、古矢なみ、古矢百合子、穂坂今朝秋、松田政子、向山光江、横内しげ子、横内みや子、横小路国広、横小路まゆみ、依田けさえ、依田豊子、山本うしの、山本喜子春、饗場啓子、斉藤みや子、深沢道子、中沢栄、松尾和江、河野節子、河西俊雄(一般)。

# 目 次

## 序 文

| 例 言  |                       |
|------|-----------------------|
| 第Ⅰ章  | 調査に至る経緯と経過1           |
| 第1節  | 発掘調査の経緯1              |
| 第2節  | 発掘調査の経過 1             |
| 第II章 | 遺跡の概観 4               |
| 第1節  | 地理的環境 4               |
| 第2節  | 歷史的環境 6               |
| 第Ⅲ章  | 調査の方法と層位11            |
| 第1節  | 調査の方法11               |
| 第2節  | 層位11                  |
| 第Ⅳ章  | 発見された遺構と遺物17          |
| 第1節  | 竪穴住居址・掘立柱建物遺構・小竪穴遺構17 |
| 1)   | 竪穴住居址17               |
| 2)   | 掘立柱建物遺構103            |
| 3)   | 小竪穴遺構105              |
| 第2節  | 集石遺構と土壙108            |
| 1)   | 集石遺構108               |
| 2)   | 土壙119                 |
| 3)   | 石棒を伴うピット135           |
| 第3節  | その他の遺構136             |
| 1)   | 溝状遺構136               |
| 2)   | 竪穴状遺構144              |
| 3)   | 不整形土壙とローム土壙146        |
| 4 )  | II 区北拡張区ピット群148       |

| 第4節  | 遺構外出土の遺物              | ·· 149 |
|------|-----------------------|--------|
| 1)   | 土器                    | ·· 149 |
| 2)   | 石器                    | ·· 151 |
| 3)   | 鉄製品·土製品               | ·· 153 |
| 第Ⅴ章  | 弥生時代の成果と課題            | ·· 155 |
| 第1節  | 弥生時代後期から古墳時代前期の土器について | ·· 155 |
| 第2節  | 集落について                | ·· 161 |
| 1)   | 住居址の様相                | ·· 161 |
| 2)   | 掘立柱建物遺構               | ·· 170 |
| 3)   | 集落の変遷と構成について          | ·· 172 |
| 第VI章 | 六科丘古墳                 | ·· 184 |
| 第1節  | 調査に至る経緯               | ·· 184 |
| 第2節  | 古墳の立地                 | ·· 184 |
| 第3節  | 古墳の形状と規模              | ·· 185 |
| 第4節  | 発掘調査                  | ·· 185 |
| 1)   | 調査の方法                 | ·· 185 |
| 2)   | 発掘調査の概要               | ·· 187 |
| 第5節  | 出土遺物                  | ·· 199 |
| 第6節  | まとめ                   | . 201  |
| 第7節  | 山梨県に於ける六科丘古墳の位置       | ·· 203 |
| 第Ⅷ章  | 結語                    | ·· 208 |
| 付 章  | 周辺採集の遺物               | 212    |
| 引用 着 | 参考文献                  | 217    |

# 挿 図 目 次

| 第1図   | 遺跡附近地形図[1/20000] 5                     | 第30図 | 9 号住居址出土土器[1/4·1/3]······48            |
|-------|--|------|--|
| 第2図   | 周辺遺跡分布図[1/50000]7                      | 第31図 | 10号住居址〔1/80〕50                         |
| 第3図   | 基本土層概念図12                              | 第32図 | 10号住居址出土土器[1/3]50                      |
| 第4図   | 遺構配置図(1) I 区(1/600) 13・14              | 第33図 | 11号住居址及び掘り方〔1/80〕51                    |
| 第 5 図 | 遺構配置図(2)Ⅱ区〔1/600〕 15・16                | 第34図 | 11号住居址出土土器[1/3]51                      |
| 第6図   | 1 号住居址出土土器[1/4]17                      | 第35図 | 12号住居址・掘り方及び炉址                         |
| 第 7 図 | 1 号住居址・炉址及び2 号住居址掘                     |      | (1/80 · 1/40) · · · · · · 52           |
|       | り方(1/80・1/40)19・20                     | 第36図 | 12号住居址出土土器(1)(1/4)54                   |
| 第8図   | 2 号住居址及び炉址                             | 第37図 | 12号住居址出土土器(2)(1/3)55                   |
|       | $[1/80 \cdot 1/40] \cdots 21 \cdot 22$ | 第38図 | 12号住居址出土青銅製品[1/2]56                    |
| 第9図   | 2 号住居址出土土器[1/4・1/3]23                  | 第39図 | 13号住居址焼土・炭化材分布図                        |
| 第10図  | 3 号住居址[1/80]25·26                      |      | (1/80)56                               |
| 第11図  | 3 号住居址遺物分布図[1/80]27                    | 第40図 | 13号住居址掘り方及び炉址                          |
| 第12図  | 3 号住居址炉址[1/40]27                       |      | $(1/80 \cdot 1/40) \cdots 57 \cdot 58$ |
| 第13図  | 3 号住居址出土土器(1)[1/4]28                   | 第41図 | 13号住居址〔1/80〕 59                        |
| 第14図  | 3 号住居址出土土器(2)[1/4·1/3]···29            | 第42図 | 13号住居址出土土器(1)(1/4)61                   |
| 第15図  | 3号住居址出土石製品[1/2]31                      | 第43図 | 13号住居址出土土器(2)(1/4·1/3)…62              |
| 第16図  | 4 号住居址・炉址〔1/80・1/40〕・33・34             | 第44図 | 13号住居址出土土製品(1/2)64                     |
| 第17図  | 4 号住居址出土土器[1/4·1/3]······35            | 第45図 | 14号住居址〔1/80〕64                         |
| 第18図  | 4 号住居址出土鉄製品[1/2]35                     | 第46図 | 14号住居址掘り方及び炉址                          |
| 第19図  | 5 号住居址・炉址〔1/80・1/40〕36                 |      | (1/80 · 1/40)······65                  |
| 第20図  | 5 号住居址出土土器[1/4]37                      | 第47図 | 14号住居址出土土器(1/3)66                      |
| 第21図  | 6 号住居址及び炉址[1/80・1/40]…38               | 第48図 | 14号住居址出土鉄製品(1/2)66                     |
| 第22図  | 6 号住居址出土土器[1/4・1/3]39                  | 第49図 | 15号住居址(1/80)67                         |
| 第23図  | 6 号住居址出土石器[1/4]40                      | 第50図 | 15号住居址出土土製品・鉄製品                        |
| 第24図  | 8 号住居址・焼土・炭化材分布図                       |      | (1/2) 67                               |
|       | (1/80)40                               | 第51図 | 16号住居址及び掘り方[1/80]68                    |
| 第25図  | 8号住居址及び7・8号住居址掘り                       | 第52図 | 17号住居址及び炉址〔1/80・1/40〕…69               |
|       | 方〔1/80〕41·42                           | 第53図 | 17号住居址掘り方〔1/80〕70                      |
| 第26図  | 8 号住居址出土土器[1/4・1/3]44                  | 第54図 | 18号住居址及び掘り方(1/80)72                    |
| 第27図  | 9 号住居址[1/80]46                         | 第55図 | 18号住居址出土石器(1/2)72                      |
| 第28図  | 9号住居址炉址[1/40]46                        | 第56図 | 19号・20号住居址及び炉址                         |
| 第29図  | 9 号住居址掘り方〔1/80〕47                      |      | [1/80 · 1/40] · · · · · · 73           |

| 第57図 | 19号・20号住居址掘り方(1/80)75               | 第86図  | 30号住居址〔1/80・1/40〕96         |
|------|-------------------------------------|-------|-----------------------------|
| 第58図 | 20号住居址出土土器[1/4·1/3]······76         | 第87図  | 30号住居址出土土器[1/4]96           |
| 第59図 | 20号住居址出土鉄製品(1/2)78                  | 第88図  | 31号住居址及び掘り方[1/80]97         |
| 第60図 | 20号住居址出土石器[1/4]78                   | 第89図  | 31号住居址出土土器[1/4·1/3]······98 |
| 第61図 | 21号住居址及び22号住居址掘り方                   | 第90図  | 31号住居址出土鉄製品[1/2]98          |
|      | (1/80)79                            | 第91図  | 32号住居址、33号住居址及び掘り方          |
| 第62図 | 21号住居址出土土器[1/4]79                   |       | (1/80)99                    |
| 第63図 | 22号住居址·同炉址·21号住居址炉址                 | 第92図  | 32号住居址出土土器[1/4]99           |
|      | (1/80 · 1/40)80                     | 第93図  | 32号・33号住居址掘り方〔1/80〕100      |
| 第64図 | 22号住居址出土鉄製品[1/2]81                  | 第94図  | 33号住居址出土土器[1/4·1/3]·····101 |
| 第65図 | 22号住居址出土土器[1/4·1/3]······81         | 第95図  | 1 号堀立柱建物遺構〔1/60〕103         |
| 第66図 | 23号住居址焼土・炭化材分布図                     | 第96図  | 1号堀立柱建物遺構出土土器               |
|      | (1/80)82                            |       | (1/3)103                    |
| 第67図 | 23号住居址及び炉址(1/80・1/40)…83            | 第97図  | 2 号堀立柱建物遺構〔1/60〕104         |
| 第68図 | 23号住居址出土土器[1/4·1/3]······83         | 第98図  | 3 号堀立柱建物遺構〔1/60〕104         |
| 第69図 | 24号住居址焼土及び炭化材分布図                    | 第99図  | 4 号堀立柱建物遺構〔1/60〕105         |
|      | (1/80)84                            | 第100図 | 1号小竪穴遺構及び掘り方                |
| 第70図 | 24号住居址及び炉址[1/80・1/40]…85            |       | (1/60)106                   |
| 第71図 | 24号住居址掘り方〔1/80〕86                   | 第101図 | 2 号小竪穴遺構〔1/60〕106           |
| 第72図 | 24号住居址出土石製品[1/2]86                  | 第102図 | 2 号小竪穴遺構掘り方〔1/60〕107        |
| 第73図 | <b>24</b> 号住居址出土土器[1/4·1/3]······87 | 第103図 | 2号小竪穴遺構炉址[1/20]107          |
| 第74図 | 25号住居址〔1/80〕88                      | 第104図 | 2号小竪穴遺構出土土器[1/4]107         |
| 第75図 | 25号住居址掘り方〔1/80〕89                   | 第105図 | 2 号集石遺構[1/20]108            |
| 第76図 | 26号住居址及び掘り方[1/80]89                 | 第106図 | 1 号集石遺構[1/40]109・110        |
| 第77図 | 26号住居址出土土器[1/4]90                   | 第107図 | 3 号集石遺構〔1/20〕111            |
| 第78図 | 27号住居址[1/80]90                      | 第108図 | 4 号集石遺構〔1/20〕112            |
| 第79図 | 27号住居址掘り方〔1/80〕91                   | 第109図 | 5 号集石遺構〔1/20〕112            |
| 第80図 | 27号住居址出土土器(1/4·1/3)······91         | 第110図 | 6 号集石遺構〔1/20〕113            |
| 第81図 | 28号住居址・掘り方及び炉址                      | 第111図 | 6 号集石遺構出土石器[1/4]113         |
|      | $(1/80 \cdot 1/40) \cdots 92$       | 第112図 | 7号集石遺構[1/20]114             |
| 第82図 | 28号住居址出土土器[1/4]93                   | 第113図 | 7 号集石遺構出土土器[1/4]115         |
| 第83図 | 29号住居址・掘り方及び炉址                      | 第114図 |                             |
|      | (1/80 · 1/40) · · · · · 94          | 第115図 |                             |
| 第84図 | 29号住居址出土土器(1/4・1/3)95               | 第116図 | 1 号土壙[1/30]119              |
| 第85図 | 29号住居址出土鉄製品[1/2]96                  | 第117図 | 2 号土壙[1/30]119              |

| 第118図 | 3 号土壙[1/30]120              | 第152図 | 2 号溝状遺構(Ⅰ)~(Ⅲ)                                    |
|-------|-----------------------------|-------|---|
| 第119図 | 4 号土壙〔1/30〕120              |       | (1/120 · 1/30) ······139 · 140                    |
| 第120図 | 5 号土壙〔1/30〕121              | 第153図 | 2 号溝状遺構( N )~( V )                                |
| 第121図 | 6 号土壙〔1/30〕121              |       | [1/120 · 1/30] · · · · · · 141                    |
| 第122図 | 7号・8号土壙[1/30]122            | 第154図 | 3号·4号溝状遺構   |
| 第123図 | 9 号土壙[1/30]122              |       | (1/120 · 1/30) · · · · · · 143                    |
| 第124図 | 10号土壙〔1/30〕123              | 第155図 | 1 号竪穴状遺構(1/60)144                                 |
| 第125図 | 11号・12号土壙〔1/30〕124          | 第156図 | 2 号竪穴状遺構[1/60]145                                 |
| 第126図 | 13号土壙[1/30]124              | 第157図 | 不整形落ち込み[1/60]146                                  |
| 第127図 | 13号土壙出土土器[1/4]124           | 第158図 | 1 ・ 2 号ローム土壙[1/60]147                             |
| 第128図 | 14号土壙及び5号不整形落ち込み            | 第159図 | II区北拡張区ピット群[1/80]148                              |
|       | [1/30]125                   | 第160図 | 遺構外出土の土器(1)縄文時代の土器                                |
| 第129図 | 15号土壙〔1/30〕126              |       | [1/3]149  |
| 第130図 | 16号土壙(1/30)126              | 第161図 | 遺構外出土の土器(2)中世以降の土器                                |
| 第131図 | 17号土壙〔1/30〕127              |       | [1/4]150  |
| 第132図 | 18号土壙〔1/30〕128              | 第162図 | 遺構外出土の石器  |
| 第133図 | 19号土壙〔1/30〕128              |       | $[1/3 \cdot 2/3 \cdot 1/4] \cdot \dots \cdot 152$ |
| 第134図 | 20号土壙〔1/30〕129              | 第163図 | 遺構外出土の鉄製品・土製品                                     |
| 第135図 | 21号土壙〔1/30〕129              |       | (1/2)153  |
| 第136図 | 22号土壙〔1/30〕129              | 第164図 | 住居址主軸方位図161                                       |
| 第137図 | 23号土壙〔1/30〕129              | 第165図 | 住居址規模別形態比較図163                                    |
| 第138図 | 24号土壙〔1/30〕130              | 第166図 | 規模別住居址分布図167                                      |
| 第139図 | 25号土壙〔1/30〕130              | 第167図 | 掘り方模式図167   |
| 第140図 | 26号土壙〔1/30〕131              | 第168図 | 第 I 期の集落173                                       |
| 第141図 | 27号土壙〔1/30〕131              | 第169図 | 第Ⅱ期の集落174   |
| 第142図 | 28号土壙[1/30]132              | 第170図 | 第Ⅲ期の集落175   |
| 第143図 | 29号土壙〔1/30〕132              | 第171図 | トレンチ配置図[1/400]186                                 |
| 第144図 | 30号土壙〔1/30〕132              | 第172図 | 第1トレンチ[1/60]187                                   |
| 第145図 | 31号土壙〔1/30〕133              | 第173図 | 第 5 トレンチ[1/60]188                                 |
| 第146図 | 32号土壙〔1/30〕133              | 第174図 | 第2トレンチ、同南・北拡張区及び                                  |
| 第147図 | 石棒を伴うピット[1/30]135           |       | 第 3 トレンチ[1/60]189・190                             |
| 第148図 | 石棒[1/2]135                  | 第175図 | 第6A・Bトレンチ(1/60)······192                          |
| 第149図 | 1号溝状遺構〔1/120・1/30〕136       | 第176図 | 第 7 トレンチ[1/60]193・194                             |
| 第150図 | 1号溝状遺構出土石製品[1/2]136         | 第177図 | 第8 A・Bトレンチ[1/60]······195                         |
| 第151図 | 2 号溝状遺構全体図[1/200]···137·138 | 第178図 | 第10トレンチ[1/60]196                                  |
|       |                             |       |   |

| 第179図 | 第4トレンチ[1/60]197                              |
|-------|--|
| 第180図 | 古墳出土土器[1/4]199                               |
| 第181図 | 古墳出土鉄製品及び石製品                                 |
|       | $(1/2 \cdot 1/4) \cdots 200$                 |
| 第182図 | 古墳公園(案)[1/400]206                            |
| 第183図 | 遺跡周辺出土の遺物(1)土器[1/3]…211                      |
| 第184図 | 遺跡周辺出土の遺物 (2)土製品                             |
|       | (1/2) 212                                    |
| 第185図 | 遺跡周辺出土の遺物(3)石器                               |
|       | $(2/3 \cdot 1/3 \cdot 1/4) \cdot \cdots 213$ |
|       |  |

# 附 図 目 次

**附図1** 六科丘遺跡全体図[1/1000]

附図2 六科丘遺跡土器変遷図[1/8]

附図3 六科丘古墳全体図[1/200]

# 表 目 次

| 第1表   | 1号住居址出土土器計測表17     | 第24表     | 13号住居址出土土器観察表(4)64 |
|-------|--------------------|----------|--------------------|
| 第2表   | 1号住居址出土土器観察表18     | 第25表     | 14号住居址出土土器計測表65    |
| 第 3 表 | 2 号住居址出土土器計測表18    | 第26表     | 14号住居址出土土器観察表66    |
| 第4表   | 2 号住居址出土土器観察表23    | 第27表     | 15号住居址出土土器計測表66    |
| 第5表   | 3 号住居址出土土器計測表27    | 第28表     | 16号住居址出土土器計測表68    |
| 第6表   | 3号住居址出土土器観察表(1)29  | 第29表     | 17号住居址出土土器計測表71    |
| "     | 3 号住居址出土土器観察表(2)30 | 第30表     | 18号住居址出土土器計測表71    |
| "     | 3号住居址出土土器観察表(3)31  | 第31表     | 19号住居址出土土器計測表74    |
| 第7表   | 4 号住居址出土土器計測表32    | 第32表     | 20号住居址出土土器計測表74    |
| 第8表   | 4 号住居址出土土器観察表(1)32 | 第33表     | 20号住居址出土土器観察表(1)76 |
| "     | 4 号住居址出土土器観察表(2)35 | "        | 20号住居址出土土器観察表(2)77 |
| 第9表   | 5 号住居址出土土器計測表37    | 第34表     | 21号住居址出土土器観察表80    |
| 第10表  | 5 号住居址出土土器観察表37    | 第35表     | 22号住居址出土土器計測表81    |
| 第11表  | 6 号住居址出土土器計測表38    | 第36表     | 22号住居址出土土器観察表82    |
| 第12表  | 6 号住居址出土土器観察表39    | 第37表     | 23号住居址出土土器計測表84    |
| 第13表  | 8 号住居址出土土器計測表43    | 第38表     | 23号住居址出土土器観察表84    |
| 第14表  | 8 号住居址出土土器観察表(1)43 | 第39表     | 24号住居址出土土器計測表86    |
| "     | 8 号住居址出土土器観察表(2)44 | 第40表     | 24号住居址出土土器観察表(1)87 |
| "     | 8 号住居址出土土器観察表(3)45 | <i>n</i> | 24号住居址出土土器観察表(2)88 |
| 第15表  | 9号住居址出土土器計測表47     | 第41表     | 26号住居址出土土器計測表90    |
| 第16表  | 9号住居址出土土器観察表49     | 第42表     | 26号住居址出土土器観察表90    |
| 第17表  | 10号住居址出土土器計測表50    | 第43表     | 27号住居址出土土器計測表91    |
| 第18表  | 10号住居址出土土器観察表50    | 第44表     | 27号住居址出土土器観察表(1)91 |
| 第19表  | 11号住居址出土土器計測表52    | "        | 27号住居址出土土器観察表(2)92 |
| 第20表  | 11号住居址出土土器観察表52    | 第45表     | 28号住居址出土土器計測表93    |
| 第21表  | 12号住居址出土土器計測表53    | 第46表     | 28号住居址出土土器観察表93    |
| 第22表  | 12号住居址出土土器観察表(1)53 | 第47表     | 29号住居址出土土器計測表95    |
| "     | 12号住居址出土土器観察表(2)55 | 第48表     | 29号住居址出土土器観察表(1)95 |
| "     | 12号住居址出土土器観察表(3)56 | "        | 29号住居址出土土器観察表(2)96 |
| 第23表  | 13号住居址出土土器計測表60    | 第49表     | 30号住居址出土土器観察表96    |
| 第24表  | 13号住居址出土土器観察表(1)60 | 第50表     | 31号住居址出土土器計測表98    |
| "     | 13号住居址出土土器観察表(2)62 | 第51表     | 31号住居址出土土器観察表98    |
| "     | 13号住居址出土土器観察表(3)63 | 第52表     | 32号住居址出土土器計測表99    |

| 第53表 | 32号住居址出土土器観察表100      | 第58表 2号掘立柱建物遺構柱穴規模1           | 04 |
|------|-----------------------|-------------------------------|----|
| 第54表 | 33号住居址出土土器計測表101      | 第59表 3号掘立柱建物遺構柱穴規模1           | 05 |
| 第55表 | 33号住居址出土土器観察表102      | 第60表 4号掘立柱建物遺構柱穴規模1           | 05 |
| 第56表 | 1号掘立柱建物遺構柱穴規模103      | 第61表 2号小竪穴遺構出土土器観察表 …1        | 07 |
| 第57表 | 1号掘立柱建物遺構出土土器観察表      | 第62表 時期別住居址一覧表1               | 76 |
|      | 103                   | 第63表 六科丘遺跡住居址一覧表1             | 82 |
|      | 写 真 図                 | 版 目 次                         |    |
| 図版 1 | 六科丘遺跡遠望               | 号堀立柱遺構                        |    |
| 図版 2 | 北東部の調査 南西部の調査 作業風     | 図版14 1号・2号・3号集石遺構             |    |
|      | 景                     | 図版15 4号・5号・6号集石遺構             |    |
| 図版 3 | 1号・2号住居址 3号住居址 4号     | 図版16 7号・8号集石遺構                |    |
|      | 住居址                   | <b>図版17</b> 9号集石遺構 石棒出土状態 II区 | 拡  |
| 図版 4 | 5 号住居址 6 号住居址 8 号住居址  | 張区ピット群                        |    |
|      | 8 号住居址遺物出土状況          | 図版18 2号溝状遺構                   |    |
| 図版 5 | 9号住居址 1号小竪穴遺構 11号住    | 図版19 1号・3号・4号溝 5・6号土壙         |    |
|      | 居址                    | 図版20 10号・15号・18号土壙            |    |
| 図版 6 | 13号住居址 13号住居址出土状况 15  | 図版21 26号・30号・31号土壙            |    |
|      | 号住居址堀り方               | 図版22 六科丘古墳                    |    |
| 図版 7 | 12号住居址 12号住居址遺物出土状況   | 図版23 六科丘古墳の調査 5号トレンチ (        | 5  |
|      | 16号住居址                | 号トレンチ遺物出土状況                   |    |
| 図版 8 | 17号住居址 18号住居址 19·20号住 | 図版24 1号・3号・5号・6号・7号・8号        | 클  |
|      | 居址                    | トレンチ                          |    |
| 図版 9 | 21・22号住居址 23号住居址炉 22号 | 図版25 出土土器 壺                   |    |
|      | 住居址遺物出土状況 23号住居址      | 図版26 出土土器 壺                   |    |
| 図版10 | 24号住居址炭化材および遺物出土状況    | 図版27 出土土器 壺・小型壺               |    |
|      | 24号住居址遺物出土状況 24号住居址   | 図版28 出土土器 台付甕                 |    |
| 図版11 | 26号住居址 27号住居址 29号住居址  | 図版29 出土土器 台付甕                 |    |
| 図版12 | 33号住居址炭化材および遺物出土状況    | 図版30 出土土器 鉢・蓋 縄文時代土器 カ        | ゥ  |
|      | 33号住居址遺物出土状況 28号住居址   | ワラケ                           |    |
|      | 28号住居址遺物出土状況          | 図版31 弥生時代遺物(石器・鉄器・土製品)        |    |
| 図版13 | 竪穴状遺構礫出土状態 1号小竪穴遺     | 縄文時代遺物 (石器)                   |    |
|      | 構 2号小竪穴遺構 1号堀立柱遺構     | 図版32 古墳出土遺物                   |    |

2号堀立柱遺構 3号堀立柱遺構 4

#### 第1章 発掘調査の経緯と経過

#### 第1節 発掘調査の経緯

本遺跡は、甲府盆地の西縁、中巨摩郡櫛形町平岡字六科山に位置する。遺跡の所在する櫛形町では、昭和55年を初年度に昭和64年度を目標年度として、新長期総合計画が策定された。同計画では、社会的・経済的な水準向上に直接関連する基本的要素である人口問題について、目標年度には、標準年度より5800人多い22000人とすることを考えている。この人口増に係わる事業の一つとして本町西地区への住宅政策の推進が計画されている。

住宅に関する事業は、西地区の過疎対策として取り上げられたが、相俟って、西地区の平岡より六科丘開発の陳情がなされ、町の事業計画と地域の要望が一致して六科丘開発(住宅地造成事業)に着手することになった。それに伴い、文化財保護法に基づき埋蔵文化財調査を実施することとなった。

町教育委員会では、昭和57年11月22日から昭和57年12月5日までの日程で、六科丘の28000㎡を対象に確認調査を実施した。その結果、約25000㎡については、遺構・遺物の分布が認められ、発掘調査が必要であるとの結論がえられた。

これをうけて、町教育委員会は六科山遺跡調査団を組織し、昭和58年5月1日から同年12月27日までの約8ヶ月間の日程で発掘調査を実施することとなった。さらに本調査をすすめるなかで、遺跡北側部で新たに古墳(六科丘古墳)が発見され、昭和58年10月1日より同年10月31日まで、墳形確認調査があわせて行なわれた。

発掘調査は、予定した期日に完了した。その後調査団は、昭和59年1月10日から昭和60年3月31日までの約14ヶ月間の日程で調査報告書作成に着手した。

一方、六科丘古墳については、昭和58年11月30日に町文化財審議委員会にその処置を計ったところ、同委員会から、保存し活用していくべく考えてほしいとの答申が出された。答申をうけ、町教育委員会では保存する事を決定し、山梨県教育委員会文化課の指導を得て、当初の造成設計を一部変更し公園として保存し、活用することとなった。設計変更に関しては、造成工事を担当しているセキスイハウス(株)・(株)大本組の文化財保護に対しての充分な理解のうえに成り立ったものである。 (鶴田 一雄)

#### 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、前述のごとく昭和58年5月1日に開始した。調査区は広大な範囲にわたるために

確認調査の成果に従って、 $I \cdot II$ 区に区分して発掘調査を行なった。すなわち、11-J区から14-M区の南北方向対角線を結ぶ線を基準とし、それ以東をI区、以西をII区とした。

発掘にあたっては、耕作土 (20~40cm) を重機によって排土し、以下の層を、遺構確認を行いつつ人力で掘り下げた。表土剝ぎは I 区からグリッドに従い順次行なっていった。

I区での遺構の調査を開始したのは、5月下旬からである。この時期、丘頂部の土壌は極度に 乾燥し、調査は難渋を極めた。I区の調査では縄文時代の集石7基、土壙12基が発見された。ま た6月初旬には円頂丘の西側中腹に、径60mを超す環状溝を発見したが、この溝の調査には約1ヶ月 を要した。この溝の時期は不詳である。I区の調査が完了したのは、8月11日である。

II区での遺構の調査を開始したのは、8月18日からである。II区の調査は、各学校の夏期休暇にあたったため、東海大学・山梨学院大・巨摩高校等の学生多数の参加を得て活況を呈した。II区では、33軒の弥生時代終末から古墳時代初頭に帰属する住居址および、該期の掘立柱建物遺構4棟、小竪穴遺構2基等が発見され調査された。ただ、斜面部下端近くでは、耕作は深く遺構底面までおよんでいた。ために、住居址等の損壊はひどく、遺物の残存状態も良好とは言えないものであった。II区の調査は12月27日に完了した。II区での調査は冬期にかかったため、遺構の凍結、壁の崩落にも悩まされることがしばしばであった。

また、設定した調査区域外でも土地改変を行なう個所については、工事担当者の理解を得て、 抜根・耕作土排除後に、遺構・遺物の確認作業を行なった。為に実際の調査面積は、約35,000㎡ におよぶ。その過程で、丘の北側に張り出した小尾根から鉄剣を発見し、その後の調査で古墳(六 科丘古墳)の存在を確認した。さらに同古墳については、7月26日より7月31日まで墳形測量調 査を、10月1日より10月31日までの期間に墳形確認調査を行なった。一方、II区に近接した二個 所で落ち込みを検出した。それぞれをII区北拡張区、II区南拡張区として遺構の調査を行なった。そ の他の工事区域では、遺構・遺物の分布は認められなかった。

調査期間及び面積と発見された遺構は以下の通りである。

#### 各区の調査の期間と面積

| I 🗵     | 58年4月28日~同年8月11日     | $13,000 \mathrm{m}^2$          |
|---------|----------------------|--------------------------------|
| II区     | 58年8月18日~同年9月末日      |                                |
|         | 58年11月2日~同年12月27日    | $11,000\mathrm{m}^2$           |
| II区北拡張区 | 58年 5 月27日~同年 5 月29日 | $200\mathrm{m}^2$              |
| II区南拡張区 | 58年10月1日~同年10月5日     | $100\mathrm{m}^2$              |
| 六科丘古墳   | 58年10月1日~同年10月29日    | $1,300\mathrm{m}^{\mathrm{z}}$ |

一方出土品等の整理作業は、何回かの中断をはさみつつ、下記の通り行なった。

59年1月5日~同年5月19日 59年8月7日~同年12月28日 60年1月4日~同年3月31日

#### 発見された遺構

| a ) | 竪穴住居址            | 33軒 |     |     |
|-----|------------------|-----|-----|-----|
| ь)  | 土壙               | 32基 |     |     |
| c ) | 集石遺構             | 9基  |     |     |
| d ) | 小竪穴遺構            | 2基  |     |     |
| e ) | 掘立柱建物遺構          | 4棟  |     |     |
| f ) | 溝状遺構             | 4本  |     |     |
| g ) | 竪穴状遺構            | 2基  |     |     |
| h ) | ローム土壙及び性格不明の落ち込み | 9基  |     |     |
| i ) | ピット              | 多数  |     |     |
| j ) | 古墳               | 1基  | (近藤 | 英夫) |



保存整備後の六科丘古墳

## 第II章 遺跡の概観

#### 第1節 地理的環境

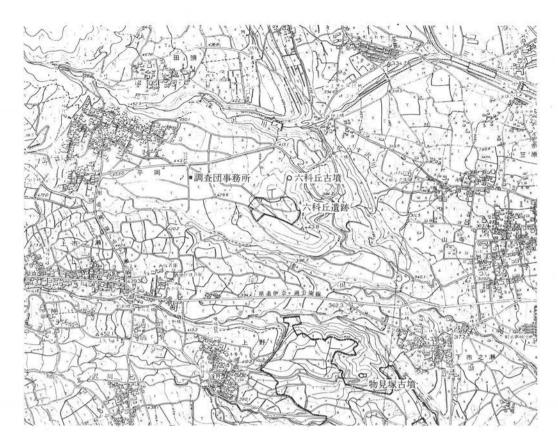
六科丘遺跡は山梨県中巨摩郡櫛形町平岡字六科山に存在し甲府盆地西縁に位置している。

甲府盆地はその地理的位置によって峡西・峡北・峡中・峡東等々と呼ばれている。そのうち峡西と呼ばれる地域は、盆地中央やや西寄りを北から南へ鈍い弧状を呈して貫流している釜無川以西の地域を指している。櫛形町はこの峡西のほぼ中央に位置し、その西半部を櫛形山及びその東麓に発達した市之瀬台地が占め、東半部は盆地床縁辺に発達した扇状地形となっている。

甲府盆地の西縁には北岳・間の岳・農鳥岳といった3,000m級の山々が南北に連なっており、通称「南アルプス」と呼ばれる赤石山脈を形成し、国立公園に指定されている。その前衛「巨摩山地」は糸魚川一静岡構造線によって南アルプスと隔されこれも南北に連なる。巨摩山地の主峰櫛形山は2,000m内外の高度を有し、その名の示す様に美しい櫛の形をとってそびえているが、櫛形町の町名はこの櫛形山に由来するものである。

ところで巨摩山地は壮年期山地の地貌を示しているが、その東側はいく条かの断層崖地形によって盆地床へと至っており、山地の中央を占める櫛形山にもその東麓に伊奈ヶ湖断層、下市之瀬断層が存在する。市之瀬台地は伊奈ヶ湖断層前面に発達した洪積扇状地が、甲府盆地形成に与かった最も新しい地殻変動によって形成された丘陵状の地形である。台地の平面形はほぼ扇状を呈し、南北4km、東西2.5kmの規模を持ち標高400~500mを示している。台地前面は比高差100~120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床へと至る。また台地前端には、断層運動に伴って発達した小円頂丘が並びこれらの西側は緩かな逆傾斜面を経て西方山麓へ向い順次高まっていく。台地基盤は櫛形山塊から流れ出した古い扇状地堆積物でその上面を火山性堆積物に覆われている。六科丘で見られる火山性堆積物は、その柱状図によると上部から、伝嗣院ローム層・黄白色軽石層・上野山ローム層と続いている。伝嗣院ロームは新期信州ロームに、上野山ロームは中期信州ロームに相当し、黄白色軽石層は木曽古御岳の第一浮石層(Pm-1)であり、甲府盆地における鍵層(Key・bed)とされている(「櫛形山の自然」編纂委員会、1976)。

ところでこの市之瀬台地上面には北から高室川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等が流れ、山地においては壮年期、台地に於いては幼年期の侵蝕地形を呈している。これらの河川は盆地床に流れ出ると急激に流勢を弱め、谷の出口から扇状地を造る。また高室川・深沢川は台地北から流れる大和川と合流して滝沢川となり、市之瀬川・漆川は合流して坪川となるがこれら諸河川は、有名な御勅使川の形成する扇状地などと相まって複雑な「複合扇状地」形をなしている。櫛形山を水源とするこれら諸河川は上流では18°~22°という急激な勾配を有し、従って大量の土砂を削



第1図 遺跡附近地形図 [1/20000]

り流し、下流の盆地床では、坪川・滝沢川等にみられる「天井川」地形を呈する。これら扇状地の扇央部にあたる桃園・小笠原・下市之瀬では地下水位が低く、極めて水に乏しい乾燥地となり、豪雨時には洪水におそわれる全く水田経営に不適な地勢である。地下に滲みこんだ水は扇端部では再び湧き出して、若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・古市場・鮎沢等と連なる弧状の湧泉列をなしている。この湧泉列より低位は極めて水の豊富な一帯となり、釜無川の形成する氾濫原へ連なっている。以上述べた地形上の制約は現在の土地利用にも如実に反映されている。扇央部は古来「原方」と呼ばれ桑畑・果樹園に利用されている。また扇頂附近は「根方」と呼ばれ山から流れ出す谷川の水を利用して水田経営が行なわれ、湧泉列外の氾濫原は「田方」と呼ばれ水田として利用されている(櫛形町誌編纂委員会、1966)。

六科丘遺跡は、先述した台地前端の円頂部から西向逆傾斜面上に占地している。東は比高差 100~120 m を有する断層崖によって盆地床と画され、西は逆傾斜面を経てなだらかな起伏を示す台地に連なっている。北は深沢川、南は漆川によって開析された谷が刻まれている。

丘頂上からは甲府盆地を一望できその夜景の見事さや眼下に広がる桃畑の花時のすばらしさは 目をみはらすものがある。また武田氏の拠った躑躅ヶ崎、後期群集墳の占地する盆地北縁の山 麓を北東に、甲斐に於ける古墳出現の地もある曽根丘陵を南東方向に見渡す好所でもある。遠 く北西には巨摩山地の鞍部を隔てて白峯連峰の一部を、北に八ヶ岳を望み、また東方には金峰山から甲武信岳を経て 「秩父山塊」が望まれる。南東には御坂山地を越えて冬には雪をいただいた富士がそのコニーデ型の姿をみせている。

以上の様に六科丘遺跡周辺の地理的・自然的環境は、近年ようやく甲府盆地にもおしよせた都市化の波に耐え、遺跡が機能していた当時の姿と環境を現在にまでよく伝えているといえよう。

(清水 博)

#### 第2節 歷史的環境

遺跡の存在する櫛形町は南隣の甲西町とともに峡西のほぼ中央を占め、また多数の遺跡の認められる地域でもある。しかしこれらの遺跡のなかで正式に発掘調査が実施されたものは五指にも充たない。まず沖積低地に所在する遺跡として甲西町古市場に存在する住吉遺跡(住吉遺跡調査団1981)が、次いで洪積台地下部、台地上にそれぞれ占地する櫛形町曽根遺跡(櫛形町教委、1984)、上の山遺跡があげられるが、これらは農道開設工事等に伴う比較的小規模な調査であった。また櫛形町上野の台地先端に占地する物見塚古墳(櫛形町教委、1983)が保存の為の確認調査を受けている。

ところで「山梨県遺跡地名表」(山梨県教委、1979)によれば櫛形町・甲西町にはあわせて60ヶ所程の遺跡が記載されている。その詳細はあきらかにされていないものの時代順に概観したい(第2図)。

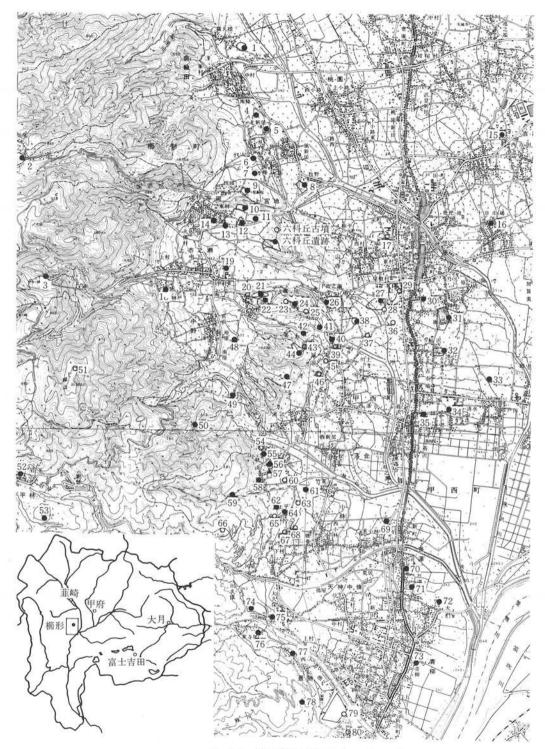
櫛形町東麓にひろがる台地上では旧石器時代から、縄文時代中期を中心とする遺物が多量に採集されている。旧石器時代の遺物は今回発掘調査を受けた六科山円頂丘上からナイフ型石器が1点採集されている。

甲西町塚原地内に所在する、昼喰場遺跡⑩からは縄文時代早期後半の土器片が採集され、同町 秋山の土居平遺跡⑩は縄文時代前期~中期の遺跡として注目されている。更に六科丘遺跡から西 方へ続く台地上からは縄文時代以降の遺物が採集され(数野他 1977)、特に平岡には長田口遺跡 ⑫、中畑遺跡⑬、東原遺跡⑩などが集中している。平岡から漆川を隔てた田頭の台地あるいは市 之瀬川をはさんだ上野・中野の台地上にも縄文時代の遺跡が存在している。櫛形町上野に所在す る上の山遺跡②では、台地先端に近く弥生時代末の集落が、また台地中央に近く早期末から晩期 にかけての土器を伴う縄文時代遺構群が検出されている。

弥生時代~古墳時代の遺跡としては先述した住吉遺跡®があげられる。住吉遺跡は扇端部の湧泉列上に並ぶ遺跡群の一つで、弥生時代後期末葉に属する住居址1軒と平安時代に属する溝状遺構等が発見されている。この他には洪積台地先端にのる、上ノ東遺跡❷、御前山遺跡倒などがあげられる。

弥生時代~古墳時代以降になると、台地先端に占地する遺跡に加えて甲西町江原の久保沢遺跡 ②、鮎沢遺跡②、清水遺跡③等扇端部の湧泉列上に占地する遺跡が主流を占める様になる。

一方古墳は、台地上から扇状地上に占地している。昭和56年に確認調査を受けた物見塚古墳図



第2図 周辺遺跡分布図 [1/50000]

| No. | 遺跡名                  | No. | 遺跡名            |
|-----|----------------------|-----|----------------|
| 1   | 曲輪田遺跡                | 41  | 後田遺跡           |
| 2   | 高尾遺跡                 | 42  | 坂上遺跡           |
| 3   | 伊奈ヶ湖遺跡               | 43  | 丸池古墳、刃塚古墳      |
| 4   | 北新居遺跡                | 44  | 上ノ平遺跡          |
| 5   | 神明遺跡                 | 45  | 住村2号墳          |
| 6   | 御坂B遺跡                | 46  | 住村1号墳          |
| 7   | 御坂A遺跡                | 47  | 御前山遺跡          |
| 8   | 曽根遺跡                 | 48  | 古屋敷遺跡          |
| 9   | 伝嗣院原遺跡               | 49  | 上ノ原遺跡          |
| 10  | 東原A遺跡                | 50  | 土居平遺跡          |
| 11  | 東原B遺跡                | 51  | 中野(雨鳴)城跡       |
| 12  | 長田口遺跡                | 52  | 平林向林遺跡         |
| 13  | 中畑遺跡                 | 53  | 平林大平遺跡         |
| 14  | 平岡遺跡                 | 54  | 丸山塚古墳          |
| 15  | 十五所遺跡                | 55  | 北沢遺跡           |
| 16  | 新田遺跡                 | 56  | 熊野神社遺跡         |
| 17  | (伝)小笠原長清遺跡           | 57  | 秋山経塚           |
| 18  | 上杉林遺跡                | 58  | 角屋敷遺跡          |
| 19  | 原田遺跡                 | 59  | 山居遺跡           |
| 20  | (伝)椿城跡               | 60  | 大明神塚古墳         |
| 21  | 上の山遺跡                | 61  | 小林竹重遺跡         |
| 22  | 下河原遺跡                | 62  | 舂米北原遺跡         |
| 23  | 上ノ東古墳                | 63  | 法華塚古墳          |
| 24  | 上ノ東遺跡                | 64  | 舂米上平遺跡         |
| 25  | 物見塚古墳                | 65  | 狐塚古墳           |
| 26  | 大畑遺跡                 | 66  | 藤塚古墳           |
| 27  | 狐塚 1 遺跡、狐塚 2 遺跡、河原遺跡 | 67  | 塚穴古墳           |
| 28  | 富士塚古墳                | 68  | 二十三夜塚古墳        |
| 29  | 御崎北1号墳・2号墳・3号墳・4号墳   | 69  | 長沢新町安清の池遺跡     |
| 30  | 下宮地遺跡                | 70  | 長沢平池遺跡         |
| 31  | 久保沢遺跡                | 71  | 長沢長池遺跡         |
| 32  | 鮎沢遺跡                 | 72  | 大椚遺跡           |
| 33  | 条里遺跡                 | 73  | 青柳遺跡           |
| 34  | 清水遺跡                 | 74  | 春米中尾田遺跡        |
| 35  | 古市場住吉遺跡              | 75  | 大久保広見遺跡        |
| 36  | 御崎前古墳                | 76  | 最勝寺平野遺跡        |
| 37  | 鋳物師屋古墳               | 77  | 最勝寺西の八遺跡       |
| 38  | 川上道上遺跡、道下遺跡、道上遺跡     | 78  | 最勝寺大堀田遺跡       |
| 39  | 塚原上村古墳               | 79  | 鎌塚古墳、塚穴古墳、大塚古墳 |
| 40  | 昼喰場遺跡                | 80  | 最勝寺馬門古墳        |

は櫛形町上野の台地先端に占地している。盆地西縁では最も古く5世紀代前半の古墳とされ、全長46mを測る前方後円墳である。内部主体は粘土槨らしくまた埴輪をもたない。副葬品として珠文鏡・管玉・鉄剣・直刀が出土している。増穂町では法華塚古墳®が台地先端に占地し、甲西町秋山には熊野神社古墳(甲西町誌編纂委員会 1973)が存在している。また物見塚の西300mの円頂丘上には上ノ東古墳②が占地しており、径25~30m程の円墳で墳頂部からは須恵器細片が採集される。また物見塚の南側に対する塚原山山頂には刃塚(甲西町誌編纂委員会 1973)が存在したとされるが現在は消滅している。

上野山丘陵を一段降った甲西町塚原、櫛形町下市之頼には、上村古墳③、鋳物師屋古墳③などが存在し共に横穴式石室を内部主体とする後期古墳であるが、後者は既に壊滅している。また上村古墳の周辺は「塚原」という字名が示す様に、かつては多くの群集墳が存在していたと考えられるが現在は数基を残すのみである。また鋳物師屋古墳周辺の扇状地にも積石塚古墳群が存在したとされ、現在も畑の中に積石塚様のものが見うけられるが詳細は明らかではない。

さて湧泉列のみられる櫛形町・甲西町・増穂町一帯は和名類聚抄に甲斐国・巨摩郡の九郷の一つとして所載されている「大井郷」に比定されている。その地内、現在の甲西町田島地区一帯には条里遺構®が埋没しているとされている。

周辺一帯は加賀美〔若草町〕、南湖(奈古)・秋山〔甲西町〕、小笠原〔櫛形町〕などの地名が示すように甲斐源氏の一族がその居館を定めた地でもあり、現在の小笠原小学校附近は小笠原氏館があったとも伝えられている。また中野の城山には秋山氏が拠ったとされる雨鳴城⑩があり土塁・堀切が残されている。上野本重寺附近には大井氏が拠ったという椿城⑩があったとされるが今日その痕跡をみることはできない。

最後に山梨県内に於ける弥生後期~古墳時代初頭の遺跡のうち発掘調査をうけた代表的なものとしては以下の例があげられる。まず盆地北縁には、敷島町・金の尾遺跡 (未木他、1980) 韮崎市・久保屋敷遺跡 (山梨県教委、1984)・坂井南遺跡 (韮崎市教委、1984)、長坂町・柳坪遺跡 (山梨県教委、1975) などが存在する。盆地東部では塩山市・西田遺跡 (山梨県教委、1978)、御坂町・二の宮・姥塚遺跡 (坂本他、1981) が、また盆地南縁では境川村・京原遺跡 (山梨県教委、1974)・物見塚遺跡、中道町・岩清水遺跡 (山梨県教委、1979)・上の平遺跡 (小林他、1980)、 三珠町・一城林遺跡 (山梨県教委、1980) 等があげられる。これらの遺跡は立地も扇端湧水帯、台地先端部と様々であり、内容も集落跡・方形集溝墓群等と多様性を示している。一般的には東海系の土器とされるS字状口縁甕を主体とする土器群を出土する遺跡は、湧水地や河川の氾濫原を控える自然堤防上などに占地し、それに先行する時代の遺跡は谷水田などを臨む低台地や丘陵先端に占地する傾向にある、とされている。

- 註1 櫛形町教育委員会によって1984年に発掘が行なわれた。弥生時代終末~古墳時代初頭の住居址 5 軒、縄文時代中期に属する住居址3 軒、土壙・溝等が検出されている。報告書は1984年度末 に刊行。
- 註2 実査による。
- 註3 実査による。尚、坂本美夫氏は「笹原塚3号墳」(笹原塚3号墳発掘調査会 1979)のなかで、 甲西町・御崎古墳群、増穂町・増穂古墳群についても、積石塚古墳である可能性を留保されつ つも、明確な判断をさけられている。
- 計4 佐々木藤雄氏の御教示による。弥生時代後期の住居址1軒が確認されているとの事である。
- 補註 1 本稿脱稿後に、保坂氏(県埋文センター)から若草町に於ける分布調査の成果を御教示いただいた。それによると湧水列上の微高地を中心として100ヶ所以上に及ぶ遺物散布地が確認されている。時代的には弥生時代後期から、中世にまで及んでいるが、その中心は五領期及び10世紀以降のものである。五領期(S字状口縁嚢)の分布は湧水列上からやや北寄りにかけて認められ、中世のものは湧水列より南(氾濫原側)へ進出している、との事である。
- 補註 2 山梨県内に於ける最近の弥生時代末~古墳時代初頭にかけての編年的研究の成果としては「熊 久保遺跡出土の弥生土器」(田代・中山、1984)がある。甕形土器を中心としてその編年を試みて いる。尚、氏らの論文で引用されている『六科山遺跡28号住居址』は本遺跡発掘時の住居番 号であり、本報文中では13号住居址としているものである。

## 第Ⅲ章 調査の方法と層位

#### 第1節 調査の方法

本遺跡は、前記したとおり、甲府盆地西縁の丘陵先端に占地する。

調査方法はグリッド法を採る事とし、調査区全域に10m方眼のグリッドを設定した。グリッドは確認調査時のものを踏襲することとした。すなわち造成工事用に設定していた基準軸を利用して、北西一南東方向に、北西から算用数字で $0\sim26$ 、それと直交する北東一南西方向に、北東からアルファベットで $A\sim V$ と定め、例えば1-A、10-V区等と呼称した。尚工事用基準軸はM列・N列の境界線にあたり、方位は $N-56^\circ51'16''-W$ にとるが、遺構主軸等の計測においては、便宜上 $N-57^\circ-W$ とした。

調査範囲は確認調査時の調査区域を基本としたが、すでに第 I 章で述べたように、確認調査の結果から多少の異同をみた。すなわち発掘区南端の26列以南及び、同南西部急斜面の16列以南、N列以西を調査対象から除外し、逆に円頂丘頂部東半部を調査区域に加える事とした(附図1)。

発掘に際しては、機械力と人力とを併用した。第一層(耕作土)を重機によって排除し、以下の層を人力で精査し、遺構・遺物の発見につとめた。 (近藤 英夫)

#### 第2節層 位

本遺跡の基本土層は次のとおり観察された。

第 I 層: 褐色土層 (耕作土)

第Ⅱ層:褐色土層。粘性・しまり共になくⅠ層の影響を受け土質は不均一である。

第Ⅲ層:明茶褐色土(ローム層)

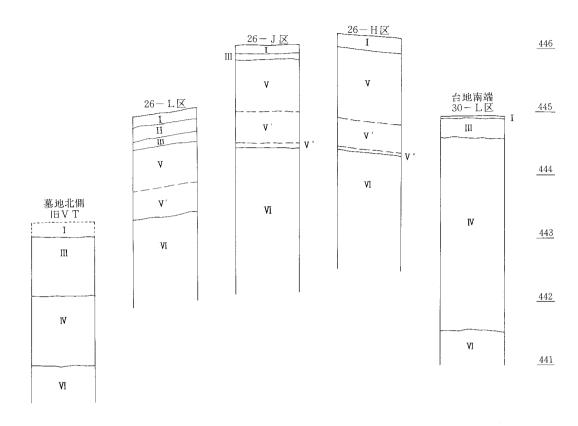
第Ⅳ層:黄白色軽石層。古御岳に由来する軽石層と考えられる。

第Ⅴ層:赤褐色土層

第VI層:茶灰色土層

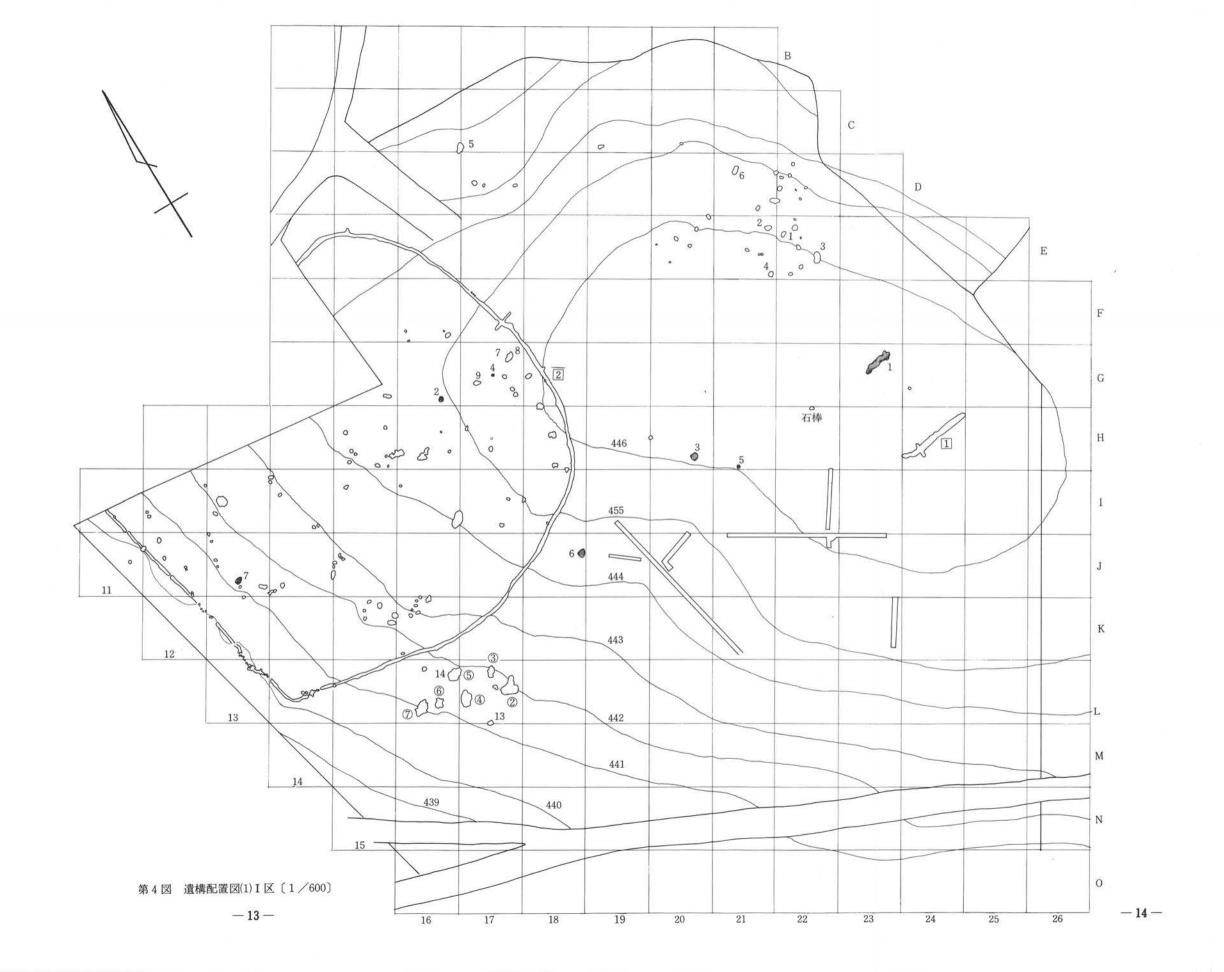
発掘区南端、26-H・26-J・26-L区で各1ヶ所、円頂丘上南端30-L区・同北部(試掘時第Vトレンチ南端)の計5ヶ所で基本土層を観察した。概念図(第3図)を以下に示すが、図より明らかなように堆積は部分的にかなり異った様相を呈している。

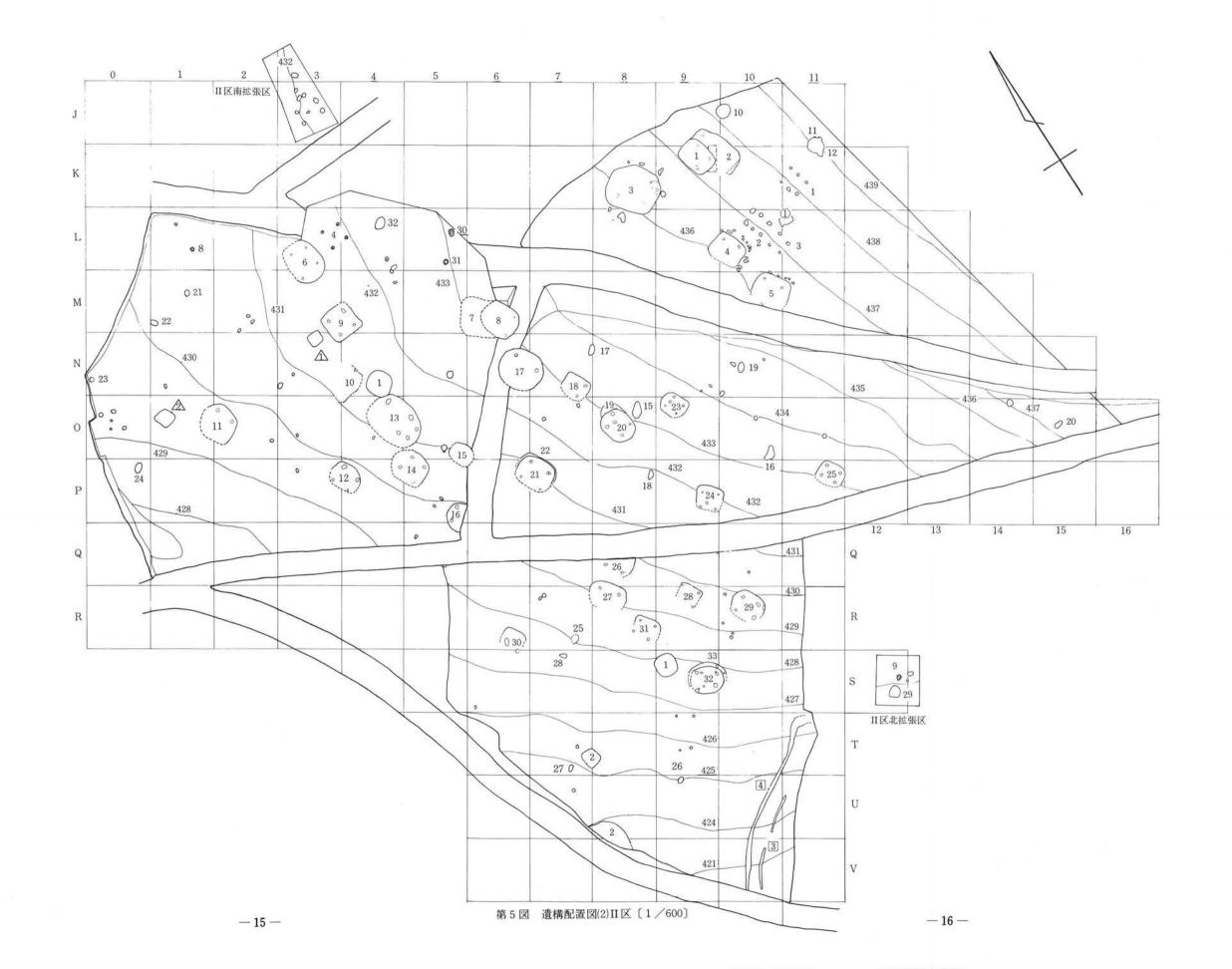
遺物は I・II 層中に分布し、遺構は II 層中からIII 層に切りこんで検出された。円頂丘頂部南半と六科丘古墳ののる北側小支丘では II・III・IV 層がほとんど確認されず、薄い耕作土層の下部に第 V 層が続く。このため、23 - G 区で検出された集石遺構は、 V 層上面まで掘りこまれた遺構基



第3図 基本土層概念図

部が残存するのみである。これらの部位は本来、III・IV層の堆積が薄く、かつ流失が著しかったものと考えられる。円頂丘南半に認められる赤褐色土層(第 V 層)は20 - K ~ 23 - E 区を東 - 西に結ぶ線で北方向へ急激に傾斜を深め、II・III層の下部へもぐりこんでいく事が看破される。調査区南側では明確にはしえないが、30 - L 区に於ては、III・IV層の厚い堆積が確認できる事から、26列~30列の間においても、23 - E 区以北と同様にIII・IV層の下部へもぐりこんでいくものと推定される。尚、試掘時に検出された1号土壙(落ち込み)はこの基本 V 層のもぐりこみ部である。円頂丘北半部及び、台地南端部においては、III層・IV層の堆積が認められ、特に弥生期集落の占地する西向逆傾斜面ではIII層が厚く堆積、耕作土下位には褐色土層(II層)も認められる。しかし諸遺構の削平状態から、遺構の本来的な掘り込み面(生活面)は現存する褐色土層上面よりも更に上位に存在したものと推定される。以上の様に本遺跡においては、遺物包含層及び生活面の流失、また耕作による削平・撹乱の為遺構の把握が必ずしも良好には行ないえなかった。 (清水 博)





## 第Ⅳ章 発見された遺構と遺物

#### 第1節 竪穴住居址·掘立柱建物遺構·小竪穴遺構

#### 1 竪穴住居址

1号住居址 (第6~8図、図版3、第1・2表)

斜面中央部の9-J・K区に位置する。2号住居址と重複し、本址上位に2号住居址床面が構築されている。

主軸方位を、N-16°-Wにとり等高線に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、5.7 × 4.2 mを測る。掘り込みはローム層まで達し、壁高は東壁で30cm、西壁で7cmを有する。上部に載る2号住居址床面と本址床面との高低差は約40~45cmを測るが、2号住居址の説明で述べる如く、調査手順を前後している為、その時間関係は明らかでない。

覆土は11層に分かれ自然堆積をなす。

床面は竪緻な貼床で、ほぼ平坦だが北西隅では若干の盛り上がりを見せる。

ピットは5ヶ所検出され $P_1$ ~ $P_4$ が柱穴である。深さはそれぞれ15cm、47cm、39cm、33cmを測る。 $P_5$ が貯蔵穴で平面楕円形を呈し規模は $55 \times 22$ cmを測る。深さは38cmを有し、平底を呈する。

周溝は、住居址西半部を半周し、幅は20~25cm、深さは5~10cmを測る。調査者の所見によると、 東半部も周溝状の浅い掘り込みが一巡する可能性がある。

炉は住居址中央やや北寄りに位置する。平面楕円形を呈し、規模は45×33cm、深さは13cmを測る。覆土は4層に分かれ第3層が火床面と考えられる。

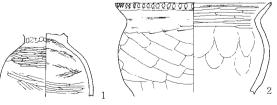
掘り方は、斜面上方(住居址東半部)が僅かに深く掘り込まれるが、ほぼ同一レベルで底面は 凹凸が激しい。埋土は3層に分かれ第12層が貼床土である。

出土遺物は少なく、1は貯蔵穴周囲床面を中心に、2は西半部覆土下層から出土している。

第1表 1号住居址出土土器計測表

| 蓌         | 壺                     | その他不明     |
|-----------|-----------------------|-----------|
| 109片 990g | 23 <sub>片</sub> 560 g | 5 片 160 g |







第6図 1号住居址出土土器〔¼〕

第2表 1号住居址出土土器観察表

|   | 蓋   | 法量:頸部径4.27cm。現存率:頸部付近場。 調整:外面一頸部指頭圧痕が残る。胴      |
|---|-----|--|
| 1 |     | 部へラミガキ。内面-胴部横方向のハケの後にヘラミガキ。口縁付近横方向のヘラミガ        |
|   |     | キ。胎土:密。焼成:良。色調:茶褐色。                            |
| 2 | 台付甕 | 法量:口縁部径16.63cm、頸部径14.10cm。現存率:胴部下半から脚部を全て欠く。他は |
|   |     | ほぼ完形。 調整:外面-口唇部、キザミを有する。頸部-口縁部ナデ。胴部・頸部         |
|   |     | ・脚部付近は縦方向のヘラケズリ。他は横方向のヘラケズリ。内面-口縁部~頸部横の        |
|   |     | ヘラミガキ。胴部指頭で整形した後にナデを施す。胎土:密。焼成:良好。色調:橙茶        |
|   |     | 褐色。  |

#### **2号住居址**(第7~9図、図版3、第3・4表)

斜面上部の9・10-J・K区に位置する。西半部で1号住居址と重複し、西5mに3号住居址が、南西7mに4号住居址、南東8mに1号掘立柱建物遺構が存在する。

住居址西半部に削平を受け遺存が悪く、また調査時の不手際もあり、本住居址に切られている 1号住居址の調査を先行してしまった。その為、本址西半部は床面の痕跡を確認しえたにすぎないが、規模・形状等はほぼ全容を把える事ができた。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸  $8.3\,\mathrm{m}$  で短軸は推定で  $5.8\,\mathrm{m}$  を測る大型住居址である。主軸方位は  $N-26^\circ-W$ にとり等高線にやや斜行する。掘り込みはローム層まで達し、壁高は東壁で  $45\,\mathrm{cm}$  を測る。壁は急激に立ち上がる。

覆土は10層に分けられ自然堆積を示す。

床面はほぼ平坦だが軟弱である。ピットは、12ヶ所検出したが、内4ヶ所( $P_1$ ・ $P_3$ ・ $P_{11}$ ・ $P_{12}$ )は掘り方で確認されたものである。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴で深さは各々、57cm、20cm、27cm、25cmを測る。 $P_{10}$ は深さ13cmを有し、梯子穴の可能性も持つ。貯蔵穴も現状では確認されず、位置関係等からも本来貯蔵穴を有さない住居址である可能性が強い。

周溝は本来全周したものと思われ、幅10~20cm、深さ3~9cmを測る。

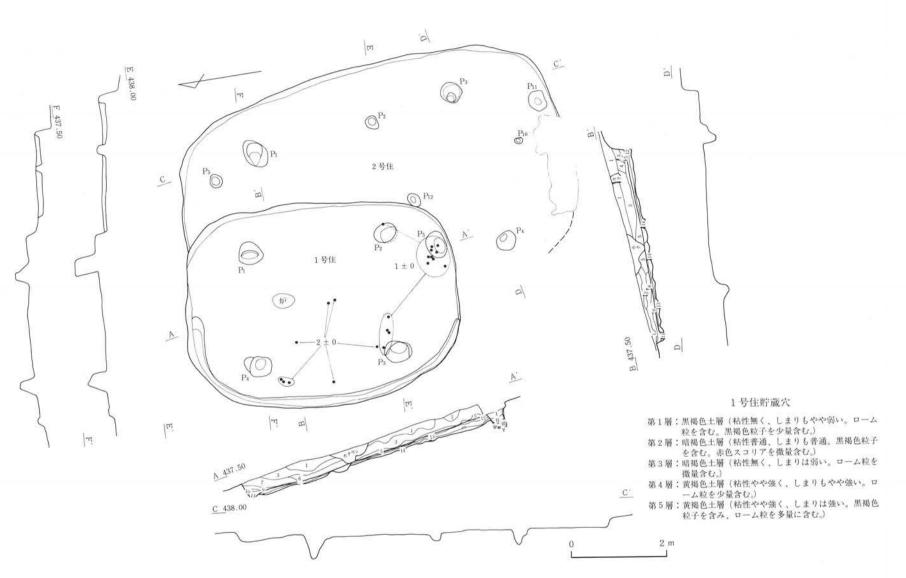
炉址は住居址北半部中央に位置する。平面形は不整方形を呈し、規模は50×37cm、深さ20cmを 測る。覆土は4層に分けられ、第1層は飛散焼土。第4層は被熱ローム層(火床)である。

掘り方は床下全面に及び、底面には凹凸が見られる。床面からは5~7cmの深さを持つ。

出土遺物は少なく南東隅に若干認められたのみである。2は覆土下層、他は覆土中から出土している。 (伊藤 公明)

第3表 2号住居址出土土器計測表

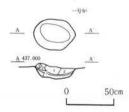
| 蓌        | 莹          | その他不明    |  |
|----------|------------|----------|--|
| 25 片 82g | 10 片 180 g | 4 片 78 g |  |



第7図 1号住居址・炉址及び2号住居址掘り方〔歳・益〕

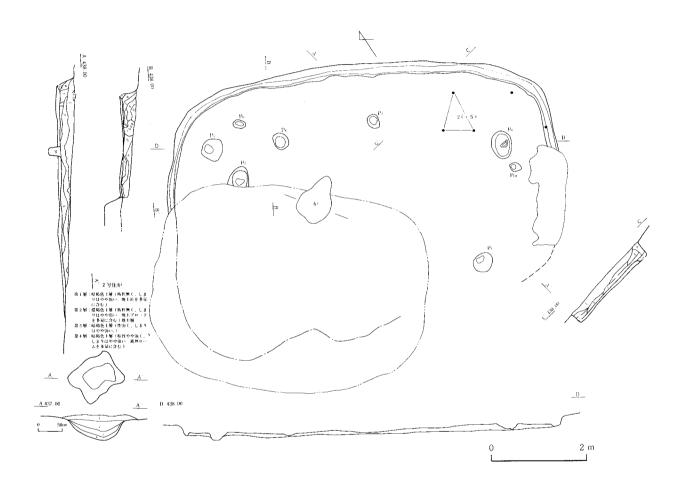
#### 1号住

- 第1層:暗褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。黒褐色粒子を少量 含み、ローム粒、炭化物、赤色スコリアを微量含む。) 第2層:褐色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。黒色土粒を含み
- ローム粒を少量含む。)
- 第3層:暗褐色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。黒褐色粒子を 含み、ローム粒、赤色スコリアを微量含む。)
- 第4層: 黄褐色土層 (粘性普通、しまりは強い。ローム粒を多量に 赤色スコリアを微量含む。)
- 第5層:褐色土層(粘性やや強く、しまりは普通。ロームブロックを多量に、黒色粒子を含み、炭化物を少量含む。)
- 第6層:暗褐色土層(粘性強く、しまりも強い。ローム粒を多量に
- 焼土粒、黒褐色粒子を少量含む。) 第7層:黒褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。ローム粒
- 炭化物粒を少量含む。)
- 第8層:黄褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや弱い。ローム粒 黒褐色粒子を少量、炭化物粒を微量含む。)
- 第9層:暗褐色土層(粘性やや強く、しまりは普通。ローム粒を少 量、黒褐色粒子を微量含む。)
- 第10層:褐色土層(粘性やや強く、しまりは強い。ローム粒を多量 に、炭化物を少量含む。)
- 第11層:暗黄褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや弱い。ローム 主体。)
- 第12層:黄褐色土層(粘性無く、しまりも強い。ローム粒、黒褐色
- 粒子を含む。) 第13層:暗褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。ローム粒 黒褐色粒子を含む。)
- 第14層: 黄褐色土層 (粘性やや強く、しまりもやや強い。黒褐色粒 子を少量含む。)



#### 1号住炉

- 第1層: 橙褐色土層(粘性無く、しま
- りは強い。) 焼土ブロック層 第2層:黒褐色土層(粘性普通、しま
- りはやや弱い。炭化物、焼土 を多量に含む。)
- 第3層:橙黄褐色土層(粘性無く、し まりは強い。) 被熱ローム層
- 第4層:黄褐色土層(粘性やや強く、 しまりはやや弱い。)

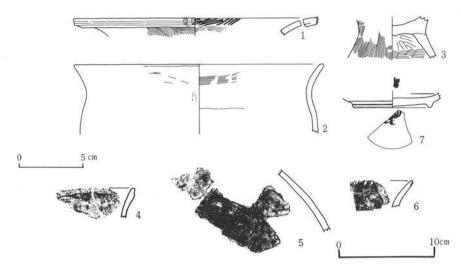


第8図 2号住居址及び炉址〔歳・ね〕

-21-

#### 2 号住

- 第1層: 黒色土層(粘性無く、しまりはやや弱い。黒褐色 粒子を多量に含む。)
- 第2層:橙茶褐色土層(粘性弱く、しまりはやや強い。黒褐色粒子を含み、ローム粒を少量含む。)
- 第3層:暗茶褐色土層(粘性普通、しまりはやや弱い。黒褐 色粒子、赤色スコリアを含む。)
- 第4層:茶褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや弱い。黒 褐色粒子、ローム粒を少量含む。)
- 第5層:橙黄褐色土層(粘性弱く、しまりはやや強い。ローム粒を多量に、黒褐色粒子を少量、赤色スコリアを 微量に含む。)
- 第6層:茶褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや弱い。ローム粒を多量に、黒褐色粒子、炭化粒を含み、赤色スコリアを微量含む。)
- 第7層:茶褐色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。ローム 粒を多量に、黒褐色粒子を含み、赤色スコリアを微 量に含む。)
- 第8層:褐色土層(粘性普通、しまりも普通。ローム粒を多量に、赤色スコリア、黒褐色粒子を少量含む。)
- 第9層: 橙黄褐色土層(粘性弱く、しまりはやや強く、粒子は微細。炭化物、黒褐色粒子を微量含む。) ローム主
- 第10層:黄褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや強い。黒 褐色粒子、赤色スコリアを微量含む。)



第9図 2号住居址出土土器 [¼・½] 第4表 2号住居址出土土器観察表

| 1 | 壺   | 法量:口縁部径(25.60)cm。現存率:口縁のみ岩。 調整:外面-口唇部棒状貼り付け。<br>折り返し口縁。指で整形しナデを施す。口縁部、縦方向のハケを呈す。内面-口縁部。 |
|---|-----|---|
| • | 52. | LRの細縄文。穿孔を有する。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。   |
|   |     | 法量:口縁部径(26.40)cm。 調整:外面-口縁部ハケ。他磨滅がひどく不明。内部-   |
| 2 | 甕   | 口縁部ナデ。頸部:横方向のハケ。他磨滅がひどく不明。胎土:白色粒子を含む。密。   |
|   |     | 焼成:良。やや軟質。色調:淡赤褐色。  |
|   |     | 法量:接合部径8.32cm。現存率:脚部のみ½。 調整:外面-縦方向に細かいハケ。   |
| 3 | 台付甕 | 内面-横方向の太いハケと斜め方向のヘラミガキ。全体に磨滅している。胎土:白色粒   |
|   |     | 子を多量に含む。密。焼成:良。やや軟質。色調:赤褐色。   |
|   |     | 現存率:口縁部~頸部½。 調整:外面-口唇部爪でつけたと思われる凹状のへこみ。   |
| 4 | 甕   | 口縁部ナデ。頸部縦方向のハケ。内面-口縁部~頸部横方向のヘラミガキ。胎土:密。   |
|   |     | 焼成:良であるがやや軟質。色調:赤褐色。  |
|   |     | 現存率:胴部上半%。 調整:外面-胴部上半細縄文を施す。その下部は、横方向の  |
| 5 | 壺   | ハケの後横方向のヘラミガキ。内面-胴部上半横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色   |
|   |     | 調:淡茶褐色。   |
|   |     | 現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-口唇部工具を用いた刻目有する。口縁部~顎  |
| 6 | 台付甕 | 部縦方向のハケ。内面-口縁部横方向のハケ。胎土:白色粒子を多量に含む。焼成:良。  |
|   |     | 色調:赤褐色。   |
|   |     | 法量:底部径(8.28)cm。現存率:底部のみ¼。 調整:外面-高台の一部を除き全て  |
| 7 | 染付  | に釉がかかる。底面に絵。内面-全てに釉がかかる。底面に絵。胎土:密。焼成:良。   |
|   |     | 色調:青乳白色。  |
|   |     |   |

#### 3号住居址 (第10~15図、図版3、第5・6表)

斜面上部の8-K・L区、9-K区に位置する。東5mには1号・2号住居址が重複して、南 11mには4号住居址が存在する。ほぼ完存する住居址であるが西半部は壁・床面共に遺存状態が 悪い。

主軸方位はN-40°-Wにとり、等高線にやや斜行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は8.3×7.0mを測る大型の住居址である。掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁78cm、西壁では5cmを測る。壁は急角度で直線的に立ち上がる。

覆土は17層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示す。第11~13層・第17層はピット覆土である。 床面は平坦であるが東半部がやや高く構築される。また全体的に堅緻であるが西壁沿いでは軟 弱で、本来的なものであるか、削平の影響であるかは明確にしえない。南西隅では壁沿い4m程 に亘って床面が盛り上がりを見せ、周囲からの立ち上がりはなだらかであるが、明確に段差を意 識して築かれている。住居址内での位置・形状等で相違を示すが、ベッド状遺構的様相を示すも のである。またこの部位では、掘り方埋土内に掘り込まれ、かつ上面を貼床で覆われる、ピット (Pt2~Pt4)が3ヶ所検出され、共に興味深い。

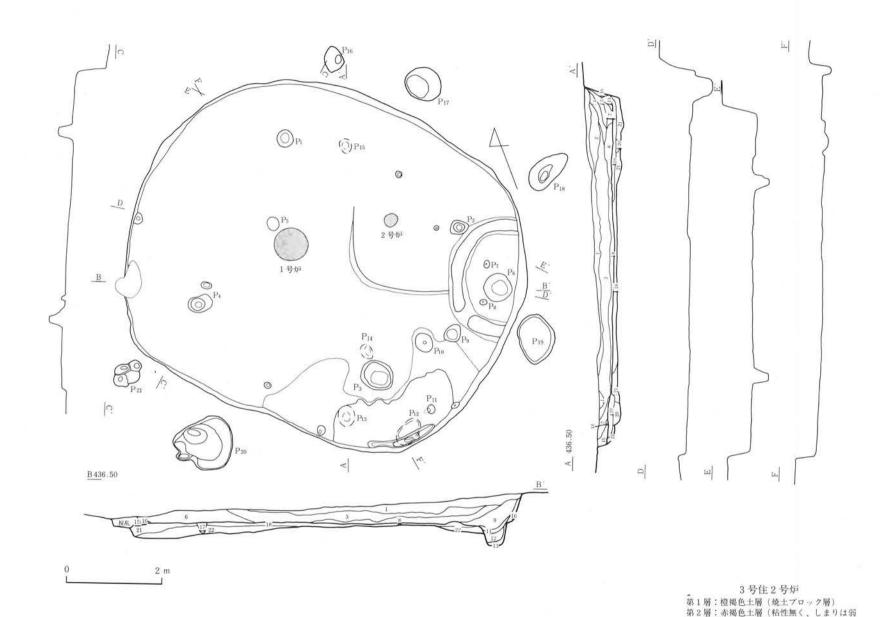
ピットは計21ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴で、深さは $P_1 - 37$ cm、 $P_2 - 28$ cm、 $P_3 - 33$ cm、 $P_4 - 29$ cmを測る。 $P_6$ が貯蔵穴、平面形は円形を呈し規模は径60cmで43cmの深さを有する。 $P_6$ の周囲は幅 $40 \sim 50$ cmの土堤状の盛り上がりが半円状に巡り、内側には小ピット( $P_7 \cdot P_8$ )が設けられており、貯蔵穴に付属するものであろう。南壁中央部寄りには $P_9 \cdot P_{10}$ が設けられており、位置からは入口施設の可能性を窺わせる。壁外には $P_{16} \sim P_{21}$ がほぼ住居址を一巡りしている。各々、19cm、21cm、50cm、26cm、48cm、28cmの深さを持つ。規模・形態とも様々であるが、位置関係から一応住居址に付設されるものと認定した。

炉址は 2  $\tau$ 所検出された。 1 号炉址は中央やや北寄りに、 2 号炉址は住居址東半中央寄りに位置する。 2 号炉址は $30\times 24$ cmの楕円形を呈し、深さ15cmの浅鉢状断面を有し覆土は 2 層に分けられる。 1 号炉址は $72\times 64$ cmの楕円形を呈し、深さ45cmのボール状断面を有し、覆土は 4 層に分けられる。 1 号炉址北には  $P_5$ が設けられ、内部には焼土・炭化物が充填していた。

周溝は認められなかった。

掘り方は壁際が深く中央が凸レンズ状に浅く、凹凸が少ない。床面からは  $5\sim34$ cmの深さを有し、埋土は 5 層に分かれる。うち第 $18\cdot19$  層を突き固めて貼床とし、第20 層はピット覆土である。掘り方内からは 4  $_{7}$  所 ( $P_{12}\sim P_{15}$ ) のピットが検出された。全て先述した如く、掘り方埋設後に設けられ、上面を床面で覆うものである。

出土遺物は豊富であるが、ほとんどの個体は原形を止めず細片化している。出土位置は、住居 址東半部、特に南東隅(貯蔵穴周辺)から多く出土しているが、これは床面の遺存状態と同様、 本来的な有様か、削平の影響か判然としない。出土レベルは覆土下層から覆土中にかけて認めら れ、一程度のまとまりを見せながらも互いに入りまじって散在している。24は磨製石鏃で北西



第10図 3号住居址 [%]

#### 3号住

第1層: 黒色土層(粘性無く、しまりは弱い、ローム粒を少量含む。)

第2層:茶褐色土層(粘性無く、しまりは普通。黒 褐色粒子を含み、ロームロックを少量含む。

第3層:明茶褐色土層(粘性普通、しまりも普通、 黒褐色土粒を含み、焼土粒、炭化物粒を少

第4層:暗茶褐色土層(粘性普通、しまりはやや強い。 黒褐色粒子を多量に、焼土粒、ローム ブロックを少量含む。)

第5層:明茶褐色土層(粘性普通、しまりも普通。 黒褐色粒子、焼土粒を少量含む。)

第6層:暗黄茶褐色土層 (黒色スコリアを多量に、 歴化物粒 焼土粒を少量会れ)

炭化物粒、焼土粒を少量含む。) 第7層:暗褐色土層(粘性普通、しまりも普通、黒 褐色粒子、ローム粒を多量に含む。)

第8層:暗黄褐色土層(粘性やや強く、しまりはや や弱い。炭化物を多量に、焼土を少量含む。)

第9層:茶褐色土層(粘性普通。しまりも普通。黒

色スコリアを多量に含む。) 第10層:暗黄色土層(粘性無く、しまりは強い。ロ ームブロックを多量に含む。)

第11層:明茶褐色土層(粘性普通、しまりは弱い。 黒色スコリア、ローム粒を含む。) 第12層:暗褐色土層(粘性普通、しまりも普通。)

第12層:暗褐色土層(粘性書通、しまりも普通。) 第13層:暗黄褐色土層(粘性無く、しまりは普通。

ローム粒を含む。)

第14層:茶褐色土層(粘性やや弱く、しまりもやや 弱い。ローム粒を含み、黒褐色粒子を微量 含む。)

第15層:黒褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。黒 褐色粒子を含み、ローム粒を微量含む。)

第16層:暗黄褐色土層 (粘性無く、しまりは弱い。 黒褐色粒子、ローム粒を少量含む。)

第17層:黄色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。 黒褐色粒子を含み、焼土粒を少量含む。)

第18層:暗黄褐色土層(粘性無く、しまりは強い。 黒褐色土粒、ローム粒を多量に含み、炭化 物を少量含む。) 貼床

第19層:明黄褐色土層(粘性普通、しまりは普通。) 第20層:暗黄色土層(粘性無く、しまりは弱い。黒

褐色粒子を多量に含む。) 1屋・麻黄色土屋(紅針型/ しまり

第21層:暗黄色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。 黒褐色粒子を含む。)

第22層:暗黄色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。 黒褐色粒子を含み、焼土粒、ローム粒を少量含む。)

### 3 号住 1-号炉

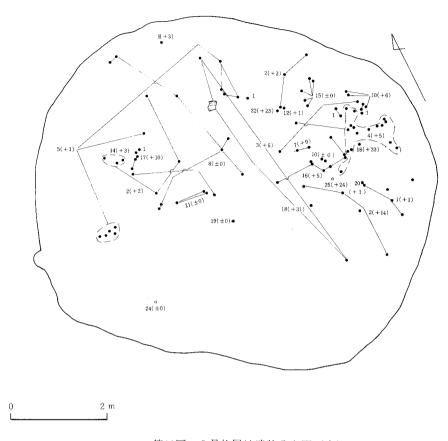
第1層:赤茶褐色土層(粘性無く、しまりは 弱い。焼土ブロックを多量に含む。)

第2層: 橙褐色土層(粘性無く、しまりは強い。茶褐色土を少量含む。)

第3層:明茶褐色土層(粘土普通、しまりは 弱い。黒褐色粒子を少量含む。)

全体に被熱 第4層:明赤茶褐色土層(粘性普通、しまり も普通、黒褐色粒子を含む。)

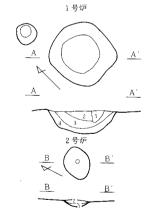
い。黒褐色粒子を少量含む。)



第11図 3号住居址遺物分布図〔息〕

部覆土下層から出土しているが、堅緻な 床面を検出しえなかった部位であり、床 面との関係は明らかにしえなかった。

(稲生 隆)

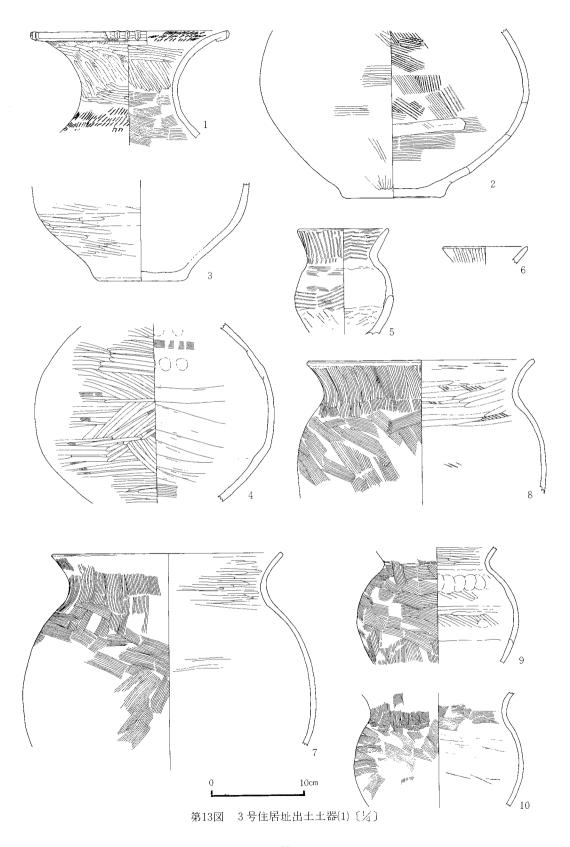


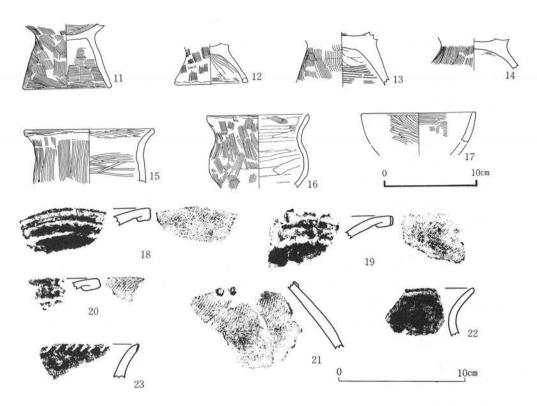
第5表 3号住居址出土土器計測表

| 39    | <b></b> | 壺    |        | その他不明 |   |      |
|-------|---------|------|--------|-------|---|------|
| 426 片 | 2740 g  | 63 片 | 1020 g | 5     | 片 | 70 g |

0 50cm

第12図 3号住居址・炉址〔売〕





第14図 3号住居址出土土器(2)〔¼・⅓〕

第6表 3号住居址出土土器観察表(1)

| 1 | 壺 | 法量:口縁部径20.85cm、頸部径10.03cm。現存率:頸部より上は完。下は欠落。  |
|---|---|--|
| 2 | 壺 | 法量:胴部径28.22cm、底部径10.65cm。現存率:胴部底部のみが½残る。 調整:<br>外面-全体に磨滅しておりミガキと思われるが不明。内面-胴部横方向のハケ底部簡<br>単にナデている。胎土:白色粒子が多量混入、密。焼成:やや軟質。色調:赤褐色。                                       |
| 3 | 壺 | 法量:底部径9.29cm。現存率:底部完存。胴部下半½。他は欠損。 調整:外面-全<br>胴部下半横方向のミガキ。内面-胴部下半底面磨滅がひどい。所々にナデの痕跡をみ<br>ることができる。胎土:密。焼成:軟質。色調:赤褐色。  |
| 4 | 壺 | 法量:胴部径25.14cm。現存率:口縁部頸部底部を欠く。胴部のみが%残る。 調整:<br>外面-胴部上半横方向のハケの後へラミガキを加える。下半縦方向のハケの後へラミガ<br>キを加える。黒斑が2ヶ所でみられる。内面-胴部上半ハケの上をわずかにナデる。指<br>頭圧痕もみられる。下半ヘラケズリ。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。 |

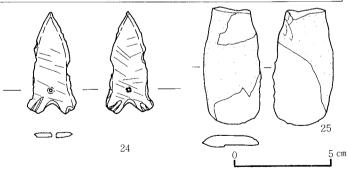
| 5  | 小型壺 | 法量:口縁部径9.1cm、胴部径10.2cm。現存率:胴下半〜底部欠損。 調整:輪積み痕を残す。外面−口縁条幅の広いハケ調整、のちヨコナデ。胴部上半口縁同様のハケ後へラミガキ。胴部下半ヘラナデ。内面−口縁ハケ後ヨコナデ後ヘラミガキ。胴ヘラナデ。胎土:赤褐色粒子・白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:褐色。                            |
|----|-----|---|
| 6  | 小型壺 | 法量:口縁部径(8.55)cm。現存率:口縁部のみ場。他は欠損。 調整:外面-口唇部指で押圧。口縁~頸部縦方向のハケの後にナデを呈している。内面-口縁~頸部横方向のハケの後ナデを加える。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色  |
| 7  | 台付甕 | 法量:口縁部径(24.43)cm。頸部径(20.69)cm。胴部径(30.85)cm。現存率:口縁をわずかに残す。胴部を光残しそれより下欠損。 調整:外面一口唇部指でナデて整形している。口縁~頸部縦方向のハケが入る。胴部横方向のハケ。内面一口縁~頸部ヘラケズリの後に粗いヘラミガキを加える。胴部ヘラケズリの後にナデている。胎土:密。焼成:良。色調:暗茶褐色。 |
| 8  | 台付甕 | 法量:口縁部径(24.80)cm。頸部径(19.36)cm。現存率:胴部上~口縁光。 調整:外面一口縁部~頸部縦方向のハケ。胴部横方向のハケの上を簡単に大きくナデる。内面一口縁部~頸部横方向のハケの後ナデを加える。胴部ヘラケズリの後簡単にナデる。胎土:白色粒子を混入。密。焼成:良。色調:薄茶褐色。                               |
| 9  | 台付甕 | 法量:頸部径(11.04)cm。胴部径(17.02)cm。現存率:頸部~胴部下半½。 調整:外面-口縁~頸部ナデヘラ押え。胴部上半縦方向と横方向のハケ。中位斜方向のハケ。下半縦方向のハケ。内面-口縁~頸部横方向のヘラミガキ。胴部上半指頭圧痕が残る。中位斜め方向のヘラミガキとナデを施す。下半指頭圧痕が残る。胎土:密。焼成:良。色調:淡褐色。          |
| 10 | 台付甕 | 法量:胴部径(17.92)cm。頸部径(13.88)cm。現存率:胴部のみ場。他は欠損。 調整<br>:外面-頸部口縁部方向の縦ハケ。胴部横方向を主としたハケ。内面-頸部横方向のハケの後にナデ。胴部横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:赤茶褐色。   |
| 11 | 台付甕 | 法量:脚底部径9.4cm。脚高5.4cm。現存率:脚部完存。 調整:輪積み。外面-ハケ内面-ハケ。胴底部内面ハケ(脚とは別原体)。胎土:白砂粒・黒色砂粒を含む。密。<br>焼成:良。色調:赤褐色。  |
| 12 | 台付甕 | 法量:脚部底径7.63cm。脚高3.50cm。現存率:脚部のみ完存。 調整:外面 - 縦方向のハケの後簡単にナデる。内面 - 横方向のハケ所々へラにて整形を加える。輪積み。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。   |
| 13 | 台付甕 | 法量:接合部径7.31cm。現存率:脚部のみ%。 調整:外面-脚部縦方向のハケ。内面-胴内底面わずかに斜め方向のハケが残る。脚上半ナデ。脚下半横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:薄黄褐色。  |
| 14 | 台付甕 | 法量:接合部(6.98)cm。現存率:脚部のみ%。 調整:外面-縦方向のハケ。内面-<br>ナデ (横方向を主とした)。胎土:白色粒子を含む。密。 焼成:良。色調:淡茶褐<br>色。   |
| 15 | 小型甕 | 法量:口縁部径10.81cm。頸部径8.26cm。現存率: ½残。脚は欠損。 調整:外面 一口縁〜頸部ナデを呈す。胴部上半縦方向のハケ調整。胎土:密。焼成:良。色調:茶褐色。   |

第6表 3号住居址出土土器観察表(3)

| 16 | 小型変 | 法量:胴部径13.83cm。頸部径11.39cm。現存率:口縁~胴部上半を½残す。 調整:<br>外面-口縁~頸部ナデ。胴部上半縦方向のハケ。内面-口縁ナデミガキ。頸部ナデ。胴 |
|----|-----|--|
|    |     | 部上半ミガキ(横方向)。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。   |
|    |     | 法量:口縁部径(12.19)cm。現存率:%。 調整:外面-ナナメのハケの後にヘラミガ  |
| 17 | 椀   | キを施す。内面-横方向のハケの後にナデる。胎土:密。焼成:良。やや軟質。色調:  |
|    |     | 淡褐色。   |
|    |     | 法量:口縁部径(17.78)cm。現存率:口縁部のみ%。 調整:外面-口唇部指で整形し  |
| 18 | 壺   | た後にナデている。口縁部わずかにハケを呈しナデている。内面-細縄文を呈している。   |
|    |     | 胎土:密。燒成:良。色調:淡赤褐色。   |
| 19 | 壺   | 法量:口縁部径(13.32)cm。現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-折り返し口縁わず  |
| 13 |     | かにハケ。内面-細縄文を呈す。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。  |
| 20 | 壺   | 現存率:口縁部のみ%。 調整:外面-折り返し口縁。口唇部は指で整形しナデを呈   |
| 20 |     | す。内面-ナデた上に細繩文を呈す。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。  |
|    |     | 現存率:頸部から胴部にかけての一部分しか残っていない光。 調整:外面-内形浮   |
| 21 | 壺   | 文2.3cm幅の縄文帯S字結節を有する。その下方はヘラミガキ。内面-横方向のハケの  |
|    |     | 後にナデを呈す。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。   |
|    |     | 法量:口縁部径(18.27)cm。現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-口唇部は口縁部を  |
| 22 | 甕   | 整形した後にナデを加える。口縁部から頸部にかけては縦方向のハケの後にナデを呈す。   |
|    |     | 内面-横方向のハケの後にナデを加える。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。  |
|    | 甕   | 現存率:口縁部のみ%。 調整:外面ーハケの上にナデを加える。この後に口唇部を   |
| 23 |     | 指で整形。内面-ハケの後にナデている。口縁-刻目。胎土:粗。焼成:良。やや軟質。   |
|    |     | 色調:薄茶褐色。   |

**石製品** 24は磨製石鏃。石質 : 粘板岩。全長5.4×最大幅3.6 cmを測る。

基部には径0.2cmの孔が認められ、断面図で上方から下方へ向け穿孔され、穿孔側に面とりを施される。



第15図 3号住居址出土石製品〔½〕

縁辺部に陵を持つが、破損が激しい。表面は丁寧に研磨され、研磨方向は概ね横方向に走る。 脚部には両面に浅い溝がある。

住居址北西部床面直上から出土しているが、床面が軟弱な事もあり、床面とのレベル関係は明らかにし得なかった。

25は磨製石製品。石質:凝灰岩。表裏ともよく磨かれている。覆土中からの出土である。

## 4号住居址 (第16~18図、図版3、第7・8表)

斜面上部、9・10-L区に位置する。北11mに3号住居址が、南4mに5号住居址が存在し、南東2mには2号・3号掘立柱建物遺構が連なっている。

西壁から南西隅にかけては削平のため遺存しない。主軸方位をN-21°-Wにとり等高線と平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、 規模は5.6×4.3mを測る。 掘り込みはローム層まで達し、 壁高は東壁で55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち遺存部の状態は良好である。

覆土は16層に分けられほぼ自然堆積を示すが、全体的にローム粒が、また上層にロームブロックが混入し不自然さを残す。

床面は堅緻な貼床でほぼ平坦であるが、壁際は貼床が施されていない。これは壁際小ピットの 存在と共に何らかの施設の痕跡を示すものであろう。

ピットは多数検出された。 $P_1 \sim P_3$ が主柱穴で、深さはそれぞれ25cm、19cm、30cmを測る。 $P_8$ が 貯蔵穴と思われ、深さ30cmを測る。 $P_4 \sim P_6$ は組で使用された可能性があり、深さはそれぞれ37cm、17cm、8cmを有する。 $P_9 \sim P_{11}$ はそれぞれ40cm、25cm、26cmを測る。他に不定間隔ではあるが壁際に 小ピットが巡る。住居址外には壁から 1 mの範囲で不定形ピット  $P_{13} \sim P_{26}$ が並ぶが、間隔は不ぞ ろいである。深さは  $P_{23}$ が38cmを有する他は $10 \sim 20$ cmの範囲内にある。

周溝は認められなかった。

炉址は住居址中央部北壁寄りに位置する。本炉址は二度にわたって構築されており、旧炉址面に地山土を貼り、新炉としたものである。平面は共に不整円形を呈し、75×62cmの規模である。深さは旧炉で30cm、新炉で15cmを測り、覆土は共に3層に分けられる。

掘り方は中央が浅く、壁際が深く掘りこまれ、深さは床面から4~25cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層が貼床である。掘り方精査中、北壁寄り中央部からP27を検出した。これは掘り方埋土内に掘り込まれ覆土上層にロームブロックをリング状に持ち、上面には貼床が施される。

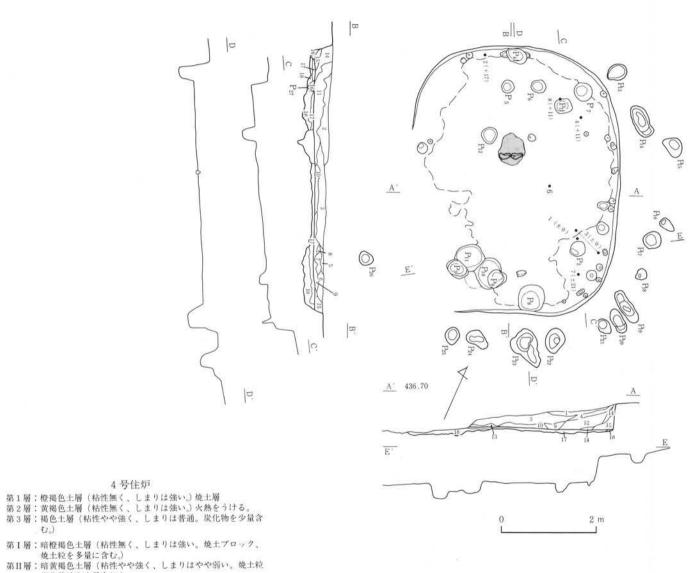
出土した遺物は少量で、床面から出土した ものは、南東隅に見られた1・3のみである。 他は覆土中からの出土である。(青木 流奈)

第7表 4号住居址出土土器計測表

| 鑂    |       | Ē    | その他不明 |   |   |      |
|------|-------|------|-------|---|---|------|
| 77 片 | 460 g | 14 片 | 240 g | 4 | 片 | 40 g |

# 第8表 4号住居址出土土器観察表(1)

法量:口縁部径(16.90)cm。胴部径(18.80)cm。頸部径(14.64)cm。現存率:口縁~胴部% 脚部欠損。 調整:外面一口唇部不揃いの刻み目をもつ。口縁部所々横方向の細かい ハケ。頸部縦方向の細かいハケ。胴部横方向のハケ。内面一口縁部ナデ。頸部横方向の ハケの後にナデを呈す。胴部横方向のハケの後を簡単にナデる。胎土:密。焼成:良。 色調:暗茶褐色。



第16図 4号住居址・炉址〔歳・ね〕

4 号住 第1層:褐色土層 (粘性強く、しまりも強い。焼土粒を 微量含む。)

第2層:暗褐色土層(粘性強く、しまりはやや強い。ロ 一ム粒を少量、炭化物を微量含む。)

第3層:明褐色土層(粘性強く、しまりも強い。ローム

粒、黒褐色土粒を含む。) 第4層:暗褐色土層(粘性弱く、しまりは強い。ローム

ブロックを含む。) 第5層:暗褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。

ローム粒、炭化物を少量含む。)

第6層:明褐色土層(粘性強く、しまりも強い。ローム ブロックを少量含む。) 第7層:黄褐色土層(粘性強く、しまりも強い。ローム

粒を多量に含む。)

第8層:明褐色土層 (粘性やや強く、しまりは弱い。ロ ーム粒、黒褐色粒を多量に含む。) 第9層:暗褐色土層(粘性強く、しまりは弱い。焼土粒

を微量含む。)

第10層:明褐色土層(粘性強く、しまりは普通。ローム 粒を含む。)

第11層:褐色土層(粘性普通、しまりはやや強い。ローム粒、炭化物を多量に、黒褐色粒子を少量含む。) 第12層:明褐色土層(粘性やや強く、しまりは弱い。ロ

一ム粒を多量に含む。)

第13層:暗褐色土層 (粘性強く、しまりはやや弱い。) 第14層:暗褐色土層(粘性強く、しまりも強い。炭化物

を微量に、ローム粒を含む。) 第15層:暗褐色土層(粘性強く、しまりは弱い。ローム

粒、炭化物を少量含む。) 第16層:暗褐色土層(粘性無く、しまりはやや弱い。ロ

一ム粒、黒褐色粒子を含む。)

第17層: 灰黄褐色土層 (粘性無く、しまりは強い。ロー ム粒、黒褐色粒子、少砂粒を含む。) 貼床

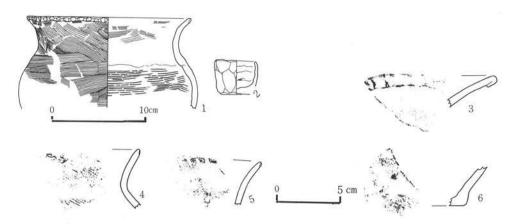
第18層: 黄褐色土層(粘性やや強く、しまりは普通。ローム粒を含み、小砂粒を微量含む。)

焼土粒を多量に含む。)

炭化物粒を少量含む。)

量含む。)

第Ⅲ層:褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや弱い。炭化物を微

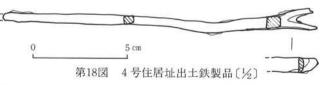


第17図 4号住居址出土土器 [¼・⅓]

第8表 4号住居址出土土器観察表(2)

| 2 | 手づくね | 法量:口縁部径3.95cm。胴部径4.50cm。器高3.67cm。底部径3.55cm。現存率:%。<br>調整:輪積み痕を残す。外面-口唇部指で整形した後に簡単なナデを施す。口縁部指頭圧痕<br>を残す。胴部指頭圧痕を残す。底部指で整形した後に簡単なナデを施す。内面-全体が<br>指で整形した後に簡単なナデを施す。胎土:密。焼成:良。色調:明茶褐色。 |
|---|------|--|
| 3 | 壺    | 現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-折り返し口縁、指で整形しナデる。口縁部~頸部縦のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。   |
| 4 | 築    | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-口唇部わずかに刻み目をもつ。口縁部〜頸部斜め方向のハケ。内面-口縁部〜頸部横方向のハケの後わずかにナデを施す。胎土:密。<br>焼成:良。色調:薄茶褐色。  |
| 5 | 築    | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-口唇部刻み目。口縁部磨滅がひどく不明。<br>内面-口縁部ナデ。胎土:密。焼成:良。色調:茶褐色。  |
| 6 | 壺    | 現存率:底部のみ½。 調整:外面 - 縦方向のハケの後にみがきを加える。内面 - 横<br>方向のハケ及びナデ。胎土:密。焼成:良。色調:明茶褐色。   |

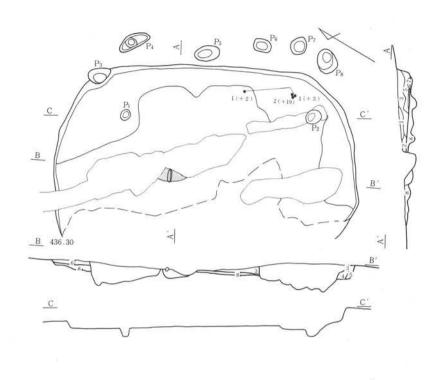
鉄製品 棒状鉄器。現長16.5cm、 0.4×0.5cmの方形断面を有する。 一端は1cmにわたって二肢に裂か

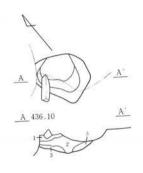


れ、0.8×0.3cmの偏平断面を示す。壁外P26覆土中より出土している。

## 5号住居址 (第19~20図、図版 4、第9·10表)

斜面上部の、 $10\cdot 11-M$ 区に位置する。北 4 mに 4 号住居址が存在し、北東 3 mに 2 号・3 号掘立柱建物遺構が連なる。主軸方位は $N-30^\circ-W$ にとり、等高線とやや斜行する。耕作及び道路に





5号住炉

第1層:橙褐色土層=焼土。 第2層:明黃褐色土層=被熱口

ム層

第3層:暗黄褐色土層(粘性弱、 しまり弱。ローム粒、黒

褐色粒子を含む。)

#### 5号住

2 m

第1層:褐色土層 第2層:褐色土層(粘性強、しまり強。ロームブロッ

クを含む。)

第3層:暗褐色土層(粘性無、しまり強。黒褐色土、

ローム粒を含む。)

第4層:暗褐色土層(粘性やや強、しまり強。) 第5層:褐色土層 (粘性無、しまり弱。ロームブロッ

ク、焼土ブロックを含む。)

第6層:暗黄褐色土層(粘性無、しまり弱。ローム粒

を含む。

第7層:褐色土層(粘性強、しまり強。焼土粒を含む。)

第8層:暗黄褐色土層=貼床。

50cm

5号住居址・炉址〔歳・ね〕 第19図

よって削平を受け、西半部は遺存しない。遺存する東半部も畝が走り必らずしも良好ではない。 掘り方残存部からの推定であるが平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、規模は6.3×(4.8) m程を測る。掘り込みはローム層まで達し、壁高は25~30cmを有する。壁は急角度でやや内湾 気味に立ち上がる。覆土は7層に分けられ自然堆積を示す。

床面はほぼ平坦で、堅緻であるが、周辺部は軟弱である。

ピットは8ヶ所検出された。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が主柱穴で、深さはP<sub>1</sub>-17cm、P<sub>2</sub>-23cmを測る。P<sub>3</sub>~P<sub>8</sub>は 住居址外に設けられ、それぞれ28cm、9 cm、13cm、23cm、24cm、22cmの深さを有する。住居址東 壁外に不定間隔に並ぶ。

周溝は認められない。

炉址は住居址中央やや北寄りに築かれるが畝の為、半分程壊されている。形状・規模は推定であるが、隅丸方形を呈し、60×50cm程と考えられる。炉石は1つ遺存しており枕石的に使用されたものであろう。覆土は3層に分けられる。

掘り方はほぼ全面に及ぶが、床面が軟弱であった東壁際は掘りこまれなかった可能性もある。底面は凹凸が激しく床面からは  $5\sim15$ cmの深さを持つ。埋土は 1 層である。

出土遺物は少なく、図示しえたものも2点の

第9表 5号住居址出土土器計測表

みである。1・2共に南東隅から出土し、1は ほぼ床面直上に認められた。 (吉岡 弘樹)

| 蓌          | 壺        | その他不明    |  |  |
|------------|----------|----------|--|--|
| 22 片 150 g | 4 片 90 g | 2 片 10 g |  |  |



第10表 5号住居址出土土器観察表

|   | 壺 | 法量:口縁部径(21.29)cm。現存率:口縁部のみ%。 調整:外面-折り返し口縁を呈 |
|---|---|---|
| 1 |   | し棒状貼り付けを有す、口縁部に焼成前の穿孔が行なわれている。縦方向のハケを施す。    |
|   |   | 内面一口縁部細縄文を呈す。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。              |
|   |   | 法量:口縁部径(17.00)cm。現存率:口縁のみ場。 調整:外面-磨滅しており整形は |
| 2 | 壺 | 不明。内面-横方向のハケの後にヘラミガキを施す。胎土:白色小粒子を多量に含む。     |
|   |   | 密。燒成:良。色調:赤橙色。                              |

#### 6号住居址 ( 第21~23図、図版4、第11・12表)

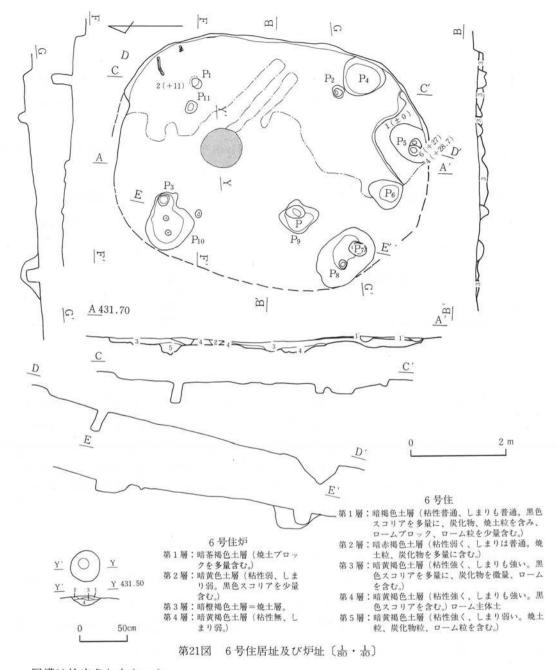
斜面中位、緩傾斜面の3-L・M区に位置する。東5mに4号掘立柱建物遺構が、南東25mに7・8号住居址が存在し、南5mには9号住居址と1号小竪穴遺構が立ち並ぶ。

耕作により削平され、東半部しか遺存しない。主軸方位をN-4°-Wにとり、等高線に平行する。平面形は隅丸長方形を呈するものと推定され、規模は $6.7 \times 5$  m程と考えられる。

掘りこみはローム層中まで達しており、削平が激しく  $5\sim12$ cmの壁高を有するにすぎず、覆土は 1 層である。

床面は貼床が施され、平坦で遺存部は堅緻である。

ピットは11ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_3$ が主柱穴で深さはそれぞれ45cm、16cm、24cmを測る。四本柱とすれば南西隅の柱穴が明らかでなく、 $P_7 \sim P_9$ のうち1ヵ所が該当する可能性がある。 $P_5$ が 貯蔵穴と思われ、楕円形平面を呈し規模は $95 \times 70$ cmで40cmの深さを有する。ピット周囲床面は $2 \sim 4$  cm程盛り上がりをみせる。 $P_6$ は出入口施設の可能性を窺わせる。



周溝は検出されなかった。

炉址は住居址中央やや北寄りに築かれる。平面形は円形を呈し、規模は径34cm、30cm程の深さを有する。覆土は4層に分けられる。

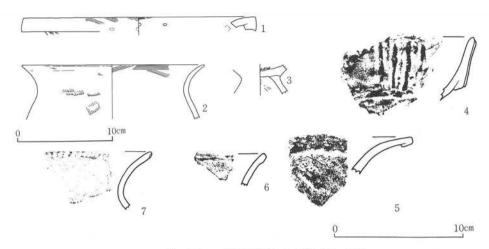
堀り方は住居址全面を掘りこむものと思われ、底面の凹凸は激しいが、撹乱の為明確にしえない。

出土遺物は少量で、南東部、貯蔵穴周辺に集

第11表 6号住居址出土土器計測表

中している。床面から出土しているものは1の みと少なく、他は覆土中の出土である。

| 甕     |       | 壺   |      | その他不明 |      |
|-------|-------|-----|------|-------|------|
| 153 片 | 705 g | 3 片 | 40 g | 3 片   | 25 g |

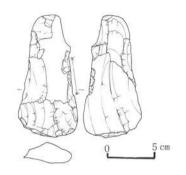


第22図 6号住居址出土土器〔¼・⅓〕

第12表 6号住居址出土土器観察表

| 1 | 壺   | 現存率:口縁部 折り返し口縁ナデ。 調整:口縁部~頸部縦方向のハケ2ヶ所の穿<br>孔。内面-口縁部~頸部ナデ。胎土:粒子が多く粗い。焼成:良。色調:灰茶褐色。                           |
|---|-----|--|
| 2 | 台付甕 | 現存率:口縁部~胴部上半光。 調整:外面-口縁部ナデ。口縁部~頸部縦方向のハケの後簡単にナデる。胴部上半縦方向のハケの後簡単にナデる。内面-口縁部~頸部ナデ。胴部上半ナデ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。   |
| 3 | 台付甕 | 現存率:脚接合部付近のみ場。 調整:外面-接合部付近簡単なナデ。内面-胴底部<br>斜め方向のハケの後ナデ。脚上部斜め方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐<br>色。                    |
| 4 | 壺   | 現存率:口縁部光。 調整:外面-口縁部複合口縁棒状貼付を4本有す。1区画。内面-口縁部ナデ。内外面ともに磨滅がひどい。胎土:密。焼成:良であるがやや軟質。色調:明赤褐色。                      |
| 5 | 壺   | 現存率:口縁部~頸部½。 調整:外面-口縁部、折り返し口縁。口縁~頸部斜め方向のハケ。内面-口縁~頸部ナデ。内外面ともに非常に磨滅しており整形は不明な点がある。胎土:小粒子を含む。密。焼成:軟質。色調:淡橙褐色。 |
| 6 | 霕   | 現存率:口縁部¼。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部横方向のヘラミガキ。内面-<br>口縁部横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:赤茶褐色。                                  |
| 7 | 甕   | 現存率:口縁部~頸部片。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁部縦方向のハケ。内面<br>一口縁部~頸部横方向のハケの後にナデ。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。                            |

石器 打製石斧。平面撥形を呈し、13×6 cmを測る。器厚は最大2.3cm、重量は230gである。一部に自然面を有し、右側縁に敲打痕を有する。



## 7号住居址 (第25図)

斜面中位の緩斜面部、5・6-M・N区に位置する。 第23図 6号住居址出土石器 [¼]

南半部を8号住居址に切られ、上面を耕作によって削平されるため、掘り方の一部が遺存するにすぎない。当初、撹乱とも、また7・8号住居址両者で一軒の大型住居址になるかとも考えた。しかし8号住居址柱穴、及び北壁一部を検出しえた為後者の可能性を除外した。更に7号住居址北壁コーナー部が僅かながらも確認されたこと、細片化が進んでいるが遺物が出土している事等から一軒の住居址として認定したものである。

形状・規模等は明確にしえないが、隅丸長方形を呈し短軸は5m程である可能性が強い。また 主軸方位は8号住居址とほぼ同一にとるものと考えられる。 (吉岡 弘樹)

## 8号住居址 (第24~26図、図版4、第13・14表)

斜面中位の緩斜面部、6 - M・N区に位置する焼失住居である。北西27mに6号住居址が、西16mに13号住居址が存在する。南3mには17号住居址が、東には22m離れて3号住居址が存在する。7号住居址南半部を切って構築されている。

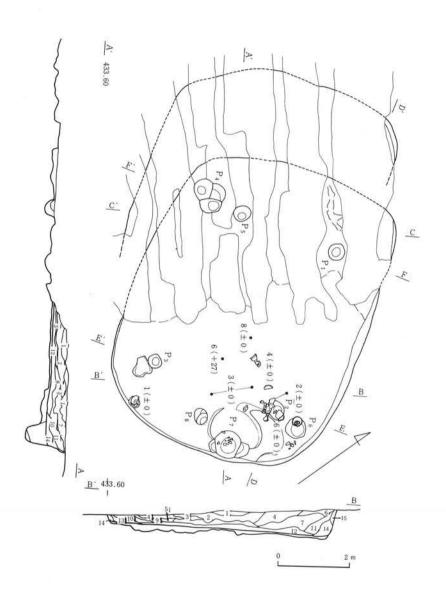
耕作による削平のため北半部では掘り方が遺存するのみである。南半部は偶々、上面を農道が走っていたため良好な遺存状態を示している。

主軸方位をN-32°-Wにとり、等高線に ほぼ平行する。堀り方面からの推定であるが、 平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6.3× 5 mを測るものと考えられる。

掘り込みはローム層中まで達し、壁高は 55cm、壁は急角度で湾曲しながら立ち上が る。覆土は15層に分けられ、床面直上(第



第24図 8号住居址焼土・炭化材分布図〔記〕



7 · 8号住

第1層:暗褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。黒褐色粒子を 多量に、ローム粒、ローム ブロックを少量、焼土粒を 微量含む。)

版里さむ。) 第2層:暗褐色土層 (粘性無く、し

まりは弱い。黒褐色粒子を 多量に、ローム粒、ローム ブロック、炭化物粒、焼土 粒を微量含む。)

第3層:明褐色土層(粘性強く、しまりも強い。黒褐色粒子を 少量、ローム粒、ロームブ ロックを多量に、炭化物粒 焼土粒を微量含む。)

第4層:暗褐色土層(粘性弱く、しまりは弱い。黒褐色粒子、 ローム粒を含み、ロームブロックを少量、炭化物粒、 焼土粒を微量含む。

第5層: 褐色土層(結性弱く、しまりは弱い。黒褐色粒子、ローム粒を含み、ロームブロックを少量、炭化物粒、焼土粒を微量含む。)

第6層:褐色土層(粘性無く、しまりはやや弱い。黒褐色粒子を少量、ローム粒、ロームブロックを含み、炭化物粒焼土粒を微量含む。

第7層:暗茶褐色土層(粘性やや強 く。しまりは強い。黒褐色 粒子、黒褐色ブロックを少 会な、黒石・エな屋

量含む。) ローム主体層 第8層:暗茶褐色土層(粘性やや強 く、しまりは強い。炭化物 焼土粒を多量に、焼土ブロ ック、黒褐色粒子、ローム 粒を少量やまり、

粒を少量含む。) 第9層:暗褐色土層(粘性無く、しまりはやや弱い。黒褐色粒子を多量に、ローム粒、ロームでウェン量、焼土粒 炭化物粒を偽量含む。)

粒、炭化物粒を微量含む。) 第10層:暗褐色土層(粘性普通、しまりは普通。黒褐色粒子を少量、ローム粒、ロームブロックを多量に、焼土粒、炭化物粒を少量含む。) 第11層:黒褐色土層(粘性無く、し

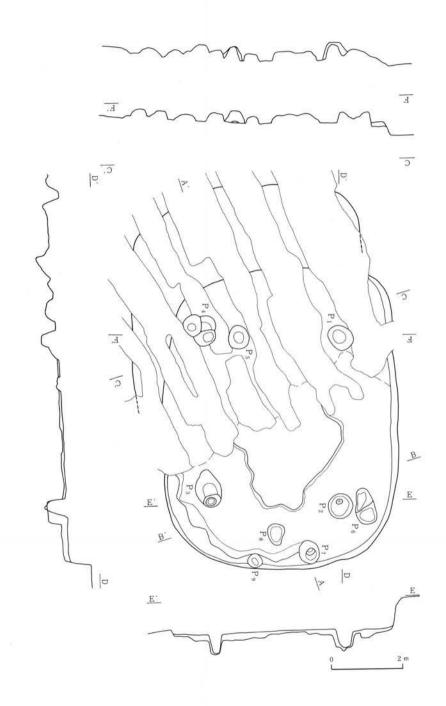
第11層:黒褐色土層(粘性無く、しまりはやや弱い。黒褐色粒 子、ローム粒、焼土粒を少量含む。)

第12層:暗橙茶褐色土層 (粘性弱く しまりは強い。炭化物粒、 焼土粒、焼土ブロックを多 量に含む)

量に含む。) 第13層:暗茶褐色土層(粘性弱く、 しまりは弱い。焼土ブロック、炭化物を含み黒褐色粒 子、ローム粒を少量含む。)

第14層:暗褐色土層(粘性普通、しまりは普通。黒褐色粒子、ロームブロック、ローム粒を少量含む。)

第15層:明褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。焼土ブロック 炭化物を少量含む。)



第25図 8号住居址及び7・8号住居址掘り方〔歳〕

12層)は大量の焼土・炭化材を主体とする層である。上層中には焼土粒・ローム粒・ロームブロックの混入が目立ち、層の乱れも人為的な堆積を示す。

床面は平坦で堅緻な貼床である。床面上には多量の焼土・炭化材が認められた。ピットは 9 ヶ所検出され、 $P_1 \sim P_4$ が主柱穴である。深さはそれぞれ27cm、18cm、42cm、23cmを測る。 $P_7$ が貯蔵穴で、 $60 \times 50$ cmの不整円形を呈し、深さ40cmで深鉢型断面を有する。両脇には小ピットが連結し、周囲床面は土手状の盛りあがりをみせ $P_7$ を巡るが住居址内部に向け開口する。 $P_8$ は深さ 30 cmを有し、出入口施設に関連するものであろう。 $P_9$ は掘方底面に設けられたものである。

炉址は検出されなかったが、位置関係から削平された住居址中央やや北寄りに構築されていた と推定される。

掘方は床下全面に及び、中央が浅く周囲が深く掘りこまれなだらかな凹凸をもつ。床面からの深さは  $5\sim15$ cmを測り、埋土は 1 層である。

出土遺物は比較的多く貯蔵穴周辺に集中している。床面での出土状態を観察すると、壺2、甕4・6、蓋10は貯蔵穴を巡る土提部外縁から、

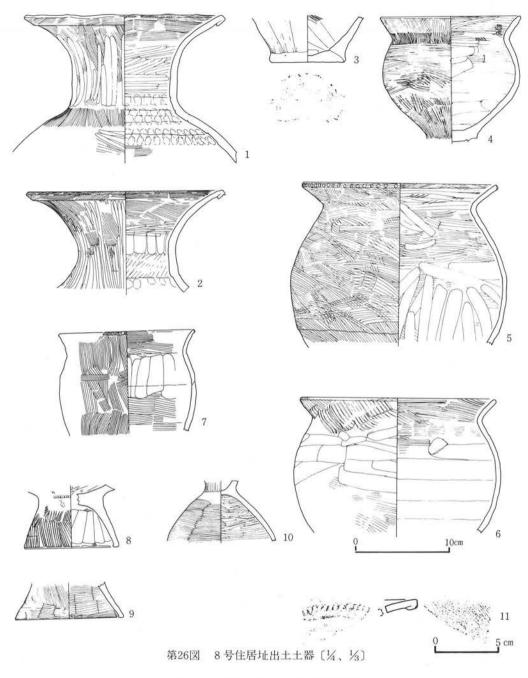
南西壁際から壺1が出土している。更に細片化のため図示しえなかったが貯蔵穴底部からも土器片が多数出土している。 (吉岡 弘樹)

第13表 8号住居址出土土器計測表

| 甕            | 壺         | その他不明    |  |  |
|--------------|-----------|----------|--|--|
| 129 片 1200 g | 8 片 180 g | 6 片 80 g |  |  |

第14表 8号住居址出土土器観察表(1)

|   |     | 法量:口縁部径20.33cm。頸部径10.97cm。現存率:頸部より下をすべて欠く。 調整    |
|---|-----|--|
|   |     | :外面一折り返し口縁、口唇部内面から外面に向けてハケを施してから折り返す。この          |
| 1 | 壺   | 後ナデを加える。口縁部縦方向のハケ。頸部(上・中)縦方向のハケの後縦方向のヘラミ         |
|   |     | ガキ。(下)縦のハケ。内面-口唇部横方向のハケ。頸部(上・中)横方向のヘラミガキ。        |
|   |     | (下)指頭による押圧。胎土:白色小粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。         |
|   | -   | 法量:口縁部径20.49cm。頸部径10.21cm。現存率:頸部より下をすべて欠く。 調整    |
|   |     | :外面-折り返し口縁、口唇部内面から外面に向けてハケを施してから折り返している。         |
|   | 壺   | この後ナデを加える。口縁部縦のハケの後簡単なヘラミガキ。頸部縦のハケの後縦方           |
| 2 |     | 向のヘラミガキ。内面-口唇部横方向のハケ。頸部(上)横方向のヘラミガキ。(中)縦方向       |
|   |     | ·<br>のヘラミガキ。(下)斜めのヘラミガキの後にナデる。指頭による押圧。胎土:白色の小    |
|   |     | 粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色                              |
|   |     | 法量:底部径(7.13)cm。現存率:底部のみ%。 調整:外面-胴部下半縦方向の大き       |
| 3 | 壺   | なミガキ。底面ハケにて整形。内面-胴部下半ハケの上をナデる。底部ナデ。胎土:密。         |
|   |     | 焼成:良。色調:暗褐色。                                     |
|   |     | 法量:口縁部径14.65cm。頸部径12.32cm。接合部径5.33cm。現存率:脚部を除き%。 |
|   |     | 調整:外面-口縁付近縦方向のハケの後にナデる。頸部縦方向のハケ。胴部横方向の           |
| 4 | 台付甕 | ハケ。胴部下半~脚接合部縦方向のハケ。内面-口縁~頸部横方向のハケの後に横方向          |
|   |     | を主とするミガキ。胴部上半ヘラケズリで一部横方向のハケ。胴部下半ヘラケズリ。胎          |
|   |     | 土:密。焼成:良。色調:明赤褐色。                                |
|   |     |  |



第14表 8号住居址出土土器観察表(2)

法量:口縁部径(20.27)cm。頸部径(16.10)cm。最大径(22.75)cm。現存率:口縁~胴部 %。 調整:外面-口唇部刻み目。口縁~頸部横及び斜め方向のハケ。頸部斜め方向 のハケ。胴部横及び斜め方向のハケ。内面-口唇部横方向のハケの後にミガキ。頸部~ 胴部上半横方向のハケの後一部ナデ。胴部下半横方向のハケの後ナデる。胎土:白色粒 子を多く含む。密。焼成:良。色調:暗褐色。

第14表 8号住居址出土土器観察表(3)

| 法量:口縁部径(20.23)cm。頸部径(17.83)cm。現存率:口縁~胴部上半/6。 調整: 外面一口唇部横方向の細いハケの後ナデる。口縁~頸部斜方向のハケ。胴部上半横方向のハケの後にナデる。胴部下半横方向のハケ。内面一口縁~頸部横方向の太いハケ。胴部上半横方向のハケの後にナデる。胴部下半横方向のハケ。内面一口縁~頸部横方向の太いハケ。胴部上半横方向の細いハケ。胴部下半ナデ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  法量:口縁部径(14.00)cm。頸部径(12.50)cm。胴部最大径(14.32)cm。現存率:口縁~胴部房。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁~頸部縦方向のハケ。胴部縦方向を主とするハケ。内面一口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土:白色粒子を多量に含む。やや粗。焼成:良。色調:暗褐色。  法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ場。 調整:外面一接合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縦方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。  法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ場。 調整:外面一脚中央部縦方向を主としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハラ・胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  法量:頸部径3.29cm。現存率:場。 調整:外面一頸部(上)縦方向のヘラミがキ。 (下)横方向のヘラミがキ。内面一はぼ全体に横方向のヘラミがキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  現存率:口縁部のみ場。 調整:外面一口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜め方向のハケ。内面一口縁細縄文を施す。胎土:密。焼成:良。色調:明赤褐色。 |   |   |  |
|---|---|---|--|
| 6 台付装 のハケの後にナデる。胴部下半横方向のハケ。内面一口縁~頸部横方向の太いハケ。胴部上半横方向の細いハケ。胴部下半ナデ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  法量:口縁部径(14.00)cm。頸部径(12.50)cm。胴部最大径(14.32)cm。現存率:口縁~胴部%。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁~頸部縦方向のハケ。胴部縦方向を主とするハケ。内面一口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土:白色粒子を多量に含む。やや柤。焼成:良。色調:暗褐色。  法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ%。 調整:外面一接合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縦方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ%。 調整:外面一脚中央部縦方向を主合付装。としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  法量:頸部径3.29cm。現存率:%。 調整:外面一頸部(上)縦方向のヘラミガキ。 (下)横方向のヘラミガキ。内面ーほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  現存率:口縁部のみ½。 調整:外面一四唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜   |   |   | 法量:口縁部径(20.23)cm。頸部径(17.83)cm。現存率:口縁~胴部上半½。 調整:      |
| 部上半横方向の細いハケ。胴部下半ナデ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。 法量:口縁部径(14.00)cm。頸部径(12.50)cm。胴部最大径(14.32)cm。現存率:口縁~胴部%。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁~頸部縦方向のハケ。胴部縦方向を主とするハケ。内面一口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土:白色粒子を多量に含む。やや粗。焼成:良。色調:暗褐色。 法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ%。 調整:外面一接合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縦方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。 法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ%。 調整:外面一脚中央部縦方向を主としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。 法量:頸部径3.29cm。現存率:½。 調整:外面一頸部(上)縦方向のヘラミガキ。(下)横方向のヘラミガキ。内面一ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  現存率:口縁部のみが。 調整:外面一豆部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜  |   |   | 外面-口唇部横方向の細いハケの後ナデる。口縁~頸部斜方向のハケ。胴部上半横方向              |
| 色調:赤褐色。   法量:口縁部径(14.00)cm。頸部径(12.50)cm。胴部最大径(14.32)cm。現存率:口縁~胴部場。   調整:外面一口唇部刻み目。口縁~頸部縦方向のハケ。胴部縦方向を主とするハケ。内面一口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土:白色粒子を多量に含む。やや粗。焼成:良。色調:暗褐色。   法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ場。   調整:外面一接合部付近縱方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縱方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。   法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ場。   調整:外面一脚中央部縦方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   法量:頸部径3.29cm。現存率:場。   調整:外面一頭部(上)縦方向のヘラミガキ。  | 6 | 台付甕   | のハケの後にナデる。胴部下半横方向のハケ。内面-口縁~頸部横方向の太いハケ。胴              |
| 法量:口縁部径(14.00)cm。類部径(12.50)cm。胴部最大径(14.32)cm。現存率:口縁~胴部光。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁~頸部縦方向のハケ。胴部縦方向を主とするハケ。内面一口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土:白色粒子を多量に含む。やや粗。焼成:良。色調:暗褐色。   法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ冷。   調整:外面一接合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縦方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。   法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ冷。   調整:外面一脚中央部縦方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   法量:頸部径3.29cm。現存率:冶。   調整:外面一頸部(上)縦方向のヘラミガキ。   10   蓋   (下)横方向のヘラミガキ。内面一ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   現存率:口縁部のみ分。   調整:外面一豆部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜   |   |   | 部上半横方向の細いハケ。胴部下半ナデ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。             |
| 7 台付装   |   |   | 色調:赤褐色。  |
| 7 台付装 するハケ。内面 - 口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎 土:白色粒子を多量に含む。やや粗。焼成:良。色調:暗褐色。 法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ場。 調整:外面一接 合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面 - 横方向のハケの後に縦方向のヘラナ デ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。 法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ場。 調整:外面 - 脚中央部縦方向を主 としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面 - 脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。 法量:頸部径3.29cm。現存率:場。 調整:外面 - 頸部(上)縦方向のヘラミガキ。 (下)横方向のヘラミガキ。内面 - ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。 現存率:口縁部のみ/n。 調整:外面 - 口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜  |   |   | 法量:口縁部径(14.00)cm。頸部径(12.50)cm。胴部最大径(14.32)cm。現存率:口縁~ |
| するハケ。内面一口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土:白色粒子を多量に含む。やや粗。焼成:良。色調:暗褐色。 法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ%。 調整:外面一接合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縦方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。 法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ%。 調整:外面一脚中央部縦方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。 法量:頸部径3.29cm。現存率:%。 調整:外面一頸部(上)縦方向のヘラミガキ。(下)横方向のヘラミガキ。内面一ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  現存率:口縁部のみ分の 調整:外面一口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜   |   | /、/_L&#</td><td>胴部%。 調整:外面-口唇部刻み目。口縁~頸部縦方向のハケ。胴部縦方向を主と</td></tr><tr><td>  法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ⅓。 調整:外面一接合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縦方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。   法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ㎏。 調整:外面一脚中央部縦方向を主としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   法量:頸部径3.29cm。現存率:⅓。   調整:外面一頸部(上)縦方向のヘラミガキ。   10   蓋 (下)横方向のヘラミガキ。内面一はば全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   現存率:口縁部のみ⅓。   調整:外面一回唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td>7</td><td>台勺装</td><td>するハケ。内面-口縁~頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎</td></tr><tr><td>8 台付甕 合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面-横方向のハケの後に縦方向のヘラナデ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。 法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ場。 調整:外面-脚中央部縦方向を主としたハケ。内面-脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。 法量:頸部径3.29cm。現存率:場。 調整:外面-頸部(上)縦方向のヘラミガキ。 (下)横方向のヘラミガキ。内面-ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  現存率:口縁部のみ火。 調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td></td><td></td><td>土:白色粒子を多量に含む。やや粗。焼成:良。色調:暗褐色。</td></tr><tr><td>デ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。 法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ場。 調整:外面-脚中央部縦方向を主 としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面-脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。 法量:頸部径3.29cm。現存率:場。 調整:外面-頸部(上)縦方向のヘラミガキ。 (下)横方向のヘラミガキ。内面-ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td></td><td></td><td>法量:脚部底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率:脚のみ½。 調整:外面-接</td></tr><tr><td>  法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ場。 調整:外面-脚中央部縦方向を主としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面-脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   法量:頸部径3.29cm。現存率:場。   調整:外面-頸部(上)縦方向のヘラミガキ。   (下)横方向のヘラミガキ。内面-ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   現存率:口縁部のみ場。   調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td>8</td><td>台付甕</td><td>合部付近縦方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面-横方向のハケの後に縦方向のヘラナ</td></tr><tr><td>9 台付甕 としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  法量:頸部径3.29cm。現存率:½。 調整:外面一頸部(上)縦方向のヘラミガキ。 (下)横方向のヘラミガキ。内面ーほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。  現存率:口縁部のみ½。 調整:外面一口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td></td><td></td><td>デ。胎土:白色粒子を多く含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。</td></tr><tr><td>白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。    古色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   法量:頸部径3.29cm。現存率:½。   調整:外面-頸部(上)縦方向のヘラミガキ。   (下)横方向のヘラミガキ。内面-ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   現存率:口縁部のみ½。   調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td></td><td rowspan=3>台付甕</td><td>法量:脚底径(11.37)cm。現存率:脚部のみ½。 調整:外面-脚中央部縦方向を主</td></tr><tr><td>  法量:類部径3.29cm。現存率:⅓。 調整:外面-類部(上)縦方向のヘラミガキ。 (下)横方向のヘラミガキ。内面-ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。   現存率:口縁部のみ⅓。 調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td>9</td><td>としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面-脚全体に横方向のハケ。胎土:</td></tr><tr><td>  10</td><td></td><td>白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。</td></tr><tr><td>量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。<br>現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td><td></td><td></td><td>法量:頸部径3.29cm。現存率:½。 調整:外面-頸部(上)縦方向のヘラミガキ。</td></tr><tr><td>現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜 11 壺</td><td>10</td><td rowspan=2>蓋</td><td>(下)横方向のヘラミガキ。内面-ほぼ全体に横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を多</td></tr><tr><td>  11   - 壺  </td><td></td><td>量に含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。</td></tr><tr><td></td><td>11</td><td>eke</td><td>現存率:口縁部のみ‰。 調整:外面-口唇部折り返し口縁に刻み目を施す。口縁斜</td></tr><tr><td></td><td>11</td><td>. 建灰</td><td>め方向のハケ。内面一口縁細縄文を施す。胎土:密。焼成:良。色調:明赤褐色。</td></tr></tbody></table> |  |

## 9号住居址 (第27~30図、図版5、第15・16表)

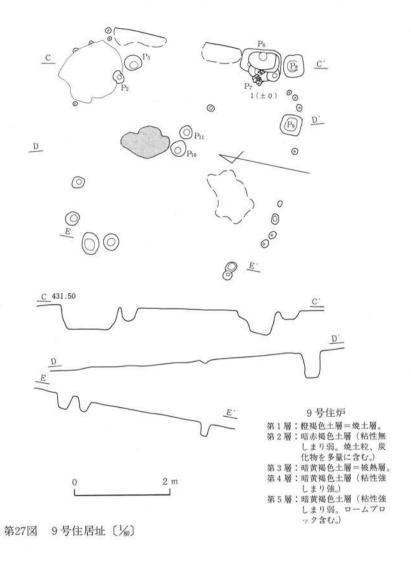
斜面中位、緩斜面部の3・4-M・N区に位置する。西1 mに1号小竪穴遺構が主軸を直交させて立ち並び、南東27mには7・8号住居址が重複して存在する。北5 mには6号住居址が、南西5 mには10号住居址が近接する。

耕作により上部を削平され、壁際に並ぶと想定されたピット及び床面の一部残存部によって規模・形状を推定した。平面形は方形を呈し、規模は $4.9 \times 4.8 \text{m}$ を測る。 主軸方位を $N-8^\circ-W$ にとり、等高線にほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しているが、壁は削平が激しく東壁で僅かに検出されたにすぎない。 床面も僅かしか遺存しないが、遺存部は堅緻であった。

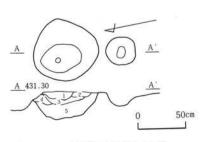
ピットは多数検出された。Pi~P4が主柱穴であるが掘り方底面で確認されたものである。床面

推定レベルからの深さ はそれぞれ、45cm、68 cm、54cm、48cmを測る。 P6・P7が貯蔵穴である。 Peは80×45cmの長方形 平面を呈し深さは50cm、 P<sub>7</sub>は50×40cmの楕円形 平面を呈し深さ20cmを 有する。P6を埋め戻し た後Prを構築した可能 性が強い。Ps·P9は共 に40~50cmの方形平面 を呈し、深さはPsが12 cm、P9が54cmを測り、 用途不明であるが、P9 は出入口施設に関連す る可能性も持つ。Pio· P11は炉際に築かれた ものである。他に壁際 に多数のピットが認め られた。規模において 大小はあるがほぼ同じ 機能を持つものといえ よう。住居址を一巡す るとするより、各コー ナーに配されているも のと考えたい。

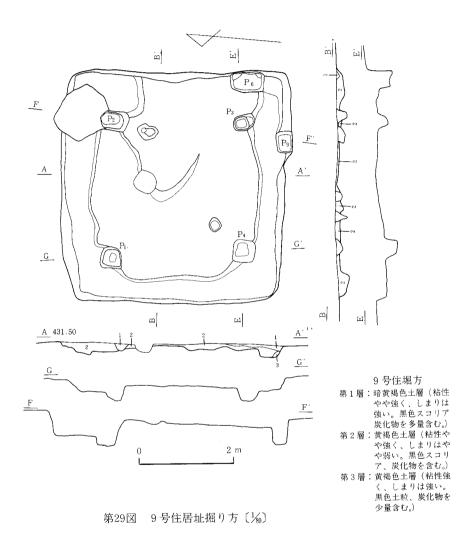


炉は住居址中央やや北寄りに築かれる。北側の一部に 撹乱を受けるが、径67cm程の不整円形を呈し、深さは30 cmを有する。覆土は5層に分けられる。

掘り方は床下全面に及ぶ。東壁沿いを除いて、壁際が深く中央が浅く掘りこまれ、更に全体的に東半部が浅くなる。底面はなだらかで床面からの深さは5~28cmを測る。埋土は3層に分けられる。



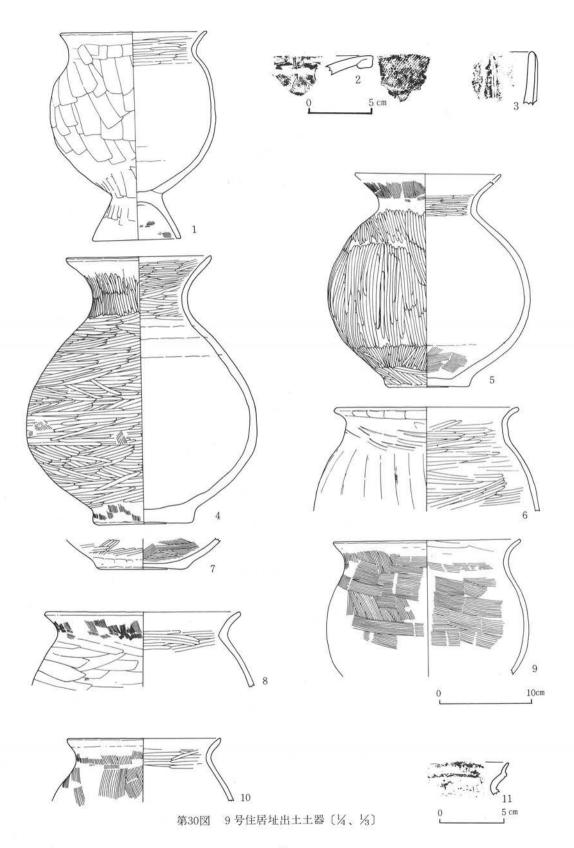
第28図 9号住居址炉址〔1/40〕



出土遺物は少なく図示しえたものも僅かである。1は貯蔵穴上面から出土している。尚本住居址は確認調査時の1号住居址にあたる。 $4\sim11$ は確認調査時に検出した遺物であり、全て遺構確認面よりの出土である。 (伊藤 公明)

第15表 9号住居址出土土器計測表

| 3    | 挺     | 壺   |      | その他不明 |  |
|------|-------|-----|------|-------|--|
| 117片 | 500 g | 5 片 | 40 g | 3 片   |  |



第16表 9号住居址出土土器観察表

| 1  | 台付甕 | 法量:口縁部径13.87cm。頸部径12.12cm。胴部径15.80cm。接合部径4.74cm。底部径(脚)<br>8.44cm。器高20.2cm。現存率:½。  調整:外面→口縁部横方向のヘラケズリ。頸部<br>ナデ。胴部上半横方向のヘラケズリ。胴部中縦方向のヘラケズリ。胴部下半横方向のヘ<br>ラケズリ。脚接合部縦方向のナデ。磨滅がひどく不明の点が残る。内面−口縁部ナデ。<br>口縁~頸部横方向のヘラミガキ。胴部~底部簡単なナデ。脚ナデ。胎土:密。焼成:良。<br>色調:暗褐色。 |
|----|-----|--|
| 2  | 壺   | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面一口唇部折り返し口縁。指で整形した後にナデる。口縁部ハケ(縦)、ナデ。内面一口唇部細縄文を施す。胎土:密。焼成:良。色調: 明赤褐色。   |
| 3  | 壺   | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-口縁部棒状貼り付けを有し、横方向のハケ。<br>内面-ナデ。胎土:密。焼成:良。色調:明褐色。  |
| 4  | 壺   | 法量:口縁径13.7cm。胴部径22.0cm。底部径9.6cm。器高25.7cm。現存率:ほば完形。調整:口縁部〜頸部ミガキのちナデ。胴部ハケのちミガキ。底部ミガキ。木葉痕。内面ーロ縁部〜頸部ミガキ。胴上半部指頭痕。下部ナデ。胎土:密。焼成:良。色調:茶褐色。   |
| 5  | 壺   | 法量:口縁径14.0cm。胴部径19.5cm。底部径8.2cm。器高20.6cm。現存率:ほぼ完。口唇部欠損。 調整:口縁部〜頸部タテハケのちミガキ。胴部ミガキ。内面−口縁〜頸部ミガキ。胴部ナデ。底部ハケ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。  |
| 6  | 莲   | 法量:口縁部17.8cm。胴部(21.6cm)。現存率:口縁~肩部岩。 調整:口縁部ヘラビ<br>キのちハケ。一部指頭痕。胴部タテハケ。内面 - 口縁部ミガキのちナデ。胴部ミガキ。<br>胎土:白砂粒を含み密。焼成:良。色調:黒褐色。  |
| 7  | 壺   | 法量:底部径8.7cm。現存率:底部破片%。 調整:外面-胴下部ミガキー部へラオサエ。底面ハケ。胎土:密。焼成:良。色調:外面-赤褐色。内面-黒色。   |
| 8  | 壺   | 法量:口縁部18.8cm。胴部(21.0cm)。 現存率:口縁~肩部½ 調整:口縁部タテハケのちナデ。胴部ケズリ。内面-口縁部ハケ。胴部ミガキのちナデ。胎土:白砂粒を含み密。焼成:良。色調:赤褐色。  |
| 9  | 甕   | 法量:口縁径18.0cm。 胴部19.3cm。 現存率:上半部%。 調整:口縁部ヨコナデ。 胴部タテのちヨコハケ。内面-ハケ。指頭痕。胎土:白砂粒を含み密。焼成:良。色調:暗茶褐色。  |
| 10 | 甕   | 法量:口縁部14.5cm。現存率:口縁部~肩部½。 調整:口縁部ナデ。胴部ハケ。内面-口縁部ナデ。頸部ハケ。胴部指頭痕。胎土:密。焼成:良。色調:茶褐色。  |
| 11 | 甕   | 現存率:S字状口縁部破片。 調整:口唇部ナデ段部刺突。頸部右方向の押引き。内面ーナデ。頸部ハケ。胎土:密。焼成:良。色調:暗黄褐色。   |

## 10号住居址 (第31~32図、第17・18表)

斜面中位の緩斜面部、3・4-N・0区に位置する。北東5mに9号住居址が、南4mに13号住居址が近接する。北西20mに11号住居址が、南西11mに12号住居址が存在する。

耕作による削平の為、床面の極く一部と掘り方南東隅が遺存するにすぎない。その為、形状・規模とも明らかにしえない。主軸方位は $N-76^\circ-E$ あるいは $N-14^\circ-W$ と思われるが、他の住居址でのあり方から後者の可能性が強い。

床面は極く一部しか遺存しないが堅緻な貼床である。

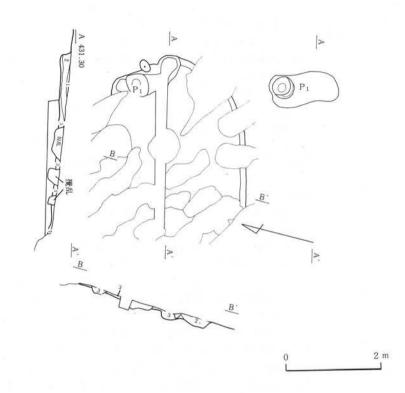
ピットは1ヶ所検出され、径50cm程の円形を呈し、深さは40cmを測る。

10号住

第1層:暗黄褐色土層(粘性 無く、しまりは強い。 ローム粒を多量に、 黒褐色粒子を含む。) 貼床

第2層: 茶褐色土層 (粘性や や強く、しまりは弱 い。ローム粒を少量 炭化物粒、黒褐色粒 子を微量含む。)

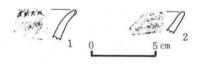
第3層:暗茶褐色土層 (粘性 やや強く、しまりは やや強い。ローム粒 を多量に、ロームブ ロックを含む。)



第31図 10号住居址 [%]

掘り方は深さ20cm程で埋土は2層に分けられる。 遺存部から推定すると南壁際が深く掘りこまれ、 中央部が浅くなるものであろう。

本址はとりあえず住居址として認定したが、竪 穴状遺構等、性格の異なる遺構である可能性を否 定しえない。 (山崎 和也)



第32図 10号住居址出土土器〔⅓〕

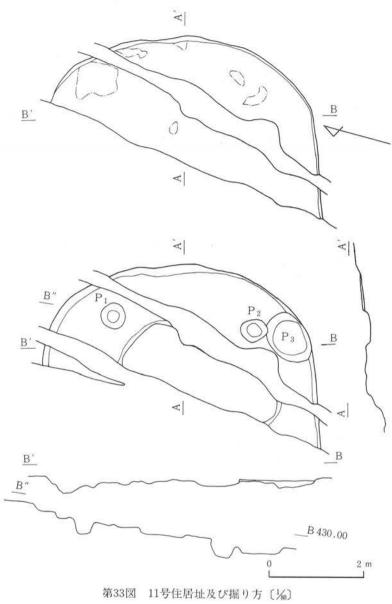
第17表 10号住居址出土土器計測表

| 築    |       | 壺 | その他不明   |  |
|------|-------|---|---------|--|
| 25 片 | 160 g |   | 3 片 10g |  |

第18表 10号住居址出土土器観察表

| 1 | 甕 | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-口唇:<br>方向のヘラミガキ。胎土:雲母を含む密。焼成 | 部刻み目。口縁部ナデ。内面-囚縁部横<br>:良。色調:淡暗褐色。 |
|---|---|--|-----------------------------------|
| 2 | 좵 | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-口唇<br>良。色調:淡橙褐色。             | 部ナデ。口縁部ナデ。胎土:密。焼成:                |

# 11号住居址 (第33~34図、図版 5、第19·20表)



ったと推定されるがほとんど遺存しない。

ピットは3ヶ所検出されたが、全て掘り方底面での確認である。P1・P2が柱穴で、床推定面から はそれぞれ38cm、44cmを測る。P3は貯蔵穴で115×80cmの楕円形平面を呈し、深さは30cmを有す る。

炉・周溝は確認されなかった。

掘り方は床下全面に及ぶものと考えられ、中央部が浅く、 周辺が深くなる。底面はなめらかで床面からの深さは5~ 第34図 11号住居址出土土器 [½]

斜面中位の緩斜面部、 1・2-0区に位置し、 集落の北西隅にあたる。 北西 5 mに 2 号小竪穴遺 構が、南16mに12号住居 址が存在する。東20mに は9号住居址、1号小竪 穴遺構が隣接する。耕作 による削平の為、貼床の 一部と東壁が遺存するに すぎなく、西半部は掘方 まで削平が進んでいる。 主軸方位は明確にできな いが柱穴間線はN-12°-Wをとり、主軸方位をほ ぼ示すものと考えられ等 高線と平行する。平面形 はほぼ楕円形をとるもの と考えられ、規模は南一 北方向に5.7mを測るが、 東一西方向は判然としな

掘り込みはローム層ま で達し壁高は5cm程を測 るのみである。

床面は堅緻な貼床であ

## 18cmを有する。

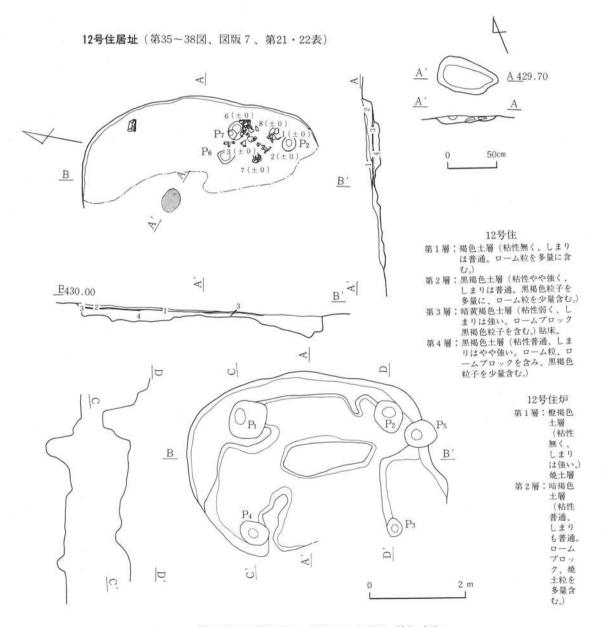
### 第19表 11号住居址出土土器計測表

出土遺物は少なく、図示しえたものも掘り方 から出土した1点のみである。 (山崎 和也)

| 甕          | 壺        | その他不明 |
|------------|----------|-------|
| 13 片 130 g | 2 片 30 g |       |

第20表 11号住居址出土土器観察表

現存率:口縁部~頸部½。 調整:外面-口唇部横方向のハケの後にナデ。口縁部縦 方向の太いハケ。内面-口縁部横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。



第35図 12号住居址・掘り方及び炉址〔‰・‰〕

斜面中位の緩斜面部、3・4-P区に位置し、扇形に拡がる集落の扇端部にあたる。北16mに 11号住居址が存在し、東8mに13・14号住居址が近接する。南14mには16号住居址が位置する。

耕作のため削平され西半部は遺存しないが、掘り方などから推定すると平面形はほぼ楕円形を呈し、規模は長軸で5.4mを測るものと考えられる。主軸方位はN-15°-Wにとり、等高線と平行する。

掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁で最長20cmを測る。覆土は2層に分けられ自然堆積を示す。

床面は堅緻な貼床でピットは 7 ヶ所検出された。うち床面で確認されたものは  $P_2$ ・ $P_6$ ・ $P_7$  の 三ヶ所で、他は掘り方で確認されたものである。 $P_1 \sim P_4$  までが柱穴で深さはそれぞれ床推定面 から65cm、55cm、50cm、48cmを測る。 $P_5$ が貯蔵穴で、 $65 \times 50$ cmの不整円形を呈し深さは45cmを測る。 $P_6$ ・ $P_7$ は共に15~17cm程の深さを有するものである。

炉は中央部北寄りに位置する。60×35cmの不整長円形を呈し、深さは8cm程を有する。覆土は2層に分けられ、焼土ブロックが混在する。

周溝は認められない。

掘り方は床下ほぼ全面に及ぶ。中央が浅く周囲は一段深く掘りこまれるが、壁際は段部を有する。底面はやや凹凸が認められ、床面からの深さは5~55cmを測る。埋土は2層に分けられ第3層は貼床である。

出土遺物は豊富に認められる。壺1・2・3・6、甕7・8が住居址南東部柱穴脇に集中し、甕9は北東部壁際から、床面より3~5cm程浮いて出土している。また青銅製品15は甕8と床面に挟まれた状態で出土した。類例は管

見にふれず、当該期の遺物としうるか疑問が残るが、出土状態からは本址に伴う可能性が強い。

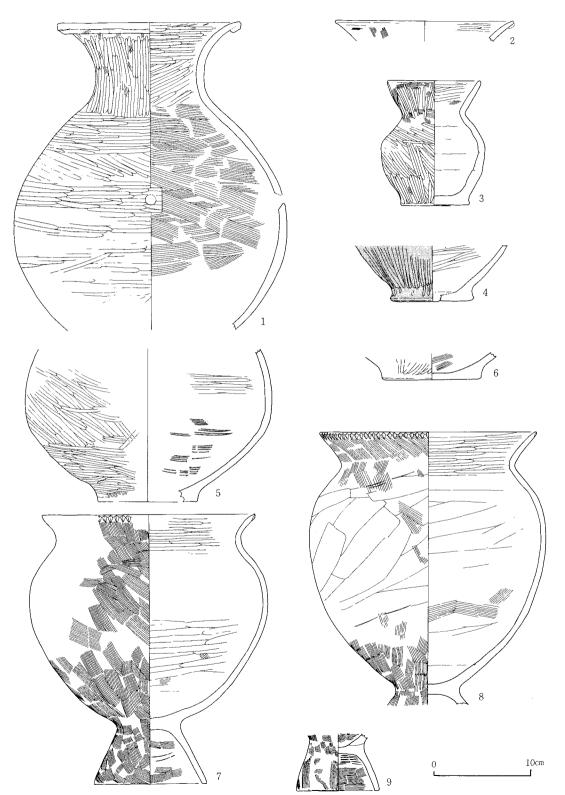
第21表 12号住居址出土土器計測表

| 甕          | 壺         | その他不明  |  |
|------------|-----------|--------|--|
| 179片 1580g | 75片 1260g | 2片 30g |  |

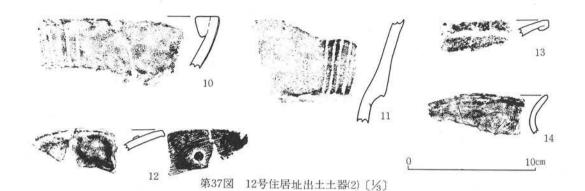
(山崎 和也)

第22表 12号住居址出土土器観察表(1)

| 1 | 壺 | 法量:口縁部径18.57cm。頸部径10.91cm。胴部径(27.78)cm。現存率:口縁~頸部完存。胴部½。底部欠損。 調整:外面一口縁部折り返し口縁わずかに斜め方向のハケと指頭圧痕を残す。頸部斜め方向のハケの後縦方向のヘラミガキ。胴部上半横及び斜め方向のヘラミガキ。胴部中位横方向のヘラミガキ。直径1.0cmの穿孔(焼成後に開けられたもの)。胴部下半横方向のヘラミガキ。内面一口縁部斜め方向のハケ。横方向のヘラミガキ。頸部横及び斜め方向のヘラミガキ。胴部上半横方向のハケ。胴部中位横及び斜め方向のハケ。胴部下半横及び斜め方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:茶褐色。 |
|---|---|---|
| 2 | 壺 | 法量:口縁部径(17.81)cm。現存率:口縁部のみ光。 調整:外面-口縁部折り返し口縁を呈していたが折り返し部分が欠落している。縦方向のハケ。内面-口縁部ナデ。胎土:雲母及び白色粒子の混入がみられる。密。焼成:良。色調:赤褐色。   |



第36図 12号住居址出土土器(1)〔¼〕



第22表 12号住居址出土土器観察表(2)

| 3 | 小型壺   | 法量:口縁部径9.30cm。頸部径6.36cm。胴部径10.45cm。底部径6.97cm。器高12.86cm。<br>現存率:完形。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部〜頸部横方向縦方向のハケの後に<br>縦方向のヘラミガキを施す。胴部上半斜め方向のヘラミガキ。胴部中位斜め方向のヘラミ<br>ガキ。胴部下半縦方向のヘラミガキ。底部簡単なナデ。内面-口縁部〜頸部横方向のヘ<br>ラミガキ。胴部〜底面簡単なナデ。胎土:密。焼成:良。色調:橙茶褐色。   |
|---|---|--|
| 4 | 法量:底部径(8.41)cm。現存率:胴部下半~底部/3。 調整:外面-胴部下半縦方向のヘラミガキ。丹彩あり。底部簡単なナデ。内面-胴部下半横及び斜め方向のヘラミガキ。全体的に磨滅が激しい。胎土:密。焼成:良。色調:明赤褐色。 |  |
| 5 | 壺   | 法量:底部径(10.62)cm。現存率:胴部中頃及び底部場。 調整:外面-胴部中頃斜め方向のヘラミガキ。胴部下半横方向のヘラミガキ。底部縦方向のハケの後横方向のヘラミガキ。内面-胴部中頃ナデ。胴部下半~底面横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。  |
| 6 | 壺   | 法量:底部径(10.00)cm。現存率:底部½。 調整:外面 — 胴部下半縦及び斜め方向のヘラミガキ。底面簡単なナデ。内面 — 胴部下半 ~ 底面斜め方向のハケ。磨滅が激しい胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。   |
| 7 | 台付甕   | 法量:口縁部径(21.56)cm。頸部径(18.75)cm。胴部径(21.16)cm。脚接合部径6.39cm。脚底径11.38cm。器高27.50cm。現存率:口縁部~胴部岩。脚部完存。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁部~頸部縦及び斜め方向のハケ。胴部上半横及び斜め方向のハケ。胴部中頃斜め方向のハケ。胴部下半斜め方向のハケ。脚接合部縦方向のハケ。脚部斜め方向のハケ。内面一口縁部~頸部横方向のヘラミガキ。胴部~底面斜め方向の粗雑なヘラミガキ。脚部横及び斜め方向のハケ。胎土:白色小粒子をわずかに含む。焼成:良。色調:暗茶褐色。 |
| 8 | 台付甕   | 法量:口縁部径(21.95)cm。頸部径(17.59)cm。胴部径24.01cm。脚接合部径6.41cm。現存率:口縁部~脚上部省。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁部~頸部斜め方向のハケ。胴部上半斜め方向のヘラケズリの後に縦及び斜め方向のハケ。胴部中位斜め方向のヘラケズリ。胴部下半斜め方向のヘラケズリ、縦方向のハケ。脚上部縦方向のハケ。内面一口縁部~頸部横方向のヘラミガキ。胴部上半~中位ナデ。胴部下半わずかに横及び縦方向のハケ。全体的に磨滅が激しい。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。                    |
| 9 | 台付甕   | 法量: 脚接合部5.57cm。脚底部8.21cm。現存率: 脚部のみほぼ完形。 調整: 外面 - 脚接合部 - 底部縦方向のハケ。内面 - 胴部底面横方向のハケ。脚部横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:淡黄赤褐色。  |

第22表 12号住居址出土土器観察表(3)

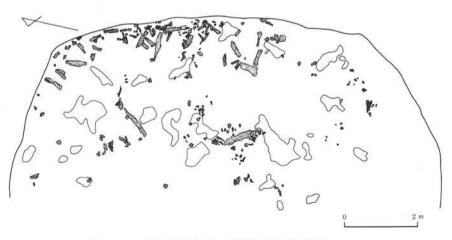
| 10 | 壺 | 現存率:口縁部%。 調整:外面-複合口縁。内側に折り返し口唇部に平端面を有する。口唇部ナデ。4本1区画の沈線。斜め方向のハケ。内面-口縁部ナデ。胎土:密。<br>焼成:良。色調:明赤褐色。             |
|----|---|--|
| 11 | 壺 | 現存率:口縁部(口唇を欠く)~頸部。 調整:外面-複合口縁部横方向のハケ。縦方向の4本1区画の沈線有段口縁。頸部ナデ。内面-口縁部ナデ。頸部横方向のヘラミガキ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:明赤褐色。 |
| 12 | 壺 | 現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部縦方向のハケ。縦方向のヘラミガキ。内面-口縁部細縄文S字結節。円形浮文を施す。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。                        |
| 13 | 壺 | 現存率:口縁部治。 調整:外面-口縁部折り返し口縁。摩滅が全体的に激しい。<br>胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。  |
| 14 | 甕 | 法量:口縁部径(13.48)cm。現存率:口縁部~頸部/6。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部~頸部斜め方向のハケ。内面-口縁部ナデ。頸部横方向のヘラミガキ。胎土:密。<br>焼成:良。色調:暗茶褐色。       |

青銅製品。蛙の前肢部状を呈する青銅製品である。長さ2.7cm、幅0.8cm、厚さ0.1cmを測る。裏面は平坦である。指間には水掻きが、腕部にはイボが表現されている。類例は管見にふれず、本址に伴うか否か明確にはしえない。



第38図 12号住居址出土青銅製品〔½〕

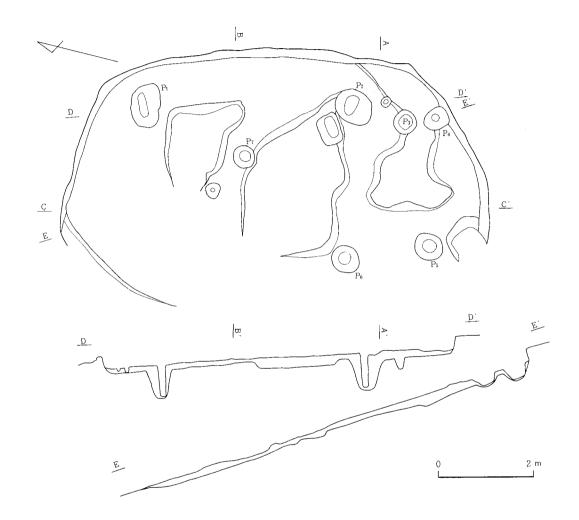
13号住居址 (第39~44図、図版6、第23・24表)



第39図 13号住居址焼土·炭化材分布図〔‰〕

斜面中位の緩斜面部、4-N・0区、5-0区に位置する焼失住居址である。

北4 mに10号住居址が近接し、南西部で14号住居址とほとんど接している。西7 mには12号住居址が、南6 mに15号住居址が存在している。



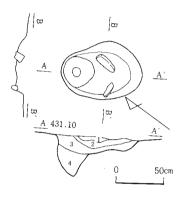
第40図 13号住居址掘り方及び炉址〔‰・‰〕

## 13号住炉址

第1層:暗赤褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。 炭化物、焼土粒を多量に含む。) 第2層:橙褐色土層(粘性無く、しまりは強い。)焼土層

第3層:暗黄褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強

い。炭化物、黒色土粒、焼土粒を少量含む。) 第4層:明黄褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。炭化物、黒色土粒を微量含む。)



## 13号住

第1層:暗褐色土層(粘性無く、しまりは強い。黒色粒子を多量に、ロームブロック、ローム

粒子を少量、炭化物、焼土粒を微粒含む。)

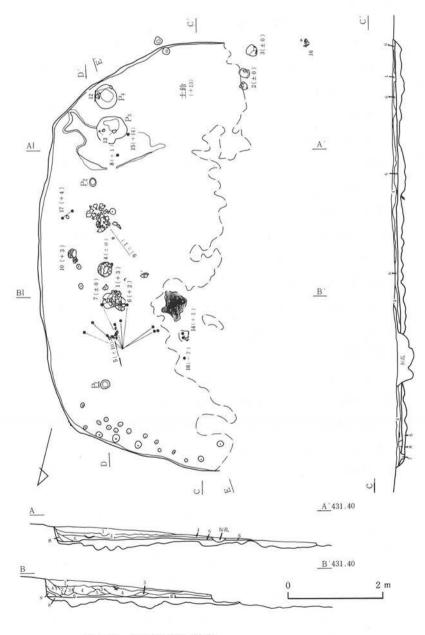
税丁を少量、灰化物、炭土地を販売さい。 第2層:暗褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。ロームブロックを少量含む。) 第3層:褐色土層(粘性やや弱く、しまりはやや強い。黒色粒子を少量、炭火物を微量含む。) 第4層:暗褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。ローム粒子を含み、黒色粒子、炭化物、

焼土を少量含む。)

第5層:整褐色土層(粘性無く、しまりは強い。)焼土層。 第6層:暗褐色土層(粘性無く、しまりはない。炭化物、焼土を多量に、ローム粒を微量含む。) 第7層:褐色土層(粘性無く、しまりはやや弱い。ローム粒、ロームブロックを少量含む。) 第8層:黄褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。ロームブロック、ローム粒子を多量に、

黒色粒子を微量含む。)

第9層:黒褐色土層(粘性無く、しまりは普通。炭化物を多量にローム粒、焼土粒を微量含む。)



第41図 13号住居址〔‰〕

削平を受け東半部が遺存するのみであるが、大型の住居址である。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長軸が9mを有し、短軸も6m以上を測るものであろう。主軸方位は明確にしえないが、柱穴間線は $N-14^\circ-W$ にとる。主軸方位もほぼ同値を示すものと考えられ等高線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁で40cmを測る。壁は急角度で直線的に立ち上がる。覆土は9層に分けられ、床面直上層(第6層)は焼土・炭化物を主体とする層である。全体的にローム粒・ロームブロックを含み、層序の状態等からも、人為的堆積の可能性も持つ。

床面は堅緻な貼床で焼土・炭化材が一面に認められ特に北半部で著しい。ピットは多数検出され、 $P_1$ ・ $P_2$ が柱穴である。深さは $P_1$ が56cm、 $P_2$ が69cmを測る。 $P_3$ ・ $P_4$ はそれぞれ16cm、27cmの深さを持つ。 $P_3$ は住居址内部の位置等、他住居址例から推しても貯蔵穴である可能性が強い。また両者と、住居址内部を画する様に弧状に存在する床面の盛り上がり部も、3号住居址、8号住居址の貯蔵穴周囲に認められるものと同例と考えられる。 $P_5$ ~ $P_7$ は掘り方面で確認されたもので深さはそれぞれ42cm、41cm、25cmを測る。 $P_4$ ・ $P_5$ ・ $P_6$ は柱穴の可能性が強いが、 $P_4$ ・ $P_5$ に関しては他柱穴  $(P_1$ ・ $P_2$ ・ $P_6$ )・貯蔵穴  $(P_3$ )との位置関係から疑問も残る。また特に北壁沿いに集中して多数の小ピットが検出された。

周溝は認められなかった。

炉は住居址中央やや北寄りに位置する。85×60cm程の規模を有し、楕円形平面を呈する。深さは20cmを測るが、西半部は一段深く40cm程掘りこまれる。炉址内ピットを囲む様に枕石が「く」の字状に配される。覆土は4層に分けられる。

掘り方は床下全面に及び中央部・南半部がテラス状に浅く、他は一段深く掘りこまれる。底面は凹凸が激しく床面からの深さは8~24cmを測る。埋土は1層で上面が堅くしめられている。

遺物は多数出土した。床面からの出土状況は壺1・4・5、甕9が中央部東壁寄り柱穴間線上から、甕14は炉址脇から出土した。壺2・3小

型襲16は南壁沿い中央部に認められ、襲13はP3、 12はP4覆土内から出土している。土鈴は南半

部、覆土中位から出土している。

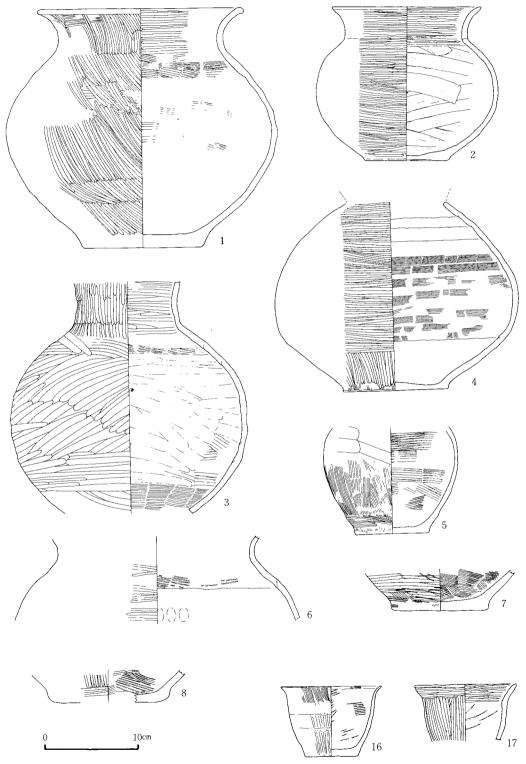
第23表 13号住居址出土土器計測表

| 甕          | 壺           | その他不明    |
|------------|-------------|----------|
| 515片 2310g | 112片 1580 g | 5 片 50 g |

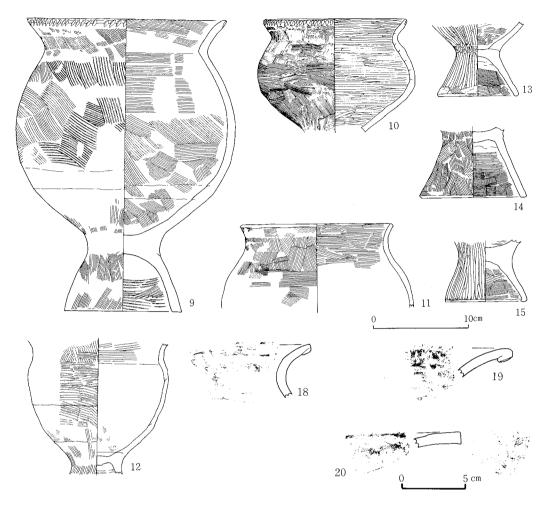
(山崎 和也)

第24表 13号住居址出土土器観察表(1)

| 1 | 広口壺 | 法量:口縁部径(20.10)cm、頸部径(17.50)cm、胴部径24.05cm、底部径12.39cm。現存率<br>:口縁~胴部を½欠く。 調整:外面一口唇部ナデ。口縁部~頸部横方向のハケの後<br>に縦方向のミガキを施す。胴部上半横方向のハケの後、縦方向のミガキを施す。胴部中<br>~下半細い縦方向のミガキ。底部付近ナデミガキ。内面一口縁~頸部横方向のミガキ。<br>胴部上横方向のハケ。胴部中横方向のハケの後ナデ。胴部下ナデ。胎土:小粒子を多量 |
|---|-----|--|
| 2 | 広口壺 | に含む。焼成:良。色調:淡黄褐色。<br>法量:口縁部径15.85cm、頸部径13.12cm、胴部径19.48cm、底部径8.71cm。 現存率:口<br>縁部を%欠くがほば完存。 調整:外面-ほとんど細かな横方向のヘラミガキ。底面<br>に木葉痕あり。内面-口縁~頸部横方向の細いヘラミガキ。胎土:白色小粒子を多量に<br>含む。密。焼成:良。色調:暗赤褐色。  |



第42図 13号住居址出土土器(1)〔¼〕



第43図 13号住居址出土土器(2) 〔¼、½〕第24表 13号住居址出土土器観察表(2)

|   | 壺 | 法量:頸部径(10.58cm)。胴部径(25.29)cm。現存率:口縁部・底部を欠く。光。 調整: |
|---|---|---|
|   |   | 外面-頸部縦方向のヘラミガキ。胴部上位横方向のヘラミガキ。胴部中位斜め方向の太           |
| 3 |   | いへラミガキ。胴部下位横方向のヘラミガキ。胴部底部付近斜め方向のヘラミガキ。内面          |
| i |   | - 頸部横方向のヘラミガキ。胴部上・中ナデ。胴部下横方向のハケ。胎土:白色小粒子          |
|   |   | 等を多く含む。焼成:良。色調:明赤褐色。                              |
|   | 壺 | 法量:胴部径26.19cm。底部径11.12cm。現存率:口縁部を欠く%。 調整:外面-胴     |
| 4 |   | 部上・中半横方向のヘラミガキ。胴部下半縦方向のヘラミガキ。底部付近縦方向のハケ。          |
| 4 |   | 底面木葉痕。内面-胴部上半未調整。胴部中横方向のハケ。胴部下半ナデ。底面ナデ。           |
|   |   | 胎土:小粒子を多量に含む。密。焼成:良。色調:淡橙褐色。                      |
|   | 壺 | 法量:胴部径(14.46cm)。底部径(7.75cm)。現存率:胴部½。底部完存。 調整:外    |
| 5 |   | 面ー胴部上半ナデ。胴部中位ナデ。縦方向のハケ。胴部下半縦方向のハケ。横方向のヘ           |
|   |   | ラミガキ。底部ナデ。内面-胴部横方向のハケ。底面ナデ。胎土:白色粒子の混入がみ           |
|   |   | られる。密。焼成:良。色調:茶褐色。                                |

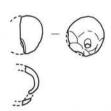
第24表 13号住居址出土土器観察表(3)

|    |     | 76 J E. J. E. J. E.  |
|----|-----|--|
| 6  | 甕   | 法量: 頸部径21cm。現存率: 頸~肩光。 調整: 外面-頸部ミガキのちナデ。肩横位のミガキ。内面-頸部ナデ。肩部横位のハケ。胴指オサエ。胎土: 白砂粒を含み密。焼成: 良。色調: 赤褐色。   |
| 7  | 壺   | 法量:底部径10.32cm。現存率:胴部下半底部のみ%。 調整:外面-胴下半横方向のヘラミガキ。最下部縦方向のハケの後指にて簡単にナデを加える。底面木葉痕を残す。内面-胴下半~斜め方向のハケ。胎土:白色粒子及び雲母小粒子を含む。密。焼成:良。色調:淡赤褐色。  |
| 8  | 壺   | 法量:底部径(12.34cm)。現存率:胴部下半及び底部のみ場。 調整:外面-胴最下部縦方向のヘラミガキ及び横方向のヘラミガキ。内面-胴最下部~底部斜め方向の太いハケ。全体に磨滅が進んでおり調整はよく分からない。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。   |
| 9  | 台付甕 | 法量:口縁部径20.84cm。頸部径16.92cm。胴部径22.86cm。接合部径7.33cm。脚部底径12.09cm。器高31.80cm。現存率:口縁部を½。胴部上半を½欠く。 調整:外面一口唇部刻み目。口縁~頸部斜め方向の細かいハケ。胴部上半縦方向の太いハケ。胴部中位斜め方向の太いハケ。胴部下半縦方向の細かいハケ。磨滅がひどい。脚部上縦方向の細かいハケ。脚部下斜め方向の細かいハケ。内面一口縁~胴部中頃横方向の細かいハケ。胴部中頃~下半斜め方向の太いハケ。脚部横方向の太いハケ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。 |
| 10 | 台付甕 | 法量:口縁部径14.52cm。頸部径13.13cm。胴部径16.33cm。現存率:脚部を欠くが他は<br>完存。 調整:外面-口唇部刻み目一部ハケ。口縁部~頸部横ハケの後縦方向のハケ<br>を施す。胴部上位縦方向のハケを主として横方向のハケが混じる。胴部中位横方向のハケ。<br>胴部下縦方向のハケに一部縦方向のヘラミガキが入る。内面-全面横方向のヘラミガキ。<br>胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。  |
| 11 | 台付甕 | 法量:口縁部径16cm。脚部径(20cm)。現存率:口縁~胴灼。 調整:外面-口縁縦ハケのちナデ。肩部縦ハケ。胴部横位ハケ。内面-口縁縦ハケ。胴部斜位ハケ。胎土:密。<br>焼成:良。色調:赤褐色。  |
| 12 | 台付甕 | 法量:頸部径(13.62cm)。胴部最大径(14.73)。脚接合部径5.19cm。現存率:口唇部・脚下部を欠く。%。 調整:外面 - 口縁部~頸部縦方向のハケ(太)。胴部上半~中位横方向のハケ(太)。胴部下半縦方向のハケ・ナデ。脚接合部~脚上部縦方向のハケ。内面 - 口縁部~頸部横方向のハケ。胴部上半~中頃ナデ。胴部下半~底面横及び斜め方向のハケ。脚上部横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:暗茶褐色。  |
| 13 | 台付甕 | 法量:接合部径4.57cm。脚底径(8.32cm)。現存率:脚胴部下半のみ½。 調整:外面 ー胴部下半縦方向のヘラミガキ。接合部簡単なヘラミガキ(縦方向)。脚部上・中縦方向のヘラミガキ。脚部斜め方向のハケ。ナデ。内面ー胴部下半横方向のハケ。脚上半ナデ。 脚中・下横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。  |
| 14 | 台付甕 | 法量:接合部径6.34cm。脚部底径11.36cm。現存率: 脚部のみ完存。 調整:外面-接合部縦方向の細かいハケ。 脚部縦及び横方向を主とする細かいハケ。 内面 - 脚部横方向の細かいハケ。 胎土:密。 焼成:良。 色調:淡黄褐色。  |
| 15 | 台付甕 | 法量:接合部径5.68cm。底部径8.41cm。現存率:脚部のみ完存。 調整:外面-脚部 縦方向のヘラミガキ。内面-胴・底部横方向の細かいハケ。脚横方向のハケ。胎土:密。<br>焼成:良。色調:淡茶褐色。   |
| 16 | 鉢   | 法量:口縁部径(最大径)(10.76cm)。頸部径(9.57cm)。底部径5.70cm。器高7.55cm。現存率:½。 調整:外面ー口唇部指でつまむようにしてナデる。口縁部〜頸部縦方向のハケ。胴部上半縦方向のハケ。胴部中位〜下半縦方向のヘラミガキ。底面ナデ。内面ー口縁部〜胴部横方向のハケ。底面ナデ。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。  |

第24表 13号住居址出土土器観察表(4)

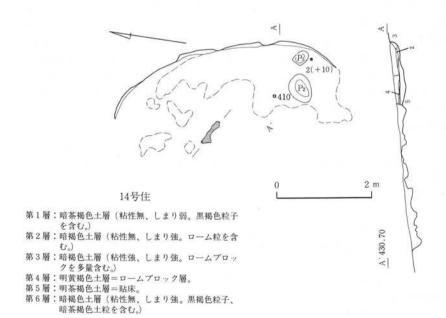
| 17 | 鉢 | 法量:口縁部径(最大径)(10.95cm)、頸部径(9.34cm)。現存率:口縁部~胴部中頃光。<br>調整:外面-口唇部ナデ。口縁部~頸部横方向のヘラミガキ。胴部上半~下半縦方向<br>のヘラミガキ。内面-口縁部~頸部横方向のヘラミガキ。胴部上半~下半ナデ。胎土:<br>密。焼成:良。色調:暗茶褐色。 |
|----|---|--|
| 18 | 壺 | 現存率:口縁部~頸部のみ場。 調整:外面-口縁折り返し口縁横方向のハケ。頸部<br>縦方向の細いハケ。内面-口縁~頸部横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤<br>褐色。   |
| 19 | 壺 | 現存率:口縁破片。 調整:外面-口縁ハケのち折り返し。刻み目。口唇ナデ。内面-口縁細縄文L。肩横方向ミガキ。胎土:白砂粒を含みやや密。焼成:やや良。色調:赤褐色。  |
| 20 | 壺 | 現存率:口縁破片。 調整:外面-口縁上部ハケ。下部ミガキのちナデ。内面-撚糸。<br>胎土:白砂粒を含みやや密。焼成:良。色調:赤褐色。   |

土製品 土鈴 径2cm程だが½程しか遺存しない。色調は明赤褐色。焼成は甘く、胎土は密。器表には指頭痕。器厚0.3cm。穿孔は器外面より内部へ向けなされている。

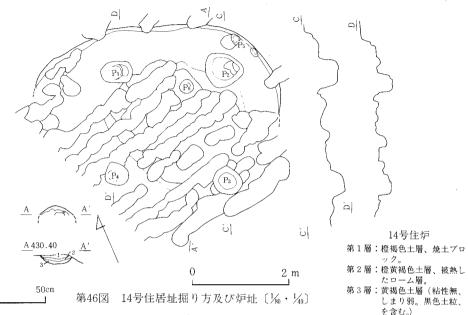


第44図 13号住居 址出土土製品(½)

### 14号住居址 (第45~48図、第25・26表)



第45図 14号住居址 [‰]



斜面中位の緩斜面部、4・5-0・P区に位置する。北に13号住居址と接している。北西7mに12号住居址が、南東7mに15号住居址、南8mに16号住居址が存在する。

耕作の為削平を受け東半部の一部が遺存するにすぎない。掘り方残存からの推定であるが、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6.9×5.5m程と思われる。主軸方位はN-11°-Wにとり等高線とやや斜行する。

掘り込みはローム層まで達しており壁高は15cm程を残す。覆土は4層に分けられ、自然堆積を示す。

床面は撹乱が激しいが、堅緻な貼床である。

ピットは6ヶ所検出されたが、床面で確認されたものはP2・P5のみである。

 $P_1 \sim P_4$  が柱穴で床面推定面からの深さはそれぞれ、54cm、63cm、69cm、69cmを測る。貯蔵穴・周溝は検出できなかった。

炉址は中央部やや北寄りに位置する。畝の為一部が遺存するのみで、長軸50cm程の楕円形平面を呈するものと思われる。深さは現存で13cmを測り、覆土は3層に分けられる。

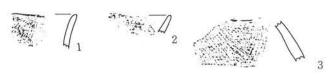
掘り方は床下全面に及び、中央が浅く周辺が深く掘り込まれる。底面は比較的なめらかと思われ、床面からの深さは5~20cm程を測る。埋土は2層に分けられ、上層が貼床とされている。

出土遺物は少なく図示しえたものも僅かである。床面からは、鉄製品4がP2脇から出土して

いる。

第25表 14号住居址出土土器計測表

| ¥    | 壺     |   |   | その他不明 |   |   |      |
|------|-------|---|---|-------|---|---|------|
| 70 片 | 450 g | 9 | 片 | 80 g  | 4 | 片 | 50 g |



### 第47図 14号住居址出土土器〔1/3〕

0 50cm

### 第26表 14号住居址出土土器観察表

| 1 | 甕 | 現存率:口縁部~頸部上部½。 調整:外面一口唇部ナデわずかに爪によって凹状にくぼむ。口縁部~頸部縦方向のハケ。内面一口縁部~頸部横方向のハケの後にナデ。胎土:密。焼成:良であるがやや軟質。色調:薄黄褐色。 |
|---|---|--|
| 2 | 甕 | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外・内面ともに磨滅が激しく整形は分からない。胎<br>土:白色小粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。                                    |
| 3 | 甕 | 現存率:胴部のみ%。 調整:外面-胴部斜め方向のハケ。内面-胴部ナデ。胎土:<br>雲母。白色小粒子を含む。密。焼成:良。色調:茶褐色。                                   |

鉄製品 不明鉄板。2×2cmで厚さ0.1cm程の鉄板 片である。住居址中央部床面から出土している。

(山崎 和也)

第48図 14号住居址出土鉄製品〔½〕

# 15号住居址 (第49~50図、図版 6、第27表)

斜面中位、緩斜面部の5・6-0・P区に位置する。北8mに13号住居址が、北西7mに14号住居址が存在し、南9mに21号・22号住居址が重複して存在する。東15mに17号住居址が位置する。

耕作及び道路によって削平され北東隅が遺存するのみであり、形状・規模・主軸方位等はあきらかにしえない。

掘り込みはローム面まで達し、壁高は残存部で20cm程を測り、壁は外反気味に立ち上がる。 床面も破損が激しく、貼床がブロック状に残存するのみである。

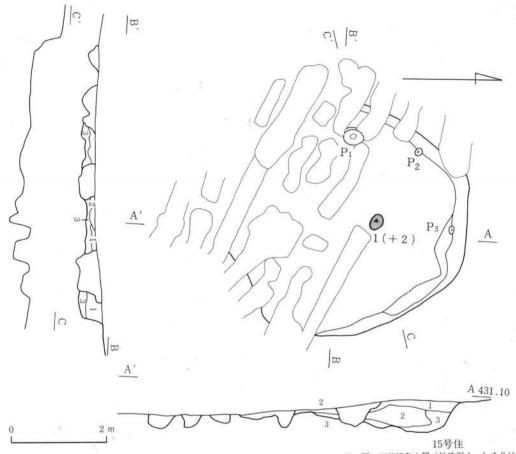
ピットは3ヶ所検出され、 $P_1$ は深さ51cmを測る。住居址中央やや北寄りに $20 \times 15$ cmの範囲で焼土溜りが認められた。貯蔵穴・周溝は検出されなかった。

掘り方は床下全面に及ぶものと推定され、底面は凹凸が激しい。床面からの深さは20cm程を測り、埋土は2層に分けられ焼土粒・炭化物粒が混入している。

出土遺物は僅かであるが、焼土溜り上面から土製勾玉1が出土している。

第27表 15号住居址出土土器計測表

| 3    | 挺     |   | 雪 | Ē     | 20 | の他 | 不明  |
|------|-------|---|---|-------|----|----|-----|
| 44 片 | 452 g | 8 | 片 | 140 g | 1  | 片  | 8 g |



第49図 15号住居址 [‰]

土製品 土製勾玉。全長3cm、径0.8cmを測る。色調は暗褐色 を呈し、胎土・焼成は普通である。表面は磨かれているが丁 寧ではない。中央部の湾曲は浅く、内面・両端部は軽く面とり されている。孔は端部やや内側に位置し、両側から穿孔されて いる。

住居址中央部床面に認められた焼土溜り上面より出土している。 鉄製品 鉄環。平面環状を呈する鉄製品で径2.5cm程を測り、 0.2×0.7cmの方形断面を有する。覆土中からの出土である。 (山崎 和也)

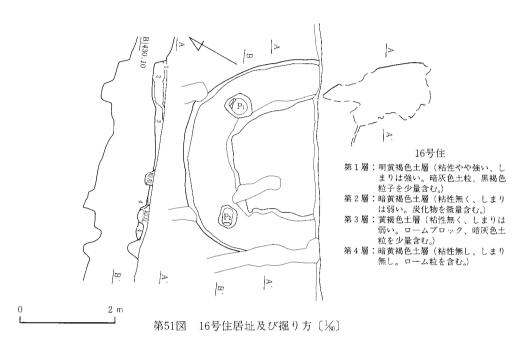
第1層:明茶褐色土層(粘性弱く、しまりはやや強 い。黒色土粒、ローム粒を含む。焼土粒、 炭化物粒を少量含む。)

第2層:茶褐色土層 (粘性やや強く、しまりもやや

第3層:暗黄褐色土層(粘性やや強く、しまりは強い。黒色土粒を含み、焼土粒を少量含む。) 第3層:暗黄褐色土層(粘性やや強く、しまりは強い。黒色土粒を含み、焼土粒、炭化物を少 量含む。)



第50図 15号住居址出土土製 品·鉄製品[½]



斜面中位の緩斜面部、5-P・Q区に位置する。北東7mに15号住居址が、北8mに14号住居址が位置する。南東11mに21号・22号住居址が重複して存在する。

農道により南半部は完全に破壊され、北半部も耕作のため床面の一部が遺存するのみである。 掘り方プランから推定すると、平面形はほぼ楕円形を呈し、規模は短軸で4m強を測るものと 考えられる。主軸方位は、柱穴間線から推定するとN-35°-WあるいはN-55°-Eをとるが、他 住居址例からは前者と考えられる。

床面は一部が遺存するのみであるが残存部は堅緻な貼床である。

ピットは掘り方から 2 ヶ所が検出され、共に柱穴である。床推定面からの深さは、 $P_1$ が48cm、 $P_2$ が51cmを測る。

炉・貯蔵穴・周溝等は検出されなかった。

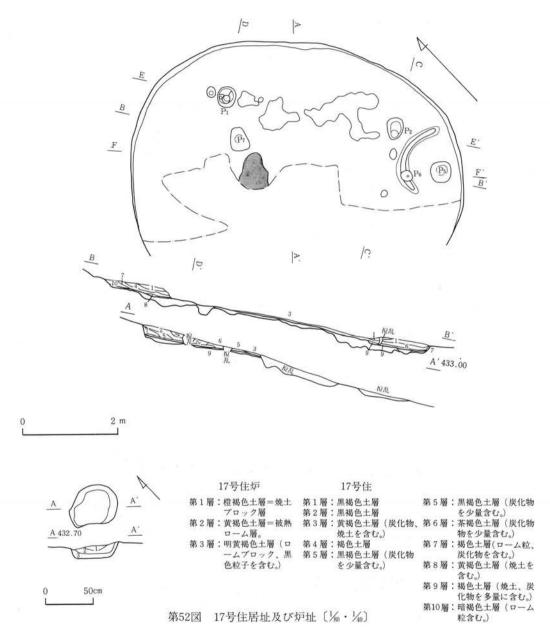
掘り方は床下全面に及ぶものと考えられる。中央が浅く、周辺が深く掘りこまれ底面の凹凸は少ない。床面からの深さは14~25cmを測り、埋土は4層に分けられる。

出土遺物は僅かで、図示しえたものはない。

(山崎 和也)

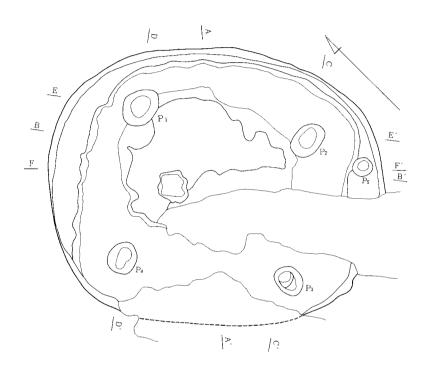
第28表 16号住居址出土土器計測表

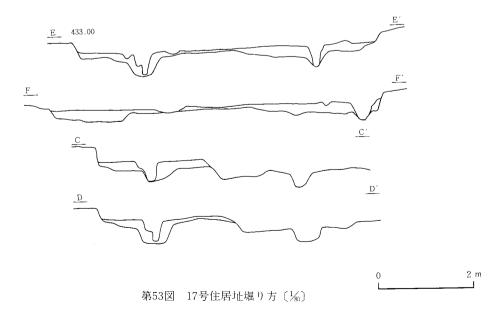
| 33  | )    | 壺 |  | その他不明 |   |      |
|-----|------|---|--|-------|---|------|
| 3 片 | 70 g |   |  | 2     | 片 | 10 g |



斜面中位の 6 ・ 7 - N区に位置する焼失住居である。北 3 mに 7 号・8 号住居址が重複して存在する。南東 5 mに18号住居址が、西15mに15号住居址が位置する。

耕作による削平のため西半部は掘り方しか遺存しない。平面形は楕円形を呈し、規模は $7.1 \times 5.7$ mを測る。主軸方位はN-31°-Wにとり、等高線にやや斜行する。





掘り込みはローム層まで達し、壁高は残存部で20cmを測る。壁は崩落し、かなり外反して立ち上がる。覆土は10層に分けられ、床面直上層(第9層)は焼土・炭化物を大量に含む。上層(第3・7・8層)には大量のロームブロックが認められ焼失時廃棄に伴う投げ込みの可能性が強い。

床面は堅緻で、なだらかな凹凸を有し、中央部がやや高く凸状に構築される。床面上には焼土 ・炭化物が一面に認められる。

ピットは7ヶ所検出され $P_1$ ~ $P_4$ が柱穴である。深さはそれぞれ、44cm、43cm、60cm、54cmを測る。 $P_5$ が貯蔵穴で径45cmの不整円形を呈し、深さ35cmを測る。 $P_5$ の周囲は床面が幅20~30cmで弧状を呈して盛り上がり、小ピット( $P_6$ )が設けられる。 $P_7$ は深さ21cmを測り炉脇に設けられる。

周溝は認められない。

炉は中央部やや北寄りに位置する。西側に一部撹乱を受けるが、径50cm程の不整円形を示す。 覆土は3層に分けられる。

掘り方は床下全面に及ぶ。中央が浅く、周辺が深く掘り込まれるが、壁際は段部を有する。底面はなめらかで床面からの深さは6~18cmを有する。

出土遺物は少なく、図示しえたものはない。

第29表 17号住居址出土土器計測表

尚6-N区出土とした刀子は17号住居址西半の 攪乱部から出土したものである。(山崎 和也)

| 蓌          | 壺 | その他不明    |  |  |
|------------|---|----------|--|--|
| 84 片 605 g |   | 3 片 95 g |  |  |

#### 18号住居址 (第54~55図、図版 8、第30表)

斜面中位の7-0・P区に位置し、焼失住居である可能性が強い。北西5mに17号住居址が近接する。南5mに19号・20号住居址が東13mに21号・22号住居址がそれぞれ重複して存在する。

耕作による削平が激しく、住居址内を畝が縞状に走り西壁部は全く遺存しない。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は4.4×3.6m程と考えられる。主軸方位はN-23°-Wにとり等高線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は残存部で15cm程である。壁は急角度で立つ。覆土は 5 層に分けられ下層には焼土粒・炭化物粒が混入する。

床面は部分的にしか遺存せず軟弱である。残存部上面には焼土・炭化物が認められる。

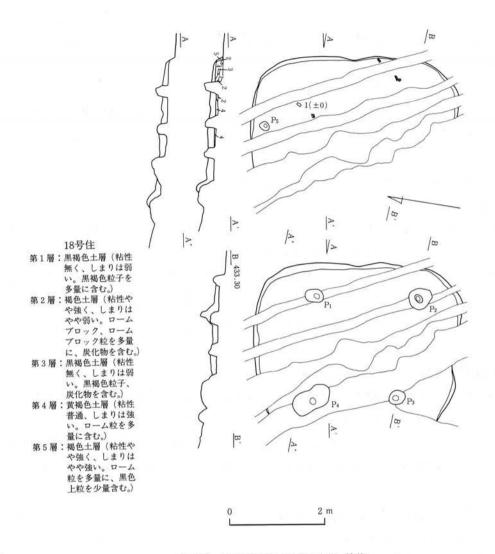
ピットは5ヶ所検出され、 $P_1 \sim P_4$ が柱穴である。深さは床推定面からそれぞれ、28cm、49cm、40cm、41cmを測る。貯蔵穴・周溝・炉址は検出されなかった。

掘り方は床下全面に及ぶ。中央がやや深い皿状断面を呈し、床面からは10~15cmの深さを有する。

出土遺物は少なく図示しえたものは麿製石斧 1のみである。北東部床面から出土している。

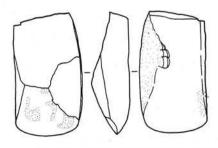
第30表 18号住居址出土土器計測表

| 甕          | 壺       | その他不明    |  |  |
|------------|---------|----------|--|--|
| 31 片 280 g | 3 片 40g | 4 片 40 g |  |  |

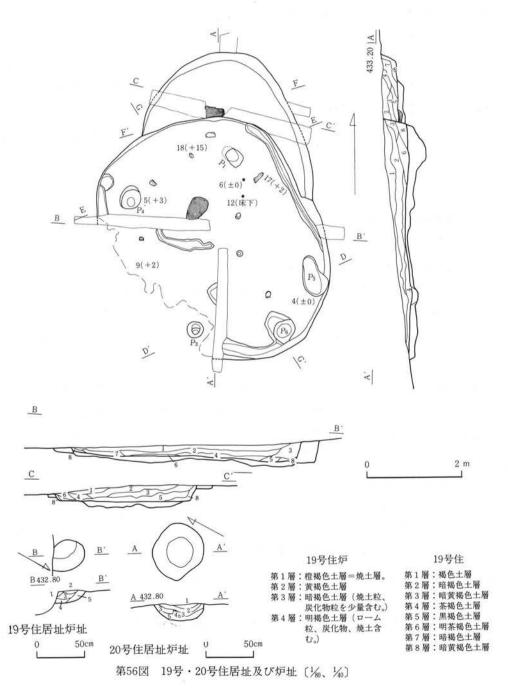


第54図 18号住居址及び掘り方〔‰〕

石器 磨製石斧。石質は緑色凝灰岩。刃部は 蛤刃と平刃である。基部欠。平刃を有する面の 刃部の鎬は破損のため不明。研磨は不完全で、 一部分、敲打痕が残っている。



第55図 18号住居址出土石器〔½〕



### 19号住居址 (第56~57図、図版8、第31表)

斜面中位の8-0区に位置する。北5 mに18号住居址が近接し、南東7 mに23号住居址が、南 17mに24号住居址が存在する。西13mには21号・22号住居址が重複して存在する。

南半部を20号住居址に切られ、北東隅が一部遺存するにすぎない。平面形は楕円形あるいは隅 丸長方形を呈すると考えられるが、規模・主軸方位等はあきらかにしえない。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は29cmを測る。壁は外反して直線的に立つ。覆土は8層に分けられ、自然堆積を示す。床面は軟弱で凹凸が認められる。

ピット・周溝は認められない。

炉址は中央北寄りに位置し、南端部を20号住居址によって切られる。40×30cm程の楕円形平面を呈し、深さは15cmを測る。覆土は5層に分けられる。掘り方は中央部が深く壁際は浅く掘り込まれる。出土遺物は少なく図示しえたものはない。(山崎 和也)

第31表 19号住居址出土土器計測表

| 獲        | 壺 | その他不明 |  |  |
|----------|---|-------|--|--|
| 3 片 60 g |   |       |  |  |

#### **20号住居址**(第56~60図、図版8、第32·33表)

斜面中位、8-0区に位置する。

北東部で19号住居址と重複している。

平面形はほぼ楕円形を呈し、規模は5.4×4.4mを測る。主軸方位はN-24°-Wにとり等高線にやや斜行する。

掘り込みはローム層まで達し壁高は50cmを測る。壁は外反して直線的に立ち上がる。覆土は8層に分けられ、自然堆積を示す。

床面は貼床だが比較的軟弱でなだらかな凹凸を持つ。中央部が高く凸状断面を示す。

ピットは7ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴で深さはそれぞれ、39cm、55cm、52cm、49cmを測る。 $P_5$ が貯蔵穴で、 $70 \times 40$ cmの楕円形平面を呈し壁に接している。深さは25cmを測る。 $P_6 \cdot P_7$ は位置的に出入口施設(梯子穴)と考えられ深さは $P_6 - 46$ cm、 $P_7 - 50$ cmを測る。

周溝は断続的に検出され、西壁部分ではあきらかにしえないもののほぼ全周すると思われる。 幅は $10\sim30$ cm、深さは $12\sim16$ cmを有する。

炉は中央部北寄りに位置し、径50cmの円形を呈し深さは18cm、覆土は5層に分けられる。炉南側床面に、幅10~20cmの溝が設けられる。掘り方は床下全面に及ぶ。基本的には中央部が浅く、周辺が深く掘り込まれるが、西壁沿いでは攪乱の為もあり判然としない。底面はなめらかで床面からの深さは5~20cmを測る。出土遺物は、細片化が進み、床面から出土したものは僅かである。甕5・6、壺4・9が床直から出土しているが、第32表 20号住居址出土土器計測表

原位置を保つものではない。大型の打製石斧17はP<sub>1</sub>脇から出土している。

| 3    |        | Ť   | その他不明 |   |   |       |
|------|--------|-----|-------|---|---|-------|
| 121片 | 1470 g | 9 片 | 260 g | 7 | 片 | 130 g |

### 20号住炉

第1層:黒褐色土層 (焼土、炭化物を

\_ 含む。)

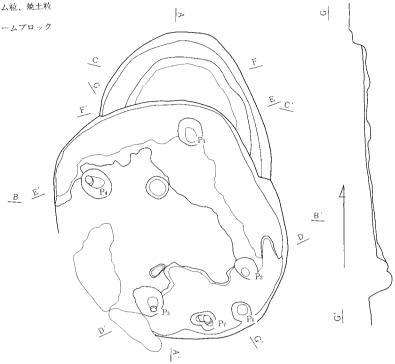
第2層:橙褐色土層=焼土層

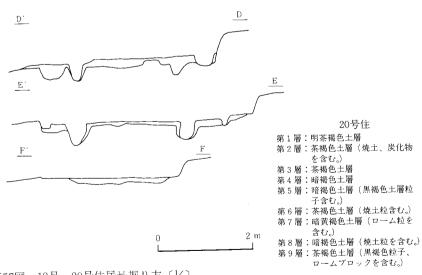
第3層: 黄褐色土層 (焼土を含む。) 第4層: 褐色土層 (ローム粒、焼土粒

を含む。)

第5層:黄褐色土層(ロームブロック

を含む。)





第57図 19号・20号住居址掘り方〔‰〕



第33表 20号住居址出土土器観察表(1)

| 1 | 壺   | 法量:口縁部径(15.67)cm。現存率:口縁部~頸部岩。 調整:外面一折り返し口縁であったと思われるが、折り返し部欠損。口縁部横方向の細いハケ。頸部付近斜め方向の  |
|---|-----|---|
| 1 | 45. | のったと思われるが、折り返し部入損。口縁部関方回の細いハラ。<br>明初の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一の一  |
| 2 | 壺   | 法量: 頸部径(12.81)cm。現存率: 頸部のみ光。 調整: 外面 - 頸部縦方向を主とする<br>ミガキ。円形浮文を有する。内面 - 頸部上横方向のミガキ。頸部下横方向のハケ。胎土<br>:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。           |
|   | 壺   | 法量:胴部径(28.48)cm。現存率:胴部のみ¼。 調整:外面-胴部中頃斜め方向のハケ及び横方向のミガキ。胴部下半斜め方向のミガキ。内面-胴部中位ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。                  |
| 4 | 壺   | 法量:底部径(12.83)cm。現存率:胴部下半~底部場。 調整:外面-胴部ミガキ、底部網代痕。内面-胴部ナデ及び横方向のハケ。全体に磨滅がひどい。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。                                 |
| 5 | 台付甕 | 法量:口縁部径(18.65)cm。頸部径(15.69)cm。現存率:口縁~胴部上半光。 調整:<br>外面-口縁部刻み目。口縁~頸部ナデ。胴部上半縦方向を主としたハケ。内面-口縁部<br>~胴部上半横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。 |

第33表 20号住居址出土土器観察表(2)

|    |       | 法量:口縁部径(17.78)cm。頸部径(15.09)cm。胴部径(20.03)cm。現存率:口縁部~胴部  |
|----|-------|--|
| 6  | 台付甕   | %。 調整:外面-口縁部刻み目、口縁~頸部ナデ及び斜め方向のハケ。胴部上半横                 |
|    |       | 方向のハケ。内面-口縁~胴部磨滅がひどい。胎土:密。焼成:良。色調:暗褐色。                 |
|    |       | 法量:口縁部径7.30cm。胴部径7.75cm。底部径4.25cm。器高6.23cm。内深5.03cm。現存 |
| 7  | 鉢     | 率:%。 調整:外面一全面に指頭圧痕の後へラミガキ。底面ハケ。内面一口縁部指                 |
|    |       | 頭圧痕。全面簡単な横方向のナデ。胎土:密。焼成:良。色調:暗褐色。                      |
| 8  | 壶     | 現存率:底部のみ%。 調整:外面ーナデ。内面ーナデ。胎土:密。焼成:良。色調                 |
| °  | 玺     | :暗赤褐色。   |
| 9  | 壺     | 現存率:口縁部のみ%。 調整:外面一複合口縁棒状貼り付け3本。内面一ナデ。胎                 |
|    | SE    | 土:密。焼成:良。色調:赤褐色。                                       |
| 10 | 壺     | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-折り返し口縁で刻み目をもつ。内面-細縄文                 |
| 10 | 52.   | を施す。全体に磨滅が激しい。胎土:密。焼成:良。色調:橙褐色。                        |
|    | 壺     | 現存率:口縁部のみ%。 調整:外面-折り返し口縁を有する。わずかに斜め方向の                 |
| 11 |       | ハケ。全体的に磨滅が激しい。胎土:白色粒子の混入が著しい。焼成:良好であるが                 |
|    |       | やや軟質。色調:赤褐色。   |
| 12 | 壺     | 現存率:口縁部のみ。 調整:外面-折り返し口縁磨滅がひどく分からない。内面                  |
| 12 |       | -磨滅がひどく分からない。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。                         |
| 13 | 壺     | 現存率:口縁部のみ½。 調整:外面-折り返し口縁で指頭圧痕を残す。縦方向のハ                 |
| 10 |       | ケ。内面-横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:暗茶褐色。                      |
| 14 | 壺     | 現存率:口縁部のみ%。 調整:外面―横方向のミガキ。内面―横方向のミガキ。内                 |
| 14 | -5i2. | 外面に丹彩を有す。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。                            |
| 15 | 獲     | 現存率:口縁部破片。 調整:外面一口唇部ナデ。口縁部ヨコのちタテハケ。内面一                 |
| 10 | 気     | 口縁部ヨコハケ。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。                              |
|    |       | 現存率:口縁部のみ%。 調整:外面一口縁部刻み目及び縦方向のハケ。内面一口縁                 |
| 16 | 甕     | 部横方向のハケの後横方向のミガキを施す。胎土:雲母小粒子を多く含む。密。焼成:                |
|    |       | 良。色調:暗褐色。  |

石器 17は打製石斧。縦長の礫を素材としている。両側縁は内湾し側縁先端部に、使用痕が認められる。形状は撥形で、長さ26cmの大型品である。重量820g、石質は玄武岩。

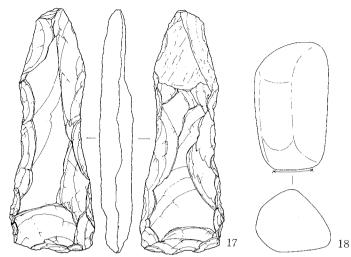
18は磨製石製品。石質:凝灰岩。表裏ともよく磨かれ面とりがなされている。



第59図 20号住居址出土鉄製品〔%〕

鉄製品 鉄環。平面環状を呈する鉄製品で径2.5cm程を測り、 一部欠損する。断面0.4cm角の 方形を呈する。

覆土中から出土している。 (山崎 和也)



第60図 20号住居址出土石器〔½〕

# **21号住居址** (第61~62図、図版 9 、第34表)

斜面中位の $6 \cdot 7 - 0 \cdot P$ 区に位置する。本住居址は22号住居址調査時に検出されたもので、22号住居址と重複し、その下部に構築されていたものである。

北9 mに15号住居址が、北西11mには16号住居址が存在する。東13mには19号・20号住居址が 重複して存在し、南には30m程離れて24号住居址が位置する。

耕作の為、西壁両隅部と床面の一部を削平されている。

平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6×4.5mを測り、22号住居址に比し一回り小型である。主軸方位はN-32°-Wにとり、22号住居址と全く同一で等高線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層中まで達し、本住居址床面と22号住居址床面とのレベル差は5~10cmを有する。壁は緩やかに立ち上がる。

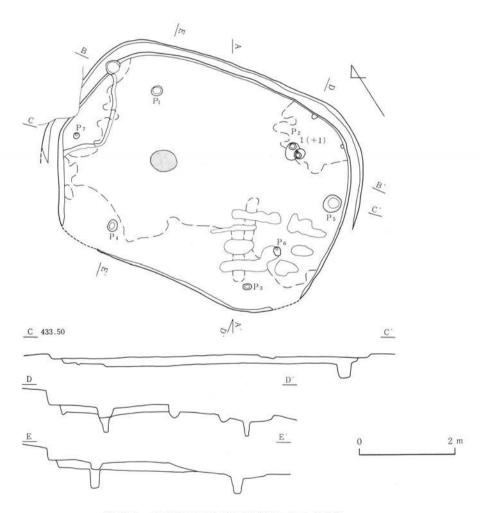
床面は貼床で、壁際部は状態が悪い。北壁沿い中央部は1.9×0.9mの範囲で床面が盛り上がり テラス状をなしている。周囲床面からの高さは5cmを測り、形状は不整楕円形を呈する。上面は 貼床の痕跡が残り、位置等からもベッド状遺構との関連を窺わせる。

ピットは7ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴で深さはそれぞれ、42cm、39cm、32cm、34cmを測る。 $P_5$ が貯蔵穴の可能性を持ち、径35cm程の円形平面を呈し、深さは34cmを測る。北壁沿いのテラス面上にも小ピット( $P_7$ )が1ヶ所掘り込まれる。尚テラス部北端で壁を切っているピットは22号住居址に伴うものである。

周溝は検出されなかった。

炉址は中央部やや北寄りに位置する。径70cm程の不整円形を呈し、深さは20cm程を測る。覆土は3層に分けられ上面は22号住居址炉によって削平されている。

掘り方は床下全面に及び、ほぼ平坦であるが、僅かに中央部が浅く断面凸レンズ状を呈する。



第61図 21号住居址及び22号住居址掘り方[‰]

周辺部には凹凸が認められる。床面からの深さは  $8 \sim 22 \text{cm} \, \text{で}$ 、掘り方埋土は 6 層に分けられ、第 5 層が貼床面である。

出土遺物は少なく、図示しえたものは一点のみである。

(稲生 隆)

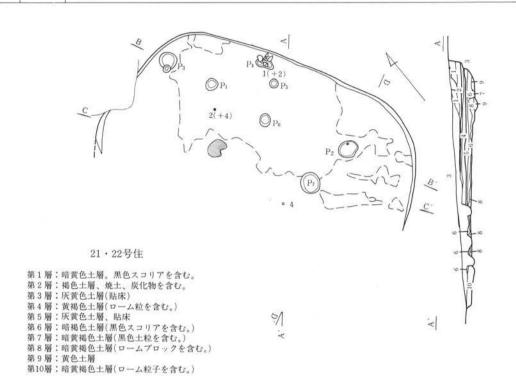
第62図 21号住居址出土土器[4]

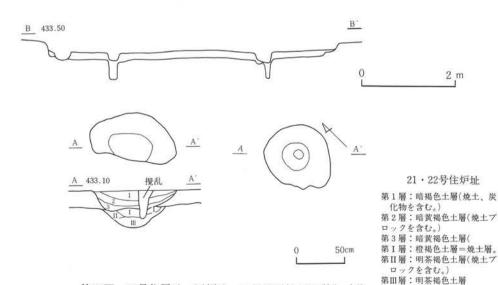
### 第34表 21号住居址出土土器観察表

台付甕

1

法量:脚部底径7.93cm。接合部径4.78cm。 調整:外面-接合部付近縦方向主体のハケ。脚下側斜め方向の細いハケ。内面-脚上側。太い横方向のハケ。中位、細い横方向のハケ。脚下側横方向のハケ。胎土:細かな白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:赤褐色。





第63図 22号住居址・同炉址、21号住居址炉址[%・%]

22号住居址 (第63~65図、図版9、第35・36表)

斜面中位の6・7-0・P区に位置する。

21号住居址と重複し、21号住居址の上部に構築されている。

耕作のため西半部を削平されており、床面の遺存状態も悪い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6.6×5 m弱と考えられる。主軸方位はN-32°-Wにとり、等高線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しており、覆土は2層に分けられた。壁高は北東壁で31cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は貼床(第3層)で、遺存部は堅緻である。

ピットは7ヶ所検出された。 $P_1$ ・ $P_2$ が柱穴で深さはそれぞれ18cm、25cmを有する。貯蔵穴は確認されなかった。 $P_3$ は深さ18cmを測るが、他のピットは比較的浅いものであった。

周溝は検出されなかった。

炉址は中央部やや北寄りに位置する。南半部は撹乱のため失っているが、90×60cm程の楕円形平面を呈し、深さは20cm程を測る。覆土は3層に分けられる。

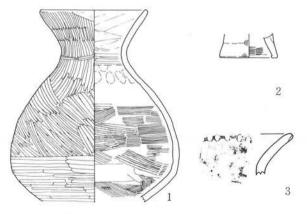
出土遺物は少なく、図示しえたものも僅かである。1はP4上面から、2は炉脇から出土している。刀子4は中央部覆土下層から出土している。他は覆土中からの出土である。

尚本住居址の炉址調査時に、炉址底部より本址炉址に伴うとは考えられない焼土ブロックを検 出した。それを平面的に追求したところ、本住居址下部より新たに一軒の住居址を検出し、21号 住居址とした。

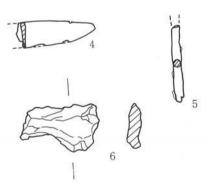
21号住居址は、22号住居址と同一の平面形を有し、柱穴・炉址の位置、及び主軸方位をほぼ同 一にする住居址である。両住居址間の間層(第4層) 第35表 22号住居址出土土器計測表

も、自然堆積とは考えられず、従って22号住は 21号住の拡張住居として理解したい。

| 甕    |       | 壺   |       | その他不明 |       |
|------|-------|-----|-------|-------|-------|
| 64 片 | 520 g | 4 片 | 120 g | 13 片  | 140 g |







第64図 22号住居址出土鉄製品 [½]

鉄製品 4は刀子先端部。現長4cm、身幅1.4cm、棟厚0.3cmを測る。5は棒状鉄器先端。現長4cmで径0.4cmの円形断面を有する。6は不明鉄片。4×2.5cm程で厚さ0.7cmを測る。錆の為肥大化が著しい。3点とも覆土中からの出土である。 (稲生 隆)

第36表 22号住居址出土土器観察表

| 1 | 壺   | 法量:口縁部径(11.00)cm。頸部径6.87cm。胴部径17.71cm。現存率:底部を欠く¾。<br>調整:外面-口唇部ナデ。口縁部~頸部縦方向のヘラミガキ。頸部横方向のヘラミガ<br>キ及び縦方向のヘラミガキ。胴部上半斜め方向のヘラミガキ。胴部下半横方向のヘラミガキ。内面-口縁部~頸部ヘラケズリの後にナデ。頸部一部ハケを施す。横方向のヘラミガキ。頸部下半指オサエ。胴部上半横方向のハケ。胴部下半斜め方向主体のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:明赤褐色。 |
|---|-----|---|
| 2 | 台付甕 | 法量: 脚部底径(5.96)cm。現存率: 脚部のみ場。 調整: 外面ーナデ。内面ー横方向のハケ。磨滅がひどく不明なところが多い。胎土: 密。焼成: 良。色調: 赤褐色。   |
| 3 | 甕   | 現存率:口縁部%。 調整:外面-口縁部刻み目。タテ方向のハケ。内面-ヨコハケ。<br>胎土:密。焼成:良好。色調:赤褐色。   |

#### 23号住居址

(第66~68図、図版9、

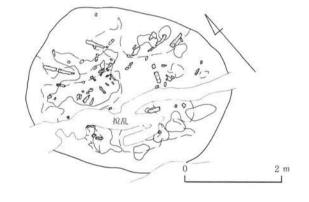
第37・38表)

斜面中位の緩斜面部、9 - N ・0 区に位置する焼失住居である。

東25mに5号住居址、南30m に25号住居址と距離を隔てて存 在し、北西7mには19号・20号 住居址が重複して位置する。一 部耕作による攪乱が走るが、ほ ぼ完存する。

平面形は隅丸長方形を呈し、

規模は4.1×3.3 mを測る。主



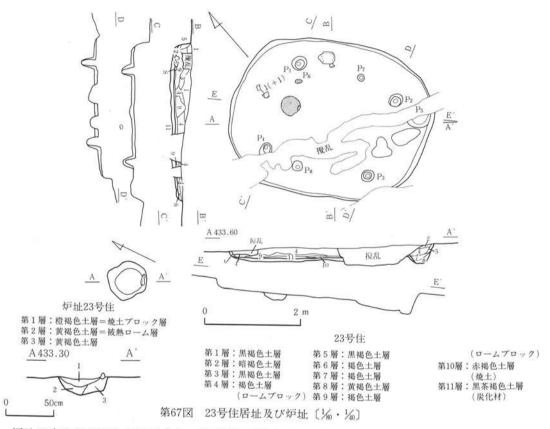
第66図 23号住居址燒土·炭化材分布図 [‰]

軸方位は $N-14^{\circ}-W$ にとり、等高線にやや斜行する。

掘り込みはローム層中まで達し、壁高は東壁で30cm、西壁で10cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がるが東壁はほぼ垂直に立つ。覆土は11層に分けられ、床面直上層(第10・11層)は焼土・炭化材を主体とする層である。上層(第4・9層)にはロームブロックが大量に混入し、堆積状態からも焼失直後の投げ込みと考えられる。

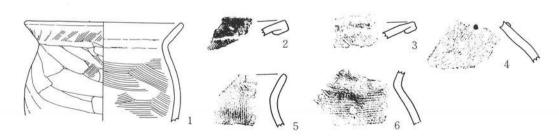
床面は堅緻な貼床でなだらかな起伏を有する。床面上には大量の焼土・炭化材が認められた。 ピットは8ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴で深さはそれぞれ26cm、31cm、28cm、21cmを測る。  $P_5$ が貯蔵穴で、東半部に撹乱を受けるが、径50cm程の円形平面を呈し深さは20cmを測る。

周溝は検出されなかった。



炉址は中央部北寄りに位置する。平面形は不整円形を呈し、径40cm、深さ13cmを測る。覆土は 3 層に分けられ、枕石が1 個検出された。

掘り方は床下全面に及び、中央部がやや深い凹レンズ状断面を示す。底面はなだらかな起伏をみせ、床面からの深さは $5\sim10$ cmを測る。



第68図 23号住居址出土土器 [¼・⅓]

出土遺物は少なく図示しえたものも僅かである。1は北壁沿い中央部、床面から出土している。 (吉岡 弘樹)

第37表 23号住居址出土土器計測表

| 努    | Æ     |     | 壺    | その | の他不明   |
|------|-------|-----|------|----|--------|
| 40 片 | 240 g | 6 片 | 70 g | 6  | 片 80 g |

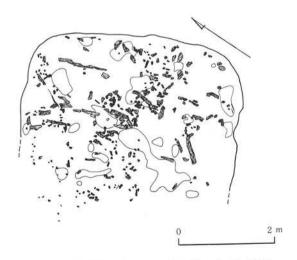
第38表 23号住居址出土土器観察表

| 1 | 台付饗 | 法量:口縁部径(16.52)cm。頸部径13.43cm。胴部径16.28cm。現存率:口縁部~胴部中位<br>½。 調整:外面-口縁部~頸部斜め方向のハケ。胴部上半斜め方向のヘラケズリ。<br>胴部中位斜め方向のヘラケズリ。内面-口縁部~頸部ナデ。胴部上半横方向のハケ。<br>胴部中位横方向のハケ。胎土:わずかに黒雲母を含む。密。焼成:良。色調:橙茶<br>褐色。 |
|---|-----|---|
| 2 | 壺   | 法量:口縁部径(14.15)cm。現存率:口縁部のみ分。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部折り返し口縁、指頭圧痕が残りその下方に縦方向のハケを施す。内面-口縁部わずかに横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。   |
| 3 | 壺   | 法量:口縁部径(15.69)cm。現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部折り返し口縁、指頭圧痕が残り、その下方に斜め方向のハケを施す。内面-口縁部横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。   |
| 4 | 壺   | 現存率: 脚部上半%。 調整: 外面-胴部上半円形浮文を有しその下部に細縄文・S 字結節を有する。内面-胴部上半ナデ。胎土:密。焼成:良。色調: 赤褐色。   |
| 5 | 甕   | 現存率:口縁部~頸部½。 調整:外面-口縁部斜方向のハケ。頸部縦方向のハケ。<br>内面-口縁部~頸部ナデ。胎土:白色小粒子をわずかに含む。密。焼成:良。色調:赤<br>褐色。  |
| 6 | 甕   | 現存率:頸部~胴部上半片。 調整:外面-頸部縦方向のハケの後ナデ。胴部上半横<br>方向の太い横ハケ。内面-頸部~胴部上半横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。<br>色調:淡赤褐色。   |

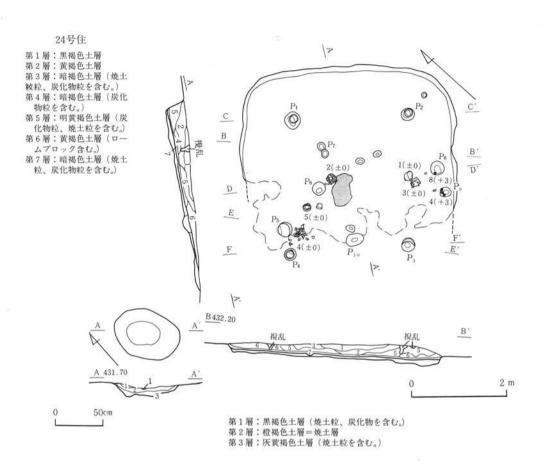
### 24号住居址

(第69~73図、図版10、第39・40表) 斜面中位の緩斜面部、9・10-P区に 位置する焼失住居である。北東14mに23 号住居址、南東19mに25号住居址、西13 mに28号住居址、と他住居址からやや離 れて位置する。

耕作のため南西壁が削平され完存しないが、平面形はほぼ隅丸方形を呈し、規模は柱穴位置からの推定であるが、4.6×4.7mを測る。主軸方位は、N-43°-Wにとり、等高線とほぼ平行する。



第69図 24号住居址焼土及び炭化材分布図 [‰]



第70図 24号住居址及び炉址 [1/40・1/40]

掘り込みはローム層中まで達しており、壁高は東壁で34cmを測る。覆土は7層に分けられ、全体的に焼土・炭化物の混入が著しい。特に最下層(第7層)は焼土・炭化材を主体とする層である。

床面はほぼ平坦で、全体的に堅緻である。床面上には多量の焼土・炭化材が認められた。

ピットは10ヶ所検出された。 $P_1$ ~ $P_4$ が柱穴で深さはそれぞれ、54cm、56cm、59cm、46cmを測る。 貯蔵穴は確認されず、他住居址における貯蔵穴の位置から推定すると、本址には貯蔵穴は付設されなかった可能性が強い。 $P_8$   $P_9$ が梯子穴と思われ各々、13cm、10cmの深さを有する。他は全て5~10cmの比較的浅いピットである。

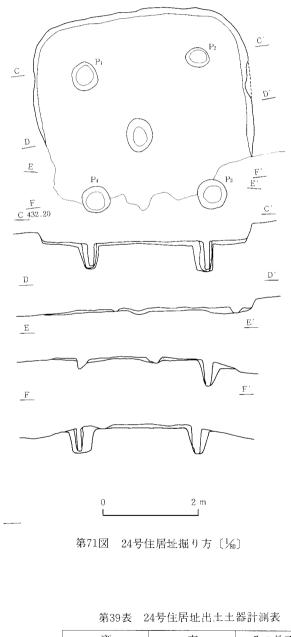
炉址は中央やや北寄りに位置する。70×50cmの規模で平面楕円形を呈する。深さは9cmを測り 浅鉢状断面を示し、覆土は3層に分けられる。

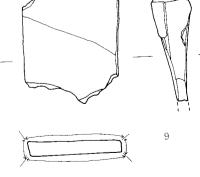
掘り方は床下全面に及び、浅くなめらかで床面からの深さは4~10cmを測る。

出土遺物は炉址脇から自然石が、覆土中から砥石 9 が出土した以外は土器である。床面上での

出土位置はほぼ2つのグループに分けられる。入口部(梯子穴)付近から壺1、甕3が、炉脇から北西隅にかけて甕2・4・5が出土している。他は覆土中からの出土である。

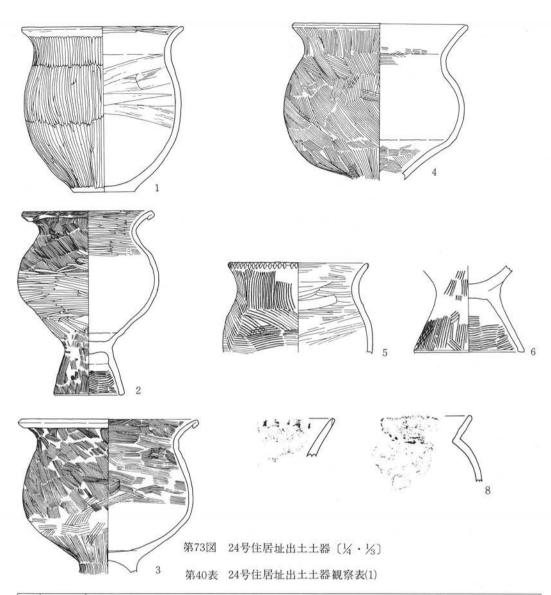
**石製品** 砥石。灰赤褐色を 呈する。5.5×4.9×2.3cmを 測り一端を欠落する。5面が 砥面とされ、一面はかなり砥 ぎべりし、粗い条痕も認めら れる。覆土中からの出土であ る。 (吉岡 弘樹)





第72図 24号住居址出土石製品〔½〕

| 甕          | 壺        | その他不明     |  |
|------------|----------|-----------|--|
| 28 片 300 g | 1 片 20 g | 5 片 160 g |  |



| 1 | 広口壺 | 法量:口縁部径(17.0)cm。胴部最大径16.5cm。底部径6.5cm。現存率:口縁部½。胴部½<br>欠損。底部完存。 調整:外面一口縁ヨコナデ。胴部一へラミガキ。底部ーナデ。内面一口縁ヨコナデのちへラミガキ。胴部一へラナデのちへラミガキ。底部ーナデ。胎土:白砂粒含み密。焼成:良。色調:暗赤褐色。         |
|---|-----|---|
| 2 | 台付甕 | 法量:口縁部径13.6cm。胴部最大径14.9cm。脚接合部5.0cm。脚底径7.4cm。現存率:胴下半一部欠損他はほぼ完存。 調整:外面一折り返し口縁、口唇部、頸部はハケ。胴部ハケのちミガキ。脚部ハケ。内面一口縁ハケのちへラミガキ。胴部ヘラナデのちへラミガキ。脚部ハケのちユビナデ。胎土:密。焼成:良。色調:黄褐色。 |
| 3 | 台付甕 | 法量:口縁部径(18.4)cm。胴部最大径17.9cm。脚部接合部6.1cm。現存率:口縁部¼。胴部ほぼ完存。脚部欠損。 調整:外面一折り返し口縁。ハケ調整を全面に残す。胴部ハケのちナデ。脚部ハケのちナデ。内面一口縁ハケ。胴上半ハケ。胴下半ヘラナデ。胴部底部ハケ。脚部ハケ。胎土:小石を含む。焼成:良。色調:黄褐色。  |

第40表 24号住居址出土土器観察表(2)

|   |                        | 法量:口緣部径(18.0)cm。胴最大径19.0cm。脚台接合部5.6cm。現存率:口緣光。胴光。 |
|---|------------------------|---|
| 4 | 台付甕                    | 調整:外面-口縁ハケのちヨコナデ。胴部ハケ。内面-ハケのちヨコナデ。胴部上位へ           |
|   |                        | ラナデ。胴部下ハケ。胎土:密。焼成:良。色調:淡赤褐色。                      |
|   |                        | 法量:口縁部径(14.4)cm。胴最大径(15.8)cm。現存率:%弱。胴下部欠損。 調整:    |
| 5 | 甕                      | 外面-口縁ハケのちヨコナデのちハケ具によるキザミ。胴部ハケ。内面-口縁ヘラミガ           |
|   |                        | キ。胴部ヘラミガキ。胎土:白砂粒を含み密。焼成:良。色調:赤褐色。                 |
|   | /_ /_L = <del>}#</del> | 法量:脚底部11.6cm。脚高5.8cm。現存率:脚部%強。 調整:外面-ハケ。内面-ハ      |
| Ь | 6 台付甕                  | ケ。胴底部内面-ハケのちナデ。胎土:密。焼成:良。色調:黄褐色。                  |
|   | witt                   | 現存率:口縁部%。  調整:外面-刻目タテハケのちナデ。内面-ヨコハケのちナデ。          |
| 7 | <b>三</b>               | 胎土:密。燒成:良。色調:赤褐色。                                 |
|   | 1 #11 =                | 現存率:口縁部~肩部場。 調整:外面-口縁ナデ。肩ミガキのちナデ。内面-口縁            |
| 8 | 小型壺                    | ・肩ーナデ。胎土:砂粒を含み密。焼成:良。色調:黄褐色。                      |

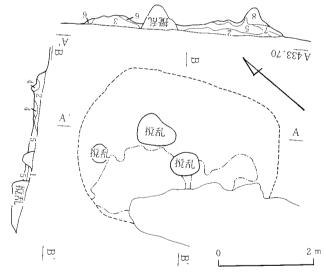
## 25号住居址

(第74、75図)

斜面中位の緩斜面部、11・12-0 ・P区に位置し、集落の南端にあた る。北西19mに24号住居址が存在す るのみで、他の住居址からは距離を 隔てている。

遺存状態が悪く、全壁が削平さ れ、床面中央部が僅かに残るにすぎ ない。

平面形は、掘り方では隅丸長方 形を呈し、規模は4.2×3.2mを測 る。主軸方位はN-28°-Wにとり、 等高線とほぼ平行する。掘り込みは ローム層中まで達しているが、壁は 削平され全く存在しない。床面残存 部はほぼ平坦で堅緻である。周溝は 検出されなかった。



第74図 25号住居址 [‰]

25号住

第5層:黄褐色土層(黒色粒子を含む。) 第1層:黄褐色土層(貼床)

第3層:暗黄褐色土層

第2層:黄褐色土層(炭化物を含む。)第6層:黄褐色土層 第3層:暗黄褐色土層 第7層:黄褐色土層(ロームブロックを含む。) 第8層:暗黄褐色土層(黒褐色粒子を含む。) 第4層:黃褐色土層

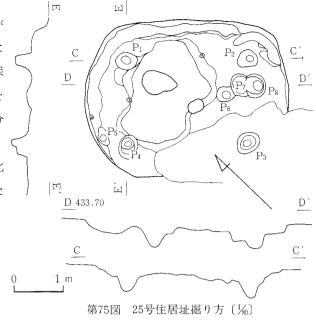
ピットは掘り方で8ヶ所検出された。P1~P4が柱穴で、掘り方底面からの深さはそれぞれ、32 cm、37cm、36cm、34cmを測る。P6~P8は三連ピットで、それぞれ、14cm、15cm、31cmの深さを 有する。

炉址は検出されなかった。

掘り方は床下全面に及び、中央が 浅く周辺が深く掘りこまれ、底面に は凹凸が認められた。床面からの深 さは14~26cmを有し、壁際は段部を なして立ち上がる。埋土は8層に分 けられ、第1層は貼床面で、第2・ 3層は撹乱の可能性もあるが、炭化 物の存在から本住居跡に附属させた ものである。

遺物は全く検出できなかった。

(稲生 隆)



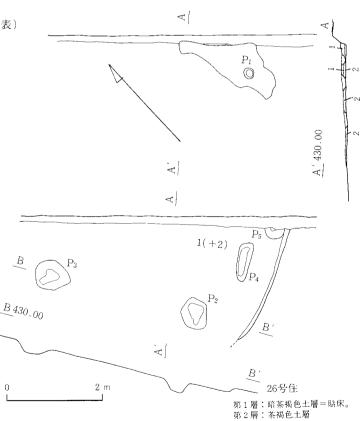
# 26号住居址

(第76~77図、図版11、第41·42表)

斜面下位の8-Q区に位置する。 西2mに27号住居址が近接する。 南10mに28号住居址、南東16mには 24号住居址が存在する。

東半部は農道によって破壊され、 西半部も耕作による削平を受け南壁 寄り床面一部が遺存するのみである。

平面形・規模は不明であるが、掘り方残存部から推定すると、長軸5.5 m以上を測り、隅丸長方形を呈するものとも考えられる。主軸方位も不 *B430.00* 明であるが、柱穴間線はN-45°-W にとり、主軸方位もほぼ同一方位を



第76図 26号住居址及び掘り方〔‰〕

とると思われ、等高線とほぼ平行する。

床面遺存部は僅かであるが、堅緻な貼床で、小ピットが1ヶ所検出された。 ピットは合計5ヶ所検出された。 $P_2$ ・ $P_3$ が柱穴で、床推定面からはそれ ぞれ、44cm、45cmの深さを測る。 $P_4$ ・ $P_5$ は位置関係から推して出入口施設 に関連する可能性も持つ。



第77図 26号住居 址出土土器(½)

掘り方は床下全面に及んだものと考えられるが

明確でない。床面からの深さは8~10cmを測り、

第41表 26号住居址出土土器計測表

埋土は2層に分けられる。

出土遺物は少なく、図示しえたものも1点のみ である。 (吉岡 弘樹)

| 甕   |      | 壺 | その他不明 |  |
|-----|------|---|-------|--|
| 6 片 | 50 g |   |       |  |

第42表 26号住居址出土土器観察表

| 法量:接合部径(5.60)cm。脚部底径(8.96)cm。現存率:脚部のみ場。 調整:外面-| 台付甕 脚部ナデ。外面は磨滅がひどい。内面-胴部底ナデ。脚部ナデ。胎土:密。焼成:良 | であるが軟質。色調:赤褐色。

### 27号住居址

(第78~80図) 図版

11、第43·44表)

斜面下位の7・8-Q・ R区に位置する焼失住居で ある。

東2mに26号住居址、南3mに31号住居址と近接する。南東11mに28号住居址、北西15mに30号住居址が存在する。

住居址西半部を削平され、 また床面の遺存も悪い。平 面形は隅丸長方形を呈する ものと考えられ、規模は柱 穴から推定すると 5.9 × 4.3 m 程であろう。主軸方

第78図 27号住居址 [%]

位はN-39°-Wにとり等高線にほぼ平行する。

掘り込みはローム層中まで達しており、壁高は削平の為最長で15cmを測るのみである。覆土は6

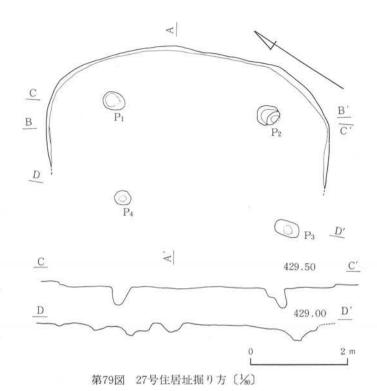
層に分けられ、床面直上層(4・5・6層)は焼土・炭化物を 主体とする層である。上層には ローム・ロームブロックが多量 混入し、人為的な堆積を示す。

床面遺存部は堅緻な貼床で上 面には多量の焼土・炭化材が認 められた。

ピットは4ヶ所検出された。 全て柱穴で深さは床推定面から それぞれ37cm、41cm、34cm、45 cmを測るが、平行四辺形を呈し、 平面形に対して歪みをもつ。

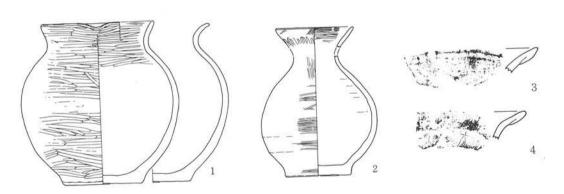
周溝・炉址は検出しえなかった。 掘り方は床下全面に及び、凹 凸が激しい。床面からの深さは 5~20cmを測る。

出土遺物は少ない。壺1・2は共に中央部床 面、ほぼ柱穴線上より出土している。(吉岡 弘樹)



第43表 27号住居址出土土器計測表

| 藝    |       | 壺    |       | その他不明 |  |
|------|-------|------|-------|-------|--|
| 30 片 | 210 g | 90 片 | 350 g | -     |  |



第80図 27号住居址出土土器〔¼・⅓〕

第44表 27号住居址出土土器観察表(1)

法量:口縁部径12.21cm。接合部径11.16cm。器高17.96cm。胴部径17.52cm。底部径8.50 cm。現存率:ほぼ完形。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部密な横方向のヘラミガキ。 1 片口壺 頸部横方向のヘラミガキ。胴部上中位横方向のヘラミガキ。胴部下半やや斜め方向のヘラミガキ。胴部底付近わずかにナデ。底部ヘラミガキ。内面-口縁部~頸部横方向のヘラミガキ。胴部簡単なナデ、磨滅している。胎土:密。焼成:良。色調:暗茶褐色。

第44表 27号住居址出土土器観察表(2)

| 2 | 壶 | 法量:口縁部径8.43cm。頸部径4.82cm。器高16.51cm。胴部径12.82cm。底部径7.05cm。<br>現存率: ½。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部〜頸部斜め方向のハケ。縦方向の短いヘラミガキ。胴部ハケ。底部ナデ。内面-口縁部〜頸部横方向のハケの後横方向のヘラミガキ。全体に非常に磨滅が激しく整形はよく分からない。胎土:密。焼成:軟質。<br>色調:明赤褐色。 |
|---|---|--|
| 3 | 壺 | 現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-口縁部折り返し口縁ナデ。横方向のハケ。内面-口縁部ナデ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。   |
| 4 | 壺 | 現存率:口縁部のみ場。 調整:外面-口縁部折り返し口縁ナデ。内面-口縁部ナデ。<br>胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。  |

#### 28号住居址

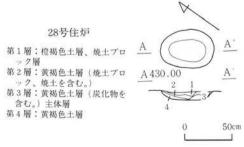
(第81~82図、図版12、第45·46表)

斜面下位の 9-Q・R区に位置する焼 失住居である。

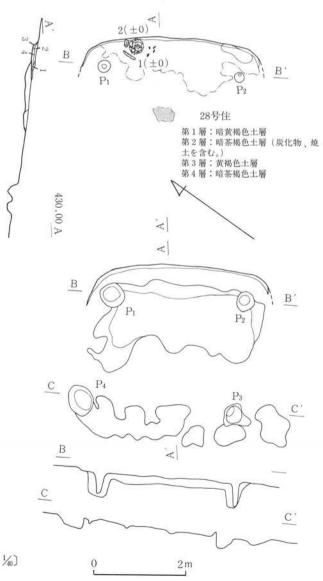
北10mに26号住居址が、南5mに29号 住居址が、東15mには24号住居址が存在 する。南西10mには32号住居址と33号住 居址が重複して存在する。

耕作による削平のため東壁際部が残存するのみで遺存状態は悪い。遺存している柱穴からの推定であるが、平面形は隅丸方形を呈し規模は3.8×3.7m程と考えられる。主軸方位はN-30°-Wにとり等高線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しているが 削平の為、壁高は10cmを残すのみである。



第81図 28号住居址・掘り方及び炉址 [%・1/0]



覆土は4層に分けられ、床面直上層 (4層)は焼土・炭化物を主体とする層である。

上層にはロームブロックの混入が目立つ。

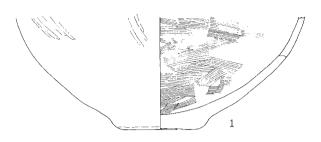
床面は壁際が高く中央へ向うに従い低くなる。全体的に軟弱であるが一部堅緻な部位を残す。床面上には焼土・炭化材が認められた。

ピットは4ヶ所検出され全て柱穴である。床推定面よりの深さはそれぞれ43cm、51cm、55cm、48cmを測る。

周溝・貯蔵穴は検出しえなかった。

炉址は住居址中央部に位置する。上面 を削平されているが、60×40cmの楕円形を呈し 深さ10cmを残している。

掘り方は中央部が掘り込まれ、周辺壁沿いは



第82図 28号住居址出土土器〔½〕 第45表 28号住居址出土土器計測表

| 甕         | 壼 | その他不明    |  |
|-----------|---|----------|--|
| 20 片 90 g |   | 1 片 20 g |  |

掘り残されるものである。従って床面遺存部は掘り方底面を整地し、貼床したものであるが、 中央部にも貼床が施されたと考えられる。床面からの深さは15~20cmを測る。

出土遺物は少なく図示しえたものも僅かである。1は北東隅壁際床直から出土している。

第46表 28号住居址出土土器観察表

(山崎 和也)

|   |   | 現存率:胴部下半~底部場。 調整:外面-底部木葉痕。外面は磨滅がひどく整形    |
|---|---|--|
| 1 | 壺 | は分からない。内面-胴部下半横方向のハケ。底面縦方向のハケ。胎土:密。焼成:良。 |
|   |   | 色調:茶褐色。                                  |

#### 29号住居址 (第83~85図、図版11、第47・48表)

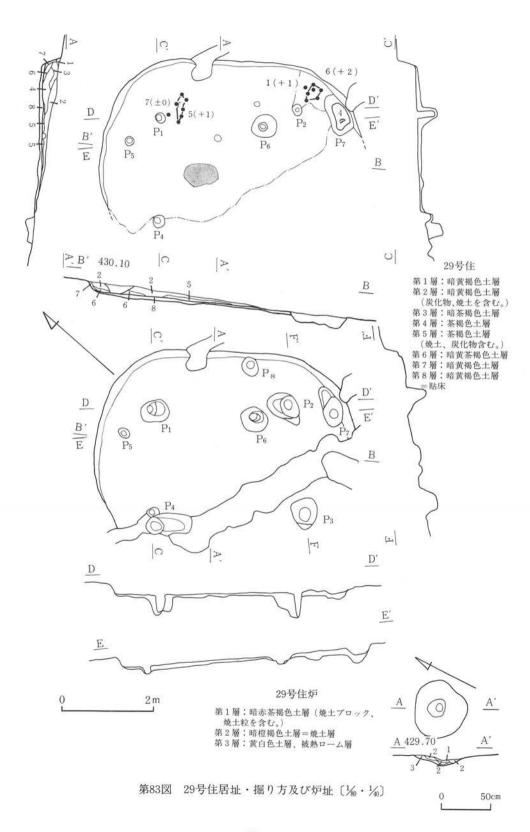
斜面下位の急斜面部、10-R区に位置し扇形に展開する集落の南端にあたる。北7 mに28号住居址が、西10mに32号・33号住居址が重複して存在する。

耕作の為西半部に削平を受け、住居址全体の%程しか遺存しない。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.5mを測り短軸は4.5m程と推定される。主軸方位はN-31°-Wにとり等高線とやや斜行する。

掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁で30cm程遺存する。覆土は7層に分けられ、 自然堆積を示す。

床面は平坦であるが、やや軟弱な貼床である。

ピットは8ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴である。深さはそれぞれ、38cm、50cm、52cm、30cmを測る。 $P_7$ が貯蔵穴と思われ南東隅壁に接して設けられる。 $80 \times 50cm$ の楕円形平面を呈し、深



は15cmを測る。

炉址は中央やや北寄りに位置する。径50~60cm程の不整円形を呈する。深さは8cmと浅く皿状断面を示す。覆土は3層に分けられる。

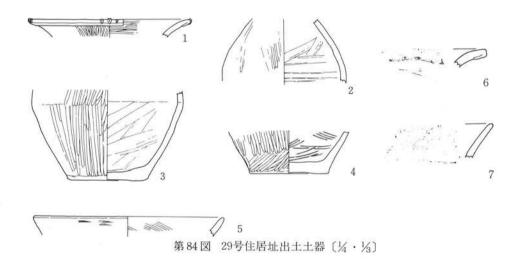
周溝は認められない。

掘り方は床下全面に及ぶ。底面はなだらかな起伏をもつ。床面からの深さは $5\sim 8\,\mathrm{cm}$ を測る。埋土は $1\,\mathrm{層}$ で上面が貼床となる。

出土遺物は細片化が進んでいるが、図示しえたものは全て床面直上から出土している。4は 貯蔵穴内から、1・3・6は貯蔵穴脇から、5・7はP1脇からの出土である。

第47表 29号住居址出土土器計測表

| 築    |       | 壺   |      | その他不明 |      |
|------|-------|-----|------|-------|------|
| 27 片 | 285 g | 7 片 | 60 g | 1 片   | 15 g |



第48表 29号住居址出土土器観察表(1)

| 1 | 壺 | 法量:口縁部径(17.88)cm。現存率:口縁部場。 調整:外面-折り返し口縁、棒状貼り付けを有す。口縁部〜頸部縦方向のヘラミガキ。内面-口縁部〜頸部横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。  |
|---|---|--|
| 2 | 壺 | 現存率:胴部上半½。 調整:外面-胴部上半わずかに縦方向のヘラミガキ。磨滅がひどい。内面-胴部上半斜め方向・横方向のナデ。胎土:密。焼成:良であるがやや軟質。色調:淡赤褐色。  |
| 3 | 壺 | 法量:底部径8.78cm。現存率:胴部中頃~底部½。 調整:外面-胴部中頃~下半縦<br>方向のヘラミガキ。胴部底付近縦方向のハケの後にナデる。底部木葉痕。内面-胴部中<br>頃~下半横方向・斜め方向のヘラミガキ。底面ナデ。全体に磨滅が激しい。胎土:密。<br>焼成:良。色調:暗赤褐色。 |
| 4 | 壺 | 法量:底部径8.71cm。現存率:底部のみ、他は欠損。 調整:外面-胴部下半~底部<br>付近斜め方向のヘラミガキ。底部ナデ。内面-胴部下半~底面簡単な横方向のヘラミガ<br>キ。胎土:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。                                     |

### 第48表 29号住居址出土土器観察表(2)

| 5 甕 | 法量:口縁部径(20.85)cm。現存率:口縁部のみ光。 調整:外面-口縁部横方向のナ |  |
|-----|---|--|
|     | デ。内面-口縁部横方向のナデ。斜め方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:明茶褐色。   |  |
| C   | c ±   | 現存率:口縁部%。 調整:外面一口縁部折り返し口縁ナデ。口縁部~頸部ナデ。内 |
| 6 壺 | 面一口縁部~頸部横方向のヘラミガキ。胎土:密。焼成:良。色調:淡茶褐色。        |  |
| 7   | whe   | 現存率:口縁部%。 調整:外面-口縁部ナデ。内面-口縁部横方向のハケの後にナ |
|     | 甕   | デ。胎土:密。焼成:良。色調:淡茶褐色。                   |

鉄製品 板状鉄片端部 現長 2 cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測り、端部は弧状を

(吉岡 弘樹)

第85図 29号住居址出土鉄製品(½)

#### 30号住居址

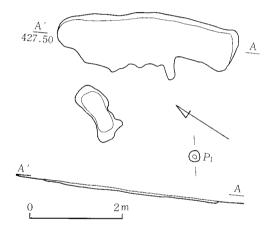
(第86~87図、第49表)

斜面下位、急傾斜斜面部の6・7 - R・S区に位置 し、扇状にひろがる集落の扇端部にあたる。他の住 居址とは距離を隔ており、南東15mに27号住居址が 存在するにすぎない。

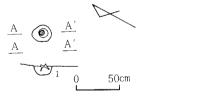
呈する。住居址北東隅壁際、覆土中から出土している。

耕作による削平が激しく、平面形・規模・主軸方 位等はいっさい明確にしえない。

本址は確認面精査時に土器を伴うピットとして検出されたものである。更に周辺から貼床残存と思われるハードブロックを検出し、下部には浅い落ち込みが確認された。落ち込みの一辺が緩い弧状を呈すること、覆土が本遺跡に於ける掘り方埋土と同一であること、更にハードブロックの存在などから一応住居址と認定したものである。勿論、確認しえた



第1層:暗褐色土層(ロームブロックを含む。)



第86図 30号住居址 〔‰・‰〕

部分は遺構のごく一部であり、他の性格の遺構となる可能性を否定するものでは ない。

出土遺物は1点で、ピット内から出土している。

(吉岡 弘樹)

第87図 30号住居 址出土土器[½]

第49表 30号住居址出土土器観察表

法量:脚接合部径5.63cm。脚底径8.38cm。現存率:脚部のみ完存、他は欠損。 調整 :外面-脚接合部縦方向のハケ。脚部縦方向のハケ。内面-胴部底面横方向のハケの後に斜め方向を主とするヘラミガキ。脚部上半横方向のハケの後にナデ。脚部下半横方向のハケ。胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。色調:薄茶褐色。

### 31号住居址

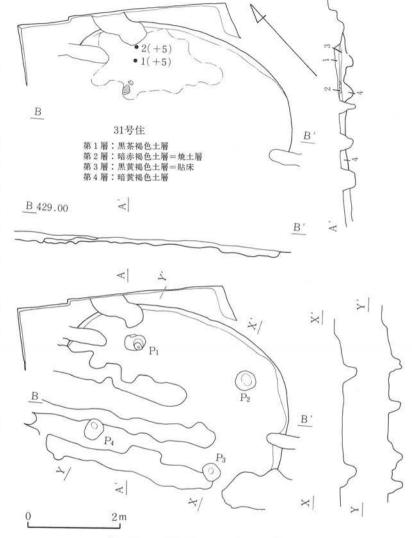
(第88~90図、第50 ·51表)

斜面下位の急斜面部 8・9-R区に位置する。

北3 mに27号住居址 が近接する。東5 mに 28号住居址が、南東14 mに29号住居址が存在 し、南10mに32号・33 号住居址が重複して存 在する。

耕作による削平の為 床面及び東壁が僅かに 遺存するのみである。 掘り方及び柱穴からの 推定であるが、平面形は ほぼ楕円形を呈し、規 模は5×4m程と考え られる。主軸方位はN -33°-Wにとり、等高 線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層



A

第88図 31号住居址及び掘り方 [‰]

中まで達している。削平が著しい為、壁高は5cm、覆土も2層を残すのみである。

床面遺存部は堅緻な貼床である。

周溝・炉址・貯蔵穴は検出されなかったが、中央部やや北寄りから焼土溜りが検出されており 炉址の残欠とも考えられる。

ピットは4ヶ所検出された。全て掘り方底面で確認されたもので、柱穴である。床推定面からの深さはそれぞれ、37cm、44cm、54cm、47cmを測る。

掘り方は床下全面に及ぶ。中央部が浅く周辺が深く掘り込まれる様相を示すが、削平が著しく 断定はなしえない。底面はなだらかな起伏を有するものと思われる。床面からの深さは5~25cm である。掘り方の埋土は2層に分けられ上層が貼床である。 出土遺物は掘り方から鉄製品が6点出土した以外 は少なく、図示したものも僅かである。

第50表 31号住居址出土土器計測表

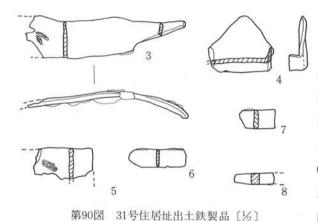
| 甕    |       | 壺   |      | その他不明 |      |
|------|-------|-----|------|-------|------|
| 40 片 | 140 g | 7 片 | 60 g | 4 片   | 50 g |



第89図 31号住居址出土土器〔¼・½〕

#### 第51表 31号住居址出土土器観察表

| 1 | 藍  | 現存率:胴部上半½。 調整:外面-胴部上半ナデ。内面-胴部上半ナデ。輪積み痕。<br>胎土:白色砂粒子を含む。密。焼成:良ぶあるがやや軟質。色調:赤褐色。                  |
|---|----|--|
| 2 | 高坏 | 現存率:口縁部~胴部場。 調整:外面-口唇部ナデ。口縁部ナデ。胴部ナデ。内面<br>-口縁部~胴部ナデ。全体的に磨滅が激しい。 胎土:白色粒子を含む。密。焼成:良。<br>色調:薄黄褐色。 |



鉄製品 鉄製品は6点出土している。

3 は刀子片、身部先端を欠き現長 9 cm、身幅1.8cm、茎幅 1 cm、棟厚0.2cmを測る。棟関は急角度に、刃関は緩やかに立ち上がる。4 は五角形を呈する不明鉄器。現寸 3 ×3.5cmを測り、厚さ0.2cmを有する。一端は0.8cm程切りこまれ、ほぼ直角に折り曲げられる。5 は板状鉄器端部。現寸 3 ×1.5cm、厚さ0.2cmを測り、木質部が遺着する。6 ・

7 は共に板状鉄器端部。6 は現長 3 cm、 $0.1\times0.9$  cmの方形断面を有し、端部は弧状を呈する。7 は現長1.7 cm、 $0.2\times1$  cmの方形断面を示す。8 は板状鉄器端部。現長 2 cm、 $0.4\times0.5$  cmの方形断面を示す。7 子類の茎尻部か。

6点全て掘り方よりの出土である。

(吉岡 弘樹)

### 32号住居址 (第91~93図、第52·53表)

斜面下位の急斜面部、9・10-S区に位置する。

本址は33号住居址掘り方検出中に確認されたもので、33号住居址と全く重複し、その下部に構築されていたものである。西半部を耕作の為に失ない、½程しか遺存しない。

掘り方からの推定では、平面形は楕円形を呈し、規模は $5.4 \times 4.4 \text{ m}$ を測る。主軸方位は $N-45^{\circ}$  -Wと、33号住居址と同一にとる。

掘り込みはローム層中に達する。上部に33号住居址が構築されるため、壁は10cm程遺存するのみである。覆土は1層で人為的な堆積を示し、33号住居址構築時の埋土であろう。

床面はやや軟弱な貼床である。

ピットは7ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴で深さはそれぞれ、40cm、46cm、55cm、51cmを測る。南東壁に接して位置する $P_5$ が貯蔵穴で、 $50 \times 55$ cmの規模で、平面隅丸方形を呈し、深さ28cmを測る。 $P_6$ は深さ32cmを有し、入口施設であろう。尚北西・北東両隅で壁を切っているピット及び本址 $P_2$ を切っているピットは33号住居址に所属する柱穴である。

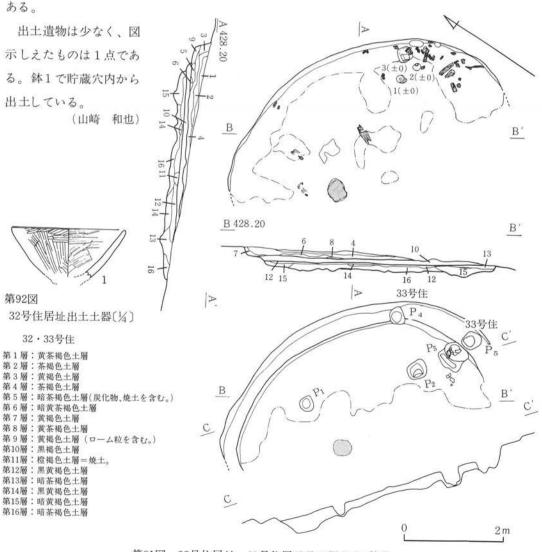
周溝は検出されなかった。

炉址は中央やや北寄りに位置する。削平が激しく焼土及び、炉址と考えられる被熱ロームの一部が検出されたのみである。

掘り方は床下全面に及ぶ。底面は全体的に凹凸が激しく、床面からは15~25cmの深さを有する。埋土は5層に分けられ、第12層が貼床面で

第52表 32号住居址出土土器計測表

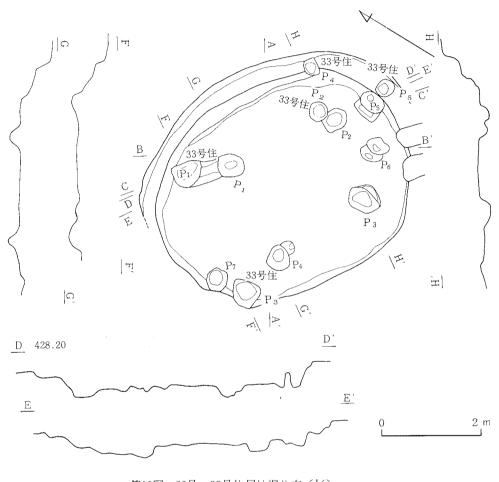
| 翌    | E     | Š    | 臣     | その  | 也不明  |
|------|-------|------|-------|-----|------|
| 26 片 | 370 g | 11 片 | 180 g | 5 片 | 10 g |



第91図 32号住居址、33号住居址及び掘り方〔‰〕

1 鉢

法量:口縁部径(12.04)cm。現存率:上半%。調整:外面-口縁部斜め方向のヘラミガキ。 胴部上半縦方向のヘラミガキ。内面-口縁部〜胴部上半ナデ。胎土:密。焼成:良。色 調:暗赤褐色。



第93図 32号・33号住居址掘り方〔‰〕

## **33号住居址** (第92~94図、図版12、第54·55表)

斜面下位の急斜面部、9・10-S区に位置する焼失住居である。32号住居址と重複し、その上部に構築される。扇形に展開する集落の南扇端部に位置し、北10mに31号住居址が、東10mに29号住居址が存在する。

耕作のため削平が激しく、東壁と床面の一部が遺存するのみである。柱穴及び、32号住居址平面形から推定すると、平面形は楕円形を呈し、規模は $6.2 \times 5.2$ m程を測るものと考えられる。主軸方位は $N-45^\circ-W$ にとり等高線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層中まで達し、壁高は東壁で35cmを測る。壁は直線的でやや開きぎみに立ち

あがる。覆土は9層に分けられ、下層(第7・8層)には焼土・炭化材が混入する。

床面は貼床だが軟弱で、かつ遺存が悪い。残存床面上には多量の焼土・炭化材が認められる。 ピットは5ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_3$ が柱穴で床面からの深さはそれぞれ、41cm、49cm、54cmを 測る。本址の柱穴は4本柱によって構成されるものと考えられるが、南西隅にあたるものは検出 されなかった。P4或いはP5が貯蔵穴とも考えられ、径40cmの不整円形を呈し、深さ37cmを測る。 炉址は中央部北寄りに位置していたと思われるが、削平のため焼土溜りが検出されたのみであ る。

掘り方は床下全面に及び、なめらかな起伏を有する。床面からの深さは8~15cmを測る。 出土遺物は少なく、図示しえたものも僅かである。1・2はPi周辺床面から、3はPi内から出 土している。

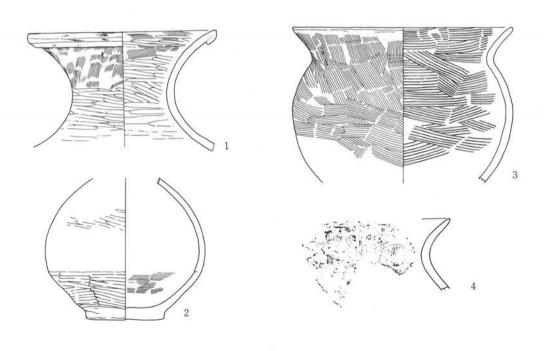
尚、本址掘り方確認時に、住居址中央に本址と相似形の落ち込みを検出した。当初、中央部が 掘り込まれるタイプの掘り方であるとも考えた。しかし5~10cm程掘り下げたところ、やや軟弱 な床面、及び遺物・ピット等を検出したため、別個の住居址と認定した。本址と、平面形・主軸 方位を同一にし、柱穴・貯蔵穴の配置もほぼ相

似形をとるものであり、20号・21号住居址の例 と同様、拡張住居址として理解しておきたい。

第54表 33号住居址出土土器計測表

| **  | 挺     | चं  | E    | その作 | 也不明  |
|-----|-------|-----|------|-----|------|
| 62片 | 380 g | 12片 | 90 g | 3片  | 20 g |

(山崎 和也)



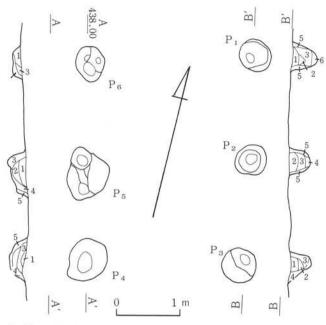
第94図 33号住居址出土土器 [¼・⅓]

第55表 33号住居址出土土器観察表

| 1 | 壺   | 法量:口縁部径18.86cm。頸部径10.36cm。現存率:口縁部~頸部完存。他は欠損。<br>調整:外面一折り返し口縁ナデ。口縁部~頸部上位縦方向の細いハケ。頸部下位横方向<br>のヘラミガキ。内面一口縁部横及び斜方向のハケ。頸部上半横方向のハケ。横方向のヘ<br>ラミガキ。頸部中位斜め方向のヘラミガキ。頸部下半横方向の太いヘラミガキ。胎土:<br>白色粒子をやや含む。密。焼成:良。色調:暗赤褐色。 |
|---|-----|--|
| 2 | 壺   | 法量:胴部径16.08cm。底部径7.90cm。現存率:口縁部~頸部を欠く。胴部以下は完存。<br>調整:外面-胴部上半やや斜方向のヘラミガキ。 胴部中位やや斜方向のヘラミガキ。<br>胴部下半横方向のヘラミガキ。底部簡単なナデ。内面-胴部上半~中頃簡単なナデ。胴<br>部下半横方向のハケ。底面ハケ。:密。焼成:良。色調:暗赤褐色。                                    |
| 3 | 台付甕 | 法量:口縁部径(21.89)cm。頸部径(18.25)cm。胴部径(22.04)cm。現存率:口縁部~胴部下半½。脚は欠損。調整:外面一口唇部ナデ。口縁部~頸部縦方向のハケ。胴部上半斜め方向のハケ。胴部中~下半横方向のハケ。内面一口縁部~頸部横方向のハケ。胴部上半横及び斜方向のハケ。胴部中~下半横及び斜方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:赤褐色。                            |
| 4 | 甕   | 現存率:口縁部~頸部½。調整:外面-口唇部ナデ。口縁部~頸部縦及び斜方向の<br>ハケ。内面-口縁部~頸部横方向のハケ。胎土:密。焼成:良。色調:淡茶褐色。   |

## 2 掘立柱建物遺構

## 1号掘立柱建物遺構 (第95・96図、図版13、第56・57表)



第1層:明茶褐色土層(粘性やや弱く

しまりは普通。ローム粒・黒 褐色粒子を少量含み、赤色ス

コリア、炭化物を微量含む。) 第2層:黒褐色土層(粘性無く、しま りはやや弱い。赤色スコリア

を微量含む。) 第3層:茶褐色土層(粘性普通、しま

B 3 層・余橋巴土層(柘任普通、しま りも普通、ローム粒を少量、 黒褐色粒子を微量含む。

第4層: 茶褐色土層(粘性普通、しまりも普通、黒褐色粒子を含み、

ローム粒を微量含む。) 第5層:暗黄褐色土層(粘性やや強く、

しまりは普通。ローム粒・ロームブロックを含む。)

第6層:暗灰褐色土層(粘性やや強く、 しまりはやや弱い。)

第95図 1号掘立柱建物遺構〔‰〕



第96図 1号掘立柱建物遺構出土土器 [1/3]

斜面中央部の10・11— K区に位置 し、集落のほぼ南東端にあたる。 北側7mに1・2号住居址が、西6 mに2・3号掘立柱建物遺構が連なって存在し、西5mに11・12号土壙が存在する。

主軸方位をN-11°-Wにとり等高線にほぼ平行する。規模は2間(約3.2m)×1間(約2.5m)の坪掘の建物である。柱穴間の距離は東列(P1~P3)が、約1.6m・約1.6m、西列(P6~P4)が約1.7m・約1.5m、北列(P1~P6)が約2.6m・南列(P3~P4)が約2.5mを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈する。覆土は6層に分けられ、P5の4・5層には炭化物が微量混入している。

遺物はP5覆土中から、弥生時代後期に属する土器片2点1・2が出土している。 (吉岡 弘樹)

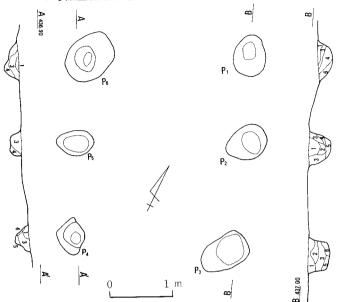
第56表 1号掘立柱建物遺構柱穴規模

| P <sub>1</sub> | 53×48 40 | P <sub>4</sub> | 55×46 | 15 |
|----------------|----------|----------------|-------|----|
| $P_2$          | 53×49 34 | P <sub>5</sub> | 84×62 | 29 |
| P <sub>3</sub> | 55×55 32 | P <sub>6</sub> | 74×60 | 25 |

第57表 1号掘立柱建物遺構、出土土器観察表

| 1 | 壺 | 現存率 口縁部破片 調整:外面一ハケのちナデ 折り返し部に指頭痕 口唇部粗い    |
|---|---|---|
| 1 |   | ハケ棒状貼り付け(4本1組)内面一無節細縄文、胎土 密。焼成 良。色調 淡赤褐色。 |
| 2 | 壺 | 現存率 底部破片 調整:内面粗いハケ 底部ナデ 外面ハケのちケズリ、 胎土     |
| 2 | 壺 | 密。焼成 良。色調 赤褐色。                            |

#### (第97回、図版13、第58表) 2号掘立柱建物遺構



第1層:暗茶褐色土層(粘性無く、 まりはやや強い。ローム粒子、

黒褐色粒子を少量含む。) 第2層:黒褐色土層(粘性普通、 りも普通。ローム粒を少量

含む。) 第3層:茶褐色土層(粘性普通。しま

りも普通。ローム粒子・黒褐 色粒子を少量含む。)

明黄褐色土層(粘性普通。しまりも普通。ローム粒を多量に、黒褐色粒子を少量含む。)

第5層:明灰褐色土層(粘性やや強く、 しまりはやや弱い。ローム粒子

しまりはやや強い。黒褐色粒子を多量に含む。)

2号掘立柱建物遺構〔‰〕 第97図

第58表 2号掘立柱建物遺構柱穴規模

| P <sub>1</sub> | 65×49 | 23 | P <sub>4</sub> | $59 \times 44$ | 22 |  |
|----------------|-------|----|----------------|----------------|----|--|
| P <sub>2</sub> | 65×52 | 33 | P 5            | 58×40          | 18 |  |
| P 3            | 76×53 | 33 | P <sub>6</sub> | 86×64          | 22 |  |

(約3.1m)×1間(約2.5m)の 坪掘の建物である。柱穴間の距離 は、東列 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>) が約1.4m・ 1.7m、西列 (P6~P4) が約1.4m ・約1.5m、北列 (P1~P6) が 約 2.5m. 南列 (P<sub>3</sub>~ P<sub>4</sub>)が約2.4m ・黒褐色粒子を微量含む。) 第6層:暗黄褐色土層:(粘性普通 を測る。柱穴の平面形は、不整円 形を呈し、西列側は斜面下部に位 置する為削平が進んでいる。 覆土は6層に分けられる。 遺物は出土していない。(吉岡 弘樹) 3号掘立柱建物遺構

(第98図 図版13、第59表)

斜面中央部の10-L区に位置し、

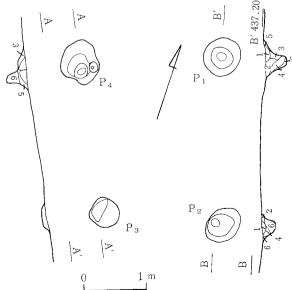
集落の南東端にあたる。北7mに 1・2号住居址が存在し、東6 m に1号掘立柱建物址が、北西2 m には4号住居址が近接する。南側 には本遺跡と主軸をほぼ同一に3

号掘立柱建物遺構が並ぶ。

主軸方位をN-19°-Wにとり等 高線にほぼ平行する。規模は2間

斜面中央部の10-L、11-L区に位置し、 集落のほぼ南東端にあたる。北東6mに1 号掘立柱建物遺構が、北西2mには4号住 居址が南西4mには5号住居址が存在す る。北には本遺構と主軸をほぼ同一にして 2号掘立柱建物遺構が並んでいる。

主軸方位をN-18°-Wにとり、等高線に



3号掘立柱建物遺構〔‰〕 第98図

第1層:暗茶褐色土層(粘性無く しまりはやや強い。黒褐

ボベロエー (THE C V M) く、しまりは普通。黒褐 色粒子・ローム粒を少量

明茶褐色土屬(粘性普通、 しまりも普通。黒褐色粒 子、ローム粒を少量含む。) 第4層:茶褐色土層(粘性やや弱

会す(.)

く、しまりは普通。ローム粒を少量、黒褐色粒子 を微量含む。)

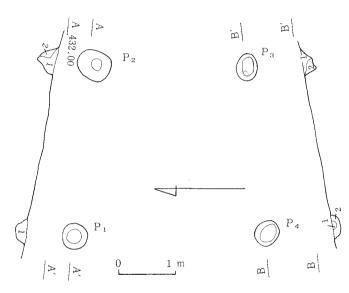
金城県古む。) 第2層:茶湖色土層(粘性やや弱 第5層:暗黄褐色土層(粘性やや 弱く、しまりは普通。黒 褐色粒子を多量に、ロー ム粒を少量含む。)

黑黄褐色土層(粘性普通 しまりも普通。黒褐色粒 子を少量、褐色土粒を微 量含む。)

ほぼ平行する。規模は 1 間(約2.6m)×1 間(約2.2m)の坪掘の建物である。 1 間×1 間の建物である為、主軸方位を $N-79^\circ$  -Eにとる可能性も考えたが、北に連なる 2 号掘立柱建物遺構との関係から、 $N-11^\circ$  -Wを主軸方位とした。柱穴間の距離は東列( $P_1 \sim P_2$ )が約2.6m、南列( $P_2 \sim P_3$ )が約1.9m、西列( $P_3 \sim P_4$ )が約2.3m、北列( $P_4 \sim P_1$ )が約2.2mを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈する。尚 $P_3$ は、位置・形状から本遺構に所属するものであるか否か疑問が残るものである。覆土は 6 層に分けられる。

遺物は出土していない。

(吉岡 弘樹)



第1層:黒褐色土層(粘性悪く、しまりは普通。ロームブロックを少量含む。) 第2層:黒褐色土層(粘性やや弱く、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。)

第99図 4号掘立柱建物遺構[‰]

第60表 4号掘立柱建物遺構柱穴規模

| P <sub>1</sub> | 42×40 | 18 | Рз  | 43×33 | 20 |
|----------------|-------|----|-----|-------|----|
| P 2            | 55×48 | 30 | P 4 | 42×36 | 13 |

第59表 3号掘立柱建物遺構柱穴規模

| Pι  | $60 \times 57 \ 32$ | Р3  | $47 \times 45 8$    |
|-----|---------------------|-----|---------------------|
| P 2 | $60 \times 45 23$   | P 4 | $70 \times 60 \ 26$ |

## 4号掘立柱建物遺構

(第99図、図版13、第60表)

斜面中央の緩斜面部、3-L・4-L区に位置する。西3mに6号住居址と近接し、南20mに7・8号住居址が存在する。

主軸方位を、N-1°-E、またはN-89°-Wにとる 1 間(約2.7 m)×1間(約2.7 m)の坪掘の建物である。柱穴間の距離は東列( $P_2 \sim P_3$ )が約2.35 m、西列( $P_4 \sim P_1$ が約3 m、南列( $P_3 \sim P_4$ )及び北列( $P_1 \sim P_2$ )が約2.7 mを測り、平面矩形を呈する。柱穴はほぼ楕円形を呈し、南列側は削平が進んでいる。

覆土は2層に分けられる。 遺物は出土していない。

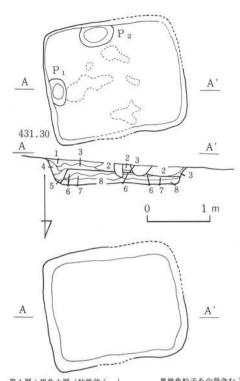
(吉岡 弘樹)

## 3 小竪穴遺構

## 1号小竪穴遺構 (第100図、図版13)

斜面中央、緩斜面部の3-N区に位置する。東1 mに9号住居址がほぼ軸を直交させて並ぶ。南12mには13号住居址が、南西15mには12号住居址が存在する。

長軸方位をN-81°-Eにとる。平面形は長方形を呈し、規模は2.1×1.8mを測る。掘り込み



はローム層まで達し壁高は30~8 cmを測り南西隅は削 平を受ける。壁は急角度で立ち上がる。覆土は5層に 分けられ自然堆積を示す。床面は堅緻な貼り床(6層) でほぼ平坦であるが西半部では遺存が悪く軟弱である。 ピットは2ヶ所検出され、P1は45×25cm、深さ21cm、  $P_2$ は50×30、深さ18cmを測り共に壁際に設けられる。 炉・柱穴・周溝等は検出されなかった。遺構中央部 から東半部にかけ、床面上から焼土が検出されたが、

掘方は床下全面に及び鍋底状に掘り込まれ、床面か らは10~20cmを測る。埋土は2層に分けられ、7層は貼 り床(6層)とほぼ同様である。

出土遺物は、僅かで図示しえたものはない。

堅穴全面に散っていた可能性が強い。

本址からは、確実な炉址は検出できなかったが、床

第1層:褪色土層(粘性強く、しまりは弱い。ロームブロック、県褐色粒子を含む。) 第2層:暗積褐色土層 粘柱性強く、しまりも強い。ロームブロックを多量に含む。) 第3層:明褐色土層(粘性強く、しまりも強い。ロームを しまりも強い。ロームを しまりも強い。ロームを 場場色粒子を量に含む。) 第4層:暗黄褐色土層 粘性強く 上まりは弱い、粒子は後

はまりは弱い。粒子は微細。ローム粒を含む。) 第5層:黄褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。

粒を含む。) 暗黄褐色土層(粘性強く、

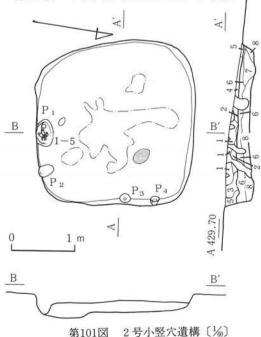
しまりも強い。ローム粒・ロームブロックを多量に 含み、黒褐色粒子を微量 含む。)

黒褐色粒子を少量含む。面の状態焼土の存在などから、何らかの居住空間と 機色土層(粘性やや弱く、しまりは強い。ロームブ レまりは強い。ロームフ ロック・黒褐色粒子を含して用いられた可能性が強い。また、軸方位を直交 む。) = 販床

せ。) = 55年 暗褐色土層 (粘性やや弱 く、しまりは強い。黒褐させて近接する9号住居址との関係も興味深い。 色粒子を多量に、ローム

(山崎 和也)

1号小竪穴遺構及び掘り方 (%) 第100図



#### 2号小竪穴遺構 (第101~104図

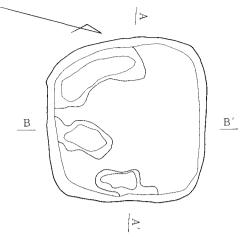
第61表、図版13)

斜面中央、緩斜面部の1-0区に位置し、 集落のほぼ北西端にあたる南東4mに11号住 居址が存在し、本址以北には、若干の土壙・ ピットが存在するにすぎない。

主軸方位をN-82°-E、あるいはN-8°-Wにとる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は 2.5×2.5mを測り、南西隅がやや入り込む。

や強く、しまりもやや 強い。黒褐色粒子・ロ

ーム粒を少量含む。) 第4層:明茶褐色土層(粘性や や強く、しまりもやや 強い。黒褐色粒子・ロ ム粒を少量含む。)



良好な焼土ブロックである。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は30~5 cmを測り 西壁は特に削平が著しい。壁は急角度に湾曲しつつ立 ち上がる。覆土は5層に分けられ、自然堆積を示すが、 畝あるいは植物根の撹乱が激しい。

床面は中央部がやや高く構築され、中央部に堅緻な部位が認められる。ピットは4ヶ所検出され全て壁際に認められる。 $P_1$ は貯蔵穴で $45 \times 35$ cm、深さは18cmを測り、南壁中央際に穿たれる。柱穴・周溝は認められなかった。

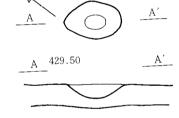
炉は中央部北西寄りに位置し、30×20cmの平面楕円 第102図 2号小竪穴遺構掘り方[編] 形を呈する。深さ8cmの皿状断面を有し、覆土は1層で

掘り方は深さ20~25cmで、ほぼ平坦であるが東半部壁沿いに3ヶ所土壙状に一段掘りこまれた 部位が認められる。埋土は3層に分けられ、6層は所謂貼床である。

遺物は1が貯蔵穴内から、2が南西隅から集中して出土しているが、図示した2点以外は全て小片である。 (山崎 和也)



第104図 2号小堅穴遺構出土土器〔¼〕



第103図 2号小堅穴遺構炉址〔‰〕

| 法量;口縁部径15.8cm 頸部径13.4cm 胴部径16.6cm 現存率;胴部~口縁% 調整:外面一唇部ナデ。口縁部ハケのちナデ、頸~胴部ハケ・内面一口縁~頸ハケのちナデ 胴部 粗いハケ。胎土 密 焼成 良 色調 暗褐色土。 | 法量;接合部径4.9cm 底部8.7cm 脚高4.6cm 現存率;脚ほぼ完 調整:外面一 接合部僅かにオサエ。脚部ハケ。内面一粗いハケ。胎土 密 焼成 良 色調 暗茶褐色土。

第61表 2号小竪穴遺構出土土器観察表

# 第2節 集石遺構と土壙

## 1 集石遺構

## 1号集石 (第106図・図版14)

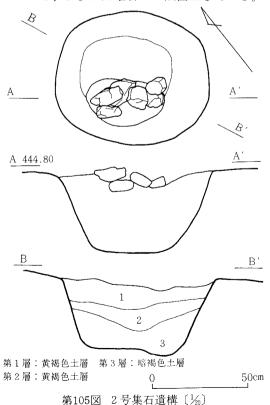
斜面上部の平坦面23-G区に位置する。東西約 $11\,\mathrm{m}$ 、南北約 $6\,\mathrm{m}$ の広い範囲に礫が分布する。 礫は全体で約77個を数え、 $5\sim15\,\mathrm{cm}$ 程の角礫で構成される。礫中には、火熱をうけたものもあった。礫の分布する範囲からは土壙  $I\cdot II\cdot III$ が検出されている。丘の頂上部に位置するため、土砂が流失しており、また後世に削平をうけており、遺構の遺存状態は不良であった。

土壙 I は平面楕円形を呈し、規模55×45cm、深さ13cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は 2 層に分かれる。礫 1 点が土壙西側上表部より出土している。

土壙 $\Pi$ は5~6基の土壙の切り合いと思われるが、発掘時に充分にその状態を把握できなかった。覆土中より礫が数点出土している。

土壙Ⅲは、平面ほぼ楕円形を呈し、規模52×40cm、深さ23cmを測る。覆土は1層。

遺物について。礫の分布する範囲から、縄文時代早期押型文土器片が数点、他に時期不詳の縄 文土器片、および黒耀石が3点出土している。



## 2号集石 (第105図、図版14)

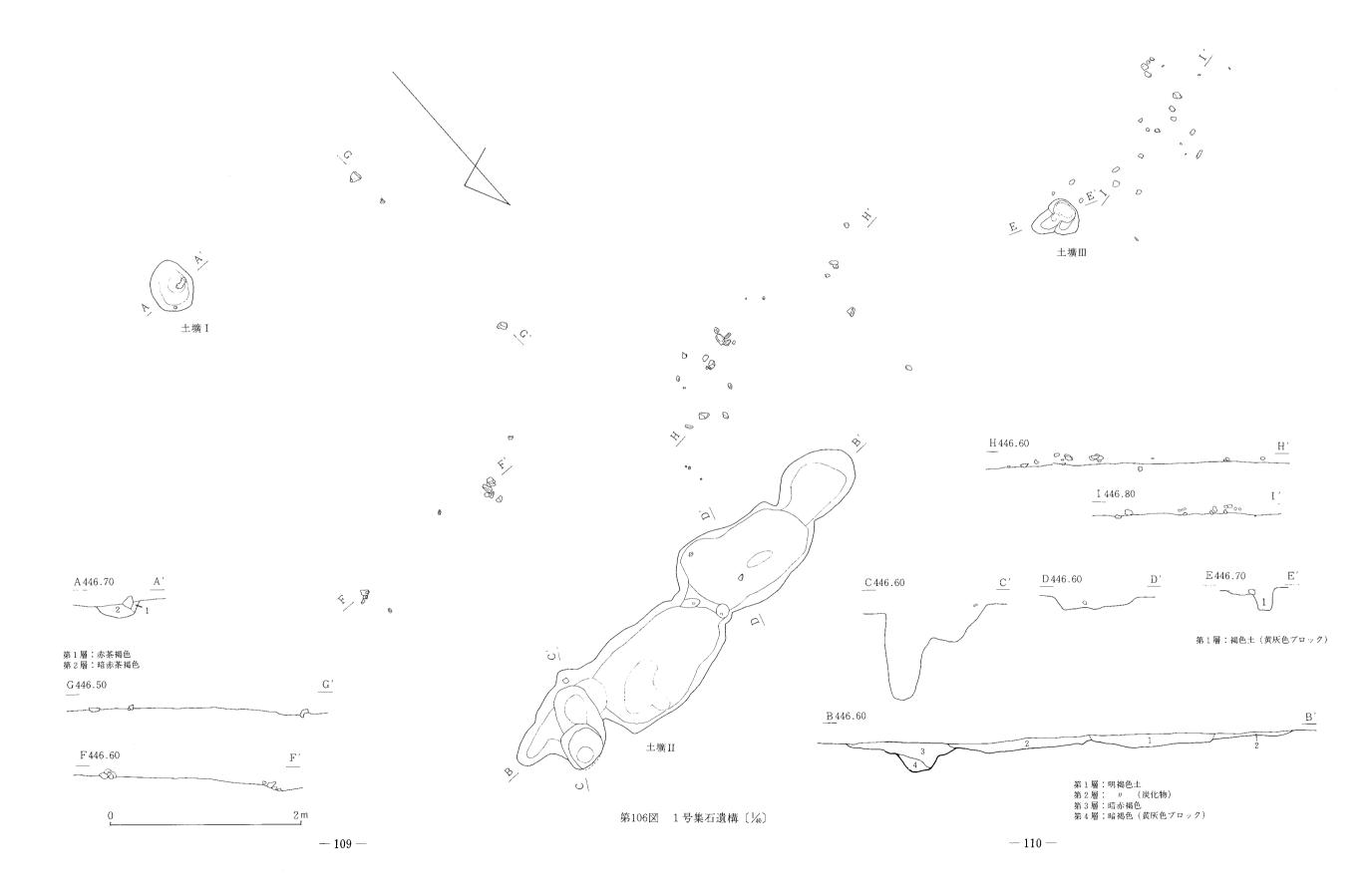
斜面上部の平坦面16-G区に位置する。集石 土壙である。礫は土壙の覆土上表部に集中す る。礫の数は6個でありすべて火熱をうけてい る。

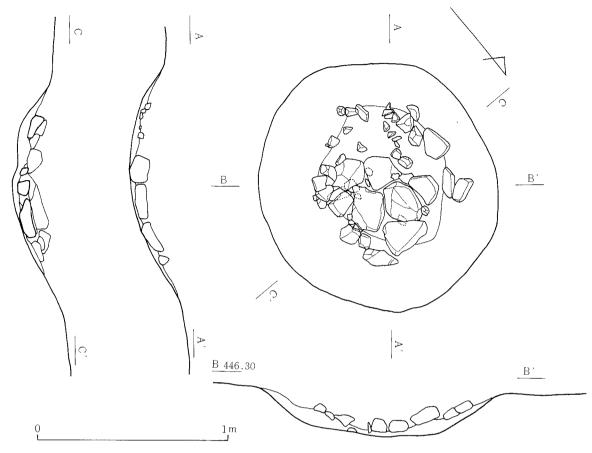
土壙の平面は円形を呈し、規模80×70cm、深さ43cmを測る。壙底はほぼ平坦であり、壁はゆるやかに外開したちあがる。覆土は3層に分かれる。

遺物は出土していない。

## 3号集石 (第107図、図版14)

斜面上部の平坦面20-H区に位置する。集石 土壙である。土壙の平面はほぼ円形を呈し、規 50cm 模127×126cm、深さ24cmを測る。断面形は皿状 を呈する。





第107図 3号集石遺構〔½〕

礫は46個を数える。人挙大の礫が多く、また大きなものは20cm強のものもみられる。礫は、土 壙底面近くに集中する。また、そのほとんどが火熱を受けている。

遺物は出土していない。

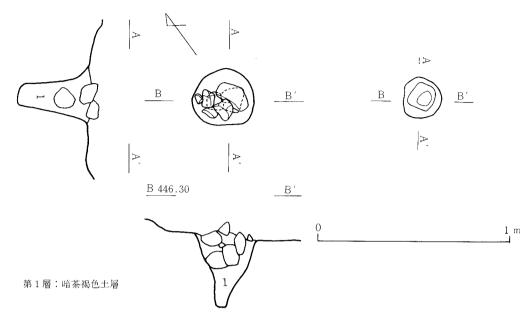
## 4号集石 (第108図、図版15)

斜面上部の平坦面17-H区に位置する。集石土壙である。礫は土壙上表部より覆土中位に存在し7個を数え、5~20cmの角礫で構成される。礫はすべて火熱をうけている。土壙はほぼ円形を呈し、断面はロート状である。規模は32×30cm、深さ37cmを測る。覆土は1層で、炭化物を少量混入する。

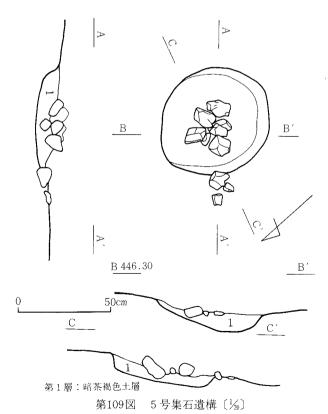
遺物は出土していない。

## 5号集石 (第109図、図版15)

斜面上部の平坦面21-H区に位置する。集石土壙である。礫は10個を数え、10~15cm程の角礫で構成される。すべての礫が火熱をうけている。また礫は、土壙底面より少し浮いて集中する。



第108図 4号集石遺構〔½〕



土壙は、平面円形を呈し、断面形は皿 状を呈する。規模62×54cm、深さ14cmを 測る。覆土は1層で炭化物を少量混入す る。

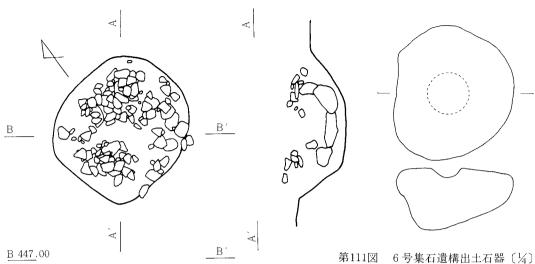
遺物は出土していない。

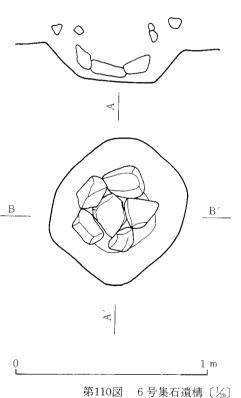
## 6号集石 (第110・111図、図版15)

斜面上部の平坦面18-J区に位置する。 集石土壙である。礫は127個を数える。 土壙上表部と下部との2ヶ所に礫の集中 がみられた。上表部の礫は、5~10cm程 の角礫である。下部は20cm前後の角礫6 個よりなり、組まれた状態であった。礫の 大半が火熱をうけている。

土壙は、平面ほぼ円形を呈し、断面は 鍋底状を呈する。規模は78×70cm、深さ 25cmを測る。壙底は平坦である。覆土は 1層で、炭化物を少量混入する。

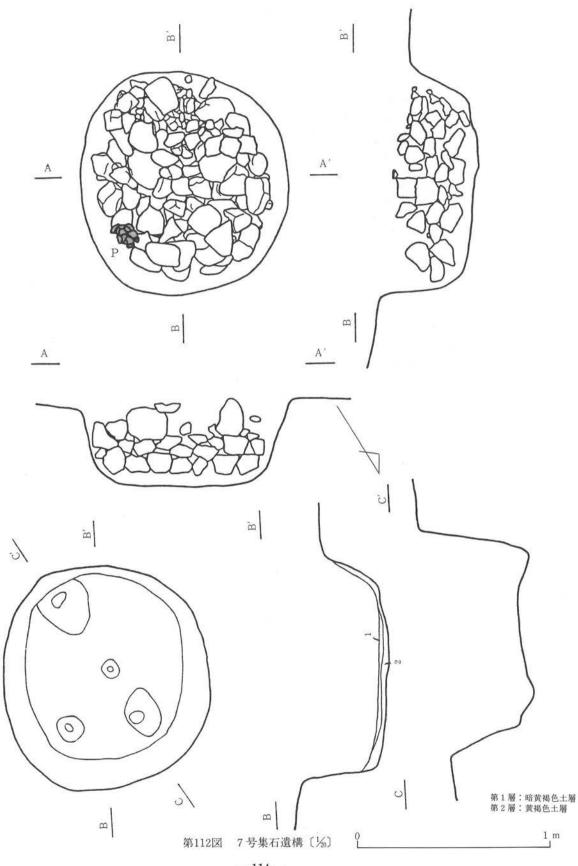
遺物は、凹み石が1点覆土中位より出 土している。



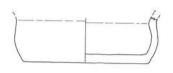


7号集石(第112、113図・図版16) 斜面上部の平坦面13-J区に 位置する。集石土壙である。礫 は土壙内にぎっしりつまった状 態で検出された。礫は約230個 を数え、5~20cm程の角礫で構 成される。そのほとんどが火熱 をうけていた。

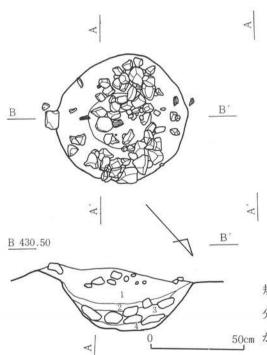
土壙は平面は円形、断面は鍋 底状を呈する。規模116×108cm、 深さ47cmを測る。壙底には浅い 凹みが4つある。礫下の覆土は ローム質土であり、2層に分か れる。ともに炭化物の混入がみ られる。また、第一層では焼土 も観察されている。

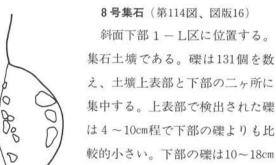


遺物は、土壙の北東部より、縄文土器の底部(中期後半以降のものと推定されるが詳細な帰属時期は不明)を出土している。



第113図 7号集石遺構出土土器[公]





土壙は、平面は円形、断面はスリ鉢状を呈する。 規模は、70×67cm、深さ28cmを測る。覆土は4層に 分かれ、各層とも炭化物が混入している。特に上層 50cm からは炭化材片も検出されている。

ている。

の角礫が19個使用されており、壙 底より4cm程浮いて組まれる形で あった。礫はほとんどが火熱をうけ

遺物は出土していない。

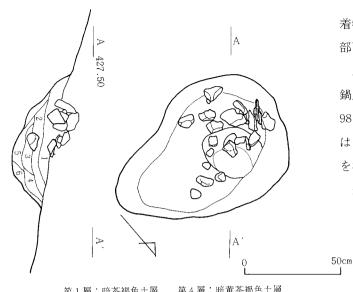


## 9号集石 (第115図、図版17)

斜面下部12-S区に位置する。集石土壙である。 礫は22個数え7~20cm程の大きさである。すべて の礫が火熱をうけており、うち6個にはスス状の付

第1層: 黒色土層 第3層: 暗茶褐色土層 第2層: 黒色土層 第4層: 黄褐色土層

第114図 8号集石遺構 [½]



着物が認められた。礫は覆土上表 部西壁よりに集中する。

土壙は、平面は楕円形、断面は 鍋底に近い形状を呈する。規模は、 98×70cm、深さ30cmを測る。 覆土 は6層に分かれ、中位から炭化材 を検出した。

遺物は出土していない。

第1層:暗茶褐色土層 第4層:暗黄茶褐色土層 第2層:暗黄茶褐色土層 第5層:黄褐色土層 第3層:暗茶褐色土層 第6層:暗黄褐色土層

第115図 9号集石遺構〔‰〕

## 集石遺構・まとめ

今回の調査で発見された集石遺構は以上の9基である。9基の遺構のうち8基がいわゆる集石 土壙であった。これらの集石遺構は、礫と土壙との関係から、以下のごとき類別が可能であった。 すなわち、

- I 類 土壙内覆土の一部に礫が集中して存在するもの。礫のありようからさらに  $a \sim c$  種に細分可能である。
  - a種 礫が覆土上表部に集中するもの……2・9号集石遺構
  - b種 礫が覆土上表部から中位に及ぶもの……4号集石遺構
  - c種 礫が覆土下部に集中するもの……5号集石遺構
- Ⅱ類 土壙内全体に礫が密につまっているもの……7号集石遺構
- Ⅲ類 土壙内覆土上表部と底面との二ヶ所に礫が集中し、底面の礫が組まれているもの……3・ 6・8号集石遺構
- Ⅳ類 磔が広い範囲に分布し、近接して数基の土壙を伴うもの……1号集石遺構 以上である。
  - 集石土壙各類について、さらに礫と土壙との時間的関係をみていくと
  - I a: 本類では、土壙内覆土が自然堆積をなす。土壙の時期と、上表部の集石の時期とは時間 差を有する。
  - Ib: 本類の土壙の覆土は一層であり、また礫は覆土中位にまで及ぶ。土壙の埋没と集石の時間は近接すると考えられる。

- I c: 本類では土壙の壙底近くに礫が集中する。土壙の掘り込みと集石の時間は近接すると考えられる。
- II類 本類は土壙内に密に礫がつまっており、土壙と集石とは同時と考えられる。
- Ⅳ類 本類に類別した1号集石遺構については、礫と土壙との関係は不明である。となる。ここから、礫と土壙との関係は、
  - ① 同時または近接するもの……Ⅰb類、Ⅰc類、Ⅱ類、Ⅲ類
  - ② 時間差を有するもの…… I a 類
  - ③ 不明……Ⅳ類

とすることができる。

礫と土壙の時間差を考えることは、相互の有機的関連を述べることになる。したがって今回の調査では、礫と土壙とが有機的連関を持つもの(①のグループ)、不明瞭のもの(②とした I a 類)とが、本遺跡でみられたこととなる。

このうち、②(I a 類)については、土壙埋没過程に礫が廃棄された可能性を指摘することができよう。一方、①のグループは、それぞれ性格を異にしながら、集石土壙として何らかの機能を有したと考えられる。

さて、従来から集石遺構については、食物調理施設、埋葬・祭祀施設、土器焼成施設、礫廃棄の場などの機能が想定され、論議されてきた。しかしながら今回の調査では、集石の機能を具体的に示す資料は発見されなかった。 集石の機能に触れた論考には、近年のものでは、(上田、1983)、(杉山、1981)などがある。ここではそれらをもとに本遺跡発見の集石の機能を整理しておく。

上田氏によれば、"掘り込みの底部に石が配されているもの" (本遺跡例ではⅢ類)を、「石蒸料理の行われる地炉に非常に類似している」として、調理施設の可能性を指摘している(上田、1983)。

また、"土壙内に礫が密につまっているもの"(本遺跡例ではII類)についても、上田氏は、野外炉としての機能を想定している。一方、杉山氏も、この種の集石(東田原1号集石、愛名島山1号集石などを例示)については、「焼石炉」としてとらえている(杉山、1981)。

いずれにせよ、本遺跡のⅡ・Ⅲ類は、何らかの「火を介在する機能」を有する遺構とすることができよう。これらⅡ・Ⅲ類の集石の礫は火熱をうけていた。同様に火熱をうけた礫が壙底に集中するⅠ c 類の集石遺構についても、やはり、「火を介在する機能」を有する遺構とすることができよう。

次に、覆土上表部~中位にかけて礫のみられる I b 類について触れる。この種の土壙を杉山氏は、「掘り込みは掘られた直後に埋め戻され、その埋め戻した土の上に集石が行われた」と理解し、野外炉とは別の機能を考えようとしている。上田氏も、同様の観点から、「埋納施設、あるいは埋葬施設としての機能を有していた可能性が強い」と考えている。本遺跡 I b 類も、野外炉

と想定したI c・II・III類とは形態を異にしており、野外炉以外の機能を想定せざるを得ない。とはいえ、埋納・埋葬等の行為を積極的に裏づける資料に欠けることも、また、事実である。

次に各集石の配置についてみていく。丘頂部の平坦面、やや東に寄った区域には、IV類とした 1号集石遺構が位置する。この遺構は、広い範囲に礫がみられること、近隣のグリッドより石棒 が発見されていることなどが注目される。1号集石遺構および石棒の占地する空間が、何らかの 目的で使われたことは疑いない。しかしながら、遺構の性格は不明である。また、同集石と石棒 との時間的関係、有機的連関についても明らかにしえなかった。

1号集石遺構以外は、西向きの斜面上に点在する。2号~7号集石遺構が斜面上部に、8号、9号集石遺構が、斜面下部に位置する。各遺構の分布からは、特定の傾向は見出せなかった。

しかし、六科丘遺跡の中における集石遺構のありかたは、別な視点から興味のもたれるものである。すなわち、今回調査した9基の集石遺構は、詳細な時期比定ではなかったものの、おそらく縄文時代に帰属するものと考えられる。

今回の調査は、六科丘全域に及んだものである。調査の結果では、六科丘では縄文時代の居住遺構は皆無であった。また、一方で周辺地域の表面採集からは、丘の周縁部には集落が営まれた可能性を示唆する資料が収集されている。

こうしたことから、六科丘遺跡は縄文時代に限って言えば、生活空間と離れた性格をもつ遺跡 であり、かつ、近隣に集落の存在が想定される遺跡であると言うことができよう。

生活空間から離れて集石遺構が占地する例としては、本町田遺跡群D地点、柏ヶ谷遺跡などがあげられる。

本町田遺跡群 D 地点の場合は、本遺跡 I b 類に似て、野外炉以外の機能を持つ遺構が集中する。 一方、柏ヶ谷遺跡の場合は、集石は多種にわたり、本遺跡例に近いものである。

非日常空間に占地した集石は、埋納・埋葬施設と想定されるもののみがみられる本町田遺跡の例と、野外炉を合わせもつ柏ヶ谷遺跡の例とに大別されよう。これは、遺跡が、近隣に集落をひかえた地にあるか否かによるところから導かれた結果であるかもしれない。

大塚、北川両氏は、柏ヶ谷遺跡の調査を分析し、同遺跡の集石遺構について、「周辺に営なまれた集落の共同の調理施設」、「狩猟の場の露営地」を想定している〔大塚、北川1982〕。六科丘遺跡の事例を、ただちに柏ヶ谷遺跡例に短絡させることはさけるべきであろうが、しかし、きわめて示唆に富むものと言えよう。

ただ、集石遺構の分析を通じ、上田氏は、前出の論稿の中で野外炉であれ、埋納施設であれ、各遺構の性格は非日常性を帯びており、祭祀的性格を有するものとしてとらえている。この点については注意しておく必要があろう。氏に従えば、たとえ、集落の共同の調理施設であれ、露営地であれ、そこにつくられた集石は、やはり単なる調理機能を越えた性格――祭祀的性格――を有していたと考えられるのである。

各集石出土遺物についてふれる。本遺跡で発見された各集石遺構のうち、1号集石遺構周辺よ

り、縄文時代早期押型文土器が数点検出されている。発見された土器と集石遺構との関係は不明 である。しかし、同遺構内および周辺からは他時期の土器は発見されていない。また、7号集石 遺構からは、縄文時代中期後半と推定される土器底部片が出土している。他の遺構からは、時期 比定しうる遺物は出土していない。以上のことから、本遺跡の集石遺構については、厳密な時期 比定は不可能であり、すでに述べたように、ひろく縄文時代に帰属するものと考えるにとどめた 11

なお、Ⅲ類に分類した底部に石を配する遺構は、県内では、豆塚遺跡1号集石に例を求めるこ とができる。報告によれば、豆塚1号集石は、前期に帰属する可能性をうかがわせるものの、な おその時期は不明とのことである(長沢他・1984)。 (桑折 礼子・近藤 英夫)

## 2 土 塘

## 1号土壙 (第116図)

斜面上部、21-E区に位置する。平面形は壙口部 ・壙底ともに楕円形を呈する。規模は壙口部101× 63cm、壙底38×22cm、深さ50cmを測る。壙底はほぼ 平坦で、壁は段部をなし急傾斜でたちあがる。長軸 方向は N-23°-Wをとる。

覆土は4層に分かれ、上位では炭化物が微量検出 され、中位にローム質土が堆積し、自然石が3個検 出された。

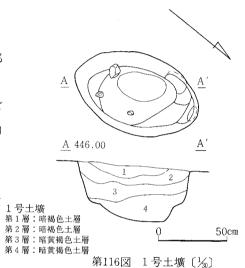
遺物は出土していない。

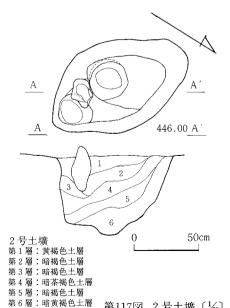
## 2号土壙(第117図)

斜面上部、21-E区に位置する。平面形は壙口部が楕 円形を呈し、壙底は楕円形を呈するが2個のピットが掘 り込まれわずかに平坦面を残すのみとなっている。規模 は壙口部118×72cm、壙底90×49cm、深さ平坦面まで60 cm を測る。壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向は $N-74^\circ$ -Wをとる。壙底のピットは東壁下では(25×25cm、深 き 7 cm) と浅く、西壁下では (35×30cm、深さ40cm) と 深く南側で若干オーバーハングする。

覆土は6層に分かれ、上位で炭化物が微量検出された。 覆土中位から上位にかけて自然石が1個樹立状態で出土 したが、人為的なものかどうか断定はできない。

遺物は出土していない。





第117図 2号土壙 [‰]

## 3号土壙 (第118図)

斜面上部、22-E・F区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに不整楕円形を呈する。規模は壙口部 $194\times100$ cm、壙底 $150\times85$ cm、深さ50cmを測る。壙底は平坦で、壁は南北は急傾斜でたちあがり、東西はほぼ垂直にたちあがる。長軸方向は $N-25^\circ-E$ をとる。

覆土は5層に分かれ、上位で炭化物が微量検出され、壙底にはローム質土が堆積していた。 遺物は出土していない。

## 4号土壙 (第119図)

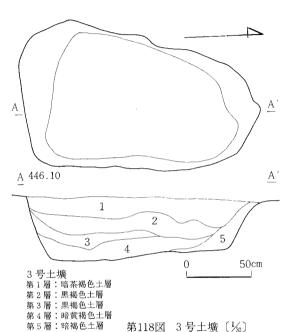
斜面上部、21-E区に位置する。平面形は 坊口部がやや不整な楕円形、墳底は楕円形を 呈する。規模は墳口部104×74cm、墳底20× 7 cm、深さ67cmを測る。墳底は中央が凹み、 壁は南側では緩傾斜でたちあがり小テラスを 有したのちほぼ垂直にたちあがり、北側は急 傾斜でたちあがり緩傾斜を呈したのち中位か らやや外反する。西側では中位で2ヶ所オー バーハングする。長軸方位はN-29°-Eをと る。

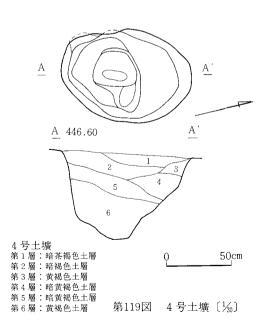
覆土は6層に分かれる。覆土上位から炭化物が微量検出され、中位から壙底にかけてローム質土が厚く堆積していた。

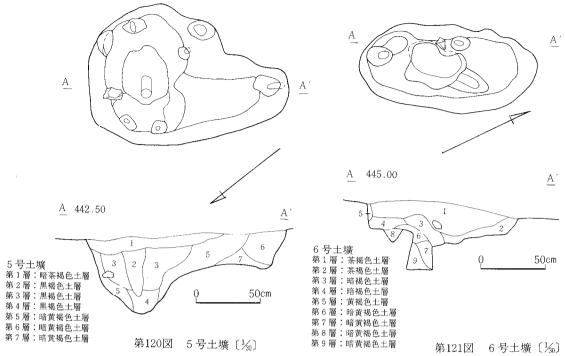
遺物は出土していない。

## 5号土壙(第120図、図版19)

斜面上部、16・17-C・D区に位置する。 平面形は西側に大きく張り出すが、断面観察より別の小穴との切り合いと考えられ壙口部は不整円形を呈するものと思われる。壙底は不整楕円形を呈する。規模は壙口部(130)×112cm、壙底47×37cm、深さ75cmを測る。壙底は凹凸が激しく、壁は小テラスを有したのちほば垂直にたちあがる。壁の中位に接して、深さ10cm程の不整形の小ピットが4個存在した。







覆土は4層に分かれ、中位より自然石が2個検出された。

遺物は出土していない。

## 6号土壙 (第121図、図版19)

斜面上部、21-D区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともにやや不整な楕円形を呈する。規模は壙口部 $140\times67$ cm、壙底 $118\times44$ cm、深さ35cmを測る。壙底は凹凸が激しく、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向は $N-41^\circ-E$ をとる。壙底には中央に1個、北壁と西壁下に1個ずつ計3個のピットを有する。中央ピット( $40\times25$ cm、深さ28cm)は不整形を呈し、北側で若干オーバーハングする。北壁下ピット( $15\times10$ cm、深さ10cm)と西壁下ピット( $20\times15$ cm、深さ10cm)は両者とも円形を呈する。

覆土は9層に分かれ、中央ピット内とピット上にローム質土が堆積していた。中位からは自然 石が1個検出された。

遺物は出土していない。

## 7号土壙 (第122図)

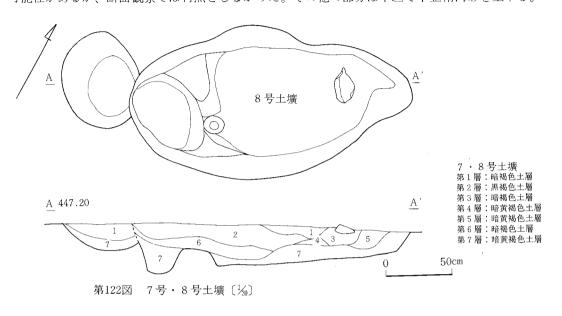
斜面上部、17-G区に位置する。東側を8号土壙に切られる。平面形は壙口部、壙底ともにほぼ円形を呈する。規模は壙口部77×62cm、壙底48×(35)cm、深さ20cmを測る。壙底は平坦で、壁はゆるやかにたちあがる。

覆土は2層に分かれる。

遺物は出土していない。

## 8号土壙 (第122図)

斜面上部、17-G区に位置する。西側で7号土壙を切っている。平面形は壙口部が不整楕円形を呈する。壙底は7号と切り合う一画でさらに一段低く掘り込まれており、別の土壙との重複の可能性があるが、断面観察では判然としなかった。その他の部分は平坦で不整楕円形を呈する。



規模は壙口部 $222 \times 122$ cm、壙底 $187 \times 87$ cm、深さは平 坦面までで30cmを測る。壁は全体に急傾斜でたちあ がる。長軸方向は $N-50^\circ-E$ をとる。

覆土は7層に分かれ、壁際から擴底にかけてローム質土が堆積していた。上位で自然石が1個検出された。

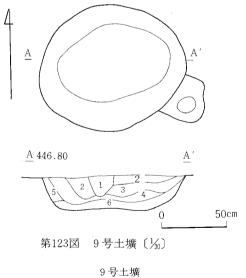
遺物は出土していない。

## 9号土壙 (第123図)

斜面上部、17-G区に位置する。東側で小ピットを切る。平面形は壙口部・壙底ともに楕円形を呈する。規模は壙口部115×92cm、壙底85×58cm、深さ27cmを測る。壙底は中央がわずかに高く、壁は緩傾斜でたちあがる。長軸方向はN-72°-Wをとる。

**覆土は6層に分かれ、壁際から壙底にかけてロー** ム質土が堆積していた。

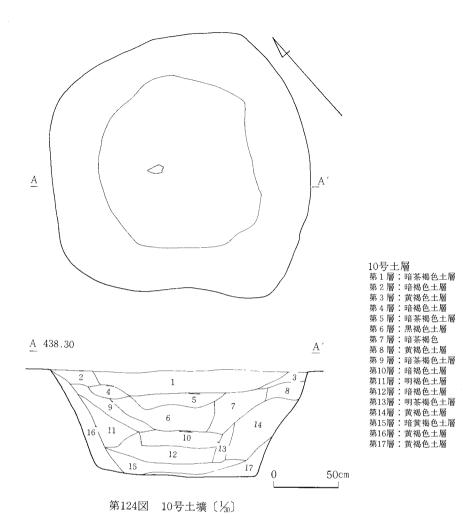
遺物は出土していない。



第1層:黒褐色土層

第2層:暗褐色土層 第3層:暗褐色土層

第4層:暗茶褐色土屬 第5層:暗黄褐色土層 第6層:暗黄褐色土層



## 10号土壙 (第124図、図版20)

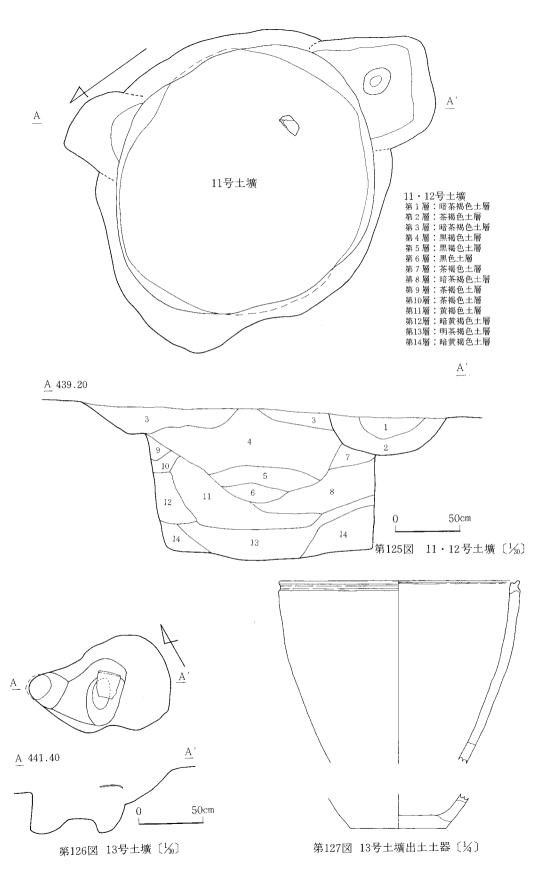
斜面中部、 $9\cdot 10-J$  区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともにやや不整な円形を呈する。 規模は壙口部 $223\times 210$ cm、壙底 $140\times 120$ cm、深さ85cmを測る。壙底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがり、中位からさらに外反する。

覆土は17層に分かれ、壁際から壙底にかけてローム質土が厚く堆積していた。壙底直上より自然石が1個検出された。

遺物は出土していない。

## 11号土壙 (第125図)

斜面中部、11-J・K区に位置する。南側を12号土壙に切られている。また東側の1部に張り出しを持ち別の土壙との重複の可能性も考えられるが断面観察では判然としなかった。平面形は壙口部・壙底ともにほぼ円形を呈する。規模は壙口部255×224cm、壙底208×188cm、深さ130cmを測る。壙底は平坦で、壁はほぼ垂直にたちあがる。



覆土は12層に分かれ、中位から壙底にかけてローム質土が厚く堆積していた。壙底直上より自然石が1個検出された。

遺物は出土していない。

## 12号土壙 (第125図)

斜面中部、11-J・K区に位置する。北側で11号土壙を切って構築されていることが断面観察より確認された。平面形は壙口部・壙底ともに隅丸方形に近い形を呈すると思われる。規模は壙口部(100)×90cm、壙底70×70cm、深さ30cmを測る。壙底はほぼ平坦で壁は急傾斜でたちあがる。壙底中部に楕円形のピット(25×19cm、深さ20cm)を有する。

覆土は2層に分かれる。

遺物は出土していない。

## 13号土壙 (第126・127図)

斜面上部、 $17-L \cdot M$ 区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに不整楕円形を呈するが、壙底は 2 個のピットに掘り込まれわずかに平坦面を残すのみとなっている。規模は壙口部 $110 \times 68$  cm、壙底 $73 \times 32$ cm、深さ平坦面まで30cmを測る。壁は東側では緩傾斜でたちあがるが、その他は 急傾斜を呈する。長軸方向は $N-73^\circ-W$ をとる。東壁下ピット( $40 \times 25$ cm、深さ10cm)は楕円形

を呈し、西壁下ピット (28×28cm、深さ10cm) は 円形を呈する。

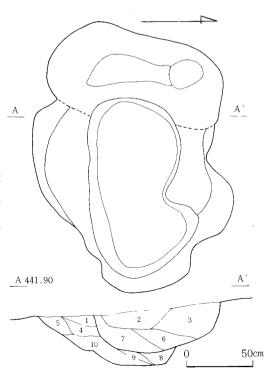
覆土上位より縄文時代後期後葉の無文土器口縁 片が出土した。

#### 14号土壙 (第128図)

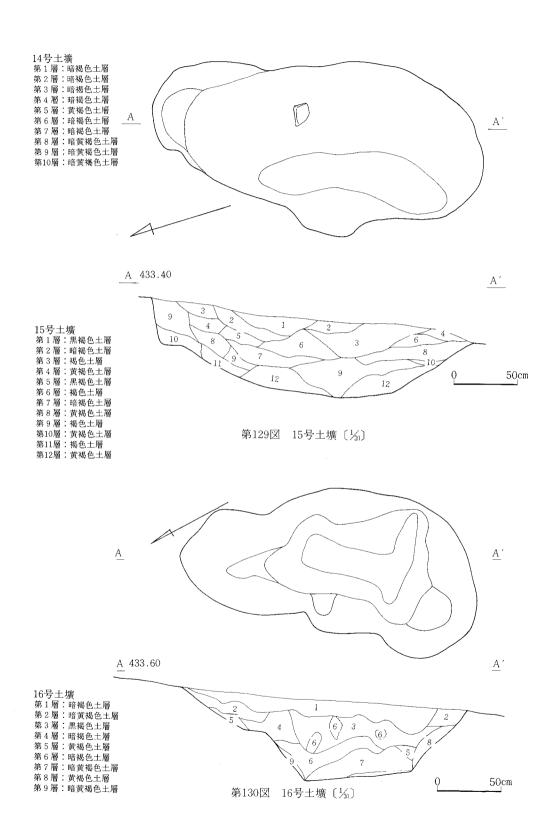
斜面中部、17-L区に位置する。5号落ち込みを切って構築されていることが断面観察より確認された。平面形は壙口部・壙底ともにやや不整な楕円形を呈するものと思われる。規模は壙口部115×(77)cm、壙底90×20cm、深さ40cmを測る。壙底は北壁下で若干低くなる他ほぼ平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-5°-Eをとる。

覆土は4層に分かれ上位で炭化物が少量検出され 塘底にはローム質が堆積していた。

遺物は出土していない。



第128図 14号土壙及び5号不整形落ち込み〔1/30〕



## 15号土壙 (第129図、図版20)

斜面中部、8-0区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに不整楕円形を呈する。規模は壙口部263×140cm、壙底145×32cm、深さ68cmを測る。壙底は平坦で、壁は南側の1部でほぼ垂直にたちあがり、北壁ではおおむね緩傾斜を呈する。長軸方向はN-33°-Eをとる。

覆土は12層に分かれる。上位から炭化物が少量検出され、壁際及び壙底付近にローム質土が堆積していた。中位から自然石が1個検出された。

遺物は出土していない。

## 16号土壙 (第130図)

斜面中部、10-0区に位置する。平面形は壙口部が東側で張り出す不整楕円形、壙底は不整形を呈する。東側の張り出しは別の土壙との重複、あるいは壁の崩れの可能性があるが、断面観察では判然としなかった。規模は壙口部235×115cm、壙底84×20cm、深さ70cmを測る。壙底は平坦で、壁は起伏が激しく、北壁と西壁の中位に1部小テラスを有し外開してたちあがる。長軸方向はN-56°-Eをとる。

覆土は9層に分かれ、壁際にローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

#### 17号土壙(第131図)

斜面中部、7・8-W区に位置する。平面形は 墳口部・ 壙底ともに 楕円形を呈する。 規模は 墳口部180×71cm、 壙底77×29cm、 深さ68cmを 測る。 壙底は平坦で、壁は一部急傾斜でたちあがるがその他は緩傾斜でたちあがる。 長軸方向 は N-43°-Eをとる。

覆土は8層に分かれ、東壁際及び壙底にはロ

ーム質土が厚く堆積していた。 遺物は出土していない。 17号土 擴 第 1 層:暗茶褐色土層 第 2 層:暗褐色土層 第 3 層:暗茶褐色土層

第3層:暗茶褐色土層 第7層:暗黄褐色土層 第4層:暗茶褐色土層 第8層:黄褐色土層

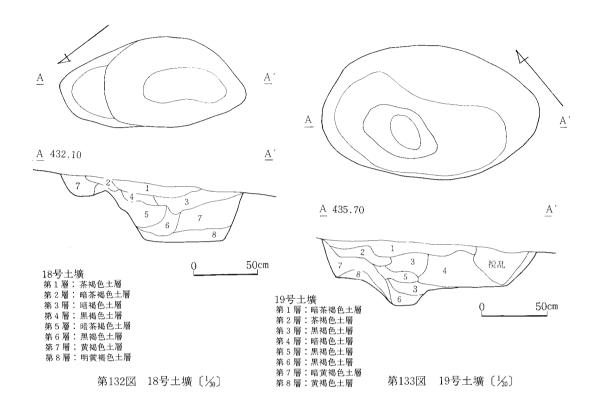
第131図 17号土壙〔‰〕

#### **18号土壙**(第132図、図版20)

斜面中部、8-P区に位置する。平面形は壙口部が北側に張り出しを持つ楕円形、壙底はやや不整な楕円形を呈する。北側の張り出しは、別の土壙との重複あるいは壁の崩れの可能性がある。規模は壙口部112×72cm、壙底65×25cm、深さ55cmを測る。壙底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-43°-Eをとる。

覆土は9層に分かれ壙底にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



### 19号土壙 (第133図)

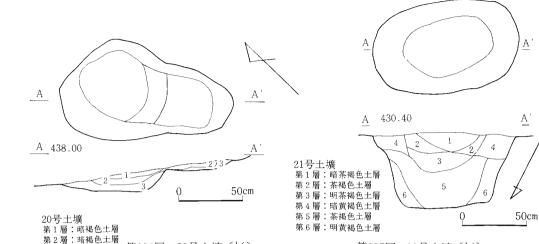
斜面中部、10-N区に位置する。平面形は壙口部が楕円形、壙底は不整楕円形を呈する。規模は壙口部 $168\times104$ em、壙底 $135\times60$ em、深さ40emを測る。壙底は平坦で、壁はおおむね急傾斜でたちあがる。長軸方向は $N-42^\circ-E$ をとる。壙底中央に楕円形のピット( $50\times38$ em、深さ18em)を有する。

覆土は8層に分かれ、東壁際にはローム質土が堆積していた。 遺物は出土していない。

### 20号土壙 (第134図)

斜面中部、15-0区に位置する。平面形は壙口部が不整楕円形で、壙底は円形を呈する。規模は壙口部182×80cm、壙底72×68cm、深さ17cmを測る。壙底は平坦で、壁は西側では緩傾斜でたちあがるが東側ではほとんどたちあがりが確認できない。本来、2基の土壙の可能性があるが、発掘時には充分把握できなかった。

覆土は3層に分かれ、上位で炭化物が少量検出された。



覆土中より縄文土器・胴部の無文小片2片が出土し た。小片の為時期等は明確にできなかった。

第3層: 茶褐色土層 第134図 20号土壙 [‰]

## 21号土壙 (第135図)

斜面下部、1-M区に位置する。平面形は壙口部・壙 底ともに楕円形を呈する。規模は壙口部114×72cm、壙 底70×43cm、深さ60cmを測る。 壙底は平坦で、壁は急傾 斜でたちあがり中位より若干外開する。長軸方向はN-53°-Eをとる。

覆土は6層に分かれ、壁際にはローム質土が堆積して いた。

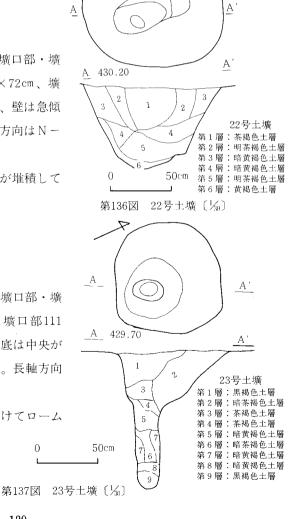
遺物は出土していない。

## 22号土壙(第136図)

斜面下部、1-M区に位置する。平面形は壙口部・壙 底ともにやや不整な楕円形を呈する。規模は壙口部111 ×86cm、 ヶ底42×23cm、深さ71cmを測る。 ヶ底は中央が 凹む。壁はやや外反して急傾斜でたちあがる。長軸方向  $4 \text{ N} - 6 \text{ }^{\circ} - \text{W} + \text{W} = 2 \text{ }^{\circ}$ 

覆土は6層に分かれ、南壁際から壙底にかけてローム 質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



第135図 21号土壙 [‰]

Α΄

<u>A</u> '

## 23号土壙 (第137図)

斜面下部、0-N区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに円形を呈する。規模は壙口部(92) ×87cm、壙底(87)×48cm、深さ48cmを測る。壙底はほぼ平坦で壁は急傾斜でたちあがる。壙底中 央に円形のピット(36×30cm、深さ68cm)を有する。

**覆土は9層に分けられる。** 壙底のピット内にはローム土が堆積していた。 遺物は出土していない。

### 24号土壙 (第138図)

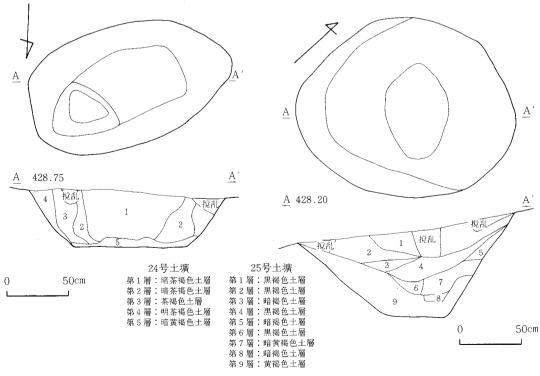
斜面下部、0-P区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともにやや不整な楕円形を呈する。規模は壙口部 $163\times96$ cm、壙底 $115\times54$ cm、深さ52cmを測る。壙底はおおむね平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-63°-Eをとる。

覆土は5層に分かれ、東壁側で炭化物が少量検出されている。擴底にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

## 25号土壙 (第139図)

斜面下部、7-R区に位置する。平面形は壙口部がやや不整な円形、壙底は楕円形を呈する。



第138図 24号土壙〔‰〕

第139図 25号土壙 [‰]

規模は擴口部 $173 \times 140$ cm、擴底 $75 \times 50$ cm、深さ84cmを測る。擴底は平坦で、壁は緩傾斜でたちあがる。

覆土は9層に分かれ、壁際から壙底にかけてローム質土が厚く堆積していた。 遺物は出土していない。

## 26号土壙 (第140図、図版21)

斜面下部、9-U区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに不整楕円形を呈する。規模は壙口部115×88cm、壙底38×30cm、深さ18cmを測る。壙底はほぼ平坦でたちあがりゆるやかに移行し、壁は緩傾斜を呈する。長軸方向はN-82°-Wをとる。

**覆土は4層に分かれ、壁際から壙底にかけてローム質** 土が堆積していた。

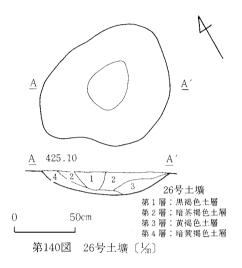
遺物は出土していない。

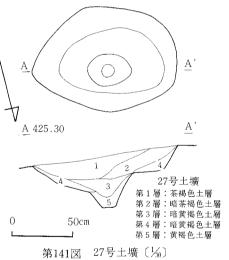
## 27号土壙 (第141図)

斜面下部、7-T区に位置する。平面形は壙口部、壙底ともにやや不整な楕円形を呈する。規模は壙口部115×84cm、壙底84×52cm、深さ20cmを測る。壙底は西側では中央に向かって若干傾斜し、壁は緩傾斜を呈するが、その他の部分では急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-46°-Eをとる。壙底中央に楕円形のピット(35×25cm、深さ25cm)を有する。

覆土は5層に分かれる。上位で炭化物が少量検出されている。ピット内にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

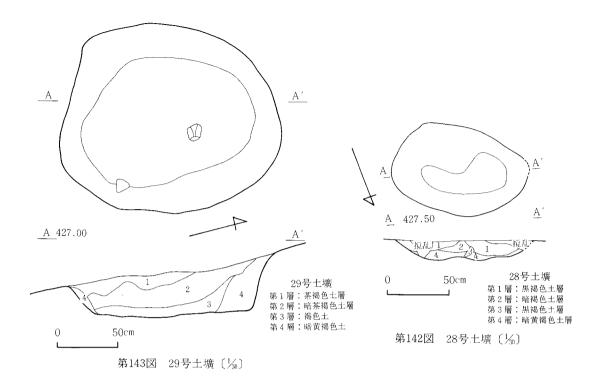




### 28号土壙 (第142図)

斜面下部、7-S区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに不整楕円形を呈する。規模は壙口部 $108 \times 72$ cm、壙底 $67 \times 32$ cm、深さ15cmを測る。壙底は若干凹凸を有する。壁は緩傾斜を呈したちあがる。長軸方向はN-71°-Wをとる。

覆土は4層に分かれ、壙底にはローム質土が堆積していた。 遺物は出土していない。



### 29号土壙(第143図)

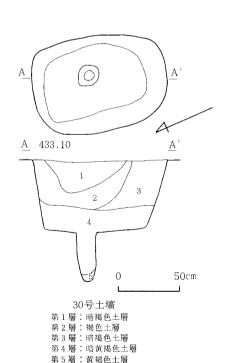
斜面下部、12-S区に位置する。平面形は擴口部が北側で入り込む不整円形、擴底は西側が直線的な不整円形を呈する。規模は擴口部183×155cm、擴底135×98cm、深さ52cmを測る。擴底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがり中位よりさらに外開する。

覆土は4層に分かれ、北壁際にローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

## 30号土壙(第144図、図版21)

斜面中部、5 - L区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに隅丸長方形に近い楕円形を呈する。規模は壙口部106×76cm、壙底80×53cm、深さ55cmを測る。壙底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-58°-Eをとる。壙底中央に円形のピット(19×16cm、深さ40cm)を有する。



第144図 30号土壙〔‰〕

覆土は5層に分かれ、壙底及びピット内にはローム質 土が堆積していた。

遺物は出土していない。

## 31号土壙 (第145図、図版21)

斜面中部、5 - L区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに楕円形を呈する。規模は壙口部77×61cm、壙底52×40cm、深さ29cmを測る。壙底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがり中位より若干外反する。長軸方向はN-62°-Eをとる。

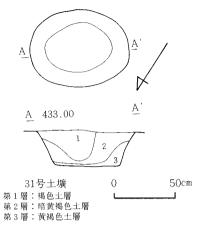
覆土は3層に分かれ、上位から 中位にかけてローム質土が堆積し ていた。

遺物は出土していない。

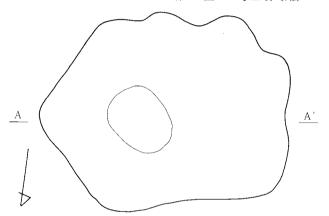
## 32号土壙 (第146図)

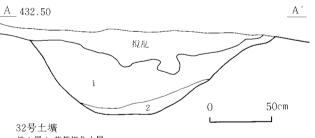
斜面中部、4 - L区に位置する。 壙口部は撹乱を受けており不整円 形を呈する。壙底は楕円形を呈す る。規模は壙口部193×150cm、壙 底55×42cm、深さ65cmを測る。壙 底は平坦で壁は緩傾斜でたちあが る。

覆土は2層に分かれ、壙底にローム質土が堆積していた。遺物は出土していない。



第145図 31号土壙〔‰〕





第1層: 黄茶褐色土層 第2層: 明黄褐色土層

第146図 32号土壙〔½〕

## 土壙・まとめ

今回発見した土壙は以上の32基である。分布について。土壙は丘頂平坦部には存在せず、平坦部の縁に一部集中する。さらに西側斜面中部から下部にかけて散在する。次に時期について。土壙の時期比定を可能とする遺物は検出できなかった。為に各土壙の時期は不詳である。

土壙の形状から、他遺跡の例にてらして、その時期・機能をうかがい知れるものが数基ある。すなわち、12号・23号土壙(平面が隅丸方形で、断面逆台形を呈し、壙底にピットを有する)は、多摩ニュータウンNo.740遺跡89号土壙、帷子峯遺跡169号土壙などに例を求めることができる。また27号・30号土壙(平面が楕円形で、断面逆台形を呈し、壙底にピットを有する)は、多摩ニュータウンNo.740遺跡71、72号土壙に例が求められる。この種の土壙は、早期末業の「陥し穴」と推定されている(宮澤・今井、1976)。

斜面中位から、平面円形で断面方形もしくは逆台形を呈する大形土壙が発見された(10号・11号土壙)。これらはともに、壙底より自然石を1個検出している。遺構周辺には礫が無い状況であり、何らかの意図で石が置かれたとも考えられる。10号・11号に形状が類似し、自然石が検出された例としては、椚田遺跡群第Ⅳ遺跡SK04土壙があげられる。しかし、10号・11号土壙と、椚田例では、覆土の堆積状況が著しく異っており、同じ類型として良いか否かはなお疑問の残るところである。

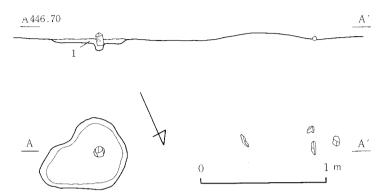
他の土壙のうち、14号・18号・21号・31号土壙は、底部にピットを有さないタイプの「陥し穴」 としうるかもしれない。類例の増加を待ちたい。 (秋田かな子・近藤 英夫)

## 3 石棒を伴うピット

(第147~148図、図版17)

円頂丘頂部、22-H区南 西部から検出された。頂部 平坦面の中央やや東寄りに 位置し、東10mに1号集石 遺構が、西15~20mに3号 及び5号集石遺構が存在す る。

石棒は安山岩製で、現長 9.8cm、径5.2cmで断面円形 を呈する小型品である。先 端は円棒のままで無頭であ るが、頭頂部には擦痕が残



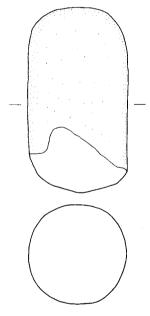
石棒出土土壙図 第1層:暗茶褐色土層(炭化物を含む。)

第147図 石棒を伴うピット [火]

り、僅かに平坦面をみせる。表面の風化が著しく、器面はかなり 荒れている。基端部は欠落しており、原寸は不明である。

ピットは、平面不整楕円形を呈し、規模は70×50cm程を測る。上面はかなり削平されていると考えられ、現状では5cm程の深さを有し、浅い皿状断面を呈す。ピット中央部には径10cm程で深さ8cmの小ピットが設けられ、石棒はその小ピット内にやや斜立した状態で認められた。

石棒から北西方向へ1~2m程離れて長さ10cm程の角礫が4個程 散乱している。本遺跡では基本土層中に礫を含まず、また検出さ れた角礫と石棒はほぼ同一レベル上で確認されているところから、 この礫は石棒に伴うものである可能性が強い。



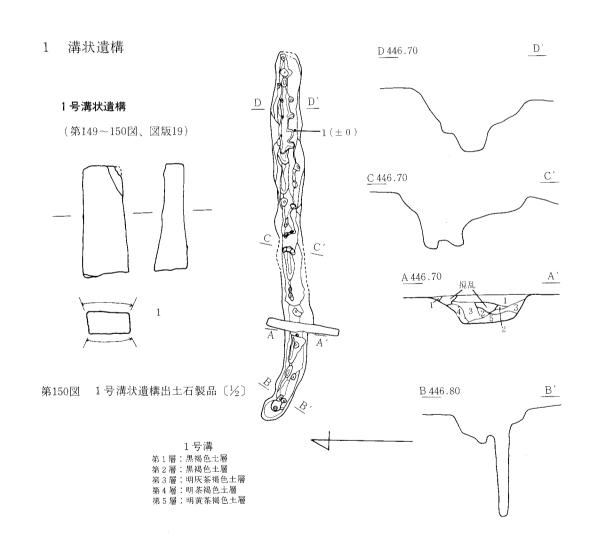
第148図 石棒〔½〕

六科丘遺跡における縄文時代遺構・遺物は円頂丘部を中心として 分布しているのであるが、その分布状態を更に検討すると、頂部平

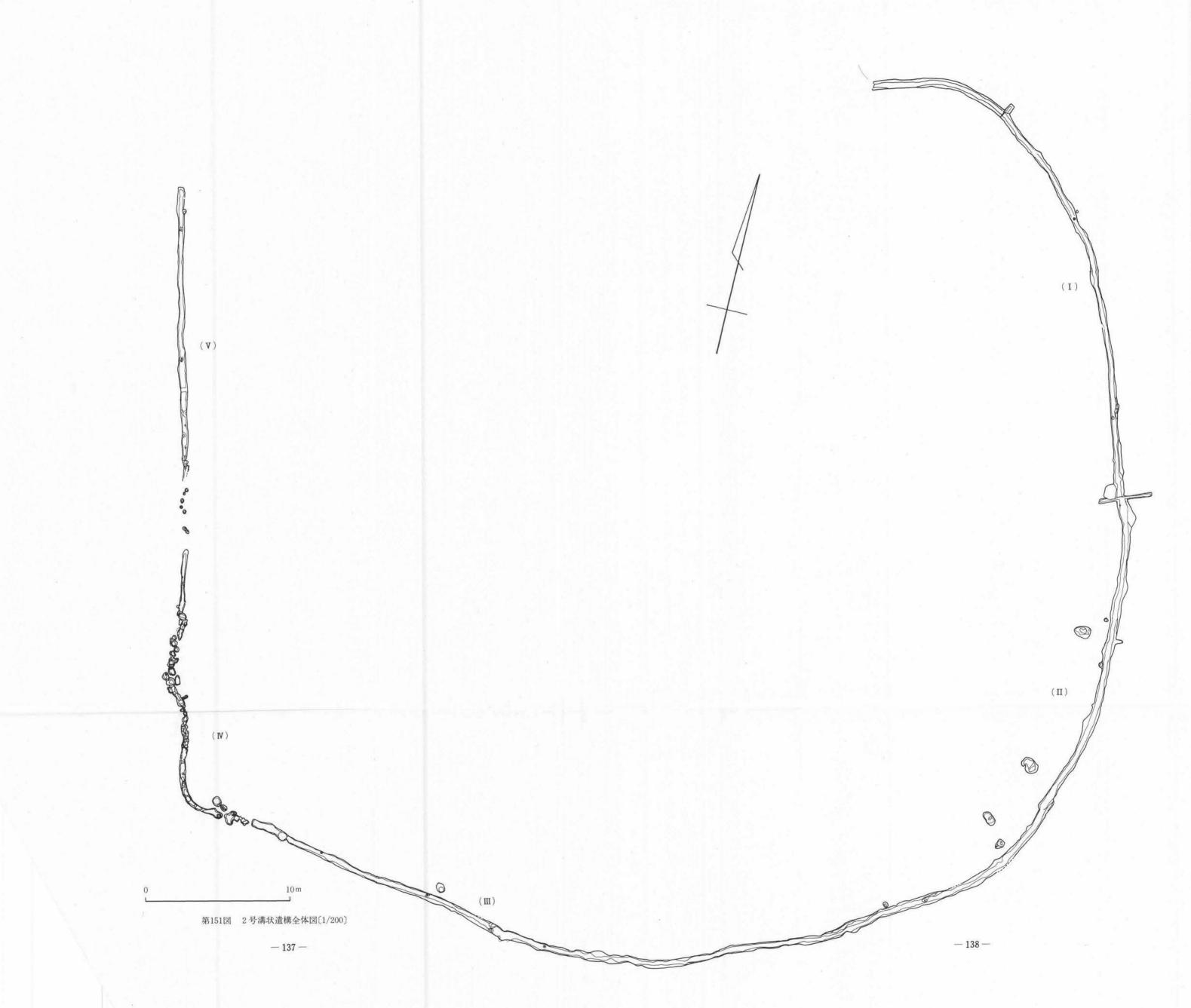
坦面縁辺部から斜面部にかけての部位に主体として認められ、頂部平坦面には遺構の分布が薄い。 本遺構は1号集石遺構と共に頂部平坦面に占地する数少ない遺構である。両者は、勿論その性格 内容を異にし、所属する時代も明らかにはしえない。更に他遺跡での類例も管見にふれえないま ま、ここで両者の関連に言及することは過言の謗をまぬがれえない。しかし、両遺構が共に他の 遺構が認められない、頂部平坦面占地しているという共通性は、両者の内容・性格を考える上で 見過しえない事実であろう。

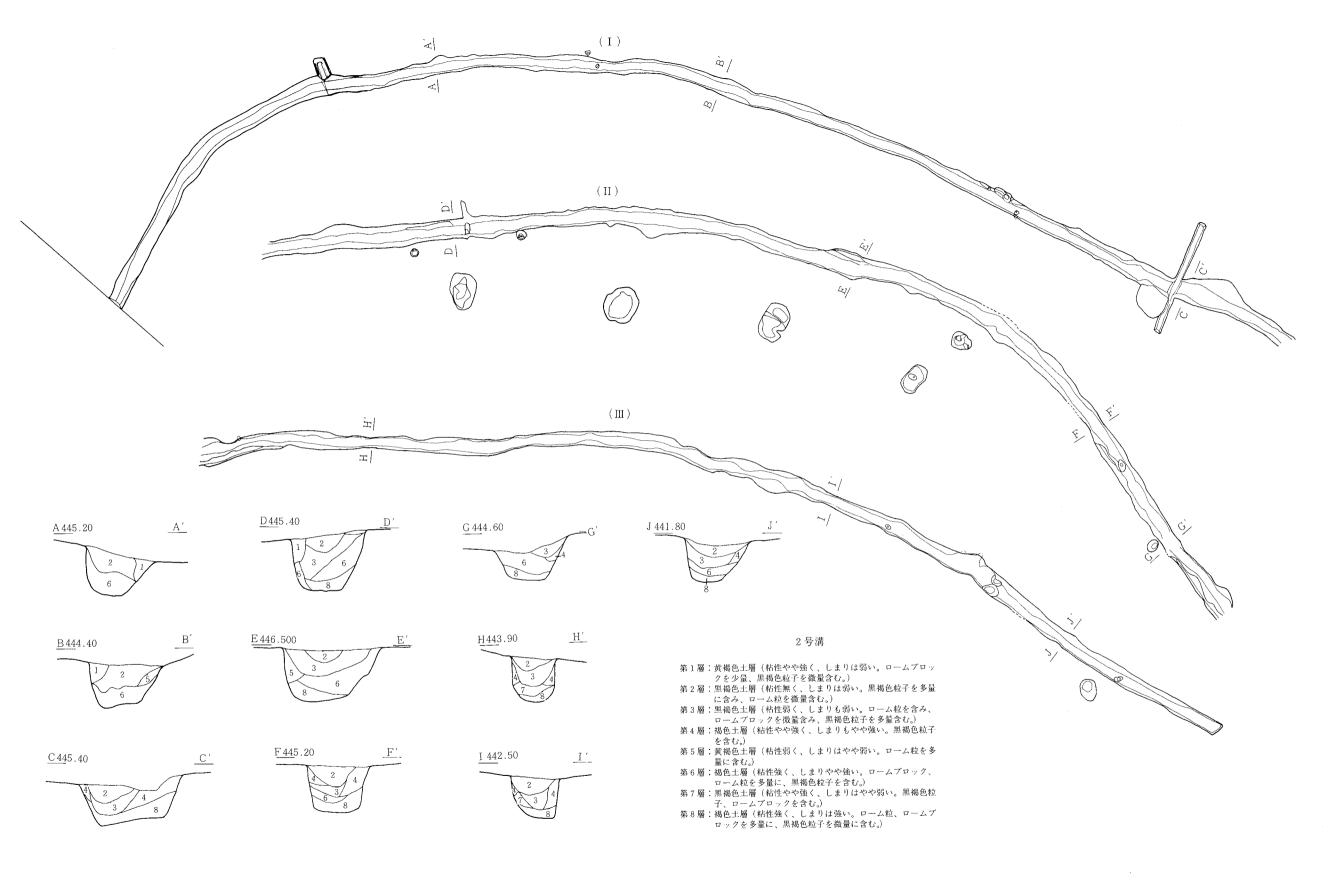
また後に附章で述べる様に、同一台地上に存在しながらも平岡の集落を中心とする台地平坦面と、六科丘遺跡の占地する台地前端部とでは、縄文時代に所属する遺物の内容・量、共に著しい差異を有している。このことは当該期の人々による空間利用-遺跡選地の結果であろう事は想像に難くない。極言すれば、六科丘円頂丘は彼らにとって決して日常的な居住空間とはなりえなかった事の表現であろうか。円頂丘上に認められる、石棒、1号集石遺構等の有様はその傍証ともなりえよう。
(百瀬 忠幸)

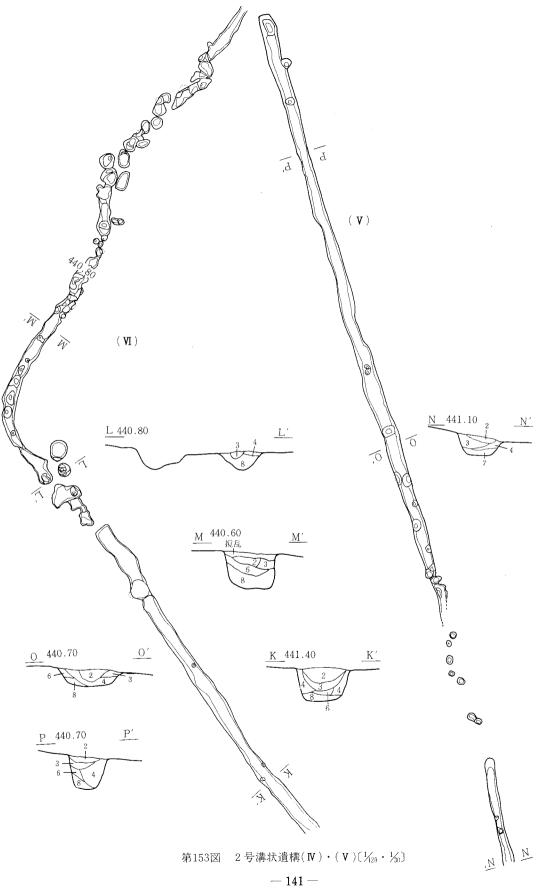
# 第3節 その他の遺構



第149図 1号溝状遺構〔½0・½0〕







円頂丘頂部、23・24-H区に存在する。発掘区南端に位置し、周辺の遺構としては、北15mに 1号集石遺構が存在するにすぎない。

東一西方向に走り、現長11mを測る。西へ向い23-H区に入り北へ向きを変えるが削平を受け途切れる。また東端部も削平の為破壊され、原状でどの程度の規模となるかは明らかにしえない。幅は70~100cmを、深さは40~80cmを測り、東一西方向の溝底比高差は約50cmを有する。断面はロート状を呈し、中央部は1段深く掘りこまれる。底面には多数のピットが掘り込まれるが、規則性は認められない。覆土は5層に分けられる。

出土遺物は砥石が1点溝壁に密着して出土しており、他に須恵器片が1点出土したが、細片の ため図示しえなかった。

石製品 砥石 明灰白色を呈し、 $5.5 \times 2.1 \times 2.5$ cmを測り、一端を欠落する。二面が砥面とされ、一面はかなり砥ぎべりしている。

#### 2号溝状遺構 (第151~153図、図版18)

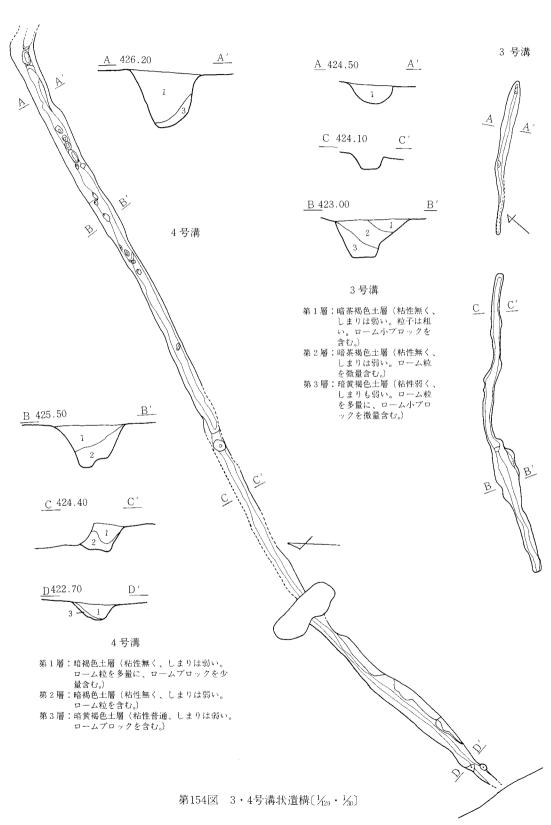
斜面上部の、14・15・16-E、17-F、18-G・H・I・J、17-J・K、16-K、15・14・13-L、13・12-K、12-J、11-J・I区に存在する。北側部は発掘区域外の為、明らかにしえなかったが平面形は一辺60mのほぼ隅丸方形を呈する環状の溝と考えられる。14-E区では西から東へ走り、15-E区で南へ方向を転ずる。後約50m程ほぼ直線的に走り、18-H・I区で再び方向を転じ、やや湾曲しながら西方向へ60m程走る。14-L区で三たび方向を転じ、北方向へ直線的にのび、約45mで発掘区域外へ逃げる。幅は0.5~0.7m、深さは0.3~0.5mを測る。断面形はほぼ深鉢状を呈し、覆土は8層に分けられ、上層は黒褐色土層、下層ではロームブロックの混入が顕著である。12-K、13・14-L区では削平の為、遺存が悪い。

溝によって画された内部では、務めて遺構の検出にあたったが、溝と関連する遺構の確認にはいたらず、 $18-G\cdot H\cdot I\sim 16-K\cdot E$ 、 $11-I\sim 12-J$ 区で溝に沿って穿たれたピット数ヶ所を検出しえたのみである。

#### **3 号溝状遺構** (第154図、図版19)

斜面最下部南端の、 $11 \cdot 10 - U$ 、10 - V区に位置し、北東から南西に向って直線的に走るが、10 - V区で僅かに湾曲する。削平の為1 部途切れるが現長は約31 m、幅は $0.3 \sim 0.7$  mを測り湾曲部で幅を広げる。深さは最深部で約50 cmを有する。両端部共削平を受ける為、原状はどの程度のものとなるかは明らかでない。断面形は本来ロート状を呈していたと考えられる。北 $3 \sim 5$  mには4 号溝状遺構がほぼ平行しており、何らかの関係を持つ可能性もある。

傾斜に従って走る為かなりの勾配を有し、湾曲部で比高差約15cmの段差をもつ。



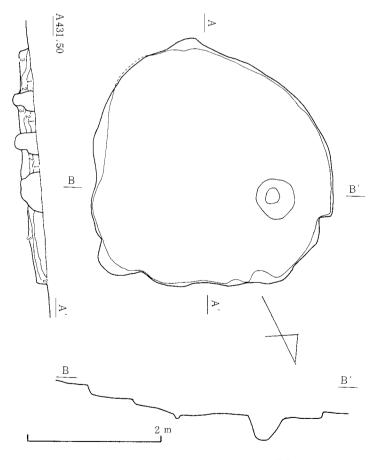
#### **4号溝状遺構** (第154図、図版19)

斜面最下部南端の、11・10-T、10-U・V区に位置する。北東から南西に向って僅かに湾曲しながら走り、現長約52m、幅は0.4~0.7m、深さは11-T区で45cmを測る。傾斜に従って走る為、かなりの勾配を有する。覆土は3層に分けられ、断面形は本来上部が広がるロート状を呈するものと考えられ、11・10-T区では溝底にピットが顕著である。11-T区上端では南東方向に向きを変えるが、以遠は撹乱の為確認しえない。

南3~5mには3号溝状遺構がほぼ平行して走る。

(吉岡 弘樹)

#### 2 竪穴状遺構



第1層:暗褐色土層(ロームブロック、獣骨

片を含む。)

第2層:明褐色土層(炭化物、炭化材、獣骨 片を含む。)

第3層:暗黄褐色土層(ローム粒、黒褐色土 粒、炭化物粒を含む。)

第155図 1号竪穴状遺構〔‰〕

#### 1号竪穴状遺構

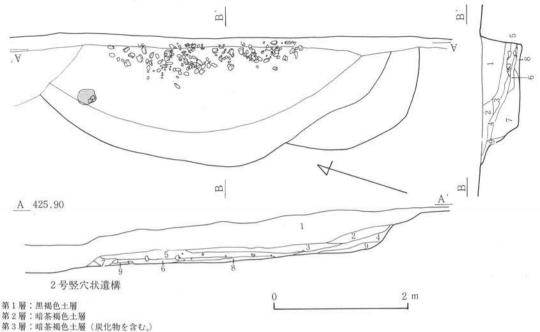
(第155図)

斜面中央、緩斜西部の4-N区に位置する北7mに9号 住居址が東15mに7・8号住居 址が存在する。北西1mには 10号住居址が近接し南壁は13 号住居址と接している。

平面形は不整円形を呈し、 規模は径4m程を測る。掘り 込みはローム層まで達し、壁 高は15~20cmをはかる。覆土 は3層に分けられ、第2層には 獣骨片・炭化物が大量に混入 する。底面は中部がやや深く 掘りこめられ、非常に軟弱で ある。北西隅には径30cm、深 さ20cmを測るピットが認めら れる。

遺物は覆土中より2点、確認面より寛永通宝1点が出土 している。

#### 2号竪穴状遺構 (第156図、図版13)



第4層:赤黄褐色土屬 第5層:暗黄褐色土層

第6層:暗茶褐色土層 第7層:茶褐色土層 (炭化物を含む。)

第8層:黄褐色土層

第8層: 昭黄茶褐色土層 (炭化物、焼土を含む。) 第156図 2号竪穴状遺構(to)

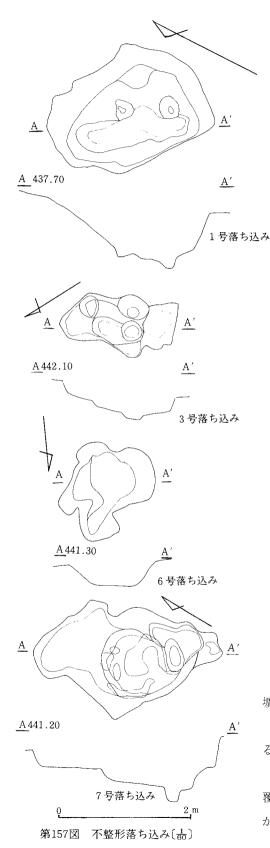
斜面最下部の8-U・V区に位置する。南15mに5号溝状遺構が走り、北東10mに2号ローム 土壙が存在する。

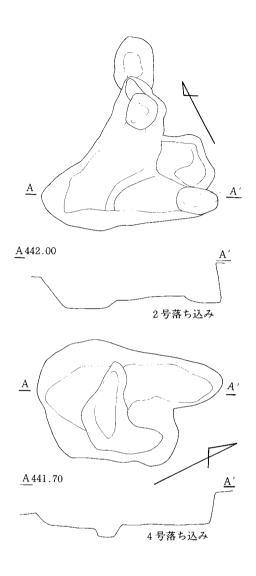
西半部を道路に切られ約%程しか遺存しない。現長は長軸6m程を測り、本来は直径7m程の 不整円形を呈していたものと考えられる。

掘り込みはローム層まで達しており、覆土は9層に分けられる。第1層は耕作、攪乱土で、第9層 には炭化物・焼土が混入する。底面はほぼ平坦で硬くしまり、壁はだらだらと立ち上がる。底面 から 5 cm程浮いて 5~10cmの小礫が同一レベルに並べられている。底面には炭化物・焼土が散乱 しており、1ヶ所焼土溜りが認められる。

遺物は覆土中より土器数片が出土している。

1号及び2号竪穴状遺構は、調査時には小竪穴遺構として認識し、それぞれ3号・4号小竪穴 遺構と呼称していた。しかし、整理作業時の検討の結果、1号・2号小竪穴遺構と、3号・4号 小竪穴遺構とにはその形状・時期・性格等において明確な差異が認められた。すなわち1号及び 2号小竪穴遺構は、弥生時代末の所産で集落に附属するものであり、3号・4号小竪穴遺構とは、 時代・内容等を異にする遺構であった。そのため、本報告書においては、1号・2号小竪穴遺構 はそのままの呼称とし、同3号・4号遺構に関しては竪穴状遺構として別個に取扱ったものであ る。 (山崎 和也)





### 3 不整形落ち込みとローム土壙

#### 不整形落ち込み (第157図)

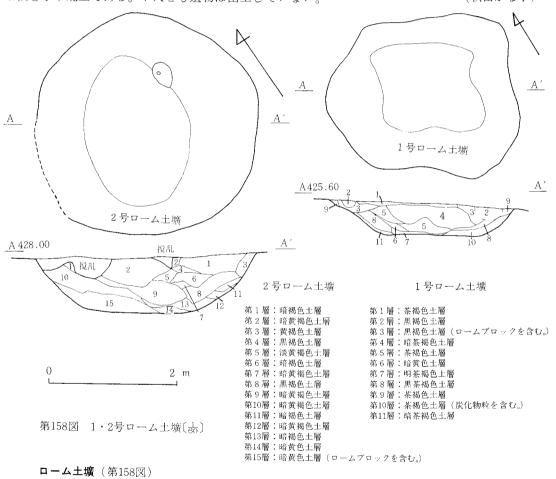
形状になんら規則性を持たない7穴を一括して土 壙とは別に扱った。

1号落ち込み。斜面中部、10・11-L区に位置する。覆土上位にロームが堆積する。

2号落ち込み。斜面中部、17-L区に位置する。 覆土上位から底面にかけてロームが堆積し、炭化物 が少量検出された。

- 3号落ち込み。斜面中部、17-L区に位置する。底面上にロームが堆積し、上位から炭化物が 多量に検出された。
  - 4号落ち込み。斜面中部、17-L区に位置する。
- 5号落ち込み。斜面中部、17-L区に位置する。西半部を14号土壙に切られる。覆土中位にロームが堆積していた。
  - 6号落ち込み。斜面中部、16-L区に位置する。

7号落ち込み。斜面中部、16-L区に位置する。底面より10em程浮上し、厚さ5cm前後のブロック状焼土がリング状に堆積していた。焼土ブロックと底面との間層には、焼土粒・炭化物粒が多量に認められた。壁面及び底面には火熱を受けた痕跡は見られなかったがあきらかに1次的な堆積を示す焼土である。7穴とも遺物は出土していない。 (秋田かな子)

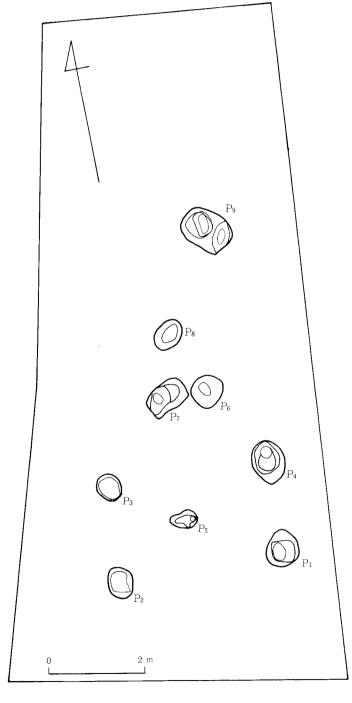


1号ローム土壙。斜面下部の7・8-T区に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は3×2.4m、深さ50cmを測る。浅鉢状断面を呈し壙底はやや硬い。覆土は11層に分けられ、中央部に再堆積ロームを主体とする層が、周囲に黒褐色土が堆積する。

2号ローム土壙。斜面下部の8・9-8区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径

3.5m、深さ90cmを測る。ボール状断面を呈し擴底は軟弱である。覆土は15層に分けられる。基本的には、中央部に再堆積ロームを主体とする層が周囲に暗褐色土が堆積する。

両者共、所謂「再堆積ロームを有する土壙」とされてきたものである。 (田尾 誠敏)



#### 4 II 区北拡張区

ピット群(第159図)

本ピット群は、II区北側、斜面下部の表土排土中に検出されたものであり、同区をII区北拡張区と呼称した。

ピットは計9個検出された。 $P_1 \sim P_4$ が $3.4 \times 2$  mを測る長方形を呈して配列されている他は規格性は認められなかった。 $P_1 \sim P_4$ は形状・規模等の所見から掘立柱建物址とは認めえなかったが、4 欠1 組として設けられた可能性が強い。

各ピットの計測値は下記の通 りである。

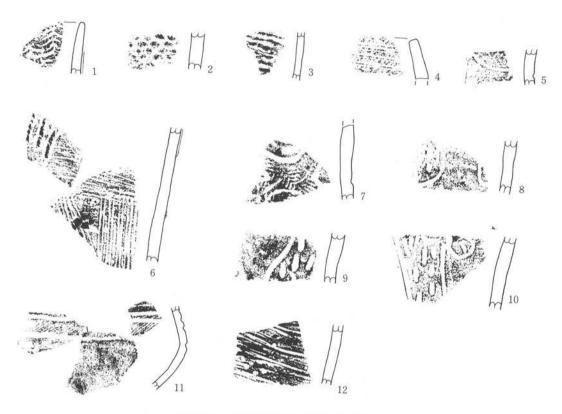
| $P_1$ | $80 \times 70$ cm          | 59cm |
|-------|----------------------------|------|
| $P_2$ | $70 \times 55$ cm          | 21cm |
| Рз    | $60 \times 50$ cm          | 24cm |
| $P_4$ | $90 \times 70$ cm          | 61cm |
| Ръ    | $60 \times 30$ cm          | 20cm |
| $P_6$ | $70 \times 70 \mathrm{cm}$ | 35cm |
| P7    | $90 \times 58$ cm          | 47cm |
| $P_8$ | $70 \times 50$ cm          | 32cm |
| Р9    | $110 \times 75$ cm         | 52cm |
|       |                            |      |

(田尾 誠敏)

第159図 Ⅱ区北拡張区ピット群〔‰〕

# 第4節 遺構外出土の遺物

土 器 (第160・161図)
 縄文時代の土器



第160図 遺構外出土の土器(1)縄文時代の土器[½]

#### (1) 早期の土器 (1~3)

早期前半、押型文系土器が8片検出された。1は山形文が施された口縁部破片。灰茶褐色を呈し、胎土に砂粒を若干量含む。焼成は不良。口唇は先端でやや細まる角頭状をなし、口縁直下をめぐる山形文下には横方向の楕円文が施されるものと思われる。22-I区から出土している。2は粒径8×5mmをはかる楕円押型文。茶褐色を呈し、胎土に砂粒・金雲母を含む。23-F区から出土している。3はネガティブな楕円文が施されるもの。粒径4×3mmをはかる。色調は茶褐色。胎土は比較的多くの砂粒・金雲母を含むものの、ややかたくしまる。23-G区から出土している。

#### (2) 前期の土器 (4・5)

2片が検出されたにすぎない。4は内傾する口縁部破片である。細い斜縄文を地文として、横 方向の多条沈線文が施される。胎土に砂粒・金雲母・石英を多く含み、焼成はふつう。前期後半 諸磯式(諸磯 b 式)に比定される。5 は半截竹管による条線を地文として、浮線文やボタン状の 貼付け文が施されるもの。胎土に砂粒・石英・黒雲母を多く含み、器壁は全体にザラザラする。 外面くすんだ褐色、内面明茶褐色を呈し、焼成はふつう。諸磯 c 式に比定される。15—L区から 出土している。

#### (3) 中期の土器

中期初頭に属する小破片が1片検出されているが、図示しえなかった。

#### (4) 後期の土器 (6~10)

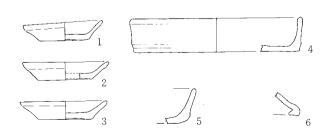
図示したものを含めて6片検出されている。6・7は平行する沈線によって曲線的な文様を描き、沈線間に縄文を充塡する胴部破片である。6は原体RL単節縄文。7はLR単節縄文である。明褐色ないしくすんだ褐色を呈し、胎土に砂粒・白色透明粒子を含む。焼成はおおむねふつう。8~10は同様の沈線間に複列の刺突文が施されるもの。明褐色・暗茶褐色などを呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を含む。6・7は後期初頭、称名寺I式、8~10は後期初頭、称名寺Ⅱ式にそれぞれ比定されよう。6は18-G区から出土している。

#### (5) 晩期の土器(11・12)

条痕文を施されるもの2片、無文のもの2片を含めて6片の該期土器が検出されている。11は 鉢形を呈すると思われる胴部破片。横位にめぐる沈線文によって区画された胴上半部に、原体L R単節縄文による縄文帯と刺突列点文が施される。外面明褐色、内面赤味をおびた茶褐色を呈し、 胎土に砂粒・石英・白色不透明粒子を含む。内面は横方向のナデによる器面調整が行われ比較的 平滑である。焼成はふつう。12はヘラ状工具による斜方向の条痕文が施されるもの。胎土に砂粒 ・石英・黒雲母と白色不透明粒子を多く含み、全体に器壁は粗い。これらは、時間的にやや不明 瞭な点を残すものの、おおむね晩期中葉に位置づけられるものであろう。 (百瀬 忠幸)

#### 中世以降の土器

1~3 はカワラケ。1 は口径8 cm、底径5.2cm、高さ2.1cm、体部回転ナデ、底部は左方向の回転糸切り、2 は口径9.2cm、底径5.6cm、高さ2.0cm、体部回転ナデ、底部ナデ、3 は口径9.6cm、底径5.8cm、高さ2.1cm、体部上半回転ナデ、下半不整方向のナデ、底部左方向の回転糸切りのち



第161図 遺構外出土の土器(2) 中世以降の土器〔¼〕

ナデ。胎土は共に密。焼成良好、色調、1は茶褐色、2・3は赤褐色を呈す。形状・大きさからいえば三者で「入れ子」となる可能性もあるが、製作技法のうえからは「入れ子」としてあつかえるか否か、疑問が残る。1~3は13-J区から出土している。4・5は盤一部。4は口径18cm、底径17.6cm、高さ3.6cmを測る。体部は内・外面共に回転ナデ、底部内面はナデ、外面は無調整。胎土密、焼成良好。色調は茶褐色で一部黒斑を有する。4は10-P区から出土している。5は体部内外面共に回転ナデ。胎土密、焼成良好。色調は茶褐色を呈する。6は磁器片、蓋一部。胎土は密で焼成は堅緻。ロクロ成形後、回転ナデ。内外面共淡緑色釉が施される。5・6は9-R区から出土している。

#### 2 石 器 (第162図)

本遺跡から出土した石器類について説明する。ここで取り扱う石器類は、先土器時代の石器類 遺構外出土の石器類、遺構出土の石器であっても、その遺構に伴なわないと判断したもの、であ る。

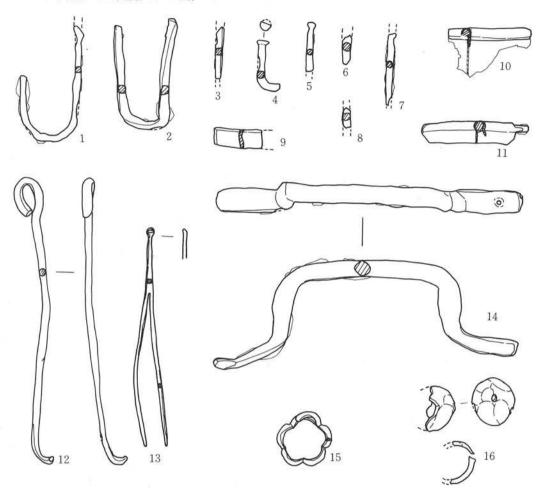
1はナイフ形石器。1号住居址出土。石質は黒耀石。基部及び先端部欠損。素材は縦長剝片。 刃潰し加工は左側にある。また右側下部にもわずかに見られ、本来は両側辺加工であったと思わ れる。右側縁には刃こぼれがある。図示したものの他にナイフ形石器の破損品が1つある。2は 尖頭器、14号住居址出土。石質は黒耀石。先土器時代終末~縄文時代初頭に属すると思われ る。茎部付近の欠損品で、節理面を残す。3は尖頭状石器。16-K区出土。石質は黒耀石。先土 器時代終末~縄文時代初頭に属すると思われる。尖頭部欠損。4は剝片。3号住居址出土。石質 凝灰質流紋岩。先土器時代に属すると思われるが詳細は不明。5はスクレイパー。23-F区表採 石質は流紋岩。素材は残核を利用している。図の右下部に調整がほどこされている。先土器時代 の石器と考えられるが、詳細は不明。6、縦長剝片、11-L区出土。石質は黒耀石。先土器時代 の剝片であると考えられる。7・8は剝片。石質は共に黒耀石。7は22-G区、8は23-H区出 土。9~13は石鏃。石質、12はチャート、他は黒耀石。9は22号住居址出土で茎部は欠損してい る。10は5号住居址出土。11はII区表採で脚部欠損。12は2号小竪穴出土。13は24-H区出土で 先端部欠損し、節理面を有する。14は研磨痕を有する礫。1号住居址掘り方出土。ほぼ側面全体 に研磨痕を有する。15は打製石斧。3号住居址出土。16・17は凹石。16はII区表採。表面の風化 が著しく磨石や敲石との併用の有無は不明。凹部分は表裏1個ずつ認められる。17は24号住居址 出土。現存部分の表裏に1個ずつ凹部分がある。磨石・敲石との併用の有無は不明である。18は 磨石。13号住居址出土。石質は砂岩。全体によく磨かれている。敲石との併用はない。直径約3.5 cmの円形状の平坦部分がある。磨石の半分以上をスス状の黒色付着物が覆っている。また赤化し ている部分もある。磨石が何かの理由で、スス状の黒色付着物で覆われたり、赤化したものと考 えられる。

(大森 隆志)



第162図 遺構外出土の石器〔1~3、9~13-%・4~8、14~18-%〕

## 3 鉄製品・土製品 (第163図)



第163図 遺構外出土の鉄製品・土製品 [½]

1~8 は棒状鉄製品。1 は現長10cmで0.3cm角の方形断面を有する。釣針状に曲げられ一端は完結するが、他端は欠落する。2 は現長12cmで0.4cm角の方形断面を有する。平面U字状に曲げられ、両端共完結するが使途は不明である。1 は11-K区、2 は17-J区から出土している。3 は現長2.7cmで0.3cm角の方形断面を有する。4 は現長3 cm、径0.4cmの円形断面を有し、頭部は径0.6cm程に叩きひろげて作り出している。5 は現長2.6cm、径0.3cmの円形断面を有し、頭部は径0.5cm程に叩きひろげて作り出す。6 は現長1.5cmで0.4cm角の方形断面を有し、7 は現長3.8cm、径0.3 cmの円形断面を示す。8 は現長1 cm、径0.4cmの円形断面を示す。6・7 はほぼ釘先端部、4・5 は釘頭部である。3~8 は14-J区から出土している。9 は板状鉄器端部、現存2.5cm、幅1 cm、厚さ0.2cmを測る。長軸に沿って僅かに湾曲する。10は異形鉄器。現寸4.3×2.5cmを測る。径0.3 cmの鉄棒を、厚さ0.1cm程の鉄板端部にはさみこんだものである。9・10は6-0区から出土している。11も異形鉄器。現寸5.5×1.2cmを測る。10と同様のもので、径0.4cm程の鉄棒を厚さ0.1

cm程の鉄板端部にはさみこんだものである。 6-N区から出土している。 12は鍵状を呈する鉄製品である。全長15cmを測り、径 $0.3\sim0.5$ cmの円形断面を呈する。一端は $1.5\times1$  cm程の長円形を呈する様に曲げられており、他端も1 cm程急湾している。 2-D区から出土している。 13は簪状を呈する鉄製品。全長11.5cmを測り、表面に薄く銅張を施す。頭部は耳掻状を呈し0.4cmに膨む。体部は $0.3\times0.2$ cmの方形断面を、脚部は $0.2\times0.2$ cmの方形断面を有し、先端へ向うに従い尖状をなして完結する。16-J区から出土している。14は引き金具。平面几状を呈し、全長19cmを測る。引き手部は幅10cmに亘って張り出し状に折り曲げられ、引き手部を為す。引き手部は $1\times1.2$ cmの方形断面を有し、両端部は $0.7\times1.2$ cm程の方形断面を示す。錆の為完全には観察できないが、端部には径0.2cm程の孔が穿たれており、おそらく両端部に穿孔されたものであろう。14-L区から出土している。15は銅製飾金具。径2cm程を測り $5\sim6$  稜を有する飾り金具である。断面は $0.2\times0.4$ cm程のカマボコ形を呈し、内面は面とりされている。図上では環状を呈しているが完結しておらず、端部は重なっている。16-J区から出土している。

16は土鈴である。径2.5cmを測るが、½程しか遺存しない。器厚は0.3cmを測る。色調は赤褐色を呈し、焼成は堅緻。胎土は密である。表面には指頭痕が残り、穿孔は外面から内面へ向けなされている。5-0区から出土している。13号住居址からも土鈴が出土しており、同一個体とも考えたが、接合しなかった。

(吉岡 弘樹)

# 第Ⅴ章 弥生時代の成果と課題

# 第1節 弥生時代後期から古墳時代前期の土器について

本遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期に属する土器が検出されており、住居址群はこの時期に該当する集落を形成するものである。弥生時代後期から古墳時代前期については、従来の土器型式による編年的位置づけに困難な点が多く、また各地域の特性についても同様の事が指摘されている。地域の特徴的な土器を横線で結びながら、ある地域の時間的経緯を細分化しようとする方向に現在はある。ここでは山梨県内外の関係資料を参考にして、土器の形態変化にもとずいて分類を行なった。

本遺跡においては一般的に時期分類の根拠となされている坩・器台が認められず、明確に高坏 形土器と呼べるものも検出されなかった。更に山梨県内の当該期の遺跡には珍しく、S字状口縁 台付甕形土器においても、口縁部破片が2片のみ出土したにすぎなかった。また櫛描文を有する土 器に至っては、皆無の状態であった等県内既報告の資料とは様相が異なる点を少なからず見出し た。

本遺跡で出土した器種は、壺・小型壺・甕・鉢・蓋の5器種であった。ここでは、主として壺 形土器、甕形土器の形態の変化を分類の根拠とし、I期からⅢ期に分類を試みた。本遺跡では焼 失住居が多くまた床面付近からの出土土器が大半を占めることより、一住居址内出土の土器を一 括し一時期として扱い分類を行なった。

#### 第Ⅰ期土器群

第 I 期土器群が検出された住居址は、第 1 ・ 3 ・ 5 ・ 29号住居址の 4 軒である。器種は壺・小型壺・甕・鉢・蓋であった。出土資料数は、少なく、完形品もないが、器種、形状は多様であった。第 3 号住居址からの出土個体数が最も多かった土器群である。第 1 号住居址については、第 2 号住居址との切り合い関係より第 I 期土器群に含まれると判断した。

#### 壺形土器

口縁部は大きく外反し、口縁内面の幅が広くなる。折り返し口縁をなし口縁端部には2から3本を単位とした紐状の貼り付けが施されている。口縁内面に細縄文をめぐらせるもの(3-1、5-1)と、丁寧に磨きを施すもの(29-1)とがある。第3号住居址から出土した壺には肩部に細縄文が施されており、第I期土器群は3時期区分の中で貼付、縄文と文様をもつ唯一の土器群である。口縁部をみるかぎりでは岩清水遺跡(森他、1979)出土の壺形土器と類似するものである。頸部から比較的大きく湾曲して胴部につながっていき、最大径を胴部中位に有する。器面外面はハケ調整の後に磨きが施されている。また口縁部内面には、磨きがなされている。

第3号住居址から検出された小型壺形土器は、最大径を胴部中位に有し、口縁が緩く外に立ち上がる形状をみせ口縁径、胴部径に対する頸部径が大きい。器厚は比較的厚味があり器面外面と口縁部内面にはヘラ状工具による鋭い磨きが残る。

#### 甕形土器

脚部と接合した資料はなかったが、すべて台付甕形土器である。口縁部は単純口縁のもの(3 - 7、8)と口縁端部にハケ状工具による刻目を有するもの(1-2)とがあるが、前者の占める割合の方が多い。また単純口縁のものは、口唇断面が方形を呈し、口縁の長さが長い。最大径は胴部中位にあり、球形に近い形状をなす。器面外面はハケにより調整され、口縁内面にはへラによる磨き、胴部内面にはナデが施されている。口縁端部に刻目を有する土器は第1号住居址よりの出土のものであり、器面外面に横位のへラ削りを施している。 I 期土器群の甕形土器の形状は、胴部から口縁のつながりが緩やかになされている。

小形甕形土器は口縁部に最大径をもち、器面外面にハケによる調整が施されている。第3号住居址より2点出土しているが、形状は異なるものである。

#### 鉢形土器

内湾する形状をなし、器面外面は丁寧なヘラ磨きが施されている(3-17)。 第32号住居址からも I 期土器に含まれる鉢が出土している(32-1)。 II・Ⅲ期と比較すると、底部径が短かく、大きく外反する形状をなしている。

#### 蓋形土器

蓋部が深く、つまみ部から鋭く内湾し孤状をなしている。つまみ部は内外面とも平坦面をつくり、器面には $\sim$  ラ磨きが施されている(1-1)。

#### 第II期土器群

第Ⅲ期土器群が検出された住居址は、第6・8・12・20・28・33号住居址の6軒である。器種は壺・小形壺・甕・鉢・蓋でありⅠ期土器群と同様であった。Ⅰ期土器群との漸移的なつながりを示している器種、器形であった。出土数は最も多かった。Ⅱ期土器群には破片ではあるが、駿河湾地方に分布が多くみられる土器も認められた。

#### 壺形土器

折り返し口縁をなすもので、口唇断面が方形を呈する。口縁部にはハケ状工具による調整を残す他は、文様が認められない。形状は頸部が短かく口縁部下半で緩やかに外反する。 I 期の壺に比べて口縁部内面の外反する幅が狭くなる。最大径は胴部中位より下位にある。底径に対する胴部径がⅢ期の壺と比べて大きく、膨らみをもつが、稜を有するには至らない、器面外面はハケ調整の後にヘラ磨きが施されており、ところどころハケ目を残している。器面内面については、頸部にはヘラ磨きがなされ、口縁部にはハケ調整が入念になされたもの(8−1、2・33−1)と磨きが入念になされたもの(12−1)とがある。第8号住居址で出土した壺のように頸部下半から胴部にかけて指頭圧痕を残すものがあるが、胴部内面には明瞭にハケ調整が施されている。第12

号住居址出土の壺には胴部中位よりやや上に、焼成後穿孔が加えられており、類例に乏しい土器である。

第6・12号住居址からは、幅広の複合口縁の破片が検出された。第6号住居址から出土した口縁片には4本以上の棒状隆帯が貼り付けられており、一城林遺跡(森他、1980),住吉遺跡(新津他,1981)等に出土例が認められる。第12号住居址より出土した口縁部破片には、細かいハケ調整の後に4から5本の棒状沈線が施されている。更に口縁端部の内側に粘土帯を貼り付け重ね合わせている。胎土に砂粒を含み、他の土器に比して色調に灰色味が強い。このような土器は駿河湾地方(加納、1981)に多く分布するものである。

小型壺形土器が第12号住居址から出土している。最大径は胴部上位にあり口縁部は胴部から「く」の字状に屈曲して付く。底部径が比較的大きく、安定感のある小型壺である。器面外面にはへラ磨きが施されている。

#### 甕形土器

台付甕形土器である。口縁部は単純口縁のもの(8-4、 $6\cdot 33-3$ )と口縁端部にハケ状工具により刻目を有するもの(8-5、 $7\cdot 12-7$ 、 $8\cdot 20-5$ 、6)とがある。口縁端部に刻目を有する甕が多くなる。口唇断面は、I期に比べて丸味を帯びてくる傾向にある。頸部の屈曲がきつく、口縁が外反し、またI期よりも口縁の長さが短かくなる。最大径は胴部中位から上位にある。脚部については内湾気味に開いていく。器面外面はハケ調整を施すものが大半であるが、その後胴部につりでは内湾気味に開いている。器面外面はハケ調整を施するのが大半であるが、その後胴部につりでは、口縁には磨きあるいはハケ目による入念な調整が施されている。

#### 鉢形土器

第28号住居址より出土している。平面の形状が楕円形をなし片側が片口状に作り出されている。 底部よりやや内湾気味に直立して立ち上がり、器面外面の整形はハケ調整後にヘラ磨きが施され ている。底部に厚味をおびている。

#### 蓋形十器

蓋部はやや内湾気味であるが直線的に拡がっている。内外面ともに入念にヘラ磨きが施されている。つまみ部上面に平坦面を残している。I期の蓋と比べ蓋部が浅くなる。

#### 第Ⅲ期土器群

第Ⅲ期土器群が検出された住居址は第9・13・22・24・27号住居址の5軒である。器種は壺、甕、鉢であった。第Ⅲ期土器群は完形品を数多く出土しており、一軒の住居内に残された土器も明確であった。にもかかわらず、第9・13・24号住居址からの出土土器に、高坏等の器種を欠いていた。第Ⅰ・Ⅲ期と比較して、より古墳時代的様相を示すが、一遺跡としての位置づけにとどまる感が強い。第9号住居址からは、本遺跡唯一のS字状口縁台付甕が検出された。しかし口縁部破片にすぎず、その出土の僅少な点に疑問が残される。

#### 壺形土器

広口壺形土器、片口壺形土器等、形状に多様性がみえる。第Ⅲ期の壺形土器はいずれも単純口縁のもので、第Ⅰ・Ⅲ期と比べ、調整が緻密で非常に丁寧に磨きが施されている。形態別に分類すると、A類・最大径を胴部中位からやや下位に有し頸部から緩やかに口縁が外反するもの(9-4,513-4)、その中でも胴部上位の径が短かく、肩部が緩やかなもの(22-1、27-2)、B類・胴部最大径と口縁径に差が少なく頸部がさほど収縮しない、いわゆる広口壺と呼ばれるもの(13-1、2)である。その中でも口縁径が胴部最大径を上回るもの(24-1)と、口縁が片口状に作り出されたもの(27-1)とに分けられる。A類壺形土器は、最大径を胴部中位より下半にもち球形に近い形状をなしている。胴部から口縁部への移行は緩やかで頸部が立ち気味に外反する。底部から胴部への立ち上がりは明瞭である。器面外面にはへう磨きが施されている。このような土器は、県内では類例に乏しい。B類壺形土器は、胴部中位に最大径をもち球形を呈する。頸部が短かく立ち気味に口縁が外反する、器面外面は丁寧にへう磨きが施されている。第9号住居址から出土したものは、京原遺跡(荻原他、1973)4号住居址出土の広口壺形土器、西田遺跡(山崎他、1978)1号方形周溝墓出土の壺形土器に類例が認められる。またいずれの遺跡でもS字状口縁甕形土器を共伴している。第29号住居址出土の片口壺形土器についても京原遺跡、坂井南遺跡(山下他、1984)等に類例が求められる。

#### 甕形土器

いずれも台付甕形土器である、口縁部形態は単純口縁のもの(9-6、8、9、10·13-11·24-4)、口縁端部が折り返されるもの(24-2、3)、口縁端部にハケ状工具による刻目をもつもの(13-9、10·24-5)の3形態に分類される。最大径は胴部中位にあるものが大半であるが、III 期に至って胴部に膨らみのある器形が顕著になる。また胴部から口縁部への移行は、急激に外反するもの、頸部が立ち気味になり強く外反するものがある。器面外面の調整は3種類の技法が用いられている。第9号住居址から出土した甕にみられるようにへラ削りを残すもの、ハケ調整を施すもの、そして甕形土器としては珍しくハケ調整後にヘラ磨きを胴部に施すもの(24-2)である。脚部の形状は、II 期の段階において内湾して開いていたものが、直線的に開く傾向になる。III 期の甕は、胎土も緻密で調整も入念に施されているものが多い。折り返し口縁の甕については、住吉遺跡、一城林遺跡に類例があるが、特異な形状を示すものである。

第9号住居址からS字状口縁台付甕の口縁部破片が出土している(9-11)。口縁部屈曲部の破片であるが、周辺遺跡あるいは県内で一般的にみられるものとは、作り、胎土、焼成とも明瞭に性格を異にするものである。他遺跡の場合砂粒を多く含み、器面がザラザラした感じを与え、屈曲部の作りも雑であるのに対し、本遺跡出土の土器は、胎土、焼成とも良好であり、丁寧に作り出しがなされている。屈曲部上位の立ち上がりは短かく、下位の方が長い。器面はナデが施されており上位にはヘラ状工具による列点状の文様が残り、下位にはハケ状工具による縦の調整が残されている。胴部が検出されなかったのでS字状口縁台付甕の分類、編年的位置づけをどこにするか

というには困難があるが、比較的古い段階に位置づけたい。また在地で生産されたS字状口縁台付甕とは区別して考えたい。

#### 鉢形土器

第13号住居址から2点出土している。器形、容量ともほぼ同一のものである。底部より内湾気味に直立して立ち上がったものが口縁先端部付近で外反する形状をなす。器厚は第Ⅰ・Ⅱ期のものと比較して薄い、器面外面は縦方向に丁寧なヘラ磨きが認められる。

#### まとめ

第 I 期から第 III 期までの変遷をたどってみたわけであるが、県内資料と関連づけ総括をしてみたい。壺形土器の変遷は、口縁部の形態変化が、 I 期一折り返し口縁をなし装飾がなされるもの II 期一折り返し口縁をなすが文様を施さないもの、III 期一単純口縁となるものとたどることができる。器形の変化は、III 期の広口壺の出現と胴部の球形化が指摘される。第 I 期土器群は、口縁端部への貼り付けと、小型壺より岩清水遺跡出土の土器群と同一の時期に位置づけられよう。第 II 期土器群は、駿河湾地方の影響をうけた住吉遺跡第 1 号住居址出土の土器群、やや様相が異なるが一城林遺跡出土土器群とほぼ同一時期と考えられる。第 III 期土器群は地域性が次第に薄れ県内に広く分布する土器群であり、京原遺跡、西田遺跡、坂井南遺跡等が同時期に該当するものと考えられる。しかし本遺跡からは器台の出土をみなかったことからあるいは、これらの遺跡に先行する可能性も残されている。

襲形土器の変遷は、形態からは明確にすることができなかった。傾向としては、頸部から口縁部にかけての長さが次第に短かくなりその収縮とともに胴部から口縁にかけての移行が大きく外反するようになる。また脚部の形状は内湾気味に開くものから直線的な開きに変化している。口縁部形態については、口唇部断面が方形を呈するものから丸味を帯びてくるようになるが、単純口縁、刻目を有する口縁は全時期を通してみられた。器面調整についても、ハケ調整、ヘラ削りはⅠからⅢ期共通してみられた。口縁形態、器面調整の違いは時期的な変化というより、むしろ一軒一軒の住居のもつ特色として本遺跡ではとらえられる。

第Ⅲ期土器群には、S字状口縁台付甕が共伴するものと考えられるが、出土資料に欠いたことはⅢ期がS字甕出現以前の時期に位置づけるという時間的な違いとみなすことができるかどうかむしろ本遺跡では、第Ⅲ期以降の遺跡の断絶と考え合わせて、S字状口縁台付甕をもつ東海地方の文化流入を受け入れなかったなんらかの地方性があったように考えられる。

本遺跡周辺では在地生産と思われる同器種の出土があり、対峙した丘陵からも出土していることからもこのことが類推される。甲西町住吉遺跡についても同様のことがいえると考える。本遺跡出土の土器を駿河湾地方の年代に位置づけると弥生時代後期の目黒身式以降、大廓式土器の範疇に属するものと考えられる。また駿河湾地方には高环形土器の出土割合が比較的少ないことが知られている。本遺跡においてもS字状口縁甕の出現直前までこの影響を受けたかの如く、同器種

の出土がなかった。

器台とともに器種の欠如については、他器種の土器による代用が考えられるが、今後の課題としておきたい。また、富士川上流域に集落を構成している東海地方色の強い集団が、中巨摩、南巨摩郡地方に集落を残さなかったかどうか、今後の調査に期待するものである。

中部地方の特色を示す箱清水系の土器は、明確ではないが大型の打製石斧を出土した第20号住居址から口縁部片が一片認められた。この一点の他は形状・文様とも同系統の土器は伴出しなかった。釜無川流域には櫛描文系土器を多数出土した金の尾遺跡(未木他、1979、1980)が知られているが、本遺跡にはその影響が土器に反映されなかったようである。

本遺跡からは県内資料の少ない壺形土器を多数出土しており、壺形土器による時間的位置づけ に貴重な資料となりえた。甕形土器にみる変遷とともに、山梨県内の編年を地域性と合わせて今 後考えていきたい。 (臼居 直之)

- 註1 六科丘遺跡周辺には曽根遺跡(清水他、1984)、上の山遺跡(清水他、1985)があり近年調査が行なわれた、この2遺跡より出土したS字甕との比較を行ない清水との検討により、明瞭な違いが認められた。
- 註2 月の輪遺跡群(湯川他、1981)における甕形土器分類のA2の段階に類似すると考えている。
- 註3 第3、9号住居址からの甕形土器は単純口縁のものが主体であり、第12号住居址からの甕形土器は刻目の口縁のものが主体であった。また折り返し口縁の甕形土器も第24号住居址から出土しただけである。
- 註4 壺形土器の頸部より上部が第3、8、33号住居址から出土しているが、これらを器台として使用した可能性もある。
- 註5 丘陵II「熊久保遺跡出土の弥生土器」田代孝、中山誠二が甕形土器の変遷を試みている。 S字状口縁の変遷から時間的変遷をたどっているが、山梨県の地域性を考えると甕形土器を慎 重に扱う事が必要と考える。

## 第2節 集落について

#### 1 住居址の様相

六科丘遺跡は、台地前端円頂丘から台地面にかけて立地するものであるが、なかでも弥生時代未の集落は、台地面へと続く西向逆傾斜面の中位から下位にかけて、標高428m~438mの間に展開している。調査面積約25,000mから、確実に弥生時代~古墳時代初頭のものとして認定しえた遺構は、竪穴住居址33軒、掘立柱建物遺構4棟、小竪穴遺構2基を数えた。遺構確認面が耕作等によりかなり攪乱・削平を受けていた事や、調査の未熟さ等もあり、遺構の見落としの可能性を否定するものではない。しかし先述した様に調査区域外にあっても抜根、表土排土作業時における立会、遺構確認を実施しており、本遺跡の遺構についてはほぼその全容を把握しえたものと考えている。

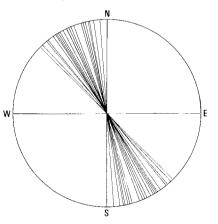
各住居址説明中でも述べた様に、本遺跡の住居址については、そのほとんどが何らかの攪乱を受けており全体を判然としえたものは少ない。その為、主軸方位、規模、平面形等について床面レベルで明確にしえたものは少なく、掘り方平面、あるいは掘り方に残された柱穴の痕跡等によって推定せざるをえない部分が多かった。

#### 主軸方位 (第164図)

主軸方位は北~北西方向を指し、 $N-4^\circ-W$ から $N-45^\circ-W$ に集中している。等高線との関係でみると、ほとんど方位を同一にして構築されており、 $3\cdot 6\cdot 9\cdot 11\cdot 14\cdot 23\cdot 25$ 号の各住居址が僅かに斜行している。しかしこれについても、現在測図された等高線が、集落が機能していた

当時の微地形を正確にトレースしていたものとは思われず、現在認められる等高線と主軸方位に観察された僅かな相違が往時も存在したか否かは判定しがたい。また45°という主軸方位の振幅の巾も等高線の褶曲に規定されたものと思われ、本来は北北西を中心とするより狭い範囲を指向していたものであろう。 w

ともあれ、集落全体がほぼ同一に方位をとるという主軸の有り様は、強い斉一性を窺わせ、本集落の特徴の一つともいえよう。この事は、本集落が限定された期間に、また単一性の強い 集団によって営なまれた事を示すものであろうか。



第164図 住居址主軸方位図

#### 平面形態

確認した33軒の住居址中、全容を検出しえたものは僅か 2 例にすぎない。他は推測に依る部分が多かった事は否定しえないが、 2 隅部以上を検出した住居址に関しては、遺存した隅部及び長辺部の状態、柱穴の配置関係等から、できうる限り原形の推定に務めた。その結果27軒の住居址に関しては平面形を明らかにしえた。内訳は下記の通りである。尚( )は可能性が強いが断定しえないものである。

- 1) 楕円形 9 軒 (11)、(12)、13、16、17、20、31、32、33号住居址
- 2) 隅丸長方形 15軒 1、2、3、4、5、6、8、14、18、21、22、23、25、27、29号住居址
- 3) 隅丸方形 2軒 24、28号住居址
- 4) 方形 1軒 9号住居址

楕円形と隅丸長方形に関してはその判別に迷うところであったが、長辺が直状を呈するものを隅丸長方形とし、弧状を呈するものは楕円形とした。またそれぞれの形態に分類したものの中には、形状が歪み不整○○形、としなければならないものも含まれているが、基本的な形態を重視して分類した。

一般的には、関東南部、静岡東部における弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居址形態の変遷は、胴張り隅丸形 (楕円形)→隅丸(長)方形→方形へ移行するといわれている。しかしこの変化は全体的な傾向であり、1集落内で複数の住居址形態が混在する事は従来から指摘されるところでもあり、その様な有り様自身が集落に於ける社会構成の歴史的表現とも考えられる。

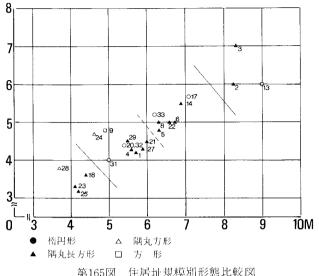
さほどの時間的連続性が考えられない本遺跡にあっても、4者の混在が認められる。隅丸長方形が16軒、楕円形が9軒と両者で25軒を占め、一方の軸に対して他方の軸を延ばすものが、主体を占めるといえるが、時間的連続性の中でその変化を把える事は不可能であった。しかし唯一「方形」を呈する9号住居址に関しては、本遺跡にあっても比較的新しい様相を示す土器群を持つと同時にS字状口縁甕破片を出土するただ一軒の住居址であり、その有り様は非常に興味深い。

ところで、住居址形態と規模との関係をみると、「方形」「隅丸方形」を呈する住居址は小型・中(小)型に所属する。また小型住居址は「方」「長方」にかかわらず全て隈丸形を呈するものである。楕円形を呈するものは、大型に1軒、中型に8軒が認められるが、大型住居址である13号住居址も、長辺は直状に近く、楕円形と隅丸長方形とのいわば中間型であり、従って楕円形平面を呈する住居址は基本的には中型住居址に認められるものであろう。隅丸長方形は全ての規模の住居址に認められる。長・短軸比は小型住居址が、1:0.78、大型住居址は1:0.72を測り、僅かではあるが規模を大きくするに従い、長軸を延ばす傾向が窺える。

#### 規模 (第165図)

33軒の住居址中、推測も含め規模を測りえたものは24軒である。そのうち最大のものは8.3×7.0 m (58.1m) を測る3号住居址、最小のものは4.1×3.3m (13.5m) の23号住居址である。計数的には図(第165図)の様に遍在するが本遺跡に於いては、特に短軸方向を推定値に頼ることが多い為長軸規模を主要な規準として相対的に以下の様に分類した。

- 1) 大型住居址 長軸8m以上。2・3・13号住居址(3軒)
- 2) 中型住居址 長軸4.5以上、8 m未満。。更に30㎡を境界として(大)(小)に二分した。
  - (大) 面積30㎡以上、5・6・8・14・17・22・33号住居址 (7軒)
  - (小) 面積30㎡未満、1 · 4 · 9 · 20 · 21 · 24 · 27 · 29 · 31 · 32号住居址(10軒)
- 3) 小型住居址 長軸4.5m未満 18·23·25·28号住居址(4軒)



第165図 住居址規模別形態比較図

大型住居址と中・小型住居址との割合 は単純計算では1:10の数値がえられ る。また便官的ではあるが、長軸×短 軸によって床面積を計測した平均値は 大型住居址53.9m²、中型(大)住居址 33.2m<sup>2</sup>、中型(小)住居址23.3m<sup>2</sup>、小型 住居址14.2㎡を測る。大型住居址はほ ば50~58㎡の間にまとまり、中型住居 址中最大規模である17号住居址の40.5 miに比しても隔絶した規模を有し、普 遍的にも相対的にも「大型住居址 | の 要件を満たしているといえよう。

本遺跡における床面積平均値は28.9 (≒30m²) であり、住居址規模分布の中央に位置する値で ある。計測しえなかった9住居址に関しても、その残存部及び、柱穴間距離等から推定すると、ほ ば中型住居址の範疇に入るものと思われる。

小型住居址としたものの床面積平均値は14.2mである。23号、25号、28号住居址等では他住居 址例に比し柱穴を壁に近づけて上屋を構築する事によって、実質的な床面積の増大を図っている 事がみとれる。単純な一次元的計測値では小型住居址と中型住居址の床面積平均値の差は9㎡ 程を有しているが、実質的な居住空間の差はより縮まる可能性も認められる。しかし、この場合 物置スペース等としての壁際の空間は極端に縮少化されるであろう事は否めない。2組認められ た拡張住居址は、両者共ほぼ相似形を呈して拡張され、21号→22号住居址は 6 m²・32号→33号住 居址は8.5㎡規模を大きくしている。その際、21号・22号住居址はほぼ同位置に柱穴を設けたもの と思われるが、32号・33号住居址は柱穴間距離を60~70cm程延長している。床面積の増大に伴っ て、上屋構造も当然拡大すると考えられ、それに対する対応であろう。

全体的な傾向としては、小型住居址は方形に近く、規模を大きくするに従い長軸方向をより延 長する傾向が窺える。

#### 住居址(内)施設

本遺跡住居址に於て、址内施設としては、炉・周溝・柱穴・貯蔵穴・出入口施設・壁際ピット・ 壁外ピット・ベッド状遺構等があげられる。一般的な意味で住居址内施設と規定した場合、壁外 ピットを除外し、床下土壙的ピットを含めるべきであろうが、ここでは、住居址床面に伴って、 つまり住居址使用時に同時に利用されたと考えられる諸施設に関してとりあげた。

<炉址> 21軒の住居址から22ヶ所の炉址が検出された。すなわち大型住居址である 3 号住居址か ら2ヶ所の炉址が検出された他は1住居址1ヶ所の炉を持つものである。検出されなかった他の 住居址についても址内に於いてその想定位置に著しく攪乱を受け確認をなしえなかったものであるが、18・27号住居址に関しては中央部北寄りから炉の検出をなしえず、本来炉をもたない住居址であった可能性を否定するものではない。また15号住居址では中央やや北寄りから焼土溜りが検出された。これは床面への掘り込みを確認しえず焼土の状態更に上面から出土した土製勾玉の存在等からも、炉址と考えるよりも、他の性格である可能性が強い。本遺跡に於ける炉址は、3号住居址に存在する副炉ともいうべき小型の炉址を除くと全て住居址中央から、北側の柱穴間線の間にすなわち所請「内区」の北半部に位置するものである。また3号住居址の副炉についても東側柱穴間線の内側すなわち「内区」内に設けられていた。住居址中央に炉を持つものは、24号・28号住居址の2例であるが、この2住居址は共に隅丸方形を呈するものである。炉は全て地床炉で、平面形は不整円形~円形を呈するものである。炉石の使用が確認されたものは、4・5・13・23号の各住居址であるが、基本的には炉の住居址内部側に使用されている。また炉址に伴うとも考えられる小ピットが検出された例は3・4・9・17・24号の各住居址があるが、これは9号住居址を除くと全て炉石とは逆に、炉の住居址外側に設けられており、炉に伴う施設と、炉の使用状況を物語るものであろうか。いずれにしても本集落に於ける炉址はほとんどが住居址中央やや北寄りに位置し、ほぼ同形態の地床炉であることは、これも強い済一性を感じさせる。

< 柱穴 > 33軒の住居址中、柱穴を確認しえた住居址は28軒である。検出しえなかった5軒の住居址に関しても、削平が激しく柱穴の存在自身を否定するものではない。すなわち本集落に於いては、基本的には全ての住居址が柱穴を持つものであると考えられる。

柱穴の形態・規模に関しては、掘り方面からの検出が多かった為明らかにしえないが、9号・ 13号・24号住居址等では柱根の状態がよく窺えた。柱穴の掘り込みは、掘り方底面より更に深く掘 りこむものが多く、床面から30~40cmを測るが中には50cmを超えるものが含まれる。柱穴の数、 配置は、4 本主柱穴のものが大多数を点めるが 5・11・13・16・22・ 26 号住居址は柱穴が 2 ヶ所 しか検出されず全て長方形に配列された一方の列のみの検出であり、また33号住居址は4本主柱 穴の南西隅部柱穴を欠いた状態であるが、これらは住居址の遺存部等から考えて、本来4本柱で あったものが攪乱の為に失なわれたものとしたい。4号住居址については、33号住居址と同様な 状態で北西隅部柱穴を欠いているが、床面の比較的良好な部分でもあり、3本柱であるか4本柱 であったのかについて断定しえなかった。大型住居址である2号住居址は片列で3本の柱穴が確 認されており、6本主柱穴の住居址である。また15号住居址は遺存が悪くピットは1ヶ所検出さ れたのみだが床面遺存部等からは柱穴ではない可能性が強い。4、6本柱穴は平面長方形・方 形を基準に配置されているが、6・18・21・22・23・27・28・29・32号住居址は矩形・平行四辺 形を呈しており、特に小型・中(小)型住居址にその傾向が認められる。以上本集落は数軒を除 いて4本柱を基調として上屋を構築されたものと思われるが、上屋構築に関係するものとしては 他に壁外ピットが3・4・5号住居址に認められた。規模、形状にさほど規格性がなく、間隔も 不定であったが住居址外をほぼ一巡する様に検出された。検出された住居址の規模にバラつきは

あるものの、全て扇形に拡がる集落の扇頂部に位置し、かつほぼ同一等高線上に並ぶ住居址である事は興味深い。

< 貯蔵穴> 一般的に弥生時代後期の住居址では炉の反対側の壁に接してやや大型のピットが設け られ貯蔵穴と呼称されている。その目的・機能に関してはいまだ不明な点が多いが、ここでは「貯 蔵穴」としてとり扱った。本遺跡では16軒の住居址から貯蔵穴が検出された。形状は円~楕円形 を示すものが主流を占めるが、4 号住居址は隅丸方形を、9 号住居址が隅丸長方形を呈している。 規模も様々で最大は11号住居址の115×85cm、最小は21号住居址の径35cmである。攪乱の為2・7 ・10・15・16・19・22・26・30号住居址ではその存在を明らかにしえなかった。それら以外の8 軒の住居址(5・14・18・24・25・27・28・31号)では貯蔵穴は付設されなかったと考えられる が、内訳は小型-3軒、中(小)型3軒・中(大)型2軒となり全体的に貯蔵穴を持たない住居 址は比較的小規模である傾向が認められる。他に貯蔵穴周囲に土堤状盛り上がり(凸堤)を巡らす ものがある。3・6・8・13・17号の各住居址で、3号住居址では凸堤内側に小ピットが設けら れ、13号住居址では同じく凸堤内にほぼ同規模の2穴の貯蔵穴が設けられた可能性もある。ま た3・6号住居址では凸堤内側に、8号住居址では凸堤外周に沿って土器が認められた。凸堤の 付設された貯蔵穴を有する住居址は大型(3・13号)が2軒、中(大)型(6・8・17号)の3 軒であり、規模の大きな住居址に認められる傾向にある。他遺跡の類例としては、県内では西田 遺跡(塩山市)1号住居址・京原遺跡(境川村)4号住居址・久保屋敷遺跡(韮崎市)1号住居 址・坂井南遺跡(同)1次調査1・2・6号住居址・同B区2・4号住居址などがある。本遺跡 での有り方としては規模の大きい住居址に付設される傾向にあるが、他遺跡例では比較的平均規 模の住居址中に散在する傾向にあり、坂井南(1次調査)1・6号 住例などは逆に小型住居址に認 められるものである。集落内でのいわば土堤付貯蔵穴を有する住居址の占める割合は、西田1: 9、京原1:4、久保屋敷1:4、坂井南5:18、本遺跡5:33である。土堤付貯蔵穴の機能、 時期等未だ明らかにされているとはいいがたいが、それを有する住居址が1集落内で占める割合 ・集落構成上の位置など多様な有り方が窺がえる。

< ペッド状遺構>他に注目すべき住居址内施設として3・21号住居址で認められたベッド状遺構的な床面の盛り上りがある。両者共に不定形を呈し床面からは5~10cm程の高さを有している。3号住居址のものは入口部左側で壁に接して認められたもので、土堤付貯蔵穴と相対して存在し、上面には2~3ヶ所の小ピットが設けられ、床下からは上面が貼床で覆われる床下土壙的ピットが検出された。21号住居址のものは北壁(炉奥)際に設けられ上面に貼床の痕跡が残る。

両者共、形状、位置共に共通性が認められず、上面も一部(21号住居址)に貼床の痕跡が残る程度であり構築もさほどしっかりしたつくりではない。床面からの立ち上がりは緩やかではあるが明確に段差を意識して構築されている。近隣の遺跡例としては、若干時代は降るが、坂井南遺跡B地区8号住居址に認められ、本遺跡3号住居址例と同様、炉と相対する壁の向って左隅部に設けられている。弥生時代の住居址に認められる所謂ベッド状遺構との関連が注目されるが形状・

住居址内での位置等疑問が残るところである。しかし住居址内他部位とは明らかに区画して設けられておりその性格・機能は注目される。

<出入口施設>弥生時代住居址の出入口施設は、従来主要には炉に相対する壁の住居址長軸線上に想定され梯子穴とされる斜行ピット、住居址の張り出し部、壁外ピット等がその存在を示すものとされてきた。

本遺跡に於いても同部位にピットが存在する住居址は2・3・6・8・9・20・24・32号住居址と8軒を数える。20、24号住居址は2本1組のピットが認められ、また3号住居址も2本1組となる可能性が強い。他はほぼ長軸線上に1ヶ所ピットが設けられている。長軸線上に存在するピットに関しては、棟持柱の機能なども考えられているが、ここでは住居址の規模・炉・柱穴との位置関係等から出入口施設としておきたい。

また 4 号住居址では、長軸線上で炉の相対する壁中央際にやや大きめのビットが設けられ、貯蔵穴の可能性を残しており逆に炉の偏った側の壁(北壁)中央部に 3 穴1 組のピットが設けられ出入口施設の可能性を示している。本址は、壁に沿って内・外にピットを有する住居址で、それらの性格を特定する事は難かしいが、北壁中央に存在するものが出入口施設とするならば、本遺跡にあって特異な例といえ、大型住居址である 3 号住居址と向いあうかたちとなる。

本集落に於ける住居址内施設の有り方は、基本的には、北西-南東方向に主軸を持ち南東壁中央部に出入口施設を、住居址中央やや奥に炉を構築するものであろう。

#### 配置 (第166図)

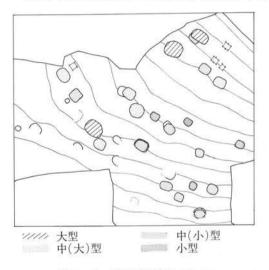
六科丘遺跡から検出した住居址は33軒にのぼるがそれらは西向傾斜面中位から下位に占地している。全体的には標高438m程の9・10—K区を扇頂部とし、428~429mの等高線を扇端線として80°~85°に拡がる扇形を呈して展開しており、この扇形の範囲はグリッド数にして69グリッド、約6,900㎡となる。この分布範囲外では住居址の存在を示すと考えられる、落ちこみ、焼土、土器溜り等は検出されなかった。従って、六科丘遺跡に於ける集落は、この扇形を示す狭い範囲内にほぼ33軒の住居址、4棟の掘立柱建物遺構等によって営なまれていたものと考えられる。

これら33軒の住居址のうち、重複して存在したものは5例10軒(1号→2号、7号→8号、19号→20号、21号→22号、32号→33号)を数える。このうち21・22号住居址、32・33号住居址の2例については拡張住居址と考えられる。これらの重複例は1・2号住居址例をのぞくと、中型住居址として分類した住居址間に認められたものである。6本柱を有すると考えられる大型の2号住居址が、中(小)型の1号住居址上面に重複して構築されている事は2号住居址の性格、1号2号住居址間の関係をとらえるうえで興味深い。

この集落範囲内での住居址等の配置を平面的に観察すると大略次の様な特徴が看破しうる。第 1点として、扇頂部で他の遺構と距離を保ちかつ一定程度集中する1群の遺構が認められる。1 号~5号住居址及び1号~3号掘立柱建物遺構がそれであり、これら8軒の遺構は更に1m程の 比高差を有しながらそれぞれ同一等高線上に並ぶ。3~5号住居址の西には農道が走っており、 住居址の存在した可能性を否定するものではないが、全体的には他の住居址群から直線距離にして $20\sim30\,\mathrm{m}$ 、比高差にして $3\,\mathrm{m}$ 程の間隔を保っていると考えられる。この一群は $1\cdot2$ 号住居址例でも理解しうる様に全て同時期に存在したものとは考えられないが、この空間が集落内に於て他から隔されていた可能性は否めないであろう。

第2点として、住居址がほぼ同一等高線上に並んで存在している。扇頂部に占地する一群については先に述べた通りであるが、それら以外についても、その傾向が窺われる。すなわち、7・8・17・18・19・20・(23)・25号の各住居址が433mの等高線上に並び、次いで6・9・10・13・(14)・15・21・22号の各住居址が431mの等高線上に並んで構築されている。更に11・12・16・26・28・29号の各住居址が430mの等高線上に、30・32・33号の各住居址が、428mの等高線上に配されている。住居址のこの様な並び方が集落構成上におけるグループのあり方を反映したものであるかについては俄には判断しがたいが、集落内での居住域の選定に集落総体としての何らかの規制が働いていた事を窺わせるものである。

最後に住居址規模との相関関係であるが、まず大型住居址である2・3・13号住居址及び、そ



第166図 規模別住居址分布図

れに次いで40㎡台の規模を有する17号住居址が、扇形のいわば放射線上に存在している。次いで、扇形の扇端部側から扇頂部に向って、すなわち斜面に向って右側に比較的小規模の住居址が集中する傾向が認められ、小型住居址(18・23・25・28号)は全てが、また中(小)型住居址はその8割(4・20・24・25・27・29・31・32号)が集落南半部に存在する。中でも一番急斜面を呈する南側扇端部に集中する一群(26・27・28・29・30・31・32・33号)は最大規模の33号住居址をとっても32㎡程であり、最小規模の住居址(1・9号)でも24~25㎡を測る北半部における住居址とは異った有り方を示している。

# A B B 第167図 掘り方模式図

#### 掘り方 (第167図)

当該期住居址における掘り方について整理・分析を加えた例としては、「床面の二重構造」として月の輪平・南部谷戸遺跡(静岡県富士宮市)で注目され、次いで向原遺跡(神奈川県平塚市)などでも目的意識的に調査・分析が加えられている。

本遺跡にあっても、削平等の為床面に於いて住居址の形態・規模等を明らかにできなかった事もあり極力掘り方の検出に務めた。その結果削平が著しい10・30号住居址を除く他の全ての住居址で掘り方が認められた。そ

- のうち、形状を把握しえなかった7・15・26号住居址及び拡張前の住居址上部に構築された、22・33号住居址を除く26軒の住居址の掘り方をA~Cの3類に大別した。
  - A類 掘り方が床下全面に及び、底面は平坦或いは凸レンズ状・凹レンズ状を呈するものである。全体的に浅く、底面の凹凸が激しい。(1)・(2)・(3)・6・18・21・23・24・27・29・32号住居址 (11軒)
  - B類 壁沿いを幅1m程に亘って深く掘り込み、住居址中央部が浅く掘られ台状部をつくるもの(BI類)、壁際を一旦浅く掘り段部を形成するもの(BI類)とが認められた。
     BI類 (4)・8・9・11・13・14・16・20・31号住居址(9軒)
  - C類 B類とは逆に、壁沿いを浅く中央部が深く掘り込まれるが、壁沿い部は掘り方底面に貼り 床土を薄く貼ったのみである。(5)・19・28号住居址(3軒)

B II 類 12・17・25号住居址(3軒)

尚形状を明確にしえなかった、7・15・26号住居址もA或いはB類に属すると考えられる。A類の掘り方を有するものが全体の30%弱、B類のものが39%、C類が10%弱となる。住居址の形態、規模との関係にふれてみたい。まず規模との関係については、ほぼ全ての住居址が掘り方を有しており、住居址の規模と掘り方の有無とには何らかの関係は認められなかった。しかし掘り方形態別に住居址規模との関係をみると、A類では、大型住居址、2 軒(1・2号)中(大)型住居址1 軒(6号)中(小)型住居址6 軒(1・21・23・27・29・33号)小型住居址2 軒(18・23号)となる。次いでB類では大型住居址1 軒(13号)中(大)型住居址3 軒(8・14・17号)中(小)型住居址4 軒(4・9・20・31号)小型住居址1 軒(25号)となる。最後にD類は中(大)型住居址1 軒(5号)小型住居址1 軒(28号)となる。従って資料数の少ないC類を除くと、全体的にA類は大型及び小規模の住居址に、B類は平均的規模の住居址に伴うものといえよう。次いで形態との関係でみると、A類では楕円形1 軒(32号)隅丸長方形9 軒(1・2・3・6・18・21・23・27・29号)隅丸方形1 軒(24号)となる。B類は楕円形7 軒(11・12・13・16・17・20・31号)隅丸長方形4 軒(4・8・14・25号)方形1 軒(9号)となり、C類は隅丸長方形1 軒(5号)隅丸方形1 軒(28号)である。全体的な特徴として、A類は隅丸長方形を主体とし、B類は楕円形、隅丸長方形が主流を占めるものといえよう。

掘り方の深さについてみると、A類が平均5~15cm程であるのに対し、B類では方台状部が5 cm強で、壁沿いでは20~30cm以上掘り込まれている。埋土は1~2層に分けられ、ほぼロームブロックを多量に含んだ弱粘性茶褐色土で、その上面をローム小ブロック・黒褐色土粒及び小礫粒等で構成された貼床土がおおい、強く固められている。従ってB類の方台状部、Bn類壁際段部、C類壁沿い部では、貼床層と地山(掘り方底面)との間に僅かに掘り方埋土が間層として認められる程度である。再度平面形態に注意すると、B類としたものの方台状部が、ほば各住居址の「内区」と一致することが観察しうる。勿論、13、20号住居址の様に「ズレ」が認められる側も存在するが全体的には方台状部の四隅に柱穴が配置され、その上面が「内区」となっている。

こうした掘り方の機能としては月の輪遺跡群においても、防湿・保湿効果をあげている。確かにローム層の場合、真夏の乾燥時にはヒビ割れ、逆に降雨時には透水性の悪さの故に表面がベトつく事は我々も発掘時に於いて体験するところである。上部に上屋を持ち、炉で火をたき続けたとしても、こうした自然条件から自由であったとはいい難く、そうした課題を解決する一方策として床下に排水・保水性のよい土を入れ上面を床面とする方法を採ったであろうことは充分領首しうるところである。

ところで、山梨県内に於て住居址の掘り方を記録した例は少なく、その出現時期をも含めて多くの事に言及する事は慎まなければならない。しかし管見にふれたところを列記すれば、曾根遺跡 (櫛形町)で4 軒中 3 軒の住居址から掘り方が検出され、全て A 類であった。上の山遺跡 (同町)では 5 軒中 4 軒の住居址から掘り方が検出され、A・B  $_{\rm I}$ ・B  $_{\rm II}$ ・C 類が各々 1 軒ずつである。他に久保屋敷遺跡(韮崎市)では「住居構築時の荒掘り」として指摘され 4 軒中 2 軒の住居址で A・B (B  $_{\rm II}$ ) 類が各々 1 例ずつ確認されている。また西田遺跡(塩山市)では弥生後期から五頒期に至る 8 軒の住居址中 7 軒の住居址に掘り方が認められ、詳細は不明だが A・B 両類が混在する可能性が強い。以上県内においても極く僅かな例ではあるが、当刻期の掘り方例が知られており、一般的な有り方と同様、掘り方をもたない住居址及び、異なる掘り方を有する住居址が同一集落内に混在する傾向を示しているといえる。

他に3号及び4号住居址から検出された床下土壙的ピットが注目される。共に貼床除去後に検出されたもので、掘り方埋設後に掘り込まれ、上面に貼床が施されている。住居址の構築から使用の過程における、どの時期に伴うものであるかは明確にしえないが床面使用時においてはその役割を終えていた可能性が強い。特に3号住居址に認められたものは、床面がベット状遺構的様相を示していた部位に認められたものでそれとの関係は興味深いところである。

#### 出土遺物

土器については前節にゆずることとし、ここでは特殊遺物について触れてみたい。

本集落から出土している特殊遺物は、磨製石鏃1、土鈴2、土製勾玉1、磨製石製品1を数える。磨製石鏃及び磨製石製品は3号住居址床面から出土し、金の尾遺跡4号住居址例と同様のものである。土鈴は13号住居址覆土、5-0区確認面から出土し、共に壹個体であるが接合しえなかった。土製勾玉は15号住居址中央に認められた焼土上面から出土している。3号・13号住居址は共に大型の住居址であり、15号住居址は小規模であるが炉・柱穴の存在に疑問のもたれる特殊な住居址である。5-0区は13・15号両住居址が存在するグリッドで土鈴は両住居址の中間から出土した。

以上の様に本集落に認められた特殊遺物は大型住居址である3号・13号住居址及び、13号住居址を中心とする狭い空間に集中しているといえ、本集落における大型住居址の性格、内容を究明する上で示唆にとむものといえよう。

他に土器以外の遺物としては、砥石、石器数点及び金属製品15点の出土をみた。金属製品の内

訳は鉄製品14点、青銅製品1点である。住居址別にみると4号住居址1点、12号住居址1点(青銅製品)、14号住居址1点、15号住居址1点、20号住居址1点、22号住居址3点、29号住居址1点、31号住居址6点であり、このうち床面に認められたものは14号住居址1点のみで、4号住居址は壁外ピット覆土、31号住居址は掘り方埋土内から、他は住居址覆土内から認められた。当該期における出土例としては比較的高い数値を示しており、また住居址が著しく削平を受けている事、出土位置の問題等全てを住居址に所属させる事については検討の余地を残しているといえよう。断定しえない資料での検討は慎まねばならないところであるが概略的には14号住居址を除くと中(小)型住居址に集中している事は留意するに値しよう。

尚12号住居址から出土している青銅製品についても、同様な資料が管見に触れず本址に所属させるべきかについて判断に迷うところであった。しかし出土位置が床面から僅かに浮いて認められた完形土器と床面とに挟まれた状態であった事から一応本址に伴うものとしたものであるが、その類例、性格等については大方の御教示をいただきたいところである。

#### 2 掘立柱建物遺構

六科丘遺跡からは 4 棟の掘立柱建物遺構が検出された。 1 ・ 2 号掘立柱建物遺構は 6 本柱( 2 間× 1 間)、 3 ・ 4 号掘立柱建物遺構は 4 本柱( 1 間× 1 間)の建物である。 1 ~ 3 号掘立柱建物遺構は集落の扇頂部に位置し、 2 軒の大型住居址等と共に 1 群を形成している。 4 号掘立柱建物遺構は北側扇側線中央に位置し、ほぼ集落の北端にあたる。 1 ~ 3 号掘立柱建物遺構は主軸方位を N-11°~19°-Wにとり住居址の示す主軸方位とほぼ一致する。 4 号掘立柱建物遺構は N-1°-E或は N-89°-Wにとる。 1 ・ 2 号掘立柱建物遺構は約 1 mの比高差を持って並立し、 2 ・ 3 号掘立柱建物遺構はほぼ同一主軸線上に連なっており同時存在した可能性が強い。本集落の掘立柱建物遺構は、 1 号掘立柱建物遺構柱穴覆土から弥生時代後期に属する土器片が出土しており、本遺跡では後出する遺物、遺構が認められない事などから、弥生期の集落の一構成要素と認定した。

弥生時代後期~古墳時代初頭に属する掘立柱建物遺構については近年その検出例が増加しつつあるようである。そのいくつかを例示すると、静岡県東部では、登呂遺跡(静岡市),藤井原遺跡、目黒身遺跡(沼津市)、天間沢横道下遺跡(富士市)、月の輪平遺跡(富士宮市)等がある。次いで長野県南部では高松原遺跡(飯田市)に認められ、関東南部では成増一丁目遺跡(東京都) ##5 根丸島遺跡(神奈川県)などがり、県内では侭ノ下遺跡(渡辺、1984)がある。

登呂遺跡では4棟の掘立柱建物址(1間×1間、1間×2間)が検出され倉庫址とされている。 藤井原遺跡では古墳時代前期の住居址86軒に対し、9棟の掘立柱建物遺構が検出され、1間×1間、1間×2間、1間×3間、2間×3間と多種に亘っている。集落内での占地は各住居址群に付属する様に散在している様である。天間沢横道下遺跡では住居址6軒に対し1棟の掘立柱建物遺構が検出され、日黒身遺跡では1間×2間の掘立柱建物遺構が1棟検出されている。遺跡全体では32軒の住居址が検出されているが、西ブロックとされた8~15号住居址(大廓期)の中央空間に存在しており、同住居址群に所属する可能性が強く、そうであるとすれば、住居址7~8軒に対 し掘立柱建物遺構1棟の割合となる。月の輪平遺跡では86軒の住居址に対して2棟の掘立柱建物遺構が検出され、それぞれの主軸方位は、住居址のそれのもっとも集中する方向と同一にしている。高松原遺跡は後期前半座光寺原式期を主体とする集落であるが、該期の住居址31軒(続く中島式期を含めて35軒)に対し8棟に及ぶ掘立柱建物遺構が検出され、集落南西部に位置し大型住居址が同北東部に認められた事と好対称を示す。そのうち5棟はやや中央に偏って1号囲溝址をL字型に囲む様に、また他の3棟は集落最西端に位置している。規模は1間×2間のもの4棟、1間×3間のものが4棟となり、大小2型式のものが1対ずつ同時存在した可能性が強く、集落内部における小単位の一構成要素として大きな意味を持っていたものとされている。成増一丁目遺跡では弥生時代から古墳時代初頭に属する住居址42軒に対し3棟の掘立柱建物遺構が検出されている。当遺跡では集落の変遷を8期にとらえ、各期6~7軒の住居址で構成されたと認識し、3棟の掘立柱建物遺構は、IV・V・VI・VII期にそれぞれ伴うものとされている。従って住居址6~7軒に対し1棟の掘立柱建物遺構が存在していた比率となる。根丸島遺跡は弥生時代から歴史時代までほぼ継続的に営まれた集落遺跡であり、700余軒の住居址、8棟の掘立柱建物遺構等が検出されている。8棟の掘立柱建物遺構のうち1棟は確実に弥生時代後期に所属するものとのことであるが、現在資料整理中であり、詳細は明らかでない。

六科丘集落内における住居址と掘立柱建物遺構との構成比率をみると、ほぼ8:1となり目黒身遺跡、藤井原遺跡、天間沢横道下遺跡例と近似した数値を示している。集落内での景観的有り方は、比較的まとまって存在しており、高松原遺跡例と同様といえよう。また該期集落の縁辺部に占地しており、これは高松原・成増一丁目遺跡等と比較的似かよった様相である。更に大型住居址との関係でみると、集落の一半部に大型住居址が、他半部に掘立柱建物遺構が存在する、高松原・成増一丁目遺跡例とは相反し両者が近接しかつ一グループを形成する有様を示している。また地域的には静岡県東部にその検出例が多い様に見受けられる。これは登呂遺跡での発見以降目的意識的にその検出に務めた結果とも考えられ、他地域においても今後検出例が増加する可能性を否定しえない。

以上、僅かな管見に触れた例ではあるが、弥生時代後期から古墳時代初頭に認められる掘立柱建物遺構は、その出現時期も様々であり、その集落内における占地、他住居址との位置関係も多様性を持つ。集落の主要構成要素である一般的な住居址との関係、また様々な解釈がなされているが集落内において、ある特定の役割を担うものと思われる大型住居址との関係など、決して一様ではない。これらは弥生時代後期から古墳時代に向い成長しつつあった、それゆえに諸矛盾を拡大させつつあった集団内における諸関係の有様を反映しているものであろう。

更には、当該期に於いて掘立柱建物遺構を有する集落と有さない集落とがみられることは集落 を超えた共同体間の歴史的諸様相を表現しているものといえよう。

厳密な意味での歴史的性格については、今後の資料の増加を待つと共により精緻な分析・検討 が必要とされようがともあれ剰余生産物の集積の場と考えられる倉庫址(倉庫を掘立柱建物遺構のみ にもとめるべきではないとしても)の有り方は、該期における剰余生産物そのものの管理・蓄積 の諸様相を反映しているものと考えられる。更には、該期における生産力の拡大、剰余生産物の 増大を軸とした様々な社会的諸関係の歴史的変動の様相を物語るものといえよう。

#### 3 集落の変遷と構成

以上述べてきた様に六科丘に弥生時代末から古墳時代初頭にかけて営まれた集落は、ほぼ住居 址33軒、掘立柱建物遺構 4 棟、小堅穴遺構 2 基等で構成されている。遺構の主軸方位、内部施設 の配置等には強い済一性を窺わせるが、一方住居址の形態、規模などは多様性を示すものといえ、 集落の時間的連続性も、伴出する土器から知られる限りではかなり限定されたものといえる。

ここでは、伴出する遺物(土器)、遺構の切り合い関係等によって集落の変遷をたどりつつ、 その構成にふれてみたい。尚遺構各説で述べた様に住居址であるか否か確定が難しかった10・30 号住居址については、時期決定が不可能であったこともあり、一応除外して考えたい。

#### 集落の変遷 (第168~170図・第62表)

伴出している土器を概観すると、六科丘集落は比較的限定された時間幅の中で営まれたものといえる。しかし土器の分析、遺構の重複、位置関係等によれば、すべてが同時に存在したものとは考えられず、ほぼⅢ期に分けることが可能であった。

出土土器の分析によるとⅢ時期に区分しうる。

I 期は3・5・29号住居址及び、1号掘立柱建物遺構

II 期は6・8・12・20・28・33号住居址

Ⅲ期は9·13·22·24·27号住居址及び2号堅穴状遺構となる。

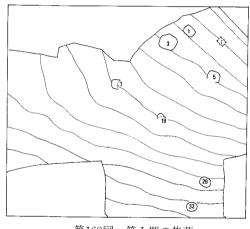
他の住居址については、遺物が少なかった事などもあり、出土土器による時期区分は不可能であった。

ところで、いままで土器の様相及び住居址の位置関係によって  $I \sim III$  期まで区分けしてきたのではあるが、ここで掘り方の様相で検討してみたい。まず注目すべき第 1 点は、I 期とした住居址は A · C 類を採用し、B 類は II 期に於いて初めて出現することである。第 2 点は I 期では主体を占めていた A · C 類が II · III 期では少数となり、しかも 2 号 · 6 号住居址を除くと中(小)型及び小型住居址に於いてのみ採用されている事である。つまり全体的には A · C 類から B 類へ移行する傾向が窺え時期決定をなしえない住居址のうち掘り方の明確にしえなかった15号住居址を除くと、他は II 或いは III 期の時期を与えてほぼあやまりないであろう。

また焼失住居址のうち6軒は時期が確定されているが、I期に該当するものは見当らず全てII・ Ⅲ期に所属している。従って残り3軒の焼失住居址に対しても、Ⅰ期とするよりもⅡ・Ⅲ期の時 期を与えた方がより自然であろう。

掘立柱建物遺構は4棟検出された。前記した様に、その位置関係からは1号・2号・3号掘立 柱建物遺構は、集落扇端部に認められる一群に含まれる。この一群は、大型の2号及び3号住居 址にそれぞれ付属する二期に区分けする事ができる。従って1号及び2・3号掘立柱建物遺構に ついてもそれぞれの時期にあてはめて考える事ができよう。出土土器の様相から1号掘立柱建物 遺構はⅠ期に該当するものであり、3号住居址に、2・3号掘立柱建物遺構はⅡ期とし2号住 居址に、それぞれ組み合わせる事が自然であろう。また4号掘立柱建物遺構は、上記した1・2 ・3号掘立柱建物遺構が存在する一群から離れて認められるが、これも同様に当該群から離れて 存在する大型住居址である13号住居址と、セット関係にあるものと考えたい。

以上、概略的にⅠ~Ⅲ期に時期区分した訳であるが、いま少し詳しく各期ごとにその変遷を追 ってみたい。



第168図 第Ⅰ期の集落

第Ⅰ期 第Ⅰ期の集落は、1・3・5・7・ 19・29・32号住居址の7軒と1号掘立柱建物遺 構で構成される。

その内訳は、大型住居址1軒(3号)、中(大) 型住居址1軒(5号)中(小)型住居址3軒(1 ・29・32号)、不明2軒(7・19号)であり、小型 住居址が存在しない事は注目すべきであろう。 掘り方はA及びC類が認められ、住居址の平面 形態は隅丸長方形と楕円形を呈するものとが存 在する。また焼失住居址は存在しない。炉は確 認しうる範囲内では全ての住居址に認められ、 大型住居址(3号)からは2ヶ所検出された。 貯蔵穴は5号住居址には付設されなかった可能

性があるが、他の住居址には全て認められた。

3号住居址は2基の炉とベッド状遺構を有し、更に磨製石鏃を出土し、3軒の大型住居址の中 でもひときわ特異な性格を有するものといえる。

この期の集落は更に3小群に区分できる。

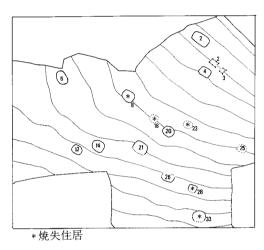
Ⅰ ─ A群は集落扇頂期に位置し、大型住居址(3号)中(大)型住居址(5号)・中(小)型 住居址(1号)及び掘立柱建物遺構(1号)からなる一群である。

Ⅰ-B群は 433mの等高線に沿って存在する一群で2軒の住居址(7・19号)からなるが、共に 遺存状態が悪く詳細は不明である。

I-C群は集落西南部の急斜面部に占地する一群で2軒の住居址(29・32号)からなり、共に中(小)型住居址である。

第II期 第II期の集落は、2号・3号掘立柱建物遺構と、6・8・12・20・21・28・33号住居 址及び、2・4・14・26号住居址、あわせて11軒+ $\alpha$ からなる。前者については先に述べた通り であるが、後者4軒をII期とした事については若干説明を要しよう。

2号住居址は、I期の特徴とした、ヒモ状貼り付けを有する折り返し口縁壺破片が出土しているが、その出土位置は覆土上層であり、遺構に伴わない可能性が強い。また1号住居址を切って構築されており、3号住居址に対して1・5号住居址が、2号住居址に対して4号住居址がそれぞれ組みあわ



第169図 第II期の集落

されて存在したと解釈した方が正合性があろう。

4号住居址であるが、これは扇頂部の一群に所属し、 $1\cdot 3\cdot 5$ 号住居址(I 期)に続いて2号住居址と共に存在したとするのが妥当と考えた。また $14\cdot 26$ 号住居址については、それぞれ $13\cdot 27$ 号住居址との共存が不可能であり、I 或いはII 期のどちらかに属するものと思われたが、掘り方の形態がB 類であるところからII 期に所属せしめたものである。

尚、18・23・25号の3住居址についてはⅡ或 いはⅢ期に該当すると考えられるが、そのどち らかに決定する事はできなかった。その為文章 中の「α」はこの3軒の存在を示すものと考え

ていただきたい。

これらの住居址の内訳は、大型住居址 1 軒(2号)、中(大)型住居址 4 軒(6・8・14・33号)、中(小)型住居址 3 軒(4・20・21号)、小型住居址 1 +  $\alpha$ 軒(28及U18・23・25号)、不明 2 軒(12・26号)である。平面形態では隅丸長方形、隅丸方形、楕円形を呈するもの三者が共存し、掘り方形態では A、B、C 類が認められる。焼失住居址は 3 +  $\alpha$ 軒存在する。炉は不明のものを除くと全てに付設されている。貯蔵穴は14・28号住居址には設けられなかった可能性が強い。この期に出現した D 小群に含まれる 21号住居址には、ベッド状遺構が存在する。

この期の集落もまた、更に4小群に分けることができる。

II — A群 集落扇頂部に位置し、大型住居址 (2号)・中 (小)型住居址 (4号) 及び、掘立柱建物遺構 2棟 (2・3号) からなる一群である。

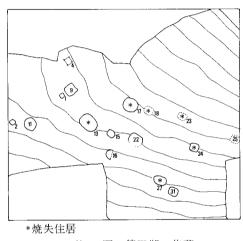
II - B群 433 m の等高線に沿って存在し中(大)型住居址 1 軒(8号)・中(小)型住居址 1 軒(20号)・小型住居址 α(18・23号) からなる一群である。

Ⅱ-C群 集落西南部の急斜面部に占地し中(大)型住居址1軒(33号)小型住居址1軒(28

### 号) 規模不明住居址1軒(26号) からなる一群である。

II — D群 該期から出現する一群で、集落扇端部中央の 430 ~ 431 mの等高線上に位置する。中(大)型住居址 1 軒(14号)、中(小)型住居址 1 軒(21号)、規模不明住居址 1 軒(12号) からなる。 21号住居址はベッド状遺構を持つ住居址で、B、C、D群の中間点に占地しており、孤立して存在するものとも考えたが、拡張後の住居址である22号住居址が、Ⅲ—D群を構成している事から II 期においてもD群に含ませた。

また集落北端に中(大)型住居址(6号)が孤立して存在する。これはD群との間に、後に大型住居址(13号)等が出現する空閑地を残して占地しており、大きくD'群ともいえる。



第170図 第Ⅲ期の集落

第Ⅲ期 第Ⅲ期の集落は、4号掘立柱建物遺構、9・13・22・24・27号住居址及び、11・15・16・17・31号住居址、あわせて10軒+αからなる。

2号住居址は、I、II期には遺構が存在せず本期になって13号住居址を中心とする一群が出現する、集落西北部の緩傾斜を呈する空間に占地している事から本期に所属するものとした。15号住居址については、炉、柱穴が明確にしえず、また土製勾玉を出土する特殊な遺構であり、13号住居址とセットとして考えるのが妥当であると判断した。16・17・31号の各住居址は、掘り方の形態及び、焼失住居であるか否かで検討するとII或いはIII期に該当する事は明らかであ

るがそれぞれ、B・C・D群とした小群に属しており、各小群の数量的変遷を考えると、Ⅲ期となる可能性がより強いと思われる。

III 期の住居址の内訳けは大型住居址 1 軒(13号)、中(大)型住居址 2 軒、( $17\cdot22$ 号)中( $17\cdot22$ 号)中( $17\cdot22$ 号)中( $17\cdot22$ 号)中( $17\cdot22$ 号)中( $17\cdot22$ 号)中( $17\cdot22$ 号) 及び小型住居址  $17\cdot22$  ( $18\cdot23\cdot25$ 号) となり、17号住居址が $17\cdot22$  ( $17\cdot22$ 号) となり、17号住居址が $17\cdot22$  ( $17\cdot22$ 9号) となり、17号住居址が $17\cdot22$ 9 ( $17\cdot22$ 9号 ( $17\cdot22$ 9号) となり、17号住居址が $17\cdot22$ 9 ( $17\cdot22$ 9号) となり、 $17\cdot22$ 9号 ( $17\cdot22$ 9号) はいりにはいいたと考えられ、野蔵穴は24・27・31号 (住居址には設けられていない。

9号住居址は本集落で唯一方形を呈する住居址であり、また該期に出現する小竪穴遺構(1号)と主軸を同一にするものである。また本址は、S字状口縁甕(破片)等他住居址とは若干様相を 異にする土器群を出土している事も興味深い。

また、拡張住居址である22号住居址がベッド状遺構を失っている事も興味深い。

この期の集落も3小群に区分できる。

Ⅲ-C群 集落南西部の急傾斜面部に存在する。中(小)型住居址2軒(27・31号)からなり共に貯蔵穴を付設しない。このC群の斜面上位に存在する24・25号住居址も貯蔵穴を伴なわず、集落南西部に存在する住居址が貯蔵穴を伴なわないものであると仮定すると、25号住居址をⅢ期としうる可能性が強いともいえる。

III 一 D群 I 期において住居址が存在せず、II 期に於ても 6 号住居址と12・14・21号住居址に挟まれた空間すなわち、I・II 期には遺構が構築されなかった集落北西部の緩傾斜面に占地する一群である。大型住居址 1 軒(13号)中(大)型住居址 1 軒(22号)規模不明住居址 2 軒(15・16号)からなる。この 1 群は該期に移動してきた大型住居址 (13号) や15号住居址などを含み、特徴のある一群である。 I・II 期に大型住居址を伴っていた A 群に替わって大型住居址を持つ 1 群としての地位を占めるものであるが、掘立柱建物遺構を失なっている事は注目される。

また、集落北西端に11号住居址、2号小竪穴遺構、D群と掘立柱建物遺構(4号)との中間に9号住居址・1号小竪穴遺構がやや離れて存在する。両者共、13号住居址を囲う様に占地しており全体でIII-D'群ともいうべき有り様を示している。

|      | I        | 期    |     |    |      | 期        |     | Ⅲ 期        |    |          |      |          |      |                    |            |
|------|----------|------|-----|----|------|----------|-----|------------|----|----------|------|----------|------|--------------------|------------|
| 住居番号 | 形状       | 規模   | 掘   | 備考 | 住居番号 | 形状       | 規札  | 模          | 掘  | 備考       | 住居番号 | 形状       | 規模   | 掘                  | 備考         |
| 1    | <b>A</b> | 中(小) | A   |    | 2    | <b>A</b> | 大   |            | Α  | 辉製<br>石鏃 | 9    |          | 中(小) | Ві                 |            |
| 3    | <b>A</b> | 大    | (A) |    | 6    |          | 中(大 | :)         | Α  |          | 13   | 0        | 大    | ( B <sub>I</sub> ) | 焼失         |
| 5    | <b>A</b> | 中(大) | С   |    | 8    | <b>A</b> | 中(大 | :)         | Ві | 焼失       | 22   | <b>A</b> | 中(大) |                    |            |
| 7    |          |      | 0   |    | 12   | 0        |     |            | Вп |          | 24   | Δ        | 中(小) | Α                  | 焼失         |
| 19   |          |      | С   |    | 20   | 0        | 中(小 | <b>、</b> ) | Ві |          | 27   | <b>A</b> | 中(小) | Α                  | 焼失         |
| 29   | <b>A</b> | 中(小) | А   |    | 28   | Δ        | 小   |            | С  | 焼失       |      |          |      |                    |            |
| 32   | 0        | 中(小) | А   |    | 33   | 0        | 中(小 | <b>、</b> ) |    | 焼失       |      |          |      |                    |            |
|      |          |      |     |    | 4    | <b>A</b> | 中(小 | <b>、</b> ) | Ві |          | 11   | 0        |      | Ві                 |            |
|      |          |      |     |    | 14   | <b>A</b> | 中(大 | :)         | Ві |          | 15   |          |      | 0                  | 主 製<br>勾 丰 |
|      |          |      |     |    | 21   | <b>A</b> | 中(小 | <b>、</b> ) | Α  |          | 16   | 0        |      | Ві                 |            |
|      |          |      |     |    | 26   |          |     |            | 0  |          | 17   | 0        | 中(大) | Вп                 | 焼失         |
|      |          |      |     |    |      |          |     |            |    |          | 31   | 0        | 中(小) | (B <sub>I</sub> )  | İ          |

▲ 隅丸長方形△ 隅丸方形□ 方 形○ 楕円形

第62表 時期別住居址一覧表

更に、Ⅰ・Ⅱ期を通じて大型住居址と共に一群を構成していた掘立柱建物遺構が、大型住居址(13号)から分離して集落北縁に孤立して占地している。

最後に視点を変え、各小群(A~D群)の変遷と特徴とを検討しておきたい。

A群 集落扇頂部に位置し、大型住居址、掘立柱建物遺構、及び一般的住居址によって構成され、I・II期と存続するがⅢ期には消滅する一群である。

B群 433 mの等高線に並ぶ一群で I~Ⅲ期まで存続し、各期平均 2~3 軒の住居址が認められる。 I・Ⅱ期は平均的規模の住居址からなるが、Ⅲ期には規模の上では二極分解した可能性が強い。尚、同一等高線上で距離を隔てる25号住居址は、本小群には含まれない可能性が強い。

C群 集落南西部に位置し、I~Ⅲ期に亘って認められるが、比較的小規模の住居址からなり、最大規模のものでも31.2㎡ (33号住居址) である。また本小群は、Ⅲ期には貯蔵穴を有さないと考えられ、孤立して存在する24号住居址をも含む可能性もある。

D群 集落北西部の緩傾斜面にⅡ期から出現する1群である。Ⅲ期には大型住居址(13号)が存在し、同期の掘立柱建物遺構(4号)も巨視的にみると該群の外れに位置するといえる。大きく D'群として把ええる可能性もあり、多様性に富む1群である。

### 集落の構成

以上述べてきた様に、六科丘遺跡に於ける弥生時代末期~古墳時代初頭の集落はⅢ期に亘り、それぞれ大型住居址、掘立柱建物遺構、一般的住居址(及び小竪穴遺構)の三者によって、構成されるものである。また各期の集落を、3~4の小住居址群に区分したが、これら小住居址群は、その内容からも理解される様に集落内に於いて自立した、すなわち一個の生産―消費単位を示す有り方をみせているのでは決してありえない。一時期の集落総体が、内部に様々な多様性あるいは矛盾を内包しつつも、一つの単位集団としての様相を有していたものといえよう。

ここでは、各期の集落(単位集団)の構成を概観したい。

第 I 期の集落は、大型住居址 1 軒、掘立柱建物遺構 1 棟及び中型住居址 4 軒・規模不明住居址 2 軒からなっており、ほぼ扇形に拡がる分布を示している。

これらは先にみた様に、 $I-A \sim I-C$ の三群に区分できるが、基本的にはI-A群と他の二群との二つに分かれるものであろう。

I-A群は他の住居址から距離を隔てて、集落全体を眺望する位置に存在する一群で大型住居址(3号)と掘立柱建物遺構(1号)などを含む。他の4軒はI-A群の下位に展開しており、それぞれ2軒1組で一群をなしている事は先に述べた通りである。すなわちI-B群は433 mの等高線に、I-C群は集落南西端に位置している。これらは全て中型住居址であり、ほぼ均一の様相を持つものである。

また若干の異同はあるもののI期において集落の南側範囲が決定されているといえる。すなわち、扇頂部には1号掘立柱建物遺構が、扇端部には32号住居址が占地して扇形に展開する集落の南部扇側線を規定しており、25号住居址が僅かにその範囲から逸脱しているにすぎない。

ともあれ、この時期の集落の特徴の第1点は大型住居址と掘立柱建物遺構がセットとして一群を形成し、かつその一群が他の住居址と距離を隔てて占地している事である。第2点は大型住居址を含む一群以外の住居址がほぼ均一な様相をもち、従って小住居址群も、ほぼ同質の内容を示していることである。

第II期の集落は、大型住居址1軒、掘立柱建物遺構2棟、一般的住居址、10軒+αからなり、 これも扇形に展開している。

この期も基本的にはI期とほぼ同様の様相を示し、II—A群と他の三群とに大別しうる。扇頂部に占地する、II—A群は大型住居址(2号)掘立柱建物遺構(2・3号)を含む一群でI—A群の建て替えと考えられる。他の住居址も、I期と同様にII—A群の下位に距離を隔てており、3~4軒1組で一群をなしている。これらの小住居址群はこの期から出現したD群を除くと、それぞれI期に認められたB~C群の後を継ぐものと考えられる。このD群の出現や、各小群が構成住居址数を増すなど、集落の拡大傾向が認められるが、このD群という新たな小住居址群の出現或いは分離は、集落構成員の単なる数量的増大を示すのみではなく、集落内部に於ける集団構成の変質をも語るものといえ、III期における大型住居址の移動をも準備するものといえよう。

B群は18乃至23号住居址、C群は12号住居址、D群は28号住居址とそれぞれの内部に、小型あるいは比較的小規模の住居址を含んでいる。同時に小住居址群間においても、比較的大規模のD群(面積65㎡)と、小規模のC群(面積45㎡)とが認められ、相対的ではあるがそれぞれの居住空間に面積の差が存在する可能性もある。また I 期~II 期への変遷過程では住居址の重複例の拡張をも含めて、4 例 8 軒認められたのに対し、II~III 期では1 例しか認められず、集落内での住居址占地に対する規制のあり方の差とも思われる。

II期の集落はD群の出現によって、その景観にも変化をきたす。つまりI期において扇形の南半部に縦長に展開していたものが、6号住居址を北縁とするほぼ完全な扇形を呈する様になる。

II 期の集落構成の特徴を再度まとめると以下の様になろう。第1点としては I 期と同様に大型住居址と掘立柱建物遺構とがセットとなって 1 群を形成し、他住居址から隔されて占地する。第 2 点は集落に、確実に拡大傾向があらわれ D 群に象徴される様に集団内の質的変化をも伴うものである。第 3 点は小型住居址の出現がある。これは同時に特に B ~ D 群の内部において住居址間の規模の差があらわれる事を示している。更に相対的とはいえ、 B ~ D 群の住居址群間においても格差が認められる様になる。

つまり住居址規模の格差を概略的に表現した場合 I 期にあってはA群 $\rightarrow$  (B·C) 群であった ものが、II 期には A 群 $\rightarrow$  (B·D $\rightarrow$ C)群と表現できよう。

第Ⅲ期の集落は、大型住居址1軒、掘立柱建物遺構1棟、一般的住居址9軒+α、小竪穴遺構2基からなり数量的な面では、Ⅱ期とほぼ同様である。しかしⅡ期~Ⅲ期は、本集落が大きな変化をとげた時期といえよう。まずそれまで扇形を呈して展開していた集落が429m~433mの等高線の幅の中で帯状を呈する様になる。これは扇頂部に占地していたA群が消滅し、それに伴い他

住居址から距離を隔てて存在していた大型住居址が集落を眺望する位置から、集落内部へと移動してきた事とそれに伴って、I・II期には大型住居址と組になって存在していた掘立柱建物遺構が集落の北縁部へ移動して孤立して存在する様になった事の結果である。

A群に替って、大型住居址を含むⅢ-D群はⅡ-D群よりやや北へ移動し従来遺構の存在しな かった集落北西部緩傾斜部へと進出する。このⅢ−D群には、土製勾玉を出土する15号住居址が 存在し、またそれまで認められなかった方形平面を呈する9号住居址や小竪穴遺構(1号)など が含まれる可能性もあり。際立った多様性を示している。土製勾玉を出土した15号住居址は、炉、 柱穴が検出されない事等、他住居址とは異った様相をみせ、位置関係からも大型住居址である13 号住居址と対になる可能性も強い。その推論が認められるならば、I・Ⅱ期の大型住居址が保持 していた祭祀的側面を表現しているものとも考えられる。本遺跡において唯一方形平面を呈する 9 号住居址はまた 1 号小竪穴遺構が附属する住居址でもあり、S 字状口縁甕破片を出土する等、遺 物の面からも他住居址と若干様相を異にする住居址である。Ⅲ期においてもやや後出的な要素を 持ち、異相を感じさせる9号住居址の出現が、本集落の廃絶直前と思われる事は興味深い。II期 にひきつづいて住居址間の規模の差が一層拡大する傾向にあり、小住居址群間の格差もより顕著 になる。大型住居址である13号住居址を除くと、17号住居址が約40㎡と中(大)型住居址中でも 最大規模を誇るのに対し、他の住居址はほとんどが中(小)型及び小型住居址となる。更に小住 居址群に含めえないと考えられる住居址(24・25号)が認められる。これは小住居址群の分解を 暗示すると共に、集落内における住居址占地の拡散を示すものともいえ、先に述べた様にI・II 期に認められた重複・切り合い関係が、極端に数をへらす事と軸を同じくするものといえる。す なわち、小住居群ごとに存在していた住居址規制が弱まった事をあらわしていると考えられる。

ここでⅢ期の集落構成の特徴をまとめておきたい。第1点は、これまで一般住居址から隔って存在していたA群の消滅である。この事の意味は、大型住居址が集落の内部に進出した事(或は集落内部にとりこまれた事)と、大型住居址と掘立柱建物遺構との分離、との二点にあろう。第2点は集落内部で各住居址間の格差が拡大した事、と同時に多様性が認められる様になった事である。第3点は各小住居址群が、分解しつつある事。第4点は、上記3点の結果であろうが、住居址配置の規則性が弱まっている事、などがあげられる。

以上述べてきた様に、六科丘遺跡の弥生時代集落は、各期共大型住居址・掘立柱建物遺構を含む10軒内外の住居址によって構成され、ほぼⅢ期に亘る変遷をたどる事ができた。なかでもⅡ期からⅢ期への変化は、集落の景観を一変させるに充分なものであったといえよう。

六科丘の集落を構成した集団をどの様なレベルの共同体として想定するかは一旦おくとしても 集落の景観、様相にあらわれたこの様な変化は、当然にも集団(共同体)内部における、また集 団 (共同体) 間における諸関係の変容の表現であることは疑いえない。ここでは最後に集落の様 相に顕われた変動の中から何点かの問題点をとりあげておきたい。 本遺跡からは3軒の大型住居址、4棟の掘立柱建物遺構が検出されている。それらは $I \sim IIII$ 期に亘ってそれぞれが組になって存在していた事はすでに述べた通りである。

大型住居址の機能・性格については、従来議論のあるところであるが、集団内においては「『単位集団』・世帯共同体の結合を実現し、維持する場所として機能して」(田中、1979) おり、また集団間にあっては集団それ自身を表現する場であったことはまちがいがいのないところであろう。掘立柱建物遺構は、登呂遺跡での発見以来、高床式倉庫として理解されている。集団共有の貯蔵施設であり、集団総体による生産物管理の「場」であったといえよう。

本集落では、I・II期に於ては大型住居址と倉庫址とが一群を形成して一般住居址とは隔されて占地している。この事は、この一群(A群)が、I・II期にあっては、集団の結合を実現する「場」であると同時に、集団総体の生産物管理の「場」としても機能していた事を示すものであろう。しかしながらIII期に至ると様相は全く異なり、それまで一般の住居址からは超越した存在であったA群は消滅する。大型住居址はその周辺に空間を保ちながらも、集落の内部へ移動してくる。と同時にそれまで共に一群を形成していた倉庫址が、大型住居址から離脱し、単独で存在する様になる。占地の状態による観察では、それまでA群が担っていた機能が分解したものともいえよう。

さきに概観した様に掘立柱建物遺構と、大型住居址、一般住居址との関係は、時代、地域、集落の規模等によって様々な様相を示しており、機能の分解等は軽々しく口にすべきことでは勿論ない。しかしながら同一集落内における両者間の、或いは両者と一般住居址との位置関係の変化は少なくとも該集団における結合の有り様や、集団総体としての生産物管理の様相の変化を物語っているものとはいえよう。

各期10軒内外の住居址によって営なまれた本集落は更にその内部を幾つかの小住居址群に分けることができた。それが集団内に於けるどの様な関係を表現しているのかはともかく、一つの「単位集団」を示すと考えられる六科丘集落の内部に、更に3~4群のグループが継続して存在していた事は確実であろう。この小住居址群もII期からIII期への移行の過程で大きな変動をみせている。すなわち、集落を代表する位置を占めていたA群が消滅・分解して集落内へ移動する。また I・II期においてはA群と対峙する存在であり、ほぼ同質の内容を持って、景観的にもそれぞれまとまりを有していた小住居址群がIII期には各小住居址群間における拡差をみせ、同時に各小住居址群が有していた住居占地規制を弱める傾向を示す。また I 期においては、大型住居址を除くとほぼ同規模の住居址で構成されていたものが、II 期以降小型住居址の出現に象徴される様に比較的大規模の住居址と、より小規模の住居址とが顕われる。つまり、大型住居址を含む一群と、比較的中規模の、それぞれまとまりをもった2~3群とによって構成されていた集落が、それぞれの小住居址群のまとまりを弱めつつ、より大きな数軒の住居址と、比較的小規模の住居址とに分解する傾向が認められる。これも、大型住居址の変遷に見られた事と同様に、集団内部における、関係性、共同性の変質の表現であろうか。

六科丘の集落は I・II 期においては、大型住居址、掘立柱建物遺構、一般的住居址とによって構成されていた。III 期に至ると小竪穴遺構と共に方形を呈する住居址(9号)や一般的居住空間とは性格を異にすると考えられる住居址(15号)などが出現する。この様な集落構成の多様化が、何によってもたらされたものであるかは、俄には論じがたいがこれも I・II 期からⅢ期への集落内部の社会的変質を窺わせるものであり、特に方形住居址である9号住居址はS字状口縁甕破片及びそれに伴う土器群を出土する住居址で、小竪穴遺構と組になって存在する等、持異性を有するものである。

S字状口縁襲の出現・波及がどの様な歴史的・社会的変動に因るものであるのかは、未だ充分に解明されているとはいいがたい。しかし弥生時代末から古墳時代初頭にかけての共同体(おそらくは幾つかの農業共同体によって構成された「政治的結合体」)間の交通関係の変動が、その根底にあることはあきらかであろう。ここで、それらの問題に触れる余裕はないが、山梨県内に於いても、S字状口縁襲の出現・主流化は、該期における生産関係、社会的・政治的諸関係の変容を示すものとして理解されている。

僅が数片の土器片によって多くを語ることは、慎しむべきであろうが、本遺跡に於いても、S 字状口縁甕の出現と、集落の変動期(II 期→III 期)とが、ほぼ同時に認められる事は注目すべき 点であろう。両者から直接の因果関係を導くことは性急にすぎるとしても、S字状口縁甕の波及 に象徴される共同体間の交通関係の緊張が、各共同体内に於ける「単位集団」の変容と深く結び ついているのであろう事は想像に難くない。

ともあれ、南西面に臨む谷水田を生産基盤として営なまれてきた六科丘集落の成立から終焉までの道程は、甲府盆地における弥生時代から古墳時代へと至る時期の社会的・政治的変容課程の1断面を、我々に示しているものといえよう。

本節は臼居との討議にもとづき清水がまとめたものであるが、最終的な文責は清水が負うものである。 (清水 博)

- 註1 住居址規模の「大」「中」「小」はあくまでも1集落内における相対的な分類であるが、石野博信氏は「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究-家-』の中で、50㎡以上を大型住居址と見做したうえで、それが弥生時代中期から古墳時代にかけての集落内に顕著に認められる事を指摘されている。
- 註 2 石野氏は、住居址内部と主柱穴間線によって「内区」「外区」とわけ、それぞれの機能差を 指摘されている。(註1文献)

註3 ここで本遺跡における掘り方と月の輪平遺跡群、向原遺跡例との対比を示しておく。

 本遺跡
 向原遺跡
 月の輪平遺跡群
 向原遺跡では中央方台状部上面、壁際部

 A
 a
 C
 上面に貼り床を行なわず、そのまま床面としたものをそれぞれc2・d2類とされている。

 BI
 BI
 BI
 月の輪平遺跡群では、A・B両類で中央方台状部が「貼床の有無にかかわらず掘り

方をもたずあるいはわずか数cmほどの厚さのみの」掘り方が認められている。向原遺跡における  $C_2$ 類に近似するものであろう。本遺跡の場合、間層の有無・貼り床の厚さに相違はあるものの全てに貼り床がなされており、基本的に同一のものとして理解した。

本遺跡のBII類は向原遺跡で、本遺跡C類は月の輪平遺跡では認められなかった。

- 註4 3号(大型)住居址は、遺構断面図の観察では中央部が浅く周辺部が深くなるタイプである。本址は掘り方平面図が不備であったため、A・B I 類 どちらとすべきか判断に迷ったところである。しかし、調査時の所見・写真観察等では掘り方中央部が明確な方台状部をなさず、ダラダラと盛り上がるタイプであり、ここではA 類として分類した。
- 註5 曽根博明氏(大和市教育委員会)の御教示による。
  - 尚、中田英氏(神奈川県教委)によると、向原遺跡(神奈川県平塚市)においても精力的に掘立柱建物遺構の検出に務めたが、弥生時代後期に属するものは確認しえず、同遺跡においては、本来存在しなかった可能性が強いとの事である。
- 註6 本集落はその規模・構成内容から、1個の生産労働単位として把握しうるものと考えられ、 また掘立柱建物遺構-貯蔵穴の有り方から窺える様に、消費単位としても把えうると考えられ る。
- 註7 両群とも、各3軒の住居址でなるが、面積を推定しうるものは共に2軒である。従って、 ここでは残る1軒はほぼ同程度の規模であると仮定した上で、面積の推定しうる2軒について 比較した。
- 註8 橋本博文氏は「甲府盆地その歴史と地域性」(橋本、1984)の中で、可耕地の飽和、人口圧の増加、指導者層の折出・技術革新の進展などをあげられている。
- 註9 Ⅲ期の集落は大型住居址(13号住)を含めその半数程が焼失住居である。従って焼失を直接の原因とする集落の廃絶を否定するものではない。しかし弥生時代末から古墳時代初頭にかけての歴史的変動期に一単位集団の移動によって営なまれた集落が、先述した様にS字状口縁霎の出現と前後して変容し廃絶を向える事はその原因を単に焼失に求めるべきではなく、社会的・政治的要因を重視すべきであろう。
- 補註1 保ノ下遺跡 (渡辺、1984) では古墳時代初頭期の竪穴住居址1軒と掘立柱建物遺構1棟が検出されているが、本来の集落の一部の調査であり、検出数も前記の通りであるため、ここでは一応除外して考えた。

| 備     |  | 出入口施設  | ベッド状遺構・出入口施設           | 壁柱穴   |   | 出入口施設  |                    | 出入口施設            | 出入口施設、壁柱穴         |  |              |          | 一部壁柱穴   |                   | 中央やや北寄り、焼土留り                             |         |                     |   |        | 出入口施設                         | ベッド状遺構   |  |                      | 出入口施設             |                      |         |   |   |   | ,  |   | 出入口施設  |   |
|-------|--|--|------------------------|---|---|--|--------------------|------------------|-------------------|--|--------------|----------|---|-------------------|--|---------|---------------------|---|--------|-------------------------------|--|--|----------------------|-------------------|----------------------|---------|---|---|---|----|---|--|---|
| 掘り方   | Α  | Ą  | A or (B)               | $\mathrm{B_{I}}$  | ()  | Α  | 0                  | Bı               | BI                |  | Bı           | Bır      | (B <sub>I</sub> )                                   | BI                | 0  | Bı      | Bır                 | A   | ن<br>ن | Bı                            | А  | ×  | А                    | А                 | Вп                   | 0       | A   | S   | А   |    | (B <sub>I</sub> )                                   | А  | ×   |
| 昨 藏 六 | 入口部右脇  | ذ  | 入口部右脇円、周囲に土堤           | 入口右脇、隅丸方  | ×   | 入口右脇、楕 周囲に土堤   | ٠                  | 入口右脇不円 周囲に土堤     | 南東コーナー            |  | 入口右脇 楕       | " 不用     | 入口右脇不円(2)周囲に土堤                                      | ×                 |  | ٠       | 入口右脇不円 周囲に土堤        |   |        | 入口右脇 楕                        | 入口部右脇  | (;)  | 入口部右脇                | ×                 | ×                    |         | ×   | ×   | 入口右脇  |    | ×   | 入口右脇   | П   |
| 柱 穴   | 4  | (9)  | 4(壁外ピット)               | (4)(壁外ピット)  | (4)(壁外ピット)  | 4  |                    | 4                | 4                 |  | (4)          | 4        | (4)   | 4                 | 8  | (4)     | 4                   | 4   |        | 4                             | 4  | (4)  | 4                    | 4                 | 4                    | (4)     | 4   | 4   | 4   |    | 4   | 4  | (4)   |
| 周溝    | 0  | 0  | ×                      | ×   | ×   | ×  |                    | ×                | ×                 | 1  | ×            | ×        | ×   | ×                 | ×  | ×       | ×                   | ×   | ×      | 0                             | ×  | ×  | ×                    | ×                 | ×                    | ×       | ×   | ×   | ×   |    | ×   | ×  | ×   |
| 应     | 中央やや北  | 11   | 2 ケ所、中央北(P)東半中央        | 中央やや北 (P)(S)  | (S) "   | 11   | ن                  | ٠                | 中央北寄り (P)         |  | ۶.           | 中央北寄り    | 中央北寄り (S)   | 中央北寄り             | $\stackrel{\textstyle (\times)}{\times}$ | 6       | 中央北寄り(P)            | $\widehat{\times}$  | 中央北寄り  | 中央北寄り                         | 中央やや北  | 11   | 中央北 (S)              | 中央 (P)            | 6.                   |         | $\widehat{\times}$  | 中央  | 中央やや北   |    | (中央やや北)   | 中央やや北  | "   |
| 規模    | $5.7 \mathrm{m} \times 4.2 \mathrm{m} = 23.9 \mathrm{m}^2$ | $8.3 \mathrm{m} \times (5.8) \mathrm{m} = 48.1 \mathrm{m}^2$ | 8.3 m ×7.0 m = 58.0 m² | $5.6 \mathrm{m} \times (4.3) \mathrm{m} = 24.08 \mathrm{m}^2$ | $6.3 \text{m} \times (4.8) \text{m} = 30.24 \text{m}^2$ | $6.7 \mathrm{m} \times 5.0 \mathrm{m} = 33.5 \mathrm{m}^2$ | $\times$ (4.7) m = | 6.3m×5.0m=31.5m² | 4.9m×4.8m=23.52m² | RANG ALAN SAN AND SAN  | 5.7 m ×(?)—— | 5.4m×(?) | $9 \text{ m} \times (6) \text{ m} = 54 \text{ m}^2$ | 6.9m×5.5m=37.95m² |  | (?)×4 m | 7.1m ×5.7m =40.47m² | $4.4 \mathrm{m} \times (3.6) \mathrm{m} = 15.84 \mathrm{m}^2$ |        | 5.4m×4.4m=23.76m <sup>2</sup> | $6 \text{ m} \times 4.5 \text{ m} = 27 \text{m}^2$ | $6.6 \mathrm{m} \times (5) \mathrm{m} = 33 \mathrm{m}^2$ | 4.1m ×3.3m = 13.53m² | 4.6m×4.7m=21.62m² | 4.2m ×3.2m = 13.44m² |         | $5.9 \mathrm{m} \times (4.3) \mathrm{m} = 25.37 \mathrm{m}^2$ | $3.7 \mathrm{m} \times (3.8) \mathrm{m} = 13.68 \mathrm{m}^2$ | $5.5 \mathrm{m} \times 4.5 \mathrm{m} = 24.75 \mathrm{m}^2$ |    | $5 \text{ m} \times (4) \text{ m} = 20 \text{ m}^2$ | $5.4 \mathrm{m} \times 4.4 \mathrm{m} = 23.7 \mathrm{m}^2$ | $6.2 \text{m} \times (5.2) = 31.2 \text{m}^2$ |
| 里     | 隅丸長方形  | "  | "                      | "   | "   | "  | "                  | "                | 方 形               | NAME OF THE PROPERTY OF THE PR | 椿円形          | "        | "   | 隅丸長方形             | 計測不能                                     | 楕 円 形   | "                   | 隅丸長方形   |        | 精 円 形                         | 隅丸長方形  | "  | "                    | 隅丸方形              | 隅丸長方形                | 計測不能    | 隅丸長方形   | 隅丸方形  | 隅丸長方形   |    | 椿 円 形   | "  | "   |
| 主軸方位  | N-16°-W  | N-26°-W  | N-40°-W                | N-21°-W   | N-30°-W   | N-4°-W   | 8号とほぼ同一            | N-32°-W          | N-8 -W            |  | N-12°-W      | N-15°-W  | N-14°-W   | N-11°-W           |  | N-35°-W | N-31°-W             | N-23°-W   |        | N-24°-W                       | N-32°-W  | N-32°-W  | N-14°-W              | N-43°-W           | N-28°-W              | N-45°-W | N-39°-W   | $N - 30^{\circ} - W$  | N-31°-W   |    | N-33°-W   | N-45°-W  | N-45°-W                                       |
| 住居    | П  | 2  | က                      |   | 22  | 9  | 2                  | ∞                | 6                 | 10   | 11           | 12       | 13  | 14                | 15                                       | 16      | 17                  | 18  | 19     | 50                            | 21   | 22   | 23                   | 24                | 25                   | 92      | 27  | 28  | 56  | 30 | 31  | 32   | 33  |

第63表 六科兵遺跡住居址一覧表

# 第VI章 六科丘古墳

# 第1節 調査に至る経緯

六科山古墳は六科山の丘頂上から北へのびる尾根先端に占地している。この尾根は発掘調査以前は全面が桑園となり、削平が著しかった。その為、本調査に先立って行なわれた遺物の表面採集、及び確認調査においてもその存在を確認しえなかったものである。勿論本調査団は、工事主体者・工事担当者の理解のもと調査区域外にあっても、抜根・排土作業時における遺構・遺物の発見に務めた。尾根上の抜根作業に伴い、現場での表面踏査を実施したところ、先端頂部から抜根時に引き出されたと思われる鉄剣一口を採集し、また地形的にも自然状態とは考えられない高まりを認めた。その為、本遺跡調査団は山梨県教育委員会文化課の指導を仰ぐと共に、工事担当者である、㈱大本組に当該尾根上での作業の一時延期を要請し、一方山梨県教委、工事主体者、櫛形町教育委員会とも急拠爾後の方針を協議した。その結果、早急に墳丘、地形測量を行なうと共に、墳形・規模等の確認の為の調査を実施し、それらの結果に基き保存等をも含めた最終方針を再度協議する事とした。また確認調査等は六科山遺跡調査団が引き続き担当し、費用については別途、処置を講ずる事としたが、調査期間については、調査団の体制、六科丘遺跡の調査とのかねあいもあり、墳丘測量は83年7月末に、また確認調査に関しては83年秋に実施することにした。

# 第2節 古墳の立地

六科丘古墳は櫛形町の西半を占める市之瀬台地先端に位置している。市之瀬台地は、櫛形町上宮地から、甲西町湯沢へと南北に続く高台である。この台地は櫛形山の東麓に発達した洪積扇状地が地殻変動を受けて形成されたもので、台地上面は標高400m前後でなだらかな起伏をもち東縁は、比高差100~120mの断層崖によって盆地床と画されている。台地は北から深沢川・漆川・市之瀬川・堰野川などによって開析され、幾つかの支丘陵に分けられている。各支丘前端は断層運動に伴って生じた円丘状の高まりを有し、北から六科丘・上野山・塚原山・御殿山等と呼ばれている。そして塚原山には刃塚、上野山には物見塚古墳、六科丘には六科丘古墳とそれぞれの丘陵先端には甲府盆地を一望しうる位置を占めて古墳が築造されている。

六科丘古墳は、標高約435mの高所にその地を占める。平地部との比高差は約120~140m程で、 甲府盆地を東に一望し、山梨県に於ける古墳出現の地である曽根丘陵を遠く南東に望む地にある。 古墳ののる尾根は東・北両面が急峻な断層崖となり、西面は小谷がきざまれ、南は六科丘丘頂へ と続いている。

# 第3節 古墳の形状と規模 (附図3)

先述したように確認調査に先立ち7月26日~7月31日まで墳丘及びその周辺の測量を実施した。造成工事用に設定された座標軸を利用し、墳丘上に直交する基準線を設け基準線上に9ヶ所の基準点を設定した。基準線は古墳が前方後円形となる事も想定されたため、その予想される主軸線と同一にN-17°-Eとした。そして各基準点から平板測量を行ない現地で直接図化する方法をとった。尚縮尺は1/100とし、コンターは原則として20cmをとったが地表面の乱れを考慮して墳丘想定部分は10cmとした。その結果は附図3に示すとおりであるが、コンターラインの平面的観察では、前方後円墳をおもわせる形状であった。すなわち後円部径25~30m、前方部長15~20m程の全長50m級の前方後円墳とも考えられた。しかし前方部の盛り上がりが観察しえない事、前方部先端墳裾線を示すと思われる434.2~434.4mのコンターラインが、尾根上部からのびる434.5mのコンターラインの為に方形状に完結しえず、尾根両側に逃れている事等から前方後円墳とは断定しえず、調査団内部でも意見が分かれたところであった。視覚的に遺存が良好であった、古墳東・北部のコンターラインを基準にして、434.2~434.4mのラインが墳裾を示すものと考え、また古墳北西部のコンターラインの乱れから造り出し状の施設を持つ可能性も指摘された。また墳丘規模は現状で高さ2m弱を測ると考えられた。

いずれにせよ、削平が激しく地表面の乱れが著しい為、測量のみで墳形・規模を確定する事は 難かしく円墳・前方後円墳と両者の可能性を含みつつ確認調査の結果を待つこととした。

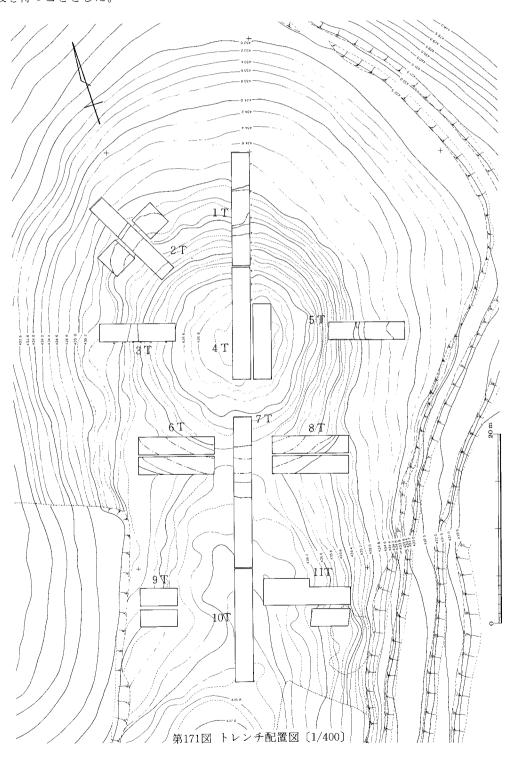
# 第4節 発掘調査

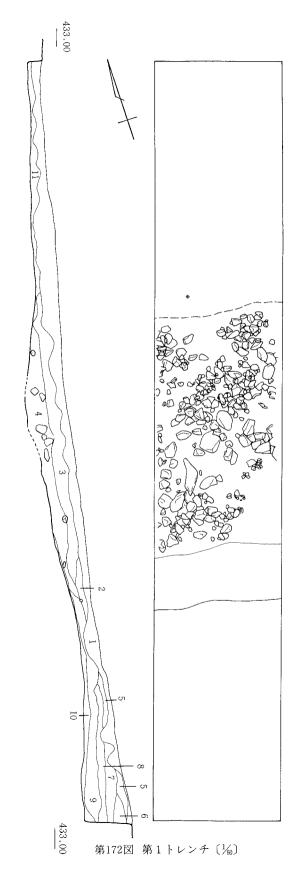
### 1 調査の方法 (第171図)

調査は、六科丘遺跡調査の区切りを待って10月1日から1ヶ月間に亘って行なわれた。今回の調査は、古墳の保存をも含めた爾後の方針決定の資料を得る為に行なわれたものである。7月末に行なった墳丘実測の結果とも鑑み、墳形・規模の確認と、内部主体の構造、遺存状態等の確認を行ない、もって古墳の時期・性格等の概略を知ることを目的とした。

発掘方法はトレンチによることとし、測量時の基準線に従って11本のトレンチを設定、トレンチの規模は原則として $2\times8$  mとした。また調査の必要に応じて追加・拡張を行なうこととした。まず墳形を確定する為に、10本のトレンチを設定した。後円部の墳裾を決定するために、 $1\cdot3\cdot5$ 号の各トレンチを、また前方後円墳であるか否かを判断する為に、前方部先端想定部に $9\cdot10\cdot11$ 号の各トレンチを、更にくびれ部と予想されたところに $6\cdot7\cdot8$ 号の各トレンチを設定した。また造り出し部を確認するために、基準線に $45^\circ$ の角度で2号トレンチを設けた。

次いで内部主体の確認の為に、墳頂部にも4号トレンチを設定した。今回の調査は主体部そのものの発掘を目的とせず、その位置、構造の種類、遺存度などの確認を行ない、本格的な調査は今後を待つこととした。





### 2 発掘調査の概要

### 第1トレンチ

(第172図 図版24)

後円部北側に設けた2×12mのトレンチである。調査の結果、円丘部は10層に分けられた。1層は耕作土で5層以下、6・7・8・9・10層は明らかに版築状の盛土であることを確認した。盛土は墳頂部より11~12mで終っており、2・3・4層は、盛土の流失と思われる。盛土の外間から幅3m強に亘って多数の礫を検出した。礫の下層は調査しえなかったが、4層の下部に敷つめられた状態で認められた。旧地表面はこの礫の部位で自然傾斜とは明らかに相違したフラット面をみせており、古墳築造時における地山整形を示すものであろう。

### 第2トレンチ

(第174図)

墳丘北西部に認められたコンターラインが乱れをみせる箇所に設けた2×10.5mのトレンチである。造り出し状の施設である可能性を認めたため、トレンチ中央部の南・北側に3×3mの拡張区を設け、それぞれ2トレンチ南拡張区、2トレンチ北拡区とした。

円丘部は7層に分けられ、1層が耕作 土、5・6・7層が盛土である。盛土は 墳頂部より15m程までなされ、2・3・ 4層は盛土の流失層であろう。盛土の外 周からは多数の礫が検出された。この 礫帯は幅約2mを有し、約8mに亘って 2 m程張り出している。墳頂部からの盛土外周の距離・礫帯の形状等から造り出し部と認定した。1トレンチと同様に旧地表面はこの礫帯の部位でフラットな面をみせている。

造り出し部は礫帯の内縁から立ち上がり、墳頂部に比し緩やかな傾斜を示して墳丘部へ連なる。

### 第3トレンチ (第174図、図版24)

墳丘西側に設けた 2 × 8 mのトレンチである。攪乱の為盛土部の状況は正確には把み得なかったが、2・3・4・5・6層が盛土の残存で墳頂部から11~12mの範囲で残っている。は把み得なかっ墳丘部の外周はフラットな面をみせ古墳築造時の整地面を最も良好に検出することができた。本来その上面には礫帯が巡る事が想定されるが、裾部のすぐ西側を後世の砂利道が走っており、

第173図 第5トレンチ〔‰〕

礫帯等は削平されている。

### 第.5トレンチ

(第173図、図版23・24)

墳丘東側に設けたトレンチで2×8mである。

5・6・7層が盛土で墳頂部から12m程まで認められる。墳裾部には比較的大きな礫が3個並んで据えられており、裾石と考えられる。このトレンチでも、墳丘外周に礫が敷かれた状態で検出されたが、他に比し量が少なくまばらであった。

礫帯と同じレベルで須恵器片が出土しいる。全て同一個体で、主要な破片は礫帯の内縁から、小破片が礫帯中に点在している。6 A トレンチ出土の物と接合した。

第5トレンチ

第1層:表土層 (耕作土層)

第2層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや弱い。)

第3層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しま

りはやや弱い。礫を少量含む。) 第4層:暗褐色土層(粘性強く、しまりは弱

い。黄色粒子を含む。) 第5層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しま

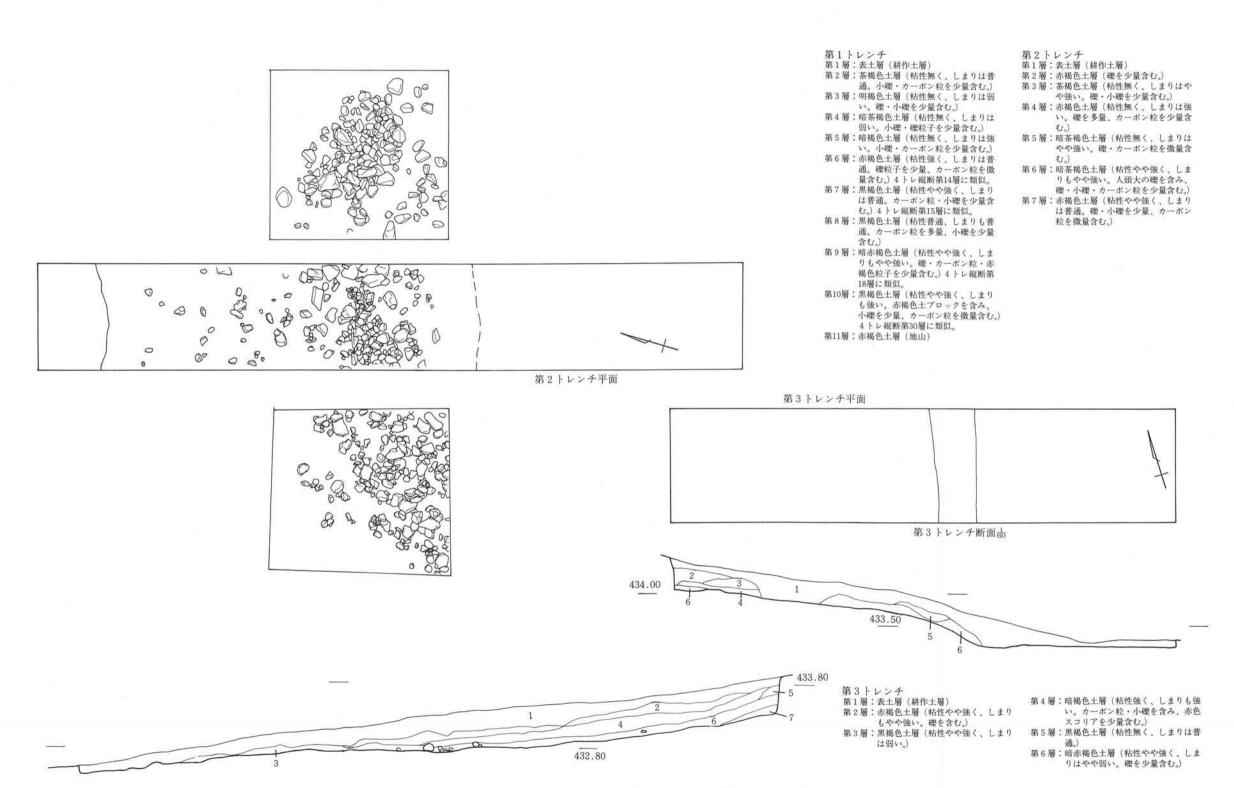
りはやや弱い。)

第6層:赤褐色土層(粘性やや強く、しまり

もやや強い。)

第7層:暗茶褐色土層(粘性やや強く、しま

りは弱い。



第174図 第2トレンチ、同南・北拡張区及び第3トレンチ [‰]

### 第6 A・Bトレンチ (第175図、図版24)

墳形確認の為くびれ部西側に2本設定したトレンチで規模はそれぞれ2×8mである。北側を6A、南側を6Bトレンチとした。

調査の結果、6 Aトレンチで墳丘の立ち上がりを検出したが、墳丘裾部は弧状を呈しており、前方部へのくびれは確認されなかった。6 Aトレンチでは1層が耕作土で、7~9層が墳丘盛土2~6層は盛土の流失である。6 Bトレンチでは1層は耕作土、4・5層が墳丘方向から、6~8層が墳丘外部方向からの堆積である。他のトレンチと同様墳丘外周から多量の、礫が検出された。このトレンチでは、礫はレベル差によって2層に分けることができ、両者のレベル差は20~25cmである。上層の礫は20×20cm以上の大きさを有し下層に比し、全体的に一回り大きい。また下層の礫は墳丘外周にそって同一平面上で幅2m程に敷きつめられた状態で検出された。上層のものは乱雑でそれぞれにレベル差も有り転落した状態であった。6 Aトレンチ下層礫面から須恵器片が一片出土し、5トレンチ出土のものと接合した。

旧地表面は礫帯の部位で、ほぼ同一レベルに整地され、フラットな面を呈している。6 Bトレンチでは礫帯外縁よりやや拡がりをみせつつ整地面からの立ち上がりが確認された。

### 第7トレンチ (第176図、図版24)

前方後円墳であるか否かを確認するため、基準線に沿ってくびれ部に設定したトレンチである。 当初2×8mで設定したが後に延長し、第10トレンチと接続した。

調査の結果、墳丘の立ち上がりと溝状の掘り込みを検出し、古墳が円形を呈することを確認した。  $19 \cdot 20 \cdot 21$ 層が盛土で、墳頂部より $12 \sim 13$ mまで達している。 $4 \cdot 8 \sim 16$ 層が墳丘からの流失、  $11 \sim 15 \cdot 17 \cdot 18$ 層が墳丘外部からの流入である。

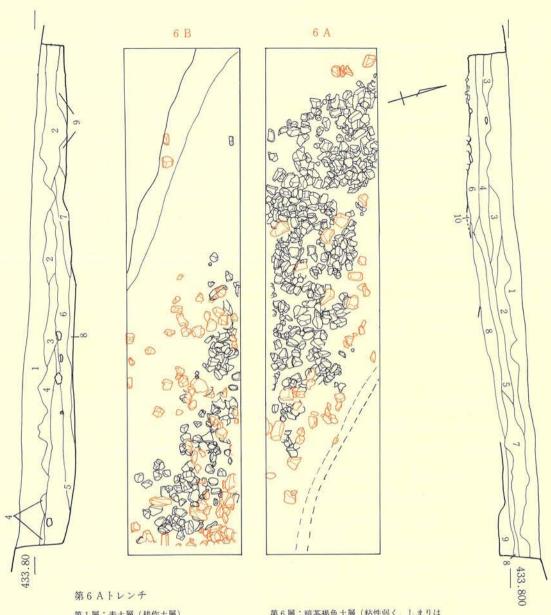
他トレンチと同様、墳丘外周に多量の礫群を検出し、6・8トレンチと同様に上・下の2層に分かれる。下層の礫帯は同一平面上に幅約2mに亘って敷きつめられた状態で検出され、径10cm内外とほぼ大きさが揃っている。上層の礫は、下層のそれに比し一回り大きい角礫で墳丘から転落した状態で認められた。

旧地表面は、この部分で所謂「丘尾切断」されており、現在確認される限りでは、深さ1~1.3 m、幅5 m程に亘っている。尾根方向からは、かなり急激に掘りこまれ、底面はほぼフラットで緩やかに立ち上がって墳丘に至る。掘り込み底面には墳丘に沿って先述した礫帯が認められ、礫帯の外周は更に一段深く削りこまれている。

礫帯下部及び礫帯外周の削り込みについては今回は調査が及ばなかった。今後の機会を待って 更に明らかにしたい。

### 第8トレンチ (第177図、図版24)

墳形確認の為、くびれ部東側に2本設定したトレンチで規模はそれぞれ2×8mである。北側



第1層:表土層 (耕作土層)

第2層:明褐色土層 (粘性無く、しまりはや や弱い。小礫を含み、カーボン粒を 少量含む。)

第3層:明褐色土層(粘性無く、しまりは強い。礫・小礫を多量に、カーボン粒 を少量含む。)

第4層:暗褐色土層(粘性やや強く、しまり も強い。小礫・礫粒子・カーボン粒 を少量含む。)

第5層:茶褐色土層 (粘性普通、しまりも普 通。礫・小礫・赤褐色礫を多量に、 カーボン粒を微量含む。)

第6層:暗茶褐色土層(粘性弱く、しまりは 普通。黄褐色礫を多量に、小礫を含 tr.)

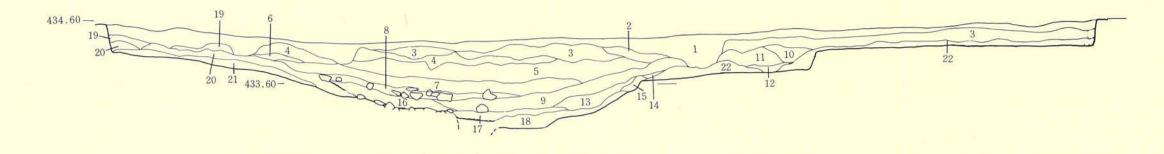
第7層:赤褐色土層(粘性弱く、しまりは普 通、礫・小礫・礫粒子を多量に、赤 褐色ブロックを少量含む。) 第8層:暗赤褐色土層(粘性普通、しまりも

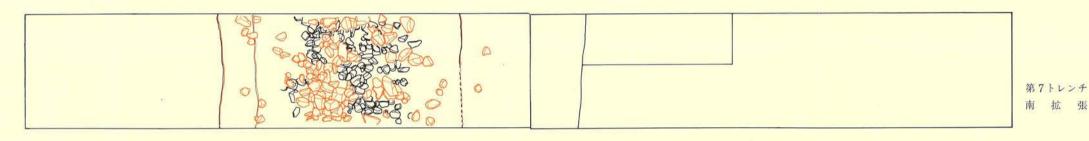
普通。小礫・カーボン粒を少量含む。)

第9層:赤褐色土層(粘性強く、しまりも強 い。礫を多量含む。) 第10層:暗黄褐色土層(粘性普通、しまりは

弱い。磔を含む。)

第175図 第6A・Bトレンチ [%]





### 第6 Bトレンチ

第1層:表土層(耕作土層)

第2層:褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。小碟 を含み、カーボン粒子を微量含む。)

第3層:暗褐色土層 (粘性普通、しまりはやや強い。礫 ・小礫・カーボン粒・褐色土ブロックを少量含

t.) 第4層:赤褐色土層(粘性やや強く、しまりは普通。礫

・小碟を多量含む。) 第5層:暗赤褐色土層(粘性強く、しまりは普通。礫を

含み、小碟を少量含む。) 第6層:暗茶褐色土層(粘性強く、しまりは普通。小碟

・カーボン散を少量含む。) 第7層:赤褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。礫 ・小礫・礫粒子を多量、カーボン粒を少量含む。)

第8層:暗黄褐色土層(粘性普通、しまりは弱い。礫を

含む。)

第9層:赤褐色土層(地山)

### 第7トレンチ

第1層:表土層(耕作土層)

第2層:褐色土層(粘性無く、しまりは強い。小碟を含

第3層:茶褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。褐色土 粒を少量含み、カーボン粒を微量含む。) 第4層:暗茶褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。

小礫を多量含む。)

第5層:明赤褐色土層(粘性弱く、しまりは普通。小礫

第6層:褐色土層(粘性無く、しまりは普通。 保を含む。) 第6層:褐色土層(粘性無く、しまりは普通。 保を含む。) 第7層:暗茶褐色土層(粘性無く、しまりは普通。 小碟 ・カーボン粒子を少量含む。)

第8層:暗褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。小 磔を多量に、磔も含む。)

第9層:暗茶褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強 い。小碟を含み、カーボン粒を少量含む。)

第10層:茶褐色土層(粘性無く、しまりは強い。小礫を 含みカーボン粒を微量含む。)

第11層:赤茶褐色土層(粘性無く、しまりは強い。小礫 を多量に含む。)

# 第12層:暗茶褐色土層(粘性強く、しまりも強い。カー

第12層・暗水梅巴工層(柏田畑)、しまりも減い。カーボン粒子を多量に、小碟も含む。) 第13層:暗黄褐色土層(粘性やや強く、しまりは強い。) 第14層:暗褐色土層(粘性やや強く、しまりは弱い。碟

を含む。)

第15層:明褐色土層(粘性強く、しまりは弱い。褐色礫 を含む。)

: 暗赤褐色土層 (粘性強く、しまりはやや強い。 小礫を含み、カーボン粒を少量含む。) 第17層:暗黄褐色土層(粘性普通、しまりはやや弱い。

壁を含む。) 第18層: 黄褐色土層 (粘性弱く、しまりも弱い。礫を多

量含む。) 第19層:赤褐色土層(粘性強く、しまりも強い。小礫を

多量含む。)

第20層:暗赤褐色土層(粘性普通、しまりも普通。小礫 ・カーボン粒を少量含む。)

第21層:赤褐色土層(粘性やや強く、しまりは普通。碟 ・小礫を多量に、ロームブロック・カーボン粒 子を少量含む。)

第22層:赤褐色土層(地山)

### 第8Bトレンチ

第1層:表土層(耕作土層)

第2層:茶褐色土層(粘性無く、しまりは普通。礫・小 礫を多量に、ロームブロックを少量含む。)

第3層:明赤褐色土層(粘性弱く、しまりは普通。礫粒 子・小礫を多量含む。)

第4層:暗褐色土層(粘性やや強く、しまりは普通。小 礫・礫粒子・赤褐色粒子・赤褐色土ブロックを

第5層:暗茶褐色土層(粘性普通。しまりも普通。小礫 ・カーボン粒を少量含む。)

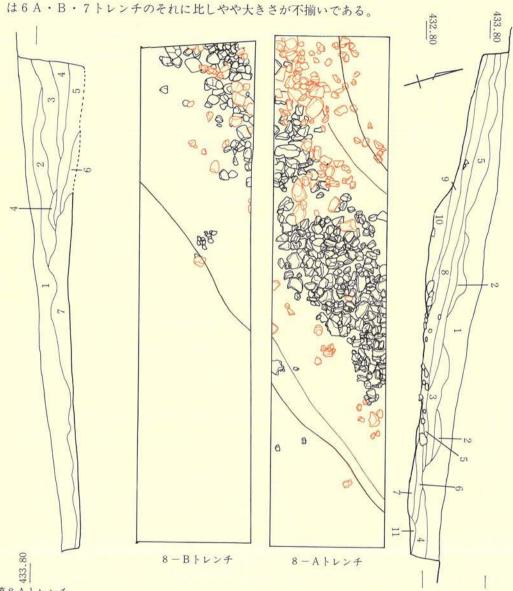
第6層:明褐色土層(粘性普通。しまりは弱い。褐色礫

を含む。) 第7層:赤褐色土層(地山)

第176図 第7トレンチ [%]

を8A、南側を8Bトレンチとした。

調査の結果は6(A・B)トレンチと対応している。8Aトレンチで、墳丘盛土を、8Bトレ ンチで整地面の立ち上がりを確認した。礫も2層にわたって検出され、下層の礫帯は墳丘に沿っ て弧状に敷きつめた状態で検出され、上層は墳丘から転落した状態でみられた。ただし下層の礫



第8 Aトレンチ

第1層:表土層(耕作土層)

第2層:暗褐色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。褐色礫を少量、 小礫・カーボン粒を微量含む。)

第3層:暗褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。小礫・赤褐色

機を少量、カーボン粒を微量含む。) 第4層:暗褐色土層(粘性弱く、しまりはやや弱い。小礫・赤褐色 礫を小量、カーボン粒を微量含む。

第5層:褐色土層(粘性無く、しまりは普通。礫を含む。) 第6層:茶褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。茶褐色土ブロック を含み、礫粒子を少量含む。)

第7層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しまりは弱い。カーボン粒 を含み、礫・小礫を少量含む。)

第8層:暗赤褐色土層(粘性普通、しまりも普通。礫粒子を含み、 カーボン粒・礫を少量含む。)

第9層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しまりは弱い。礫・小礫を 会すれ

第10層:黄褐色土層(粘性弱く、しまりは強い。小礫粒子を多量含

第11層:赤褐色土層(地山)

第177図 第8A・Bトレンチ [½]

# 12 N 70 14 14 60 第178図 第10トレンチ

### 第10トレンチ (第178図)

前方部確認の為、第7トレンチの延長上に設けた2 ×12mのトレンチである。

表土の下層が地山となり、盛土は確認できなかった。しかし断面観察では自然堆積とは考えにくい落ち込みが確認され、何らかの掘り込みがあったとも考えられるが、当古墳に附属するか否かは不明である。

なおセクション図における段差はサブトレンチの為 で地山の状態を示すものではない

### 第9トレンチ

### 第11トレンチ

前方部確認の為、第10トレンチの両側に設けた。 調査の結果、表土(耕作土)の下層が地山となり、 平面的にも断面観察上も、所見は得られなかった。

### 第4トレンチ (第179図)

内部主体の確認を行なう為に墳頂部に設定したトレンチである。 $2\times8$  mを基本とし東・西に2本設定し必要に応じ、拡張した。また内部にはサブトレンチを設けた。

調査の結果、内部主体を検出する事はできなかったが、 断面観察によって墳丘構築方法の大方をあきらかにす ることができた。

墳丘は基本的に赤褐色土と黒褐色土(暗茶褐色土) を交互に盛ることによって構築されている。しかし、

### 第10トレンチ

第1層:耕作土層

第2層:暗茶褐色土層

第3層:茶褐色土層 第4層:暗茶褐色土層

第5層:暗褐色土層

第6層:暗茶褐色土層

第7層;茶褐色土層

第8層:明褐色土層

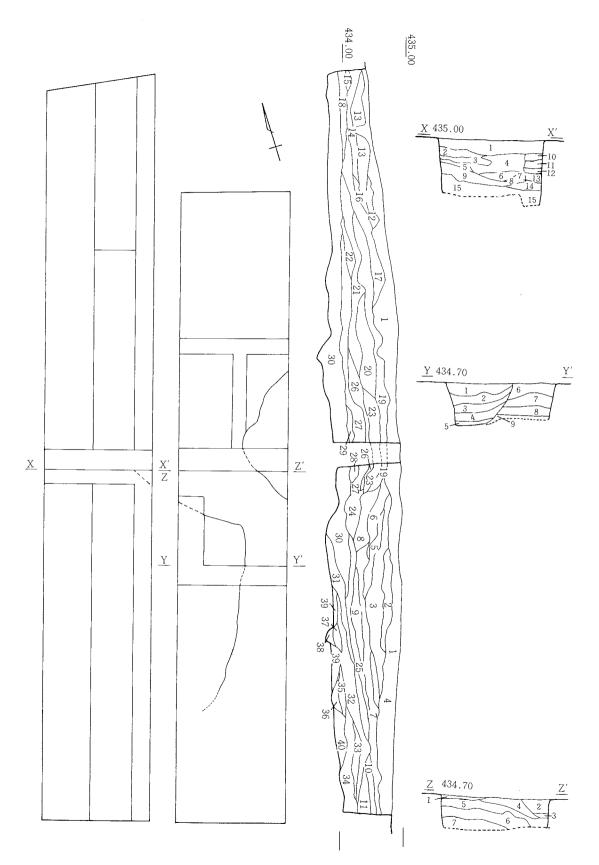
第9層:暗茶褐色土層

第10:暗茶褐色土層 (礫・ローム粒を含む。)

第11層:暗褐色土層

第12層:茶褐色土層

第13層:暗茶褐色土層 第14層:赤褐色土層(地山)



第179図 第4トレンチ[%]

第4トレンチ南-北セクション

第1層:表土層(耕作土層)

第2層:茶褐色土層(粘性無く、しまりは強い。礫・小礫・礫 粒子を多量、カーボン粒を微量含む。)

第3層:黒褐色土層(粘性弱く、しまりは普通。小礫・礫粒子・カーボン粒を多量含む。)

第4層: 褐色土層(粘性無く。しまりはやや強い。礫・礫粒子を多量含む。)

第5層:茶褐色土層 (粘性普通、しまり普通。小礫・褐色礫を 多量含む。)

第6層:明茶褐色土層(粘性普通、しまり普通。小礫・カーボン粒を含む。)

第7層:茶褐色土層(粘性普通、しまり普通。礫・小礫・礫粒 子を多量、カーボン粒を少量含む。)

第8層:茶褐色土層(粘性普通。しまりはやや弱い。礫・小礫 ・礫粒子を多量含む。)

第9層:黒褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。小礫・礫粒子・カーボン粒を少量含む。)

第10層:黒褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。礫・礫小 を多量に、カーボン粒を少量含む。)

第11層:明茶褐色土層(粘性強く。しまりもやや強い。礫・小礫を多量含む。)

第12層: 明茶褐色土層 (粘性無く。しまりは強い。黄褐色、礫を多量に、小礫・礫粒子を少量含む。)

第13層:黒褐色土層(粘性無く、しまりは普通、赤褐色土ブロックを含み、碟・小礫・カーボンを小量含む。)

第14層:赤褐色土層(粘性強く、しまりは普通。黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロック・赤褐色土ブロックを含み、小礫を小量、カーボン粒を微量含む。)

第15層:黒褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。カーボン粒・小礫を少量含む。)1トレ、4層類似

第16層:黒褐色土層(粘性弱く、しまりは強い。赤褐色土ブロックを含み、小礫を小量含む。)

第17層:黒褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。赤褐色土 ブロック、黒褐色土ブロックを含み、礫・小礫を多量 に、カーボン粒子を微量含む。)

に、カーボン紅丁を傾重含む。) 第18層:暗赤褐色土層(粘性やや強く。しまりもやや強い。カーボン粒を多量、小礫、赤褐色粒子を少量含む。)

第19層:灰茶褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。小礫・ カーボン粒を含み、黄褐色礫を多量含む。)

1トレ、5層類似

第20層: 黒褐色土層(粘性やや強く。しまりもやや強い。カーボン粒子を含み、礫・小礫・赤褐色土ブロックを多量含む。)

第21層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しょりもやや強い。カ ーボン粒子、赤褐色土ブロック、黒褐色土ブロックを 含み、礫・小礫を小量含む。)

第22層: 黄赤茶褐色土層(粘性無く、しまりは普通。礫・小礫 ・茶褐色土粒を多量含む。)

第23層:黒褐色土層(粘性無く、しまりは普通。礫・小礫・赤 縄色土粉を多量含む)

第24層:赤茶褐色土層(粘性無く、しまりは弱い。小礫・礫粒 子を含む。)

第25層:黒褐色土層(粘性強く、しまりも強い。カーボンを少量、赤褐色土を微量含む。)

第26層:黄褐色土層(粘性普通、しまりは弱い。礫・小礫・礫 粒子を多量含む。)

第27層:茶褐色土層(粘性強く、しまりはやや強い。 黄褐色土 ブロックを含み、亦褐色土を多量に、小礫・礫粒子を 少量含む。)

第28層:黒褐色土層(粘性やや強く、しまりはやや強い。小礫 ・カーボン粒を少量含む。)

第29層:赤茶褐色土層(粘性強く、しまりもやや強い。礫・小 礫を多量含む)

第30層:黒褐色土層(粘性やや強く。しまりも強い。赤褐色土 ブロックを含み、小礫を少量、カーボン粒を微量含む。

第3 1層:赤褐色土層(粘性強く、しまりはやや弱い。礫・小 礫・礫粒子を多量含む。)

第32層:黒褐色土層(粘性普通。しまりはやや強い。赤褐色土 ブロック・黒褐色土ブロックを含み、カーボン粒、小 礫を多量含む。) 第33層:黄赤茶褐色土層(粘性無く、しまりは普通。礫・小礫 を含む。)

第34層:黒褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。カーボン 粒を多量、小礫を少量含む。)

第35層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しまりは弱い。赤褐色 土ブロックを含み、小礫を小量含む。)

第36層:暗赤褐色土層(粘性やや強く、しまりは弱い。赤褐色 土ブロックを含み、小礫・カーボン粒を小量含む。)

第37層:暗赤褐色上層(粘性やや強く、しまりは無し。赤褐色 礫を多量、小檗を少量含む。)

第38層:暗褐色土層(粘性普通、しまりはやや強い。小礫・カーボン粒を含む。)

第39層:明赤褐色土層(粘性強く、しまりもやや強い。小礫を 少量、カーボン粒を微量含む。)

第40層:明赤褐色土層(粘性強く、しまりもやや強い。礫・小 礫を多量含む。)

### 4トレ東-西セクションX-X'

第1層=4トレ縦断第1層に同

第2層:赤褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。小礫を多量含む。)

第3層:黒褐色土層(粘性強く、しまりもやや強い。黒褐色土 ブロックを含み、小礫を少量含む。)

第4層:茶褐色土層(粘性普通、しまりはやや弱い。礫・小礫 ・礫粒子を含む。)

第5層:赤茶褐色土層(粘性強く、しまりは弱い。赤褐色土ブロックを含み、小礫を少量含む。)

第6層:4トレ縦断8層に同

第7層:暗茶褐色土層(粘性無く、しまりも弱い。礫粒子・カーボン粒を少量含む。)

第8層:赤茶褐色土層(粘性無く、しまりも弱い。小礫・礫粒 子を含み、黒褐色土ブロックを微量含む。)- 4 トレ縦 断第24層に類似

第9層:赤褐色土層(粒性強く、しまりは無い。小礫を少量含む。)

第10層=4トレ縦断19層に同

第10層=4トレ縦断19層に 第11層= " 23層 第12層= " 26層

第13層= # 27層 第14層= # 28層

第15層= " 30層

### 4 トレ東西セクション Y - Y'

第1層:4トレ縦断第3層

第2層:4トレ縦断第5層

第3層:4トレ縦断第7層

第4層:4トレ縦断第9層

第5層:赤褐色土層(粘性強く、しまりはやや弱い。礫・小礫 ・礫粒子・赤褐色土を多量に含む。)4トレ縦断第31層 に類似

第6層:赤茶褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。カーボン粒・礫・小礫を含む。)

第7層:暗茶褐色土層(粘性弱く、しまりはやや強い。小礫・

赤褐色土ブロックを含み、カーボン粒を少量含む。) 第8層:黒褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。カー ボン粒子・赤褐色土ブロックを含み、礫・小礫を少量、 黒褐色土ブロックを多量含む。)

第9層:黒褐色土層(粘性弱く、しまりはやや強い。赤褐色土 ブロック・黒褐色土ブロックを含み、小礫は小量、カ ーボン粒を多量含む。)4トレ縦断第32層に類似

### 4トレ東西セクションZ-Z'

第1層:4トレ縦断第1層

第2層:赤茶褐色土層(粘性無く、しまりはやや強い。礫・小 礫・カーボン粒を少量含む。)

第3層:暗赤褐色土層(粘性無く、しまりもやや強い。黒褐色 土ブロックを含み、礫・小礫・赤褐色土を多量含む。)

第4層: 黒褐色土層(粘性やや強く、しまりもやや強い。赤褐 色土ブロックを含み、小礫・カーボン粒を小量含む。)

第 5 層:4トレ縦断第19層 第 6 層:4トレ縦断第23層 第 7 層:4トレ縦断第27層 墳丘全体を詳細に観察すると、その様相は一様ではなく、平面上にも、レベル上にも何回かの段階にわけ構築されている。

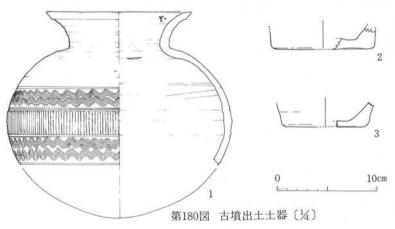
すなわち旧地表面を削りこんだ整地面にまず第30層~40層までと交互に盛り上げ上面を平坦になす。次いで墳丘ほぼ中央部に小マウンド(第23層~第29層)を築き、更にそれを核とし盛土を行い、最終的に墳形を整えたものと考えられる。また断面観察中、盛土下部で2ヶ所の小ピットを確認した。サブトレンチ内であった為、平面形態は把え得なかったが、墳丘構築中に穿たれたものであることは確かである。

内部主体は全く確認できず、炭化物・粘土等も検出できなかった。しかしトレンチ内で平面的に落ち込み様の土層の違いが認められ、また断面観察においても、南北セクションの第3~9・24・25層とそれに対応する東西セクションY-Y'の第 $1\sim4$ 層、同X-X'の第 $2\sim8$  層などが確認され、当初内部主体の位置を示すものとも考えた。しかし調査の進展につれ、先述した様に墳丘構築の段階を示すものである可能性が強かった。

本トレンチの排土はすべてふるいにかけ、遺物の発見に務めたが、管玉1、丸玉破片1、鉄製品断片5、土師器細片少量を得たのみにすぎない。

# 第5節 出土遺物

調査の結果、本古墳からは、須恵器・土師器・鉄製品・玉類が出土した。以下これらについて述べることとする。



## 1 土器類

(第180図、図版23・32)

### 須恵器

第5・6 Aトレンチ出土の 接合資料であり共に礫帯面直 上から出土している。

1は胴部下半が欠失する壺。 胴部からゆるやかに外反する 頸部を有し、口縁部は開いて

立つ。頸部の立ち上がり、口縁端部のつくりはやや甘い。口縁部径14.8cmで胴部中半に最大径をもち23cmを測る。胴部中位には、1~2条の沈線によって区画された横位の文様帯が3帯巡っている。上位の文様帯は、5本単位のクシ状工具による左上がりの波状文が、下位の文様帯は同右上がりの波状文が各々2段施される。中位には5本単位のクシガキ縦位沈線が施される。文様区画沈線は非常にシャープである。整形は右廻り、頸部外面はカキメ、口唇部はナデ、頸部内面は

ナデ、胴部内面はヘラ状工具によるナデである。

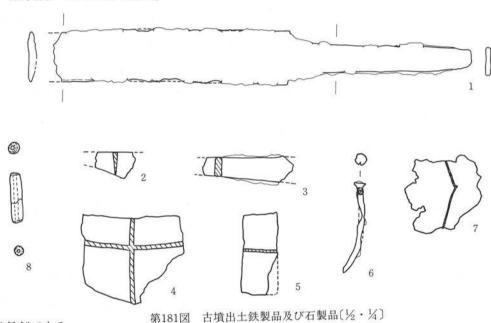
色調は淡灰褐色を呈し、頸部内面に緑色釉の残欠が認められ、融着物も残る。肩部外面には褐 色釉もわずかに遺着する。焼成は竪緻、胎土は細かな黒色粒を含み、密である。

### 土師器

おもに第4トレンチから20片あまり出土しているが図示しえたものは2点である。

2、3共に壺底部残欠である。共に焼成は甘く、内外面共摩耗が激しい。底部に押えの指頭痕が残る。2は胎土に雲母・石英を含み、色調は橙褐色を呈する。3は赤茶褐色を呈する。

### 2 鉄製品 (第181図、図版32)



1は鉄剣である。

墳頂部の抜根時に出土したもので身部上半を欠損している。

現長32.5cm、身部幅4.2cm、茎部幅(3.0)~1.4cm、厚さ0.4~0.7cmを測る。錆の為遺存が悪く肥大化が進んでいる。剣身の断面はレンズ状を呈しており、一面の鎬は確認しうるが他面は明確でない。関部は直角につくられ、茎部は茎尻へ向い幅を細める。目釘は確認できない。身部には木質部が遺着しており鞘木とも推定される。

2・3は刀子片。2は現長2cm程の身部片、身部幅1.5cm、棟厚0.3cmを測り、平棟である。3は 刀子茎部片。現長4.7cmで0.4×1.1cmの断面方形を呈する。

 $4 \cdot 5 \cdot 7$  は不明鉄片。4 は $5.2 \times 4.7$  cm程の鉄板片である。器厚は0.2 cmを測り、僅かに湾曲する。用途等は不明である。一面には全体にわたって黒色の附着物が認められるが何であるかは不明である。5 は $1.9 \times 4.2$  cmの方形を呈する鉄片で器厚は0.1 cmを測り一部欠損する。7 は $3.7 \times 4.1$  cm程の鉄板片で遺存が悪い。厚さは0.1 cmを測る。

6 は全長4.8cmを測る釘である。遺存が悪く断定しえないが、0.3cm程の断面円形を呈する。 2~6 は墳頂部第4トレンチ排土内から、7 は第1トレンチから出土している。

### 

8は管玉。第4トレンチ排土内からの出土である。全長2.6cm、端部径0.5cm、胴部最大径0.55cmを測り、僅かに中膨みの形状を呈する。孔は両側から穿孔されている。材質は緑色凝灰岩で軟質である。いたみがひどく表面が荒れているが、胴部において縦方向の研磨痕が観察できる。色沢はくすんだ暗緑色を呈する。

他に同一石材からなる丸玉破片が一片出土したが、遺存状態はきわめて不良であり取りあげのさい崩壊した。

# 第6節 まとめ

今回の調査はトレンチによる確認調査であった為、古墳の内容・性格を充分に明らかにしえた とはいえない。しかし墳形・規模等の確認をなしえ、一定程度の目的を果たす事ができた。

以下それについてまとめてみたい。

### 墳形

当初、墳丘測量図等から、前方後円墳であるとの期待を抱かせたが、調査の結果、北西部に8 × 2 mの造り出しを持つ円墳である事が判明した。墳丘規模は径24mで、後述する礫帯を含める と28m程の直径を持つ。高さは現状で約2 mを有するものである。

### 墳丘構築

墳丘は旧地表面を削平して整地した後、盛土を行なって構築される。

第6・7・8トレンチで検出された溝状掘り込みで丘尾を切断し、同時に地表面を削平して墳 丘構築面の整地を行なっている。丘尾を切断する溝状部は墳丘に比し、径の大きな弧状を呈し墳 裾に対し、やや外開きの三日月状をなしている。その後、墳丘を築造するのであるが、その際整 地面の外周2m幅程はテラス面として残している。

盛土は赤褐色土と黒茶褐色土を互層として積み重ねているが墳丘全面を覆う各層を一時に積み 重ねるのではなく、墳丘を部分的に、また段階的に構築している。

すなわち、第一段階として整地面上に30~40層までを盛り墳丘基盤とし、次いで墳丘中央部に 小マウンド23層~29層を築き、それをおおう様に南側・北側からそれぞれ盛土を行なう。最後に更 に墳丘全面にわたって盛土を行ない墳形を整えたものであろう。

### 外部施設

調査では埴輪は発見されなかった。度々述べた様に墳丘がかなり削平されている為、埴輪がす えられた可能性を全く否定するものではないが、その可能性はかなり低いものといわざるを得な V10

葺石については、墳丘に葺かれた状態では検出されなかった。しかし墳丘南側の第6・7・8の各トレンチにおいては礫層を2層に区分する事が可能であり、上層のものについては墳丘からの転落と考えるのが妥当である。逆に第1・2トレンチにおいては、墳丘面から、転落した状態での礫を検出する事はできなかった。第5トレンチにおいては礫の状態がかなり乱雑であり、墳丘からの転落であるか、礫帯の撹乱であるかは明確にしえない。以上の事から、六科丘古墳においては葺石は墳丘南面の一部を中心としてその存在の可能性が強いものの、墳丘全面を巡る状態ではなかったといえよう。また第5トレンチで確認された裾石も、現状からは全面を巡ったものであるか否かは判然としない。

次に礫帯であるが、墳丘の外周に残された整地面上に幅1.8~2 mに亘って施され、墳丘を全周するものと考えられる。第1、第2、同南・北拡張区、第6~8トレンチにおいては、よくその状態を観察する事ができた。その様相は、丘尾切断部である第6~8トレンチにおいて礫の選別・敷き方等は特に整えられており、造り出し部である第2トレンチに比較しても見事な配列を示している。この事は先述した葺石のあり方と共に、墳丘築造時に、当該墳丘面を、より整えようという意識の反映とも考えられる。

### 内部主体

調査に於いて内部主体を明確に把握しえず、また断面観察においてもその痕跡をつかむ事はできなかったが先述した墳丘構築時に核とした小マウンドの存在が、内部主体構築と何らかの関わりを持つものである可能性を窺わせる。また現在の段階で内部主体として想定しうるものは、石材類・粘土・炭化物等の検出がない事から木棺直葬の可能性が考えられるが、その位置・規模等は一切明らかにしえず明確な判断は今後の調査に期待したい。

### 遺物

六科丘古墳の出土遺物は非常に少い。詳細は先述した通りであるが、時代判定の材料となりう <sup>主3</sup>るものは須恵器の壺のみであった。現在の所、他の類例は管見にふれない為、産地・時期等は不 明であるが、その文様構成・形状等から、一応5世紀代中葉以降とするに止めておきたい。出土 地点・出土状態・接合関係等から、副葬品としてより葬送儀礼に伴う供献品としての性格を持つ ものと考えたい。

### 年代

最後に、六科丘古墳の略年代を推定しておきたい。まず、山上単独墳である事、また墳丘築造にあたって自然地形を最大限に利用している事、また、副葬された剣、玉類等から前期古墳的様相を備えているといえよう。また出土した須恵器からも5世紀代後半の年代を与えるのが妥当であろう。

# 第7節 山梨県に於ける六科丘古墳の位置

山梨県内では、現在20基を超す前期古墳が確認され、その分布は甲府盆地南縁の曽根丘陵を中 心として認められ、次いで盆地南東縁の一宮・御坂、同西縁の甲西・櫛形地域に及んでいる。六 科丘古墳は盆地西縁域に認められる1群中に含まれるもので、盆地床を見おろす台地前端に、5 世紀代初頭から6世紀初頭にかけて築造された5~6基の前期古墳の一つである。中でも櫛形町 上野に所在する物見塚古墳(銭塚)は、唯一正式の発掘調査を受けたもので、5世紀代初頭の年 代を与えられている。台地先端から僅かに降った尾根中ほどに占地しているこの古墳は、調査報 告書(松浦他、1983)によると、現長46mを測る前方後円墳で、後円部径30m、前方部現長16m、 高さ4m強の規模を有するものである。また副葬品として、珠文鏡一面、鉄剣三口、直刀一振、 緑色凝灰岩製の管玉12、臼玉1が認められた。内部主体は確認されなかったが、幅2.2m、長さ3.5 mの墓壙が推定され粘土槨を想定されている。また外部には茸石を有するが周湟・埴輪は認められ ない。坂本氏は出土遺物の分析から、4世紀終末から5世紀前半の年代を与えられている。次い でその内容の一端が明らかにされているものとして、熊野神社古墳(上野・1973)がある。本墳 は山腹からのびた台地前端にあり、明治年間に直刀1振、鉄剣1口、鏃2が出土している。更に 口縁径25cmを測る円筒埴輪が出土し、盆地西縁域では確認される唯一のものである。埴輪は、川 西編年 V 期にあたり、6世紀初頭に比定される。これら以外に物見塚から西へ約250m程のぼっ た台地前端に上の東古墳が存在する。本墳は円頂丘上に地形を最大限利用して築かれており、径 25~30mを測る円墳である。墳丘からは須恵器小片が採集されているが、詳細は不明である。時 期を確定しうる資料には乏しいが、墳形・規模・占地などから、六科丘古墳と同時期あるいは若 干後出し、熊野神社古墳よりやや先行する年代を与えておきたい。更に物見塚古墳の南側対岸の 台地上には通称「刃塚」が存在したとされる(上野・1973)。物見塚古墳とほぼ同様の立地を示 し、本来「刃塚」「銭塚」として並び称せられてきたが、現在は壊滅しその詳細は明らかでない。

また、これらより更に南へ降った増穂町には、仿製鏡二面、瑪碯製勾玉を出土した法華塚古墳が存在したが、識者によりその年代観は一致していない。

これらの古墳は一応、物見塚古墳一六科丘古墳一上の東古墳一態野神社古墳の相対年代が考えられ、5世紀初頭から6世紀初頭に比定されうるが、態野神社古墳以外は、末だ不確定要素が多いといえよう。

ところで、県内に於ける前期古墳は曽根丘陵に濃密に分布しているが、その出現は4世紀代中葉とされている。まず、全長52mを測る小平沢古墳―前方後方墳―(小林他・1978)が、中道町米倉山の尾根先端に、次いで全長120mを測る大丸山古墳―前方後円墳―(仁科・1931)、全長168mの中道銚子塚古墳―前方後円墳―(上田・1930)が4世紀中葉から5世紀初頭にかけて、曽根丘陵中央部に連続して営まれる。5世紀代に入ると墳形は円形―丸山塚古墳―へ転じ、5世

紀代前半の天神山古墳(全長132m)(上野他・1975)で再び前方後円墳形を採るものの、5世 <sup>注1</sup> 紀代後半の茶塚古墳一前方後円墳一(小林他・1979)をもって、この中道町の造墓集団はほぼ終焉 を迎えるものである。

小平沢古墳は全長52mの前方後方墳で、内部主体は木棺直葬あるいは粘土槨、副葬品に舶載鏡、 勾玉を持ち、墳丘からS字状口縁甕を出土(山本・1980)する。大丸山古墳は有名な上下二重構 造の堅穴式石室を有し、舶載鏡(三角縁神獣鏡を含む)、鉄製工具、短甲を副葬している。中道 銚子塚古墳は丘陵下部に占地し、鏡(三角縁神獣鏡を含む)、碧玉製腕飾類等が副葬された竪穴式 石室を持ち円筒埴輪を有する。丸山塚古墳は銚子塚古墳主軸線上に築造され、朱円文を施された竪 穴式石室を内部主体とし、舶載神獣鏡、碧石製石釧等が副葬され、円筒埴輪を持つ。茶塚古墳は 丸山塚古墳の更に東方に位置し、竪穴式石室を内部主体とし、鉄製武器、馬具等を副葬される。 報告書では前方後円墳とされるが、疑問をなげかけられている(橋本、1984)。

4世紀終末から5世紀初頭には、盆地内に於ける古墳の分布はその領域を拡大する。まず曽根丘陵を東へ進み、八代地内に全長84mを測り、銅鏡、直刀、剣、勾玉、工具類が副葬された堅穴式石室を内部主体とする八代銚子塚古墳(前方後円墳)が出現し、5世紀前半には更に盆地東南部(御坂町)に竪穴式石室を内部主体とし、銅鏡、管玉、鉄製武器、工具が副葬された亀甲塚古墳(墳形不明)が出現しその分布域をのばす。更に盆地西域、市之瀬台地縁辺には、物見塚古墳をはじめとする1群の古墳が営なまれる。

曽根丘陵中央(中道町)~同東部(八代町)に営なまれた前方後円墳(前方後方墳)は、初現 古墳である小平沢古墳を除くと全て100mを超す規模を誇り、副葬品も豊富な内容を持ち、おそ らく盆地全域に亘る政治的結合体の首長墓であったことが窺われる。これに対し、他域の古墳が規 模、副葬品共に圧倒的に貧弱であることは、両者間の隔絶した力量差を感じさせる。とはいえ、 5世紀代前半の中規模古墳の出現は、盆地内に於ける中小首長層が政治的発言力を得つつあることを窺わせ、特に前方後円墳(物見塚)の盆地内他地域への波及は、中道首長家の相対的弱体化 と、更には各政治的共同体間の交通関係の変質をも予感させるものである。

次いで、5世紀代の後半~6世紀初頭に至ると、曽根丘陵西端地域でも古墳の築造が開始され 分布域を更に拡大する。

盆地西縁、市之瀬台地では先に述べた通りであるが、曽根丘陵西端域では、三珠町に赤烏元年 銘鏡等が副葬された鳥居原狐塚古墳が存在する。6世紀初頭前後には、合掌型石室に桂甲、眉庇 付胄等が副葬された王塚古墳が、全長46mの大塚古墳等がある。後二者は、三星院古墳と共に、 帆立貝式古墳である。丘陵東端では、境川村地内に箱式石棺等を内部主体とする馬乗山1号墳 (円墳)、全長40~50mの馬乗山2号墳(前方後円墳)が存在し、丘陵下へ降りて、竪穴式石室を 内部主体とし円筒埴輪を持つ表門神社古墳に続く。馬乗山2号墳は、疑問の投げかけられている 茶塚古墳を除くと、盆地最後の前方後円墳である。八代地域に入ると5世紀代後半に、八代狐塚 古墳(全長26cm、剣、直刀、鉾が出土)、乳文鏡、玉類、直刀等が副葬された団栗塚古墳が認めら れ、両者共に帆立貝式古墳である。

全長100mを超す前方後円墳の築造が天神山古墳で終末を迎えたのに前後して5世紀代後半には、盆地西縁から東南縁にかけて中型の古墳が顕著に認められる様になる。また、5世紀末~6世紀初頭にかけて帆立貝式古墳が目だって築造されている。茶塚古墳、表門神社古墳、また六科丘古墳も帆立貝式古墳の可能性が指摘されている(橋本、1984)。もしその指摘が正しいとするならば5世紀後半~6世紀初頭にかけ、その年代に若干の差を有しながらも盆地内に存在した主要な古墳築造集団の全てが帆立貝式古墳を築造し、ほぼそれをもって前期的様相をおえている事は注目に値しよう。これら盆地内に存在する帆立貝式古墳の形態等の分析(小林他、1985)等が必要とされる所以でもある。5世紀代における古墳規制論(小野山、1970)はひとまずおくとしても、甲府盆地内においても、中道首長家の衰退と中小首長層の顕在化という政治的地域集団の相対化が確実に進展しているものといえよう。この様な相対化は同時に前期古墳から後期古墳への変化にみられる様な地域政治集団内、集団間の変質をも伴って、盆地社会の政治的・社会的再編へと進むものであろう。

ところで六科丘古墳を円墳系の古墳とした場合、5世紀代に盆地内他地域で認められた古墳が 前方後円墳、帆立貝式古墳を主体とするのに比し、六科丘古墳を含む市之瀬台地縁辺に築造され た古墳は、その初現である物見塚古墳を除くと、ほぼ円形を基調としている。これは他地域政治 集団との単なる力量差であるのか、或いは中央政治集団を含めた他集団との関係のとり方の問題 であるのかは興味深い。

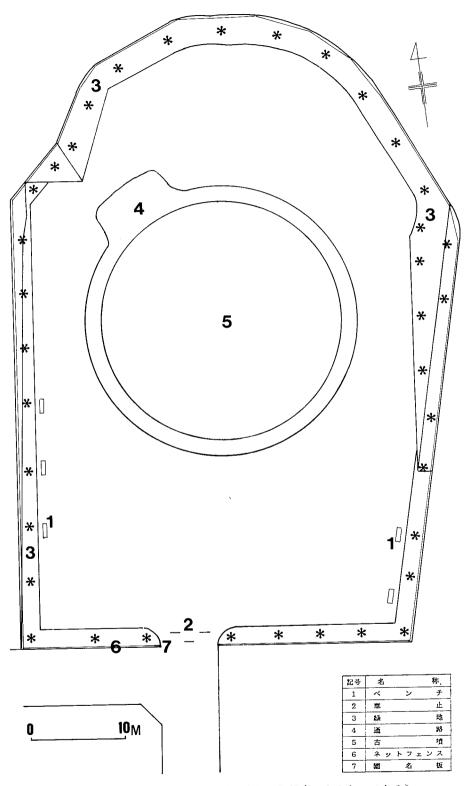
ともあれ、今回調査された六科丘古墳の存在は、古墳時代前半に於ける盆地内社会の複雑な政治課程を示しているものであり、最近調査が進められている集落遺跡、生産遺跡などの解明と合わせ本県の古墳時代研究に一石を投じたものといえよう。

### おわりに

今回の六科丘古墳の発掘調査は墳形、規模、内部主体等の確認の為に行なわれたものである。 その成果は以上述べた所であるが、保存し活用すべきであるという、町文化財審議委員会の答申 を受け関係者協議のうえ、公園化し保存、活用すべく決定がなされた。

既に保存整備がなされつつある物見塚と共に地域の文化財として保存され、歴史的資料として 活用される様期待するところ大なるものがある。

最後に保存決定に関して御協力、御尽力いただいた町内各位、山梨県考古学協会の方々に感謝の意を表すと共に、特に今回の設計変更、公園化に際してはセキスイハウス(株)、(株)大本組の方々の文化財に対する深い御理解、御協力の賜物であり、心よりの敬意を表する次第であります。 (第1、7節 清水 博 第2~6節 小口妙子)



第182図 古墳公園 (案) [本図は(株)大本組の御好意によるものである]

- 註1 本墳を帆立貝式古墳とする指摘がある(橋本、1984)。帆立貝式古墳と造り出しを有する円墳の概念規定については、(遊佐、1980)、(石部、1980)等がある。ここでは第2トレンチの断面観察により、方形部が墳丘の一要素となりえるかを基準とし「造り出し付円墳」とした。尚、「造り出し付円墳」とした場合、遊佐氏分類(遊佐、1982)のII類型にあたる。
- 註2 今回の発掘で確認しえた円丘部最下層は黒褐色土であり、また墳裾部とのレベル差等からも、墳丘整地面には到達しえていない可能性が強い。
- 註3 守屋幸一氏(板橋区教委)にご教示いただいた。
- 註4 橋本氏(橋本、1984)は獣形鏡から5世紀後半の年代を、坂本氏(坂本、1973)は勾玉から7世紀の年代を与えられている。
- 註5 本墳については帆立貝式古墳であるとの説(小林他、1985)もある。また坂本氏の御教示によると、形状、規模は不明なものの、西隣する銚子塚古墳方向へ、張り出し部が付設されている可能性が強いとの事である(坂本、1985)。
- 註6 報文では5世紀代(第3四半世紀)の年代を与えられている。坂本氏も最近の研究(坂本、1985)でほぼ同年代を考えられている。
- 註7 報告書では、発達した前方部に竪穴式石室を有する前方後円墳であるとされている。しかし報文に接する限りでは、墳形・形状ともその根拠は脆弱の様に思われる。また墳形決定の根拠とされた「横断面よりの観察」も一部しか公表されておらず、墳形の確定には若干のとまどいを感ずるところである。尚、橋本氏は本墳に帆立貝式古墳の可能性を指摘(橋本、1984)しておられる。
- 註8 坂本氏(県埋文センター)の御教示による。径5cm程の円文が施されるが、不確定要素も 認められるとの事である(坂本他、1985)。
- 註9 小林秀夫氏の分類(小林、1978)では金鎧山形式である。
- 補註 礫帯(敷石帯)について考察を加えた例としては三池平古墳(静岡県清水市)がある。(内藤・大塚、1961、杉山他、1983)。三池平古墳で認められた「敷石帯」は墳裾部(墳丘末端部)を全周し、幅1.7~3.7mを測るもので径10~15cmの円礫を主体として構成され1・2~3段に積み重ねている。敷石帯上位の墳丘面からは礫が検出されず、敷石帯との境界には石列が認められ、また敷石帯外周は自然礫層と接続している。この敷石帯は埴輪を伴うものと考えられ部分的ではあるが、敷石帯の更に外側に周溝が巡っている。

1961年度の報文中で、内藤氏は、後藤守一氏の調査時の所見として「聖域帯」としての意味を持ち、「古式古墳に伴う周堀も同じアイディアで発生したと解すべきではないか」という見解を紹介されている。しかし、墳丘調査報告書(1983)で杉山氏は、自然礫層との接続、周溝の存在などを根拠に、後藤氏の見解に対して「古墳を外域から区画するという敷石の役割もあながち否定できないが、むしろ……封土の流出を防ぎ墳裾を整える目的を併せもった施設」と考えておられる。

これに対し本墳の場合は、①墳丘末端ではなく墳丘外周のテラス面上に敷かれている事、②部分的ではあるが葺石の存在した可能性が窺える事、③丘尾を切断した部位を除くと周溝の存在が認められない事、等、三池平古墳の場合と若干趣を異にしており、古墳を外域から区画する機能をもっていたと思われ、後藤氏の提起された内容により近いものと思われる。

# 第Ⅷ章 結 語

はじめて六科丘を訪れたのは、昭和57年の秋であった。(株)大本組野瀬、松田両氏の強い要望があって同氏らに同行したのである。六科丘は、東に甲府盆地を広く見下し、遠く富士山を望む絶佳の地であった。当地は、既に県教育委員会末木健氏らの調査・指導があって遺跡の所在が予測されており、その確認が急がれていたのである。その調査の要請がわれわれにあることにより、早速に櫛形町教育委員会と協議をもち、昭和57年11月末より2週間に亘って試掘調査を実施して、同遺跡の時期、性格を明らかにし、遺跡の範囲を把握することに努め、その後に資することとした。この結果、遺跡の状況の一端が明らかになり、あらためて県教育委員会、町教育委員会と工事主体のセキスイハウスとの間に協議がもたれ、本調査が企図されたのである。

本調査に当っては、われわれは地元での調査体制と善処を要望し、直接の担当を辞退したのであるが、小林喜男前町長、上田幸斉前教育長らの懇望を黙し離く、地元での調査主任の任用を不可欠のこととし本調査をも担当することとなったのである。発掘調査は、清水博主任調査員をはじめ、地元関係各位の多大な労苦があってはじめて遂行されたものであり、また当地に不案内なわれわれには末木健、新津健、坂本美夫氏らをはじめとした山梨県の研究者各位の適切なご助言があって無事調査が終了しえたものである。ここに厚くお礼申し上げる次第である。

さて調査の結果については、既述のごとく各調査員により委細がつくされており、あえて蛇足の要もないが、若干のとりまとめを行い、いささかの私見をそえておこう。

試掘調査により、六科丘遺跡は大きく丘頂部周辺と、丘麓部とに区分しえる地形上の特徴をもち、合せて、発見された遺構・遺物の時期や性格も異なることが判明した。そこで前者をI区、後者をII区と区分して本調査にとりかかった。しかし本調査では、結果的には工事対象約35,000㎡の全地域を調査実施地としたことになる。

(先土器時代) 発見された遺物の中には、ナイフ形石器、尖頭器、その他剝片類に先土器時代に属せしめうるものが検出されたが、遺憾ながら、その出土の状況や相当すべき遺構等は確めえなかった。主に丘頂から西斜面の住居跡覆土、耕土中から発見されたものである。しかし、本遺跡形成にかかわる最も古い時期のものとして重要である。

(縄文時代) 縄文時代に相当する土器片が僅かに発見されている。早期から晩期にまで亘るが、晩期のものがII区に属する以外は、その殆んどはI区にあって、丘頂部及びその周辺部に限られる。この時期に帰属すると考えられるものに集石遺構・土壙があるが、土壙の大半はむしろ時代が決定し得ないとすべきであろう。集石遺構は縄文時代に所属することを妥当とするが、詳細な時期まで定めることができるのは少い。しかし最高頂部に所在した立位の石棒は注目される。

この場の眺望の良さと相俟って、若干の空隙と周囲に配された集石、土壙は、同時性の決定しえぬとはいえ特殊な雰囲気を醸し出し、祭場を想定するにふさわしい。既に察せられたように I 区の繩文時代の遺構は、日常的な生活空間を構成したものとは見做し難い。今後の周辺遺跡に関連した調査・研究が期されるところである。

### (弥生時代後期、古墳時代前期)

六科山遺跡の主体を占めるのが弥生時代終末から古墳時代前期に亘る住居跡群である。この時期の遺構は、六科丘の中腹、標高 439 mより下位(II区)に展開している。調査面積は約11,000 mであり、なお西側には若干の遺跡の拡がりを予想しえぬこともないが、北側・南側は限界とみてよく、集落のほぼ全貌を調査しえたといってよい。竪穴住居跡 33軒、竪穴遺構 4 ヶ所、掘立柱建物跡 4 棟がこれである。

分担者による出土土器の分析より、凡そ3期に分類されその変遷が考えられている。何分遺跡 の攪乱が著しく、一括の資料に恵まれたとはいい難く、十分な検討が行き届いたとは限らないが 鋭意とりくみ、一つの見解が示されたいえよう。総じて変化に乏しく、時間的にはかなり限定さ れた所産と考えられるが、時期の細分と位置づけは、現在集積されつつある県内資料の公表と相 俟って今後の検討が必要である。なお一、二の点を付言すれば、僅少資料ではあるが、他地域との 対比可能な土器片が検出されたことは重要である。第37図10、11、第9図11である。前者は、12 号住居跡に関わり、概ね駿河湾地方に多くみられ、大型壺Bと呼称される大廓式土器の特徴を示 すものとされる(加納、1981)。遠く奈良県纒向遺跡の辻土壙4下層(石野・関川、1976)の組成 中にも瞥見する。この種の土器の型式変化は適確には把えられていないが、本遺跡資料は他器種 との共伴関係において月の輪新 (加納、1981)、長野県下蟹河原 (藤森、1939) より先行する段階 に相当するのは間違いない。一方、9号住居跡で検出された2片のS字口縁甕は、その良質で定 型化した器型、口唇内面に軽く面を有し、頸部内面に粗く刷毛目を残す手法とともに、安達・木 下氏のII類(安達・木下、1974)、湯川・加納氏のA2類(植松他、1981)に相当し、古相を示し ている。この点でも纒向3式、東海西部の元屋敷式等との時間的な親近性をうかがわせる。先の 大型売Bとともに本遺跡土器群の一端は駿河湾地方の大廓式に相当し、かつ古い段階にふさわし いと考える。しかし、高坏、小型精製土器群の欠如は、なお問題を残している。一方、当地方で S字口縁甕が盛行し、小形高坏、小型精製土器を含む器種構成を示している京原遺跡、坂井南遺跡、 西田遺跡の出土資料に比較すれば本遺跡は先行することが予測しうるが、27号住居跡の片口付広 口壺 (第80図1)は、全くの同類が京原、坂井南に出土例があり、さほどの時間の懸隔は考え難い とせねばならない。

本遺跡の古相の段階をいかに比定すべきかは、なお解決がつかないと云うべきである。やはり 駿河湾地方に系類をもつ二重口縁を有する甕形土器(24号住居跡)は古い様相を示すし、5号住 居跡出土の口縁部(第20図2)は、壺形土器と同定されたが、高坏形土器とする可能性をも有す る。とするならば、これも同様に古相の要素となろう。この古相の段階は当面、甲西町住吉遺跡 (新津健他 1981)が比較の対象としうるが、当遺跡の資料はやや特異である。櫛描文を多様に用いた 土器群は、その系類の多くを遠江地方に求めることができ、櫛描横線文と波状文をもつ高坏、扇 形文や有段羽状刺突文を有する壺などの存在は複雑である。しかし、これを弥生時代後期後半に 一定点を求める(坂本、1984)のは妥当であろう。あえて六科山遺跡と比較すれば、住吉遺跡の 壺はなで肩で胴下位に稜をもち装飾性が強く、先に推測した本遺跡の高坏との比較等は、住吉遺跡を先行する位置におくことが可能である。しかし、本遺跡と指呼の間にある住吉遺跡が、若干 の時間差を考慮しうるとはいえ、何故にかかる系類を異にした土器相を示すかは興味ある問題で あり、本遺跡ならびに周辺遺跡に関連して今後の大きな検討課題となろう。いささか贅言を費した が、六科山遺跡は、駿河湾東部地域と深い関連ちつつ当地方のS字状口縁甕の波及期の直前、直 後の短期間に形成され、廃絶した集落遺跡とすることができよう。

集落の構成と変遷は、詳細に分析され、一つの論説が提示された。 出土遺物が十分に揃わない各遺 構に時期を比定し、群構成を考察することは至難である。住居規模に相応して構成を考慮するのは 筆者も試みたことがあるが(関根、1974)、地域の集団構成の動向をふまえた今後の検討が必要で ある。また焼失住居に関連して、ほぼ相い近い高位と空間を占める住居群が、2期に亘って災厄に 相遇したかどうかは、なお問題を残していよう。一方、集落の構成要素として掘立柱建物跡が検 出されたことは特筆されよう。4棟分が発見され、いずれも居住地域の限界域に所在しているの は注意される。恐らく集落成員の共同の用をなす倉庫跡と推定されるのであるが、一概に蓄稲庫 とするには問題がある。なぜなら本遺跡の占める地がかなり高位の山丘にあり、同時期の遺跡の 所在が推測される台地下の遺跡群とは区別される。現在谷水田として利用される高地は、往時の 利用は考慮し難い。むしろ水稲耕作とは異なった生産活動基盤を考えるべきではなかろうか。こ こで、I区に検出された2号溝状遺構は注意されてよい。幅50~70cmの溝が約60mの範囲で一辺 が直線状に、他の三方が弧状に一定空間を閉塞している。これに帰属すべき他の遺構や遺物が検 出されず、その時期や性格を定めることができなかったが、住居群は掘立柱建物跡をその末端と して上位の2号溝状遺構に及ばず、それぞれの遺構の空間配置が考慮されていると思われること。 西側の直線状溝は、掘立柱建物跡をはじめ住居群の展開を意識していると解されること。本遺跡 の遺跡構成上からみた年代推定も、住居群形成の時間幅に溝遺構を推定することが妥当であると 考える。これがいかなる機能と役割を果したかは明言し得ぬが、この溝に囲繞された空間に墓域を想 定するよりは、何らかの生産活動に関連した遺構とみたい。やはり今後の類例をまっての検討が 必要である。こうした集落の性格に関連しては次の点をも留意しておきたい。先に本遺跡の形成 の時期の一端を、大廓式と時間を共有するとした。しかし、大廓式を現定する最も重要なる要素 としての小型精製土器群を欠き、高坏をも殆んどみない。これを時間的に先行するとするよりは、 本遺跡の特性と見たのである。何らかの意味で先進的要素が強いと考えられる小型精製土器群、 ないしは高坏類を含まず、きわめて単純な器種組成を示す本遺跡の土器群に示される生活様態は、 いささか停滞ぎみであった感を抱かしめる。こうした土器相が本地域に一般化しうるかどうか

は、今後の検討をまたねばならないが、小型精製土器群の流入に際して、駿河湾、南関東諸地域では小型丸底土器に先行して、小型器台の盛行する段階が広く認められているが、当地方では小型器台、古相のS字口縁甕はきわめて少く、小型器台の出現は、小型丸底土器やS字口縁甕Ⅲ類以降の流入とは、あまり時をおかなかったように思える。このことが妥当であるならば、こうした古式土師器生成期の斉一的要素の出現相の地域性が、この後展開する古式古墳形成に示される地域社会の動向といかに関連しているかの検討は重要である。いささか憶測を重ねたが今後に残された問題は多い。

(六科丘古墳) 事前に確認されていなかった古墳が、土地造成時になって検出された。急遽その保護対策がせまられたが、県、町の行政当局、町文化財審議会および山梨県考古学協会(代表権名慎太郎氏)らのご尽力、セキスイハウス、大本組のご理解により古墳公園として保存されたのは幸いであった。当初、円墳か前方後円墳かの物議を醸したが、調査の結果は、径約24mの円墳で、付り出し部を有することが判明した。残念ながら調査では主体部が検証されなかったが、造成時に採集された鉄剣、調査時に発見された須恵器等により5世紀後半代に位置づけられる。したがって六科丘遺跡の集落とは、時間的には直接関連しない。しかし本地域では、物見塚古墳(松浦、1984)に次いで出現した古墳であり、曽根丘陵の古式古墳群と対比される貴重な資料である。

以上いささか冗長に過ぎたが、とりまとめと私見を述べた。ともかく拙いわれわれが、調査を無事完了し、ここに報告書をまとめえたのは、関係各位のご理解とお力添えのあったことに尽きる。重ねて厚くお礼を申し上げる次第である。調査によって明らかになったことも多いが、また新たな問題を生じ、今後に残された課題も多い。しかし本調査が、今後の当地域の研究に少しでも益するところがあれば喜びこれに過ぎるものはない。

(関根 孝夫)

(付) 本文中、分担執筆者の見解と異なる部分もあるが、あえて統一していない。

# 〔付〕 周辺採集の遺物

### 1 はじめに

六科丘遺跡は市之瀬台地の先端に位置している。市之瀬台地上には平岡・上市之瀬等の集落が存在し、平岡から東に広がる平坦面には縄文時代を中心として多くの遺跡が確認され、土器・石器が多数採集されている。

今回調査団事務所が、平坦面のほぼ中央にあったこともあり、発掘調査の合間をぬって事務所 周辺の表面採集を行なった。主要には事務所前面の桑畑及び事務所から発掘現場へ至る道路沿い からであるが、片手間的に行なった事もあり、その精度は非常に粗いものであることはいうまでも ない。しかし従来当地域における採集資料等の紹介がその予想される遺跡の存在に比し少なかっ た事なども考え、今回資料として紹介することにした。本遺跡の報文と併わせ、活用していただ ければ幸いである。

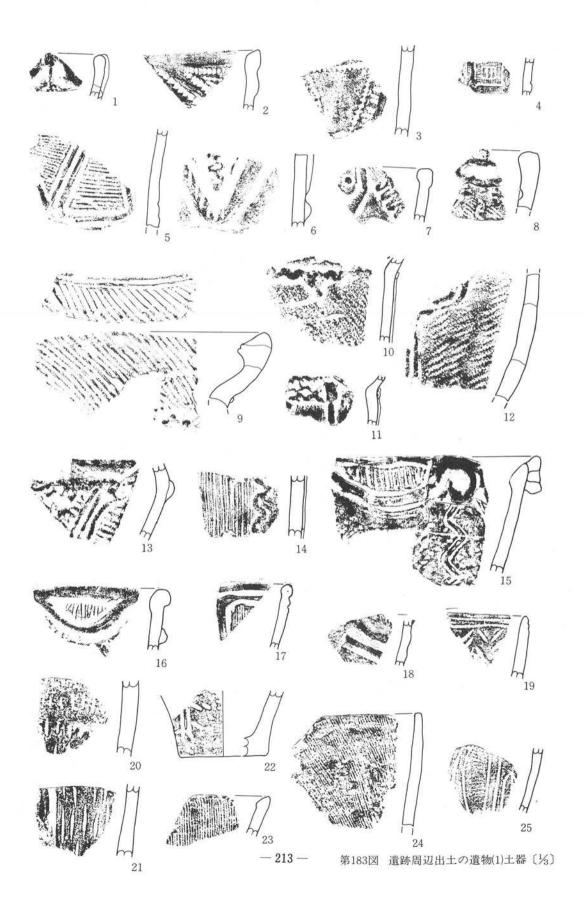
### 2 土 器 (第183図)

1は波状を呈する口縁部破片。口縁上部は一条の隆帯がめぐり、波状部からも短い隆帯が垂下する。茶褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子・石英を含む。器厚は6~7mmとやや薄手のつくりであり、早期末葉、神の木台式に相当するものと思われる。

2・3は三角押文(クサビ状文)が施されるもの、2は平縁の口縁部破片であり、三角形状に 区画された隆帯に沿って角押状の押引文や三角押文が加えられる。外面茶褐色、内面くすんだ褐 色を呈し、器面は横方向を中心とするていねいな調査が行なわれている。3は同様の胴部破片で あり、三角押文とキャタピラ状の押文が併用される。ともに、中期前半、新道式に比定される。

 $4 \sim 7$  は主に隆帯によって文様が構成されるものであり、 $4 \cdot 5$  は区画文、 $6 \cdot 7$  は曲線的な文様がそれぞれ施される。くすんだ褐色・暗茶褐色などを呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を多く含む。器面は全体にザラザラするものが一般的であるが、4 は内面を中心に研磨が加えられる。すべて中期前半、藤内式に比定されよう。

8~24は中期後半、曽利式に比定されるものである。8は大きな突起状をなす口縁部破片であり、突起部に細かい粘土紐が貼付けられるほか、胴部には原体LP単節縄文による結節縄文が施される。9はいわゆる「重弧文」が施された口縁部破片であり、頸部には細い粘土紐による波状文が加えられる。外面くすんだ褐色、内面明茶褐色を呈し、内面の横方向のていねいな器面調整が行なわれる。15は二条一組の細い隆帯により、弧状・渦巻状の区画文が施される口縁部破片。区画内に、縦位の平行沈線が密に施されるほか、胴部には撚りの粗いRL単節縄文を施文として半哉竹管による蛇行懸垂文に施される。色調は明茶褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を含む。16・17も同様の口縁部破片であるが、17は沈線により区画文が描かれ、区画内には細かく

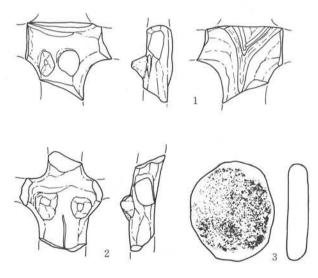


浅い条線が縦位に充填される。19は口縁上部に二条の沈線文がめぐり、胴部には「は」の字状の短沈線文が施される。くすんだ明褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を含む。22は底径6.7cmをはかる底部破片。23・24は平縁の口縁部破片であり、櫛状工具による縦位・斜位の条線文が密に施される。くすんだ褐色・暗褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・金雲母・白色不透明粒子を多く含む。焼成はおおむねふつう。8~12は曽利II式、13・14は曽利II~III式、15・16は曽利III式、17・18は曽利IV式、19~22は曽利V式にそれぞれ相当する。23・24は曽利式の粗製的な土器であろう。

25は斜位に施されたLR単節縄文を地文として、多条の沈線による弧状の文様が描かれる胴部破片。沈線間の縄文は磨消される。色調は茶褐色、胎土に砂粒・石英・金雲母・白色不透明粒子を含む。焼成は良好とはいいがたい。後期前半、堀ノ内式に比定される。 (百瀬 忠幸)

3 土製品 (第184図)

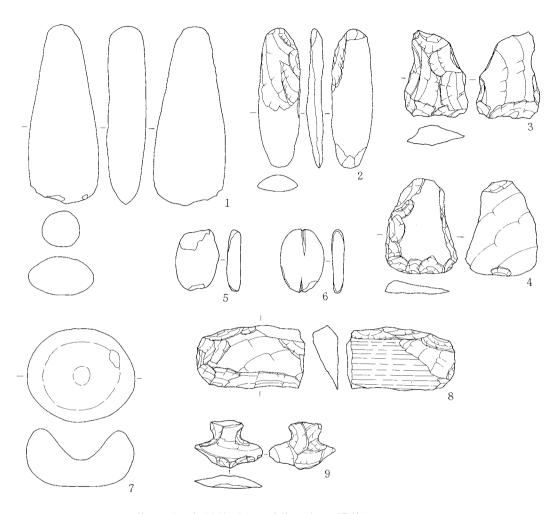
土偶 2 点が表採されている。 1 は現在長 4 cm、最大幅4.6cmをはかる「胴部」破片。正面に乳房状の突起が貼付けられているほか、背面には「Y」字状の細い隆帯が施される。 2 も「胴部」のみを残す土偶片であり、最大長 5 cm、最大幅4.4cmをはかる。正面に乳房状の突起とともに「正中線」を表わすと思われる縦位の鋭い沈線文が施される。共に茶褐色・茶灰褐色を呈し、胎土に



第184図 遺跡周辺出土の遺物 (2) 土製品[½] 砂粒・白色不透明粒子を多く含む。焼成は良好とはいいがたく、全体に粗くザラザラする。3は土製円盤である。径5cm弱で厚さ1cmを測る。縄文時代中期後葉に属するものである。 (百瀬 忠幸)

## 4 石 器 (第185図)

1. 磨製石斧、石質:緑色凝灰岩。器面全体に敲打痕がわずかに見られる。基部及び、その周辺は磨かれてはいない。刃部には刃こぼれがある。 2. 打製石斧、石質:粘板岩。短冊形を呈し、全体に風化激しく剝離の状態が不鮮明なところが多い。 3. 打製石斧、石質:砂岩。撥形を示す。 4. 打製石斧、石質:砂岩。撥形を呈し、自然面を有する。 5. 石錘、片面のみから長軸方向に縄かけのための打ちかきを入れている。 6. 石錘、切目石錘。両面から切りこみを入れている。表裏ともよく磨かれている。 7. 凹石。 8. 横刃形石器、石質:砂岩。節理面を有する。 9. 石匙、石質:安山岩。 (大森 隆志)



第185図 遺跡周辺出土の遺物 (3) 石器[½、7-½]

### 5 まとめ

以上、六科丘遺跡周辺で採集された、土器・石器等について簡単に説明した。採集品は図示した 以外にも数多く、数回の表面採集でコンテナ2箱弱の遺物を採集した。採集品の時期は縄文時代中 期中葉から中期末に至るものが主流を占め、弥生時代以降のものはわずかに土器片数点である。

これは従来から指摘されてきた様に、市之瀬台地上に於ける縄文時代遺跡の分布の濃密さを裏付けるものでもあろう。また六科丘遺跡から出土した縄文時代に属する遺物が、ビニール袋で数袋を数えたにすぎないことに比し、著しい差異を持つ。六科丘遺跡が自然条件・耕作等によって土砂の削平・流失が激しかったであろうことを考慮に入れても、当該期に於ける人々の遺跡選地の結果に因るものであろう事は想像に難くない。今回、採集された大量の遺物は台地平坦面に於ける遺跡の存在を示すと共に、台地前端円頂丘頂部に位置する、六科丘遺跡の縄文時代遺構・遺物を検討するうえでも興味深い有り様といえ、その性格を逆に照射するものともいえよう。

註 萩原氏は六科丘遺跡と同様、台地先端に位置する御料平遺跡を「御料平遺跡における……調査 地点はいわゆる精神的な空間とみなされていた事を強く感ずる」と述べられている。(荻原他、 1977)。 また山本氏は牛石遺跡(都留市)・平須遺跡(中富町)・千居遺跡(静岡県富士宮市)な どをあげられ、富士山を対象とする信仰を考えられている(山本、1984)。 その当否は別として、 六科丘遺跡の縄文時代遺構を考えるうえでも魅力ある考えかたである。

(百瀬 忠幸)

#### 引用・参考文献

7

安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」 『考古学雑誌』60-4 日本考 古学会

石野博信 1975 「考古学から見た古代日本の住居」 『日本古代文化の探究―家―』 社会 思想社

石野博信·関川尚功 1976 『纒向』 奈良県教育委員会

1985 「貯蔵施設の三形態」 『古墳文化出現期の研究』 学生社

" "「高倉の管理」 "

" 「前期古墳周辺区画の系譜 | " " "

板橋区成增一丁目遺跡調査団 1981 『成増一丁目遺跡』 板橋区教育委員会

上田典男 1983 「縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握」 『物質文化』41 物質文化研究会 上田三平 1930 「銚子塚古墳附丸山塚古墳」 『文部省史蹟調査報告』 5 (『中道町誌』に 再録)

上野晴朗他 1975 『中道町史』

植松章八・馬飼野行雄・渡井一信 1981 『月の輪遺跡群』 富士宮市教育委員会

大塚靖夫・北川吉明 1982 「集石遺構について」 『柏ヶ谷遺跡』 (江藤他) 海老名市 柏ヶ谷遺跡調査団

大参義一 1967 「S字状口縁土器考」 『いちのみや考古』 13 一宮考古学会

大参義一 1968 「弥生式 土器から土師器へ」 『名古屋大学文学部研究論集』 47 名古屋 大学文学部

小野山節 1970 「5世紀における古墳の規制」 『考古学研究』16-3 考古学研究会

小野真一 1968 『目黒身』 沼津市教育委員会

小薬一夫 1979 「縄文時代における焼石遺構」 『小田原考古学研究会会報』 8 小田原考 古学研究会

カ

加納俊介 1981 「月の輪遺跡群出土の土器」 『月の輪遺跡群』 (植松他) 富士宮市教育委員会

木下正史 1985 「高床倉庫の系譜をめぐって」 『日本史の黎明―八幡―郎先生頌寿記念考 古学論集』 六興出版

櫛形町誌編纂委員会 1966 『櫛形町誌』 櫛形町教育委員会

『櫛形山の自然』編纂委員会編 1976 『櫛形山の自然』 山梨県立巨摩高等学校

甲西町誌編纂委員会 1973 『甲西町誌』 甲西町教育委員会

神戸市教育委員会事務局社会教育部文化課 1975 『史跡五色塚古墳復元・整備事業概要』 神戸市教育委員会

小久保徹 1977 「弥生時代の大形住居について—南関東地方の実態と諸様相—」『埼玉考古』17号 埼玉考古学会

小坂井孝修他 1982 『多摩ニュータウン遺跡・第4分冊 No.759遺跡』 (財)東京都埋蔵 文化財センター

小林広和 1978 「甲斐小平沢古墳の墳形と編年的位置」 『信濃』30巻2号 信濃史学会

- " 他 1979 『甲斐茶塚古墳』 山梨県教育委員会
- # 1980 『上の平』 山梨県教育委員会
- 1981 「曽根丘陵の古墳群」 『一探訪 日本の古墳 東日本編』 有妻閣選書12 有妻閣
- " 1985 「山梨県」 『古代学研究』 第105号 古代学研究

小林秀夫 1978 「合掌形石室の諸問題」 『中部高地の考古学』 I 長野県考古学会 近藤英夫他 1984 『帷子峯遺跡』 一横浜新道三ッ沢ジャンクション建設予定地区遺跡調査報 告書一 横浜新道三ッ沢ジャンクション遺跡調査会

#### #

斎藤 進他 1983 『多摩ニュータウン遺跡・第5分冊 No.740 遺跡』 (財)東京都埋 蔵文化財センター

坂本美夫 1973 「山梨県内各地古墳出土遺物集成図」『甲斐考古』10-3 出梨県考古学会 # 1978 「山梨県・曽根丘陵周辺地域の前期古墳等について」 『甲斐考古』 別冊

2号 山梨県考古学会

┌──1980 「川久保古墳の出土遺物」『甲斐考古』17−1 山梨県考古学会

" 1983 「古墳よりみた古代甲斐国の成立と展開」(発表要旨)

〃 1984 「山梨県」 『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会

』 1985 「木心鉄板張輪鐙」 『甲斐考古』22-1 山梨県考古学会

" 山梨県埋蔵文化財センター第10集 『国指定史跡、銚子塚古墳附丸山塚古墳 一保存修理事業第1・2年次概報』 山梨県教育委員会

佐々木藤雄・鴫原靖彦 1985 『物見塚遺跡』境川村教育委員会

清水 博他 1984 『曽根遺跡』 櫛形町教育委員会

静岡県考古学会 1983 「弥生後期の集団関係」 『静岡県考古学会シンポジューム 5 』静岡 県考古学会

末木 健他 1979 「出梨県中巨摩郡敷島町金の尾遺跡発掘調査中間報告」 『長野県考古学 会誌』33 長野県考古学会

1980 「山梨県敷島町金の尾遺跡調査略報」 『長野県考古学会誌』36号 長野 県考古学会

杉山博久 1981 『東田原八幡遺跡』 東田原八幡遺跡調査団

杉山 満他 1983 『三池平古墳墳丘発掘調査報告書』 清水市郷土研究会

瀬川裕一郎他 1978 『藤井原遺跡発掘調査報告書1』 沼津市教育委員会

関根孝夫他 1974 『諏訪原遺跡』 松戸市教育委員会

#### 4

ナ

田代 孝・中山誠二 1984 「熊久保遺跡出土の弥生式土器」 『丘陵』11 甲斐丘陵考古学 研究会

田中義明 1979 「弥生期における耕地と集落」 『日本考古学を学ぶ(3)』有斐閣 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権」 『講座日本史1 古代国家』 東京文学出版会

中田 英他 1982 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1 『向原遺跡』 神奈川県教育 委員会

内藤 晃・大塚初重 1961 『三池平古墳』 庵原村教育委員会 長沢宏昌他 1984 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第4集『豆塚遺跡』 山梨県教育委員 会

永峯光一 1951 「古墳と環境―甲府盆地の場合―」 『国史学』 56

新津 健他 1981 『住吉遺跡』 甲西町教育委員会

仁科義男 1931 「大丸山古墳」 『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』 5 (『中道町誌』 に再録)

日本考古学協会 1954 『登呂』 日本考古学協会

能登 健 1974 「発掘調査と遺跡の考察―いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として」 『信濃』 26— 3 信濃史学会

/\

橋本博文 1979 「甲斐の須恵器(1)・(2)」 『丘陵』 6・7号、甲斐丘陵考古学研究会

1984 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」 『甲府盆地―その歴史と地域性』 地方史研究協議会

萩原三雄他 1974 『京原』 山梨県教育委員会

" 1977 『御料平遺跡』 早川町教育委員会

樋口清之他 1980 「土壙について」 『藤野台遺跡II』 藤野台遺跡調査会

藤森栄一 1939 「信濃下蟹河原における土師器の一様式」 『考古学』 10-11 東京考古 学会

文化庁・文化財保護部 1981 『全国遺跡地図―山梨県』 国土地理協会

マ

松浦宥一郎他 1983 『物見塚』 櫛形町教育委員会

御堂島正 1977 「集落にかかわる諸問題」 『高松原』 (宮沢他) 長野県立飯田高等 学校

宮沢 寛・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題―いわゆる落し 穴について―」 『調査研究集録』第1冊 港北ニュータウン埋蔵文化 財調査団

森 和敏 1975 『八代町誌』

" 1979 『岩清水遺跡』 山梨県教育委員会

" 1980 『一域林遺跡』 山梨県教育委員会

百瀬忠幸 1985 「縄文時代の遺構と遺物」『上の山遺跡』(清水他)櫛形町教育委員会

山田香代子 1978 「土壙」『椚田遺跡群 1978年度調査概報』 八王子椚田遺跡調査会 山本寿々雄 1969 『山梨県の考古学』 吉川弘文館

" 1984 『日本の古代遺跡 14 山梨』 保育社

1980 「小平沢古墳(前方後方)と近在の方形周溝墓を考える上に」『甲斐考古』17─1 山梨県考古学会

山本暉久 1979 「再堆積ロームを有する陥ち込みについて」 『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵 文化財調査報告15 神奈川県教育委員会

山下孝司他 1984 『坂井南遺跡』 韮崎市教育委員会

山崎金夫 1978 『西田遺跡』 第1次調査報告書 山梨県教育委員会

遊佐和敏 1980 「所謂「帆立貝式古墳」の形態的分離について」 『古代』68 早稲田大学 考古学会

" 1982 「造り出し付円墳について」『史学』第52巻・第2号 三田史学会

湯川悦夫 1981 「月の輪遺跡出土土器」 『月の輪遺跡群』 (植松他) 富士宮市教育委員 会

米田明訓·保坂康夫 1984『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会

ワ

和島誠一・田中義昭 1966 「住居と集落」 『日本の考古学』III(和島編) 河出書房 渡辺誠一 1984 『侭ノ下遺跡』 山梨県教育委員会

# 写 真 図 版



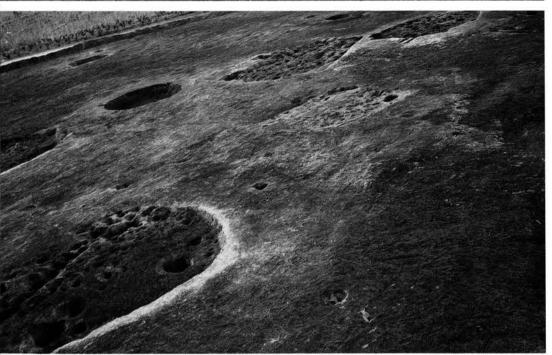
六科丘遺跡遠望 (西から)



六科丘遺跡遠望 (東から)



2区 北東部の調査



2区 南西部の調査



作業風景 (3号住居址)





1号・2号住居址



3号住居址



4号住居址



5号住居址



6号住居址





右:8号住居址 左:8号住居址 遺物出土状況

9 号住居址 1 号小竪穴遺構





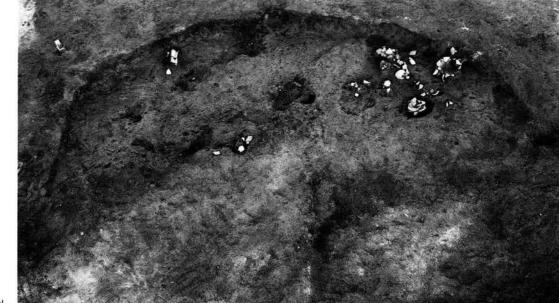
13号住居址



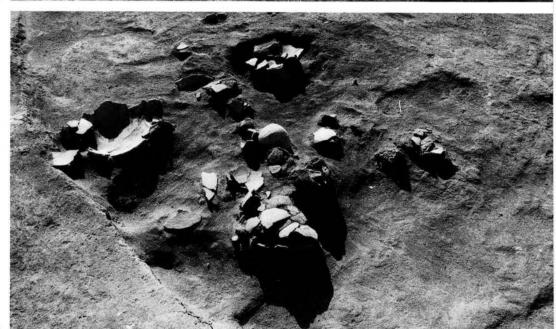
13号住居址 遺物出土状況



15号住居址堀り方



12号住居址



12号住居址 遺物出土状況



16号住居址





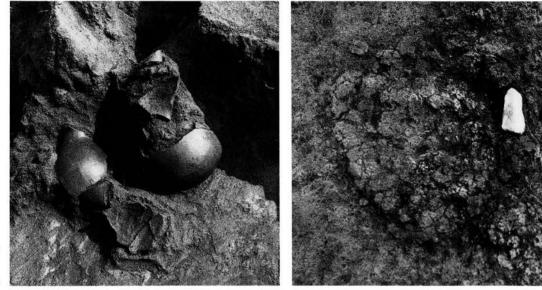
18号住居址



19号·20号住居址



21号·22号住居址



右:23号住居址炉 左:22号住居址 遺物出土状況



23号住居址



24号住居址 炭化材および 遺物出土状況





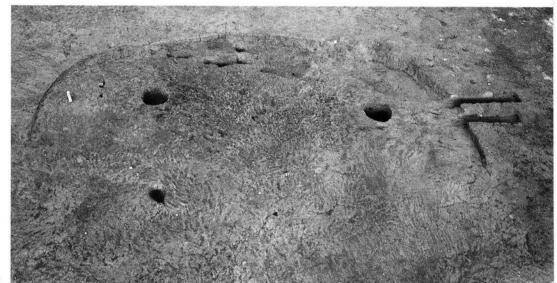
24号住居址 遺物出土状況



24号住居址



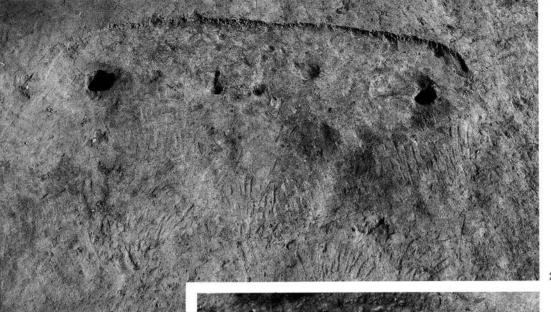
26号住居址



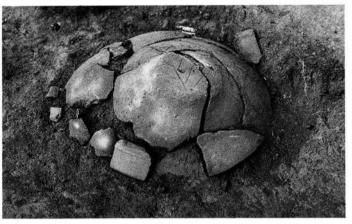
27号住居址



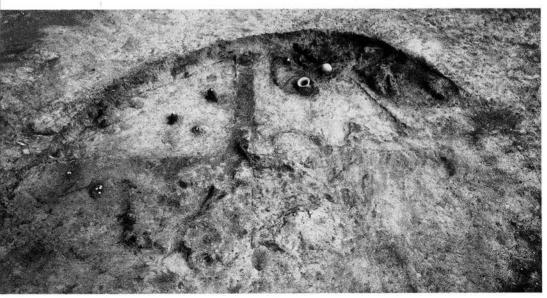
29号住居址



28号住居址



28号住居址 遺物出土状況



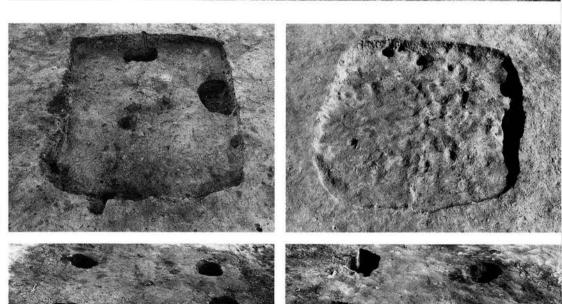
33号住居址 炭化材および 遺物出土状況



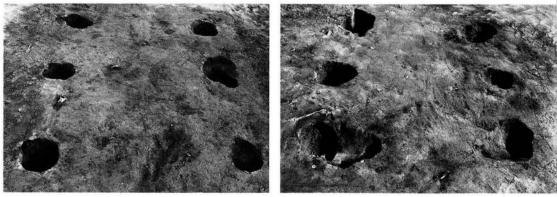
33号住居址 遺物出土状況



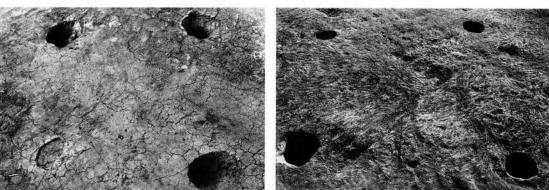
竪穴状遺構 礫出土状態



左:1号小竪穴遺構 右:2号小竪穴遺構



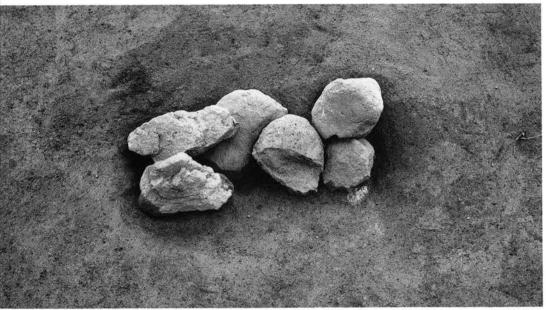
左:1号掘立柱遺構 右:2号掘立柱遺構



左: 3号掘立柱遺構 右: 4号掘立柱遺構



1号集石遺構



2号集石遺構



3号集石遺構



4号集石遺構



5号集石遺構



6号集石遺構



7号集石遺構



8号集石遺構上部



8号集石遺構下部

図版 I7



9号集石遺構



石棒出土状況



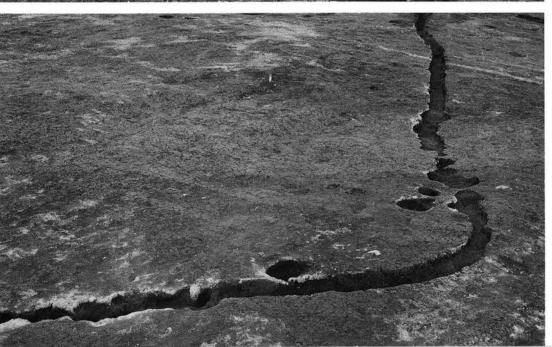
Ⅱ区拡張区ピット群



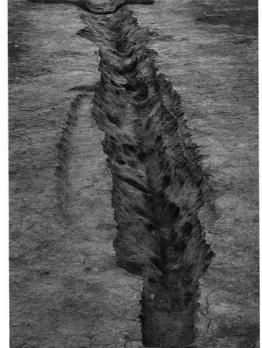
2号溝状遺構



2号溝状遺構



2号溝状遺構





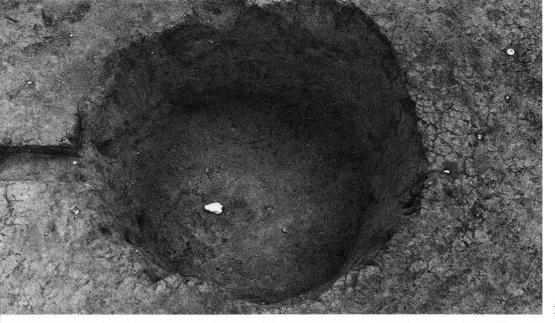
左:1号溝 右:3・4号溝



5号土壙



6号土壙



10号土壙



15号土壙



18号土壙



26号土壙



30号土壙



31号土壙



六科丘古墳 (南東から)



六科丘古墳 (南から)



六科丘古墳の 調査



5号トレンチ



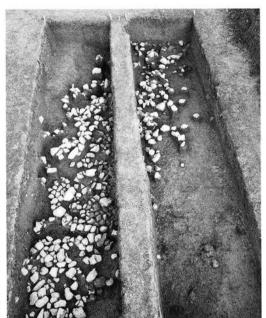
5 号トレンチ 遺物出土状況



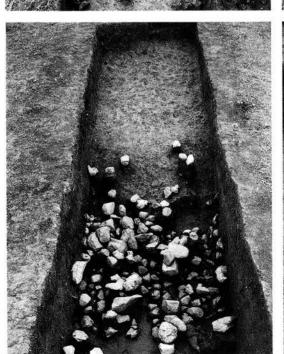


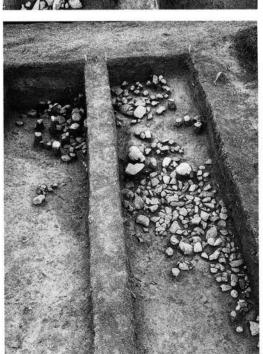
左1号トレンチ 右3号トレンチ



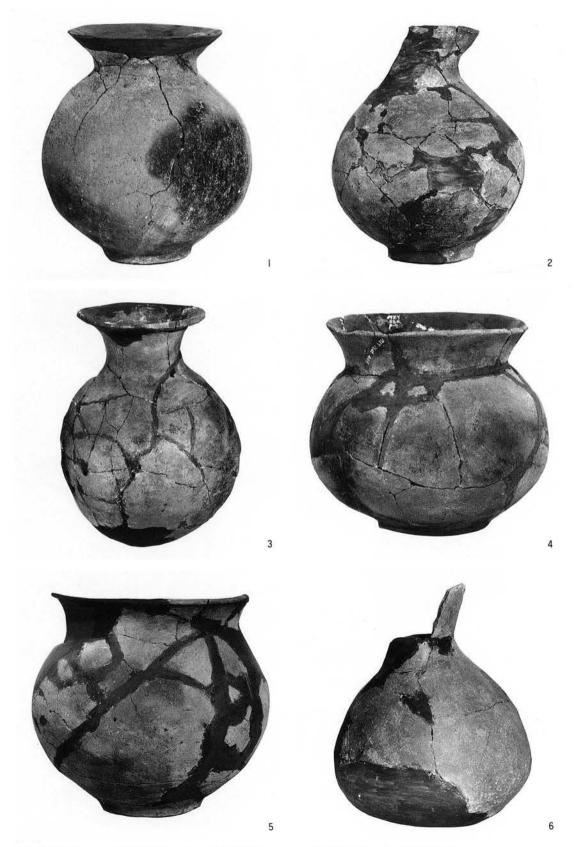


左5号トレンチ 右6号トレンチ

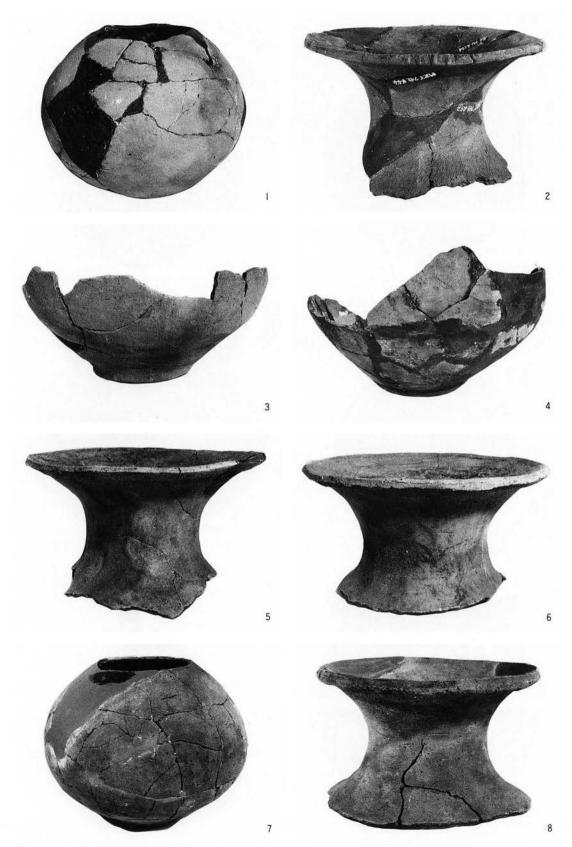




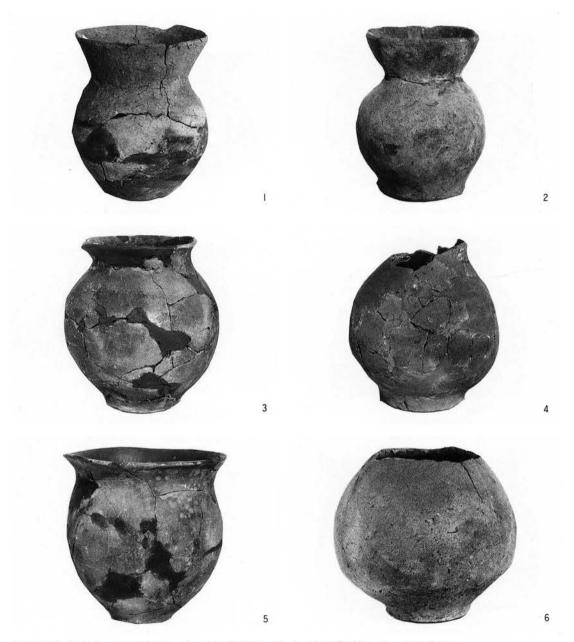
左7号トレンチ 右8号トレンチ



壺形土器:1.2-9号住居址,3-12号住居址,4.5-13号住居址,6-22号住居址

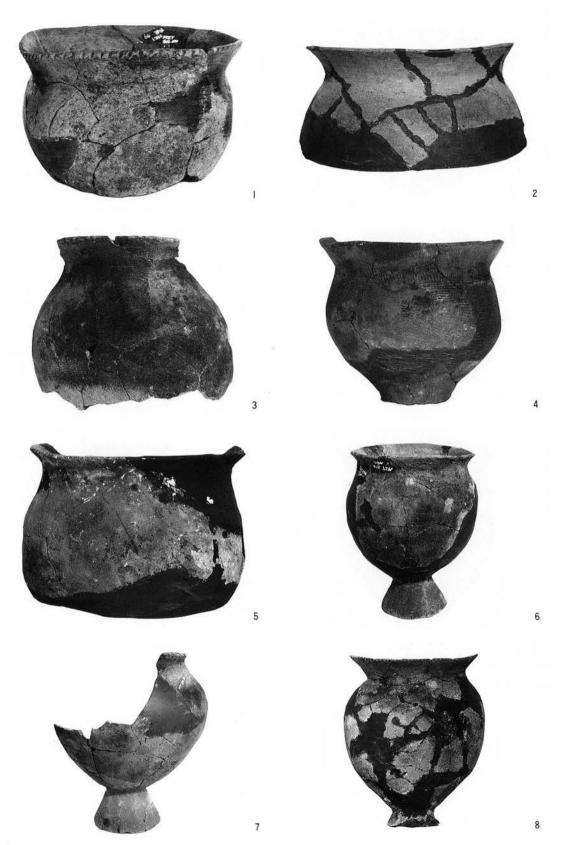


壺形土器:  $1\sim 4-3$  号住居址, 5.6-8 号住居址, 7-13号住居址, 8-33号住居址



小形壺形土器: 1-3 号住居址, 2-12号住居址, 3.4-27号住居址, 6-33号住居址

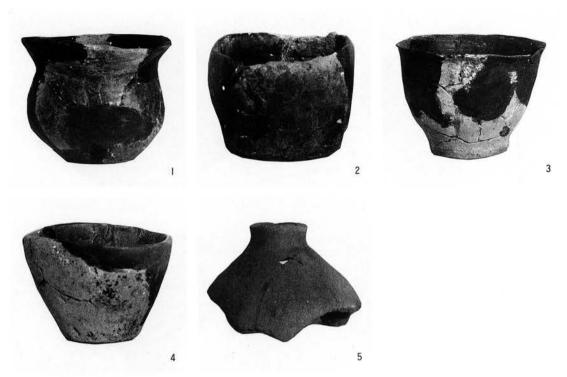
広口壺形土器: 5-24号住居址



獿形土器: 1-1 号住居址, 2-3 号住居址, 3.4-8 号住居址, 5.5-9 号住居址, 7.8-12号住居址



夔形土器: 1.2-13号住居址,  $3\sim7-24$ 号住居址, 8-2 号小竪穴遺構



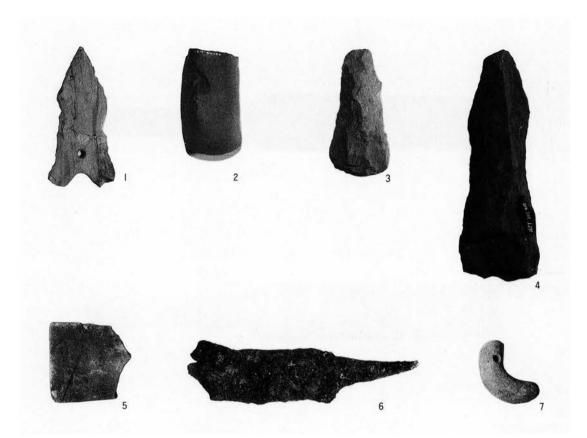
ミニチュア土器: 1-3 号住居址, 2-4 号住居址, 3-13号住居址, 4-20号住居址 蓋-5-8 号住居址

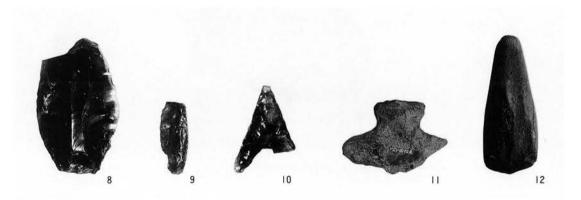


6-13 J 区出土土器 (カラワケ)

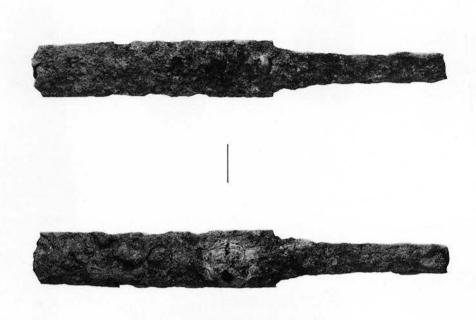


右一7号集石遺構出土土器:左一27号土壙出土土器





繩文時代遺物 石器:8-11L区出土,9-16K区出土,10・11・12-周辺地域より表採



### 古墳出土遺物

- 1. 鉄剣
- 2. 須恵器・壺
- 3. 管玉



3

櫛形町文化財調査報告 No.3

# 六科丘遺跡

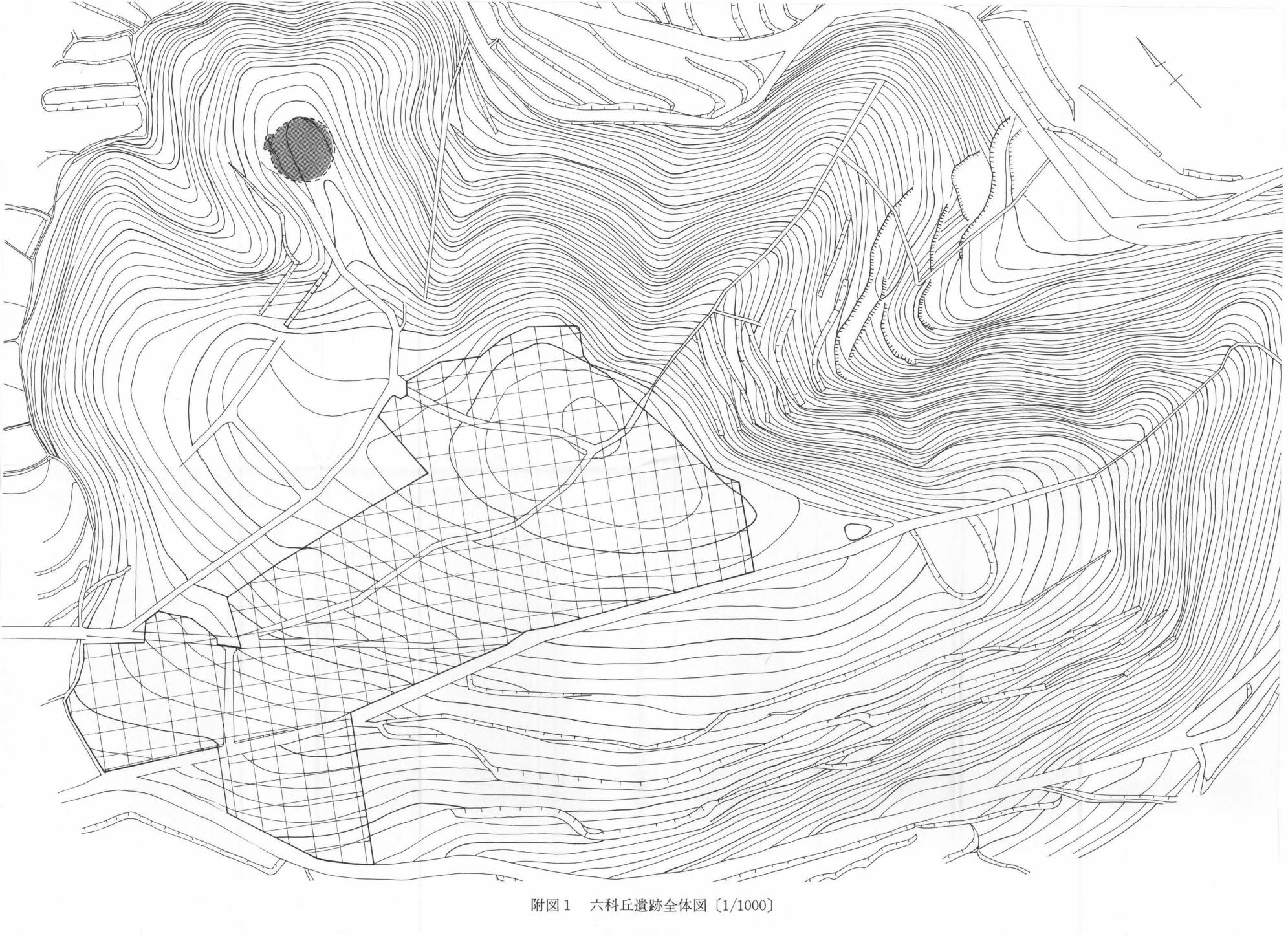
——山梨県中巨摩郡櫛形町六科丘遺跡発掘調査報告書——

昭和60年6月1日 印刷 昭和60年6月10日 発行

編集・発行 櫛 形 町 教 育 委 員 会 六 科 山 遺 跡 調 査 団 印 刷 ほ お ず き 書 籍(株)

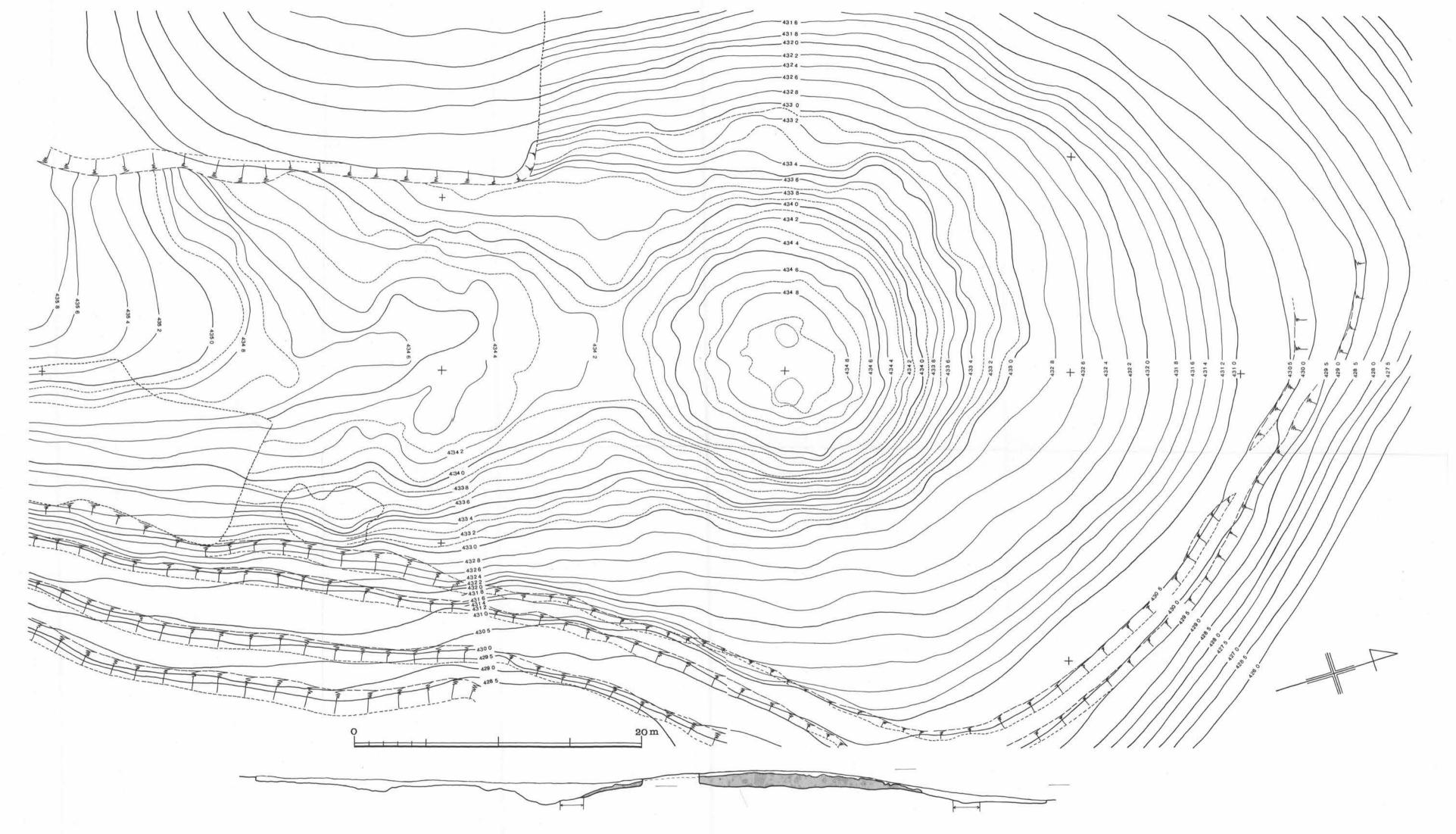
# 六科丘遺跡

附図



附図2 六科丘遺跡土器変遷図〔½〕

|   | 壺  | 小型壺                  | 連   | 鉢 蓋   |
|---|--|----------------------|---|---|
| I | 3-1 $29-2$ $2-1$ $3-4$ $29-2$ $29-1$ $3-2$ $29-3$ $29-4$ $3-3$ | 3-5 $3-6$            | 3-7 $3-9$ $3-8$ $3-10$ $3-11$   | 3-16 $1-1$ $3-15$ $3-17$ $3-12$ $3-12$ $3-12$ |
| П | 20-3 33-2 20-2 8-3 12-4 12-4 12-5 6-4 20-1 12-6 12-6 12-6      | 12-3                 | 33-3  12-7  8-6  12-8  8-5  20-6  8-7  8-8  | 8-10 $20-7$ $4-2$                             |
| Ш | 9-4 9-5 9-4 13-1 13-2 27-1 13-7 13-7 13-7                      | 27-2<br>22-1<br>13-5 | 9-9 $13-10$ $9-6$ $13-11$ $9-8$ $9-10$ $24-5$ $24-2$ $13-12$ $13-13$ $24-6$ $13-14$ $13-15$ $9-1$ | 13-16   |



附図3 古墳全体図

